

歌の女神たちの天使 ～天使じゃなくてマネージャーだけど！？～

YURYI*

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

音ノ木坂学院の前に倒れていた『みはね』という少女。

自身についての記憶はみはねという名前しか覚えていなかった…

そんな彼女は音ノ木坂学院の理事長に助けられ、音ノ木坂に『桜みはね』という名前で入学することになる――

これは、そんな彼女と九人の歌の女神たちの物語である。

※意味不明な表現、文がおかしいなど多いと思います。あたたかい目で見守っていただけたら幸いです。

※辛口でもぜんぜん構わないので感想、評価のほうもよろしく願います！

目次

アニメ一期

1.	始まり	1
2.	入学式、出会いと生徒会	7
3.	生徒会	14
4.	自覚	21
5.	廃校と：	33
6.	スクールアイドル	43
7.	簡単だよ	57
8.	逃げないで	63
9.	合宿だ！前編	74
10.	合宿だ！後編	84
11.	大丈夫じゃない	92
12.	想い　　Part 1　　矢澤にこ	99
13.	想い　　Part 2　　星空凛	106
14.	想い　　Part 3　　小泉花陽	111
15.	想い　　Part 4　　西木野真姫	116
16.	想い　　Part 5　　高坂穂乃果	123
17.	想い　　Part 6　　南ことり	129
18.	想い　　Part 7　　園田海未	134
19.	想い　　Part 8　　東條希	141
20.	想い　　Part 9　　絢瀬絵里	147
21.	みはねのこたえ	154
St Valentine's Day		159
22.	相談とお願い	170

23.	ふたたび	178
24.	反省	190
25.	秘密	200
26.	今日は雨の日	206
27.	私のせい	211
28.	真姫ちゃんとふたりきりで	218
29.	絢瀬さんにご乱心	226
30.	泣き虫	232
31.	自分の立場	244
32.	謎は解けたけど嬉しくはない	250
33.	Run away	259
34.	おちる	264
35.	天然たらしはなんとやら	275
	園田海未誕生日記念	287
36.	聞きたいことがあるんです	296
37.	これは日常?	303
38.	誰のもの	309
39.	講堂での会話	317
40.	みんな一緒に	320
41.	生徒会、劇	326
42.	練習開始!...問題発生。	333
43.	あなたの王子様	339
44.	ロミオとジュリエットにはキスシーンがある。	346
45.	理事長	355

46.	真姫ちゃん	363
47.	二度目のラブライブー	371
48.	おかしい日	378
49.	甘やかす、甘やかされる	382
50.	またまた合宿!	388
51.	答えはすぐそばに	397
52.	新曲完成!	403
	*遊園地デート!	409
53.	はじめまして	419
54.	言葉の力	426
55.	もうわからない	432
56.	過去	438
57.	私の居場所	446
58.	作戦会議	454
59.	ふたり	460
60.	ほんとうは	467
61.	キミへの気持ち	478
62.	ユメノトビラ	486
63.	おかえりなさい	496
64.	伝えること	505
65.	にこのかぞく	515
66.	リーダー	527
67.	わかっていること、わからないこと	533
	絵里 Birthday	541
68.	いちばん	556

アニメ一期 1. 始まり

「ん、んう…」

真つ暗な空間にひとすじの光。

私の人生はたった今、ここから始まる。

…たぶん。

「あ、ああ！目が覚めたんだね！」

耳元で聞こえるかわいらしい声。

寝ていたベットから上半身を起こし、声が聞こえた方向に顔を向ける。視線の先にはベージュの特殊な髪型とはちみつ色のぱつちりとした瞳のとてもかわいい少女が立っていた。

「あ、えっと、その」

「名前！あなたのお名前聞いてもいいですか？」

とりあえず何かを言おうとしたらかぶせられた…

えーと、名前…？私の名前は…まだ覚醒しきっていない頭をフル回転させて思い出す。

あ、すごい。こんなに頑張っと思いつくそうとしないと出てこない時点で私おかしい。

あ、私の名前…これだ。

「…みはね、です。たぶん…？」

「みはねちゃんかあ…」

彼女は私の名前を聞くと、素敵なお名前。とふんわりと微笑んだ。

自分の名前だという自覚はほとんどないが、褒められたとなると悪

い気はしない。

「あの…」

「ああ、ごめんなさい。私の名前は南ことりって言います！」
ことり、とても彼女らしいかわいい名前だ。

「とつてもお似合いです」

「ふふっありがとう！あ、ことりって呼んでくださいね？」

「は、はい。ことり…さん」

そう言った瞬間に彼女はぷうつとほおを膨らませて、いかにも怒ってますというような顔になった。

今のの何がいけなかったのだろうか。

あ、言い方がいけなかったのかな…？謝ったほうがいい？

「さんはいらないのっ…こ…と…り！」

めっだよ？と、彼女はかわいらしく首をかしげてみせる。

なるほど、そういうことか。でも、初めて会ったばかりの人をいきなり呼び捨てにするのもな…と戸惑いながらも、ここは少しでも怒らせるべきではないと、私の記憶に関しては全く役に立たない脳が警報を鳴らす。

「じゃあ…ことり、ちゃん。ことりちゃん」

さつきから口しか動いていない顔を、少しでも緩くして彼女の名前を口にした。

自分の中ではかなり頑張ったほうだと思う。なんだか人と話すことにあまり慣れていないのか、さつきから緊張しっぱなしで困ってしまう。

「笑うとさらにかわいいんだね…」

ことりちゃんの口元が動く。

なんて言ったのかは分からなかったが、怒ってはいないようだ。

なんだかさつきまで怒った顔をしていたのに、いや、とてもかわいくて怖くはなかったけど。今度は頬を紅潮させてうーうー唸っている。

なんだか表情がころころ変わって面白い。

「私はなんて呼ぼうかなあ?」

「なんでもいいですよ」

苗字とかが思い出せない。本当になんでだろう?」

目の前で真剣に私の呼び方を考えていることりちゃんをよそに頑張って記憶をたどっていく。

「みはねちゃん?でもでも…あ!みいちゃん!みいちゃんって呼んでもいい?」

ようやく決まったらしい。やっぱりとてもかわいらしい人だ。そんな笑顔で言われたら嫌だなんて言えるわけがない。

「もちろんです!」

私は目の前の笑顔につられ、初めて自然に笑った。

*

「うーん。記憶喪失なのかしら?よくわからないわねえ…」

私はあの後ことりちゃんに連れられ、ことりちゃんのお母さんと話をしていた。私は音ノ木坂学院という高校の前で倒れていたところを、そのの理事長であることりちゃんのお母さんに拾われたらしい。しかも、私がここにきてからすでに3日も経っているとか。

私についての質問をいくつかされたが、自分についてわかることはみはねという名前だけだった。その他の生きていくうえ、生活していくうえで必要な知識はあるようだが、自身についてはまるで最初からなかったかのようにぽっかりと穴が開いてしまっている。

私はもともとどこに住んでいたのだろうか。誰と一緒にいたのだろうか。なぜそんなところで倒れていたのだろうか。考え出したらきりがない。しかし、いくら考えても思い出せないものはしょうがない。

顔が自然と下を向くと、目からぽたぽたと何かがこぼれる。こんな室内で水なんかが降ってくるわけがない。

その時、隣にいたことりちゃんにふわりと抱き寄せられた。

「みいちゃん、大丈夫だよ。無理に思い出そうとしなくても大丈夫。…だから、泣かないで?」

その言葉を聞いてゆつくりと手を自分の頬に持つていくと、水気を感じた。

ほんとだ、私…泣いているんだ。

自分が何者なのかわからない恐怖。まるでこの世界で私だけが切り取られてしまっているような感覚。

私は悲しくて、この気持ちをどうすればいいのかわからなくて…ことりちゃんの前で泣いた。

「落ち着いたようね。それで、これから…」

「その、助けていただいてありがとうございます。このお礼はいつか必ずします」

「そのことなんだけど、少し相談があるの」

そんな、助けてもらった冒険者のようなセリフを言う私に、ことりちゃんのお母さんは優しく微笑む。

「私の学院に入学してくれないかしら? ちょうど入学の時期だし、年齢的にも問題なさそうだし…ね?」

「でも、これ以上迷惑をかけるわけには…」

それに、普通なら警察などに行くべきなのだろう。しかし、なぜ警察などに言わないのだろうか。

「そんなことないよ! 学院には私もいるし、みいちゃんが入学してくれたら私は嬉しいな…?」

ことりちゃんは、両手で私の手を包み込んで下から顔をのぞかせる。

「それに、大変言いにくいことなのだけれど…ここ数日に警察に捜索願いだは出されていないみたいなの」

ことりちゃんも理事長さんも、自分のことのように悲しい顔をする

から、私は悲しむことも何かを言うこともできなかつた。

捜索願いが出されていないということは、私には家族がない。もしくは、私のことを心配して探してくれる家族がないということだ。まあ、どちらにせよ私は必要のない人間なのだろう。

「だから…いや、私のわがままね。入学してほしいの」

そんな言い方されたら、そんな優しいこと言われたら甘えてしまう。これ以上迷惑をかけるのはダメだけど、ここにいたくなってしまう。

私は、この人たちのそばにいてもいいのだろうか…？

「私、このまま行くあてもないし、どうすればいいのかわからないんです。助けてください…お願いします…」

それに対しての返事は言わなくてもわかるだろう。

私は、誰かに必要とされる人間になりたい。たくさんの人々の笑顔が見たい。

なぜそんなことを思うのか自分でもよくわからないが、記憶のない私にとってとても大切なことだということはある。

過去のことは無理に思い出そうとも思わないし、思い出せたらそれはそれでいいだろう。まあ、自分が何者なのかわからなくて怖くもあるけど。

でも、私の人生は今ここから始まる。そういうことにしよう。うん。

なんか、言葉だけ聞くとかつこいい気もしてきた。

一週間という短い時間で、入学に向けてたくさん準備をした。しただけでも、理事長さんたちがほとんどやってくれたわけだけども…そんな中、私はわがままをひとつだけ言った。それは、「学院に住む」ということだ。まあ、絶対に学院がいいというわけではなく、極力迷惑をかけたくなかったから一人で住む場所が欲しかっただけだ。ことりちゃんにもすぐく反対されたが、それでも無理に押し通した。

学院の生徒がほとんど来ないフロアの空き教室の一つをもらったわけだが：

ついでだからと理事長さんから生活費までもらうことになってしまった。…これはバイトでもして返していこう。

そんなこんなで一週間はあつという間に過ぎ、今日、この音ノ木坂学院に”桜みはね”という名前で入学する。

あ、”桜”という苗字は理事長さんが、桜並木を見てつけてくれたものです。私的には結構気に入っています。

つて、誰に説明してるんだろう…？

まあ、物語の始まりです！

2. 入学式、出会いと生徒会

今日は入学式。

たくさんの生徒の視線の先にはステージの上で話すことりちゃんのお母さん：理事長の姿がある。

私はあの人に助けられ、今こうしてこの学院の生徒としてこの場に
いることができるのだ。

最初の頃はあまりうまく話せなかったけど、だんだんと慣れてきて
笑顔で話せるようになった。ことりちゃんとはもつと早く打ち解け
ることができたんだけど…

入学式が終わり、新入生は教室に戻ってHRをやらなければならな
いらしい。今は担任の先生が来るまで自由時間なのだが…そう、二人
としか接することがなかった私は絶賛ぼっち中。

それに、なんだか周りの子達は私のことを見てひそひそと話してい
たりと、なんとも居心地が悪い。

私、何か変だろうか？自分についての記憶がないせいで変なところ
で臆病になっているらしく、めんどくさいことに悪い方向にばかり考
えが進んでいく。

「はあ…」

私がため息をすると同時に隣からもため息が聞こえた。びつくり
してその方を向くと、相手もこっちを見ていた。

赤毛であまり長くないふわふわとした髪、なんともきれいな顔立ち
でつり目が特徴的な彼女に……なぜか睨まれていた。

たしか、彼女は新入生代表の西木野真姫さんだったと思う。

「えっと、ごめんなさい…っ…」

とりあえず、謝っておいた。睨まれているし、もしかしたら不快な
思いをさせてしまったのかもしれない。

「なんで何もしてないのに謝るのよ」

「いや、怒っていらっしやるのかと…」

その言葉を聞いてなんで敬語なのよ、とつぶやき西木野さんはさらに不機嫌そうな顔になった。

「あなた、名前は？」

「みはねです。桜みはね」

「そう。みはね、私が友達になつてあげないこともないわよ」

いきなり呼び捨て…いや、いまそこは問題ではない。なぜか西木野さんはかなりの上から目線で、しかも睨んだ顔はそのまま友達になつてあげないこともないと言つたのだ。つてことは、西木野さんと友達になれるということなのか？

「ありがとう…？」

「べ、べつに私が友達になりたいわけじゃないんだからね…!？」

ほおを自分の髪のように真つ赤に染めて両肩を掴んでくる。

この反応はもしかして…

「西木野さんつて…ツンデレ？」

「ば、ばつかじやないの!?!イミワカンナイ!!」

そんなことを叫びながら自分の席に戻つていったが、顔はやつぱり赤いままで…。西木野さんの大人な印象がガラツと変わった。周りもこつちを見てぎわついている。

とにかく、友達ができたなんて嬉しいな。

「真姫ちゃん!よろしくね」

「はあ…しようがないから仲良くしてあげる」

やつぱりツンデレみたいだ。横目で真姫ちゃんを見るとやつぱり真つ赤で、それを隠そうと両手で顔を覆っていた。

「真姫ちゃんかわいい」

「っ／＼／あたりまえでしょ!みはねもかわいいんじゃない!？」

自覚してるのか。まあ、これで自覚してないほうがおかしいんだけどね。てか、なんでそんなに怒つた言い方するんだろう?それに…

「そういうお世辞いらない」

「もう…ほんとあなたなんなのよ」

なぜだか真姫ちゃんはジト目で私を見る。

照れたり怒ったり呆れたり。真姫ちゃんの笑顔が見たいんだけどなあ…

「ねえ、笑ってよ」

「は？なんでいきなりそんなこと言うのよ」

「見たいの！絶対笑ったらかわいいし！」

少しの沈黙。数秒だったから真姫ちゃんはくすぐすと笑いだした。笑ってくれたのは嬉しいけど、なんだかバカにされてる…？

「むう…なんでそんなに笑ってるの？」

「だって、そんなことで必死になっているから。まったくもう」

理由はわかったけど笑いすぎ。さすがに拗ねちゃうんだからね！

それに、さっき笑ったらかわいいっていったけど…やっぱ間違ってたなかつたみたい。普通にしていたら大人びているけど笑うと年相応になる。バカにされているけどなんだか得した気分。

そうこうしているうちに担任の先生が来てHRも終わり帰宅の間になった。もっと話していたかったけど、真姫ちゃんはすぐに帰ってしまった。

*

家…といっても学院なので、下校とかがないからあまり面白くない。いや、面白くないとか言える立場じゃないんだけどね。

ここに住みたいっていったのは私だし、住むところを与えてもらっているわけだもんね。

何かやることないかなあ……あ、学院を探索でもしよう！

都合がいいのか悪いのかよくわからないけど、今日はもう学院内に生徒はほとんどいない。たしか二、三年生は登校日ではないとことりちゃんが言っていた。

なんだか学院を独り占めしているみたいでテンションが上がる。意味もなく回ってみたりと前をよくみていなかった。

「っ!？」

「ぎゃっ!？」

角を曲がろうとしたら誰かとぶつかってしまった。

「すみません。前よく見てなくて…」

とりあえず謝り、倒れてしまった相手に手を差し出す。

相手は私の手を取りながら、こちらこそごめんなさいと謝ってくれた。

「……」

改めてぶつかった相手をよく見てみると金髪碧眼の美人さん。外国の人だろうか？それとも HALF さん？そんなことを思いながらもついそのきれいな姿に見入ってしまった。よくわからないが心臓がドキドキと音を立てる。深呼吸をしてもう一度相手を見ると、なぜか相手の人もじつと私を見て固まっていた。

「ねえ、あなた…いや、大丈夫だったかしら？」

「はい。って、日本語…」

「ふふっ。私、こう見えてロシアンクォーターなの。だかられっきとした日本人よ」

クォーター…ということとは祖父母の誰かがロシアの人ってことか。

「すみません。あまりにもきれいなので見つめちゃいました」

思ったことがつい言葉に出てしまった。

私の言葉を聞くなりきよんととして、突然顔を赤くした。

「な、あ、名前！教えてくれるかしら？リボンの色からして一年生よね」

「桜みはねです。よろしくお願いします。えっと…」

「三年の絢瀬絵里よ。この学院の生徒会長をやっているわ」

三年生!?!生徒会長!?!とんでもない人にぶつかってしまったようだ。普通なら怒られているところだが、絵里先輩は怒らずに心配してくれた。なんて優しいんだろう。

「それでみはね？新入生はもうとつくに下校してる時間よ？」

あ、そうだ…

どうしよう。学院に住んでいることを言ってもいいのだろうか？

「あ、えっと…」

「みはねちゃん！まったく、終わったら来るように伝えておいたはずよ。」

運がよかったのか悪かったのか、絵里先輩の背後から理事長が現れた。

終わったら理事長室に来るように言われてた…かも。

「ご、ごめんなさい！忘れてました…」

「はあ、素直に忘れてたことを言ったから許しましょう」

理事長との約束を忘れるなんて…

落ち込んで下を向いていると突然ふわりと落ち着く匂いが鼻腔をくすぐった。

「みはねちゃん。入学おめでとう」

ぎゅっとして頭をなでられてしまえば安心とともに嬉しさがこみ上げる。家族がいたら、こんな感じなのかな？とか考えてみたり。

「ありがとうございます」

抱きしめられたままお礼を言うのと制服の袖を遠慮がちにひっぱられた。

「あの、すみません。理事長とみはねはどういうご関係で？」

まって今さらだけどもめっちゃ恥ずかしい。変な顔とかしてなかったかな？どうしよう。

絵里先輩は私の袖を掴みながらまっすぐと理事長を見つめている。

なんだから、さっきまでと違ってキリツとしてる。さっきは優しい先輩という感じだったが今は生徒会長といった雰囲気を感じる。まあ、生徒会長がどんな感じなのかはよくわからないけど。

「そうね、ちょうど良かったわ。絢瀬さんも一緒に理事長室に来てちょうだい」

*

く絵里く

私は今、理事長のあとを今日知り合ったばかりのみはねと一緒につ

いていつている。理事長室つてことは重要な話なのかしら。

理事長室につくと理事長は自分の椅子に座った。

「わざわざごめんさいね。ふたりとも」

話の途中でここにきたのだから話というのはさっきのことに関係しているということだろうか。みはねと理事長の関係。家族：ではないわよね。苗字が違うし、理事長にはすでに二年生に娘さんがいたはずだわ。

「いえ、こちらこそすみません」

「その…お話の続きということでしょうか？」

みはねが暗い顔をして謝る中、私は気持ちが焦って話の続きを促す。

「そうね。まず、みはねちゃんはこのに住んでるの。だから、下校時刻を過ぎて学校にいても問題ないわ」

学校に住んでいる？ますます意味がわからなくなる。

「それと、私とみはねちゃんは家族未満知り合い以上…ね」

まあ、ほとんど家族ね。と、理事長は微笑む。

ほとんど家族…いや、家族未満。いくら幼い頃から賢いと言われてきた私でも頭がこんがらがってきた。

「南理事長は私の命の恩人なんです」

みはねはそういつて悲しく笑った。それにどういう意味があるのかはわからない。けど、みはねにそんな笑顔は似合わないと思った。ついさつき出会った時、みはねを見たときからなぜか胸が苦しい。笑顔とともに彼女の素直すぎる言葉を聞いたとき顔は熱くなるし。

——確かめたい。この気持ちがあるのか。

「ねえみはね。あなた、生徒会に入らない？」

「えっ？」

みはねは目を丸くさせている。

自分でもそんな言葉が出るとは思っていなかった。私のそばにいて欲しくて、私がみはねのそばにいたくて。つい、というのが正しいのかしら。

「あら、ちょうどよかった。私からもお願いしていいかしら？」

突然のお願いに戸惑っているようだったが、理事長と私を交互に見るとみはねはふわりと笑った。

「はい。よろしくお願いします」

まただ、鼓動が速くなって顔が熱くなる。みはねの笑顔を見ると私の心臓は騒ぎ出す。

今まで自分から誰かに歩み寄ることなんてなかった。手を伸ばそうと思うことなんてなかった。でも、今初めて心からみはねのことをもっと知りたいと思う。

この気持ちを大切にしたい。

私の中で何かが動き始めた。

3. 生徒会

今日は初めて生徒会の活動に参加させてもらう。

授業が終わったら迎えに行くから待っていてと絵里先輩に言われたはいいけど…

「来ないなあ…」

クラスのみんながいなくなってから30分。外からは、部活動をする生徒たちの声がある。

うーん、約束忘れちゃったのかな？

まあ、かといって何もすることがないので、おとなしく自分の席に座っている。さみしいなあ…なんてね。

「ごめんなさいーっはあ…はっ先生に捕まっちゃって」

いきなり教室のドアが開いて現れたのは絵里先輩だった。

約束…忘れられてなかった。それだけで嬉しい気持ちになる。

それに、急いできてくれたのがその様子からわかる。

「そんなに急いで来なくても大丈夫でしたよ？」

「ダメよ！授業が終わってから、かなり時間が経っているのよ？急ぐに決まってるじゃない。ほんとにいてくれてよかった…」

そういつて絵里先輩は私の手を取って立たせる。そのままぎゅつと私の手を握ると歩き始めた。

「遅れてしまって本当にごめんなさい」

「大丈夫ですよ。それに、絵里先輩こそ大丈夫ですか？」

「ふふっ心配されるようなことは何もないわよ」

歩きながら横顔を盗み見ると、絵里先輩は眉を八の字に下げている。そんなに気にしなくてもいいのに。

「走ってきてくれただけで、ちゃんときてくれただけで嬉しいですよ」

「そ、そう。もう、みはねには敵わないわね」

何がだろう？よくわからないけどもう気にしていないようだ。

絵里先輩はニコニコとしながら話しはじめた。まあ、さっきの先生

に捕まったといっていたことだけ。いつも生徒会長つてだけで色々な先生から頼られているらしい。

いつも歩いている廊下なのに、絵里先輩と一緒にいるだけで全然違く見える。絵里先輩の笑顔が輝いていると同時に、周りの世界もキラキラと綺麗に輝いて見える。私の心もポカポカとあたたかい気持ちになる。それに、ときどき私の鼻腔をくすぐる絵里先輩の優しい匂いにひどく安心する。

いつかこの気持ちの正体に気づく時が来るのかな？

そうこうしているうちに生徒会室についたようだ。

絵里先輩は慣れたようにドアを開けて私に入るように促す。私が入るとそれに続いて絵里先輩も中に入った。

「えりちおそい！つて…」

「希ごめんなさい。先生に捕まっちゃってて」

「そ、その子は…？」

絵里先輩の謝罪はスルーされ視線は私のほうを向いたまま動かない。

「あ、今日から生徒会に入ることになった一年の桜みはねです」

慣れてきたばかりの笑顔を向ける。

「ほら、希。見つめてないで自己紹介」

「ご、ごめんなあ。ウチは東條希！えりちと同じ三年生で生徒会の副会長やで」

希先輩は少しだけわざとらしい関西弁で自己紹介をしてくれた。

その後すぐにこっちまできて私に手を出して来る。私は迷うことなくその手を取る。

「希先輩。よろしくお願いします！」

「よろしくなあ！みはねちゃん♪」

ぎゅーつと抱きしめられる。

あたたかいしやわらかい。って何を考えているんだろう。

隣にいる絵里先輩は、さっきからずっと私の左手を握ったまま離してくれない。それに抱きしめられている今は刺さるような視線を向けられている。

「希。そろそろ仕事しましょう」

「そんなこと言ってるけど、えりちなんかみはねちゃんの手ずつと握ってるやん」

「わ、わかってるわよ」

「ああ、いつものかっこいい会長さんはどこへ行つてしもたんやろか。デレデレしちやって」

希先輩はわざと目を細めて絵里先輩のほうを見る。絵里先輩はより繋がっている手に力を込めてくる。

ふふっなんだかかわいい。

「そ、それは！希も同じでしょう！」

口喧嘩とも言えないような言い合いを始める二人が微笑ましくて、とても仲がいいのがわかって思わず笑みがこぼれる。

「仲いいんですね？」

「まあ、そうね。もう、みはねに笑われちゃったじゃない」

「えりちのせいやけどなあ。ほら、書類溜まっとるよ？」

結局私は簡単な書類を分ける仕事を与えられ、絵里先輩と希先輩は大量の書類の処理をしている。絵里先輩は集中しているのか黙々と作業を進めている。それに対して希先輩はちよくちよく私にいたずらをしてくる。いきなりほっぺをつんつんしてきたり、耳元に息を吹きかけてきたり。話しかけてくれるのは嬉しいが、スキンシップが少しばかり多くて恥ずかしい。

一時間ほど経って私の仕事は終わろうとしていた。それよりも、さつきから疑問に思っていることがある。

「希先輩」

「ん？みはねちゃんどうしたん？」

「生徒会って他に人いないんですか？」

さつきからずっと不思議に思っていた。コの字型のテーブルに椅子はあるが他に生徒が来ることはない。

「ああ、一応いるんよ。でも、みんな部活入つとるし、忙しいからなあ。それに、仕事はウチとえりちで終わらせられるし」

希先輩は絵里先輩のほうを見ながら穏やかに笑う。

でも、二人だけでこの量を終わらせるのはとても大変だと思う。

「でもそれって…」

思ったことを口にしようとしたら、希先輩にほっぺたをムギユツとつままれる。

「みはねちゃんが手伝ってくれるんやし、問題ないやん？」

そう言って微笑まれてしまえばもう何もいうことはできない。な
んだらう、希先輩って何考えてるのかわからない。でも、とても優し
いことだけはわかる。

絵里先輩のほうを見ると絵里先輩もこつちを見ていた。

「あ、そや。ウチ今日は用事があるんやった。えりち、残りは任せ
ちやつてもええ？」

「ええ、大丈夫よ」

「ほな、えりちとみはねちゃんまたな！」

その返事を聞くと希先輩はカバンを持ってドアのところまで手をぶ
んぶん振ったあと帰ってしまった。残りといっても希先輩の分の仕
事はもう終わっているようだった。

*

く希く

いきなりすぎただろうか？

まあ、問題ないやろ。それよりも、みはねちゃんを連れてきたとき
のえりちのあの顔。あんな顔なかなか珍しい。普段クラスにいると
きなんか冷たいくらい表情してるのに。まあ、ウチといるときは普
通に笑ってくれるけど。

それにしても、あからさまにやきもち妬きすぎやろ。ウチが
ちよーつとみはねちゃんにちよっかいかけるだけで羨ましそうな顔
しちやつて…

まあ、えりちのことだから仕事中に話しかけるなんてできないんや
ろうな。ってことで二人きりの時間を作ってあげた。

本当にえりちは世話がやけるんやから…なんて。本音を言うなら
ウチもみはねちゃんともつと話したかったんやけどね。

ま、今回はえりちに譲ってあげる♪

携帯でえりちにメッセージを送って、空を見上げる。

真つ赤な夕焼けがウチを照らしていた。

*

く絵里く

希が帰ってしまったてすぐ、私の携帯にメッセージが届いた。

【みはねちゃんと仲良くなあ♪】

希…

周りに気を使いすぎる彼女はきつと私のことに気づいていたのだらう。だって、私だってみはねともつと話したい。もつとみはねのことを知りたいの。

でも、こんなの送られてきちゃったら変に意識しちゃうじゃない！
はあ…仕事はまだまだ終わってないし、集中することにしなう。

しばらく時間が経ったあと、みはねがおずおずといった様子で話しかけてきた。

「えつと、もう外真つ暗ですよ…？」

その声にはつとして外を見る。陽は完全に沈んでいて月が姿を見せていた。私としたことが、大失態だわ。

時計の針はもう19時を過ぎていた。下校時刻を過ぎているため、部活動をしている生徒もいない。学院内はとても静かだった。

「ほ、ほんとね。もう帰らないと怒られてしまうわ…」

微かに声が震える。実は、私は暗いところが得意ではない。いや、大の苦手だ。暗所恐怖症といえは伝わるかしら？

そう、とにかく暗いところがダメなの。

普段は暗くなる前に仕事は終わらせていたが、今日は集中していたため時間のことを考えていなかった。

「絵里先輩、暗いのこわいんですか？」

な、なんでそんなに鋭いのよ!?

「ま、まさか。そんなことないわよ」

「はあ…心配なので家まで送りますよ。暗いし、変な人とかいたら大変ですし、ね？」

「い、いいわよ! だい」「ほら、置いていっちなやいますよ」

そういつて電気を消そうとするみはね。

真つ暗の中に取り残されると思うと嫌で、みはねのところまで急いで走っていく。何も言わずに手を繋いで歩いてくれる。

私の方が年上なのに…と思いつながらも、みはねとまだ一緒に居られると思うと少し嬉しかった。

「送ってくれてありがとう」

暗いのが怖かったはずなのに、優しく話しかけてくれるみはねに安心したのか不思議と帰り道が短く感じた。

「いえいえ。私のこと気にせず家の中入ってください」

もう、この子はどこまで優しいのよ。お言葉に甘えて家の鍵を開ける。

「ただいまーつてきやあ!？」

ドアを開けた瞬間前から衝撃を受けた。

「お姉ちゃん! 遅いし連絡ないから心配したよ!」

「あ、亜里沙…! めんなさい」

妹の亜里沙が飛び出してきたようだ。そういえば、連絡入れるのすっかり忘れてたわ。

「絵里先輩、大丈夫ですか？」

みはね、まだいてくれたのね。

亜里沙は私からひよつこりと顔を出すと、目を輝かせてみはねを見

た。

「お、お姉ちゃん！この人は…？」

亜里沙も希と同じような反応をするのね。まあ、私も人のこと言えないんだけど。

「桜みはねです。一年生なんですけど、生徒会で絵里先輩のお世話になってます」

みはねはにっこりと笑った。

「っていつても今日から入ったのよ。みはね、妹の亜里沙よ」

「お姉ちゃんの妹の亜里沙です！みはねさんよろしくお願いします」

「うん。よろしくね、亜里沙ちゃん」

亜里沙は私から離れるとみはねにハグをする。

最初はびつくりしていたみはねだが、笑顔で亜里沙の頭をなでていた。

もともと人懐っこい性格をしている亜里沙だけど、こんなにすぐ抱きつくなんて初めてかもしれない。

「ほ、ほら亜里沙。もう家に入るわよ。みはね、送ってくれて本当にありがとう。気をつけて帰ってね」

亜里沙をみはねから無理やり引き離す。亜里沙は不満そうな顔をしていたが、嫌なものはしょうがない。

希も亜里沙もなんでそんな簡単に…はあ、そんなこと考えてもしようがないわよね。

みはねに手をふってドアを閉める。

その日の夕飯の亜里沙の話題はみはねのことばかり。

希の時もそうだったけど、なぜだか心にもやがかったように苦しい。

この気持ちは…

4. 自覚

放課後は毎日生徒会に行っている。でも、絵里先輩と話す機会是最初の日以来めつきり減ってしまった。

言葉を交わすのは仕事の話ばかりで、笑顔を見せてくれることもほぼなくなってしまった。

私、嫌われるようなことしちゃったかな…？

あの日、手をふって家に入ろうとする絵里先輩の顔が、少し悲しうだったのを覚えている。…もしかしたら、何か関係あるのかもしれないな。

ぼんやりと授業を受けていたら、いつの間にかお昼休みになってしまったようだ。

「ねえ、みはね。ちよつといい？」

となりにいた真姫ちゃんが、私の制服の袖を遠慮がちに引っ張ってきた。

「どうしたの？真姫ちゃん」

「…ついてきて」

真姫ちゃんはそれ以上なにも言わず教室を出て行ってしまった。

私は慌てて教室を出て真姫ちゃんを追いかけた。

「どこ行くの？」

「秘密」

「ねえ、教えてよ」

私の質問に答えてくれる気はないらしく、スタスタと早歩きでどんな先に行ってしまう。私はそのあとをちよこちよこ小走りで追いかける。

そうこうしてついたのは音楽室だった。

真姫ちゃんは迷うことなく入るとピアノの椅子に座った。

「ま、真姫ちゃんピアノ弾けるの!？」

「ちよつと、バカにしているの? 弾けなかったら座るわけないじゃない」

真姫ちゃん鍵盤のふたを開けながら呆れた顔でこっちを見る。

が、すぐに目を閉じて鍵盤の上に手を置いた。

時間が一瞬止まった気がした。

「愛してるばんぎょい♪♪ここでくよか〜つた〜♪〜」

真姫ちゃんがピアノを弾きながら歌い始める。

声も出ないほどの素晴らしい演奏に圧倒された。そしてなにより、

真姫ちゃんの歌声と弾き語る姿がとても綺麗だった。

「真姫ちゃん…すごい。すごく綺麗だった!」

拍手をしながら感想を述べる。

「と、当然でしょ」

「今の曲って…」

「その、私が作ったのよ」

「作曲もできちゃうなんてすごい!」

真姫ちゃんは当たり前じゃない、と言いながらも照れていて、さっきまでとは違ってすごくかわいかった。

「ああ、もう。聞かせるんじゃないかった」

「ねえ、なんで聞かせてくれたの?」

真姫ちゃんの顔を覗き込むと思いつきりそらされた。

ちよつと傷つくんだけど…

「べつに、みはねが元気ないみたいだった…から」

ほんとに小さな声でそうつぶやいた。

「えっ?」

「な、なんでもないわよ!」

真姫ちゃんは突然立ち上がると音楽室から出て行ってしまった。

うそ、本当はちゃんと聞こえてた。私を元気づけるために聞かせてくれたんだね。

「真姫ちゃんありがとう」

そうだよ。せつかく真姫ちゃんが元気になるようにピアノを聞かせてくれたんだから。頑張らないとだよね!

今日、ちゃんと絵里先輩と話そう。そう決意して真姫ちゃんの背中を追いかけた。

*

放課後。

お昼休みはあんなに意気込んでいたのに、やっぱり少し不安になってくる。でも、行かないと…だよな。

「失礼します。遅れてしまつてすみません」

絵里先輩は私のほうを一瞬見たが、すぐに視線を落として仕事に戻つてしまった。

やっぱり嫌われてるのかな…？いや、でも…

希先輩は椅子の上に乗つて棚の上のものを取ろうとしていた。

「あ、みはねちゃん！気にせんでええよ」

私に気づいて手をひらひら振ってくる。

…椅子が少しぐらついている。

「…っ!？」

「危ない！」

不安が的中する。希先輩が椅子ごと横に倒れたのだ。しかし、先輩の体が床に打ちつけられることはなかった。

早くに気づいた私は、希先輩をなんとか受け止めることができた。

まあ、二人とも床に倒れているわけだけど…

「ん、…っ」

「希！大丈夫!？」

絵里先輩が大声で叫ぶ。

「だ、大丈夫…ですか？」

「大丈夫、大丈夫。みはねちゃんこそ…」

希先輩は、へらりと笑う。

「よかった…。心臓、止まるかと思いましたがよ…っ」

上に乗っている希先輩を抱きしめながら、頭をポンポンとなでる。

「ウチはケガとかしても全然平気よ？／＼／＼」

希先輩はほおを赤く染めながら私から離れようとする。しかし、そうはさせなかつた。

「希先輩がよくても、私がよくないんです」

だから危ないことしないでください、とより一層希先輩を強く抱きしめてから手を離して解放した。

「うん。ごめんなあ…」

そう言つて希先輩は立ち上がろうとした…が、へなへなと座り込んでしまった。

「足、捻つてしもうたみたい…」

顔は笑っているが、相当痛いのだろう。

「じゃあ、はい！どーぞ？」

そう言つてしゃがんで希先輩に背を向ける。

「ど、どうしたん？みはねちゃん？」

「いや、保健室に連れて行ってあげようとしてるんですけど…？おんぶ、知らないんですか？」

「いやいやいや、一人で行けるよ！」

「乗らないなら、引きずつて連れて行きますけど…？」

首をかしげ、にっこりと笑顔でそう言う。ちよつと意地悪だっただらうか？でも、まださっきのこと怒っているわけだし…ね。

「引きずられるのは嫌や…」

希先輩は、しゅんとした顔を見ると素直に肩に手をかけてきた。

最初から乗ればいいのに…

「じゃあ、保健室に行つてきますね」

希先輩を背中に乗つけて生徒会室をでる。

絵里先輩からの返事はなかつた。

〈絵里〉

「じゃあ、保健室に行ってきますね」

そう言ってみはねは希をおんぶをして行ってしまった。

「はあ…」

なによ、希ばつかりに優しくして。いや、今回のことはしようがないことなのだが…

あの日以来、みはねとうまく話すことができない。もしかしたら、みはねのことを避けてしまっているかもしれない。

みはねは、気にしていないのかしら…

今日はお昼休みにみはねの教室に話がしたくて行ったけどいないし。

「もう…なんなのよ!」

そう言つて机に突つ伏す。と、同時にドアが開いた。

タイミングよすぎよ…もう。

「絵里先輩…どうかしたんですか…?」

みはねが帰ってきてしまった。

「べつに…仕事、まだ残ってるから」

姿勢を正して仕事に戻る。

みはねは希のカバンを持ってもう一度出て行った。希は…帰るのね。

戻ってくると、みはねは何も言わずに仕事を始めた。希の分の仕事もできる範囲でやっているみたいだった。

「絵里先輩、時間大丈夫なんですか?」

気がついたら、いつしかのように日が暮れてしまっていた。

みはねも仕事で気がつかなかったようだ。

「…帰るわね」

カバンを持って立ち上がる。

「お、送っていきま」

「いい、じゃあ」

みはねの言葉をさえぎってそう言い残して教室を出ると私は走り出した。

自分でもなんでそんなことをしたのかわからなかった。普通に話せばいいのに。自分の行動に傷ついている自分がいる。

学校を出てからも足を止めることはない。

走って走って走って走って、疲れたとかそんなのおかまいなしに走り続ける。

「あっ!?!」

足がもつれて転んでしまった。

「痛い…」

そこまでひどい転び方をしたわけではないけど、膝を擦りむいてしまったようで少し血が滲んでいた。

痛くて、情けなくて涙が出てくる。

立ち上がれないわ…

「はあ…はあ…やっど…見つけたっ」

この声は…みはね…

息が切れてる。走って探してくれたのだろうか。

「転んじゃったんですか?家まで送っていくので、背中、乗ってください」

そう言って私の前にしゃがむ。

そんな…そんなの…

「一人で帰れるわよ!ほうっておいて!」

つくづく私は素直じゃない。

本当はみはねが来てくれて嬉しいのに、おんぶまでしてくれるって言うのに…

でも、頭に浮かぶのはみはねの背中に乗った希の横顔。すごく嬉しそうだったわ…

「はあ…」

みはねはため息をつくとき、立ち上がって私の視界から消えた。

そうよね、私のことなんて…

「きゃあっ!?!」

いきなり体が浮いた。

みはねと目が合う。悲しそうな顔…

「すみません、こんな無理やり…でも、先輩が悪いんですよ…」

そう言つて歩き出す。

お、お姫様抱っこなんて初めてされた。

恥ずかしい。でも、みはねの体温が、とくとくと伝わってくる鼓動

が気持ちいい…

目をつぶっていると、突然足が止まる。家に着いてしまったようだ。

「鍵、ありますか?」

カバンから鍵を取り、無言でみはねに鍵を渡す。

「すみません。……お邪魔します」

器用にドアを開ける。中に入ると亜里沙が玄関のところで待っていた。

「あ!お姉ちゃん!…つてみはねさん!?!ど、どうしたんですか?」

「ああ、亜里沙ちゃん。ちよつとお邪魔してもいいかな?」

「は、はい!どうぞ!」

「ありがとう」

亜里沙がみはねをリビングに案内する。

リビングに入ると私は優しくソファに下ろされた。

「ちよつと待つててください」

大人しく待つことしかできない。

…いろいろとびくりしすぎて動けなかった。

みはねと亜里沙が話している。亜里沙は最初は驚いていたようだが、最後は笑顔で話していた。みはね、また亜里沙の頭なでて話している…

話し終わったのか、亜里沙はみはねに救急箱を渡すとリビングを出て行ってしまった。

「絵里先輩、傷見せて」

「……………」

真剣な表情のみはねに何も言葉が出てこない。

「私のこと、嫌いですか…？」

みはねは手当てをしながら、優しい声で私に問いかける。

私は首を横に振る。嫌いなわけ、ないじゃない。

「…本当に？」

今度は首を一生懸命縦にふる。

「…よかった」

「み…はねこそ、私のこと嫌いなんじゃない…」

そう言うともみはねは私の目を見ながら手当てし終わった膝に優しくおでこをくつつける。みはねのサラサラな髪があたって少しくすぐったい。

「嫌いなわけではない。好きですよ？」

「う、うう…」

そんな真剣に言われたら…さすがに照れてしまう。

顔が熱い。きつと私の顔、真っ赤になっているわね。

「絵里先輩に嫌われてなくてよかった」

みはねは本当に安心したように笑顔で言ってくる。

どうしよう…。頭の中が何かが燃えているように熱くなってくる。

私は両手をみはねのほっぺに添えると――

みはねの柔らかかそうな唇に自分のそれを重ねた。

「ん…っ」

あ、やっぱり柔らかい…

そんなことを考えながら唇を離す。

って、私今…みはねにキスした…？

「ご、ごめんなさい…！自分でもよくわからなくて、本当にごめんなさい」

「い、いえーだ、大丈夫です…っ」

みはねは真っ赤になった顔を隠すように手で覆って返事をする。

ふふっ耳まで真っ赤だから意味ないのに。

そんなかわいいみはねの頭を優しくなでる。すると、みはねはぎゅっつと抱きついてきた。

は、ハラショー！

何この生き物、かわいすぎるわ！

「絵里先輩の匂い、落ち着く」

私の首元に頭をぐりぐりしながら言ってくるものだから、思考はパ
ンク寸前だ。

突然扉が開く音がする。

ふたりしてハツとなつてリビングの入り口を見る。

「む、お姉ちゃんばかりみはねさんと仲良くしててずるいよ」

そこにはぶくーつとほつぺを膨らませた亜里沙がいた。

「あはは、お姉ちゃんのこと独り占めしちゃってごめんね？ 亜里沙
ちゃん」

みはね今なんて言った？ 亜里沙が言っているのは、そういうこと
じゃないと思うんだけど…

「…今日泊まっていつてくれたら許します」

「あ、えーと、絵里先輩…」

「いいわよ。じゃあ、亜里沙？ ご飯作っちゃうからみはねとお話でも
してってくれるかしら？」

亜里沙はうんっ！と頷いた。

危ない、亜里沙が来てくれなかったら…

それにみはねが泊まってくれるみたいだし、亜里沙には感謝しない
とね。

ご飯も作り終わり、いつもとは違う三人でご飯を食べた。

みはねは私の料理に大げさでしよつてくらい喜んで、おいしいって
言ってくれた。

ご飯を食べ終り、それぞれお風呂に入った後に事件は起きた。

「みはねさんは私と寝るのっ！」

「え、わ、私も一緒に寝たいわ…！」

「ちよ、二人とも落ち着いてください…！」

みはねの右腕を亜里沙、左腕を私で引つ張り合っている。みはねは
苦笑いをしながらなだめることしかできないみたいで…

私だってみはねと寝たいもの！いくら亜里沙でも今回は譲れないわ！

「みはね(さん)!!!」

「は、はいっー!」

「どっちか決めて(ください)ー!」

「え、ええく、どっちもとは…」

「ダメ!!!」

「む、むう…じゃあ、今回は絵里先輩のところにお世話になり…ます」

「やった♪もちろんよ!」

「そんなあ…みはねさん…」

亜里沙は涙目でみはねに抱きつく。

「亜里沙ちゃんとは、次一緒に寝ようね」

「絶対ですよ…?」

みはねはうん、と言いながら亜里沙の小指に自分の小指を絡めると、約束と笑顔で言った。

みはねの笑顔はすごいわね。泣きそうだった亜里沙がいつの間にかあんなに笑顔になってるわ。

「みはね、部屋に行きましょう?」

「はい!じゃあ、亜里沙ちゃんおやすみ」

あ、また頭なでてる…

「おやすみなさい!みはねさん!」

そう言っつて、亜里沙はみはねの腕を自分の方に引っ張ってみはねのほっぺにキスをした。そして、満足そうな顔を見ると自分の部屋に行ってしまった

「キス…されちゃいました」

みはねはキスされたほっぺを触り、はにかみながらそんなことを言う。

そんなの…認められないわ!

そう思い、みはねの腕を引っ張って自分の部屋まで急ぐ。

部屋に入り、ドアを閉める。

「え、絵里先輩?どうしたんですか?」

「べつに…」

そう言つてベッドに向かう。が、後ろからみはねに抱きつかれた。

「うそ…先輩怒ってる」

そう耳元で囁かれる。

「理由、教えてください」

本当に悲しそうに言うみはねに正直に言葉が出る。

「…みはね、亜里沙にキスされて嬉しそうにしてたじゃない…」

「それだけ？」

みはねは、予想外だったのかきよとんとしている。

私は、こくりと頷いてうつむいた。

気がつくとも私はみはねに向き合う形にされていた。

「あーあ、先輩にキスされた時のほうが嬉しかったんだけどなあ」

みはねは満面の笑みでそんなことを言う。

もう、本当にずるいんだから。

「みはね、一緒に寝ましょ？」

「え、狭くなるから床で寝ますよ」

「そんなの、許すわけないでしょう？」

無理やり腕を引っ張る。

「うわあ!？」

ドサツつと二人してベッドに倒れ込む。

隣を見ればみはねが肩を揺らして笑っている。

思わず私もつられてしまい、二人して笑いあう。

「……なんだかとても幸せ。」

「ねね、狭いからくつついて寝ましょ？」

みはねは、恥ずかしげもなくそんなことを言ってくる。

「な、え、ちよ」

「絵里先輩動揺しすぎ〜！ほら、ぎゅ〜っ」

「な、くすぐったいわよ」

みはねが抱きついてスリスリしてくる。

ちよ、かわいい！かわいいけど、私の理性が…

「え…りせんぱ…お、やす…み…なさ…」

って、寝ちやった!?

ふふ、まったくもう…

「おやすみ、みはね…」

私はあなたに恋をしている。きつと、出会ったときから。

希や亜里沙がみはねと仲良くしているのをみると胸が苦しくなるの。

私、けっこうやきもち妬きみたい。

だから覚悟しててね？

そつと、みはねのおでこにキスをした。

5. 廃校と…

「ん、ふわあ…あ」

んー、よく寝たなあ…

ん？動けない。目線を少し上にすると綺麗な金色と整った寝顔があった。つて絵里先輩!?

そ、そっか…

昨日絵里先輩のお家にお泊りしたんだった。

しつかりと絵里先輩の腕に捕まっついていて、動くことがかなり困難だ。

今、絵里先輩の抱き枕状態かも。なんて、ふざけてる場合じゃない。けっこう苦しくなってきた。

時間は…つと、まだ5時半…

起こしたら悪いし、そつと抜け出て書き置きでもして学院に戻ろうかなあ、と、ぼんやりとそんなことを考えながら絵里先輩の腕からの脱出を試みる。

「ん、やあ…」

抜け出そうとすると絵里先輩は私をよりきつく抱きしめてきた。

う、動けない。完全にホールドされた…

しょうがない、もうちよつとだけこのままでいよう。うん。

べ、べつに、絵里先輩がかわいくていい匂いだからこのままで居たいわけじゃないよ？

誰に弁解しているのかわからないけど、とりあえず仕方がなくだから。いや、うれしいんだけどね？

犬みたいに、すりすりとすり寄り寄ってくる絵里先輩がなんだかかわいくて抱き返してみる。その瞬間、絵里先輩がかすかに笑った。気がする。え、本当に寝てる？起きてたりしてないよね？

「絵里先輩」

がんばって少し上にいって、わぎと耳元で囁いてみる。

あれ？今ちよつと反応しなかったか？

ふふついたずらしちやおつと。

絵里先輩の背中に腕を回しておでこにキスを試してみた。さてさて、どんな反応してくれるのかなあ？

あ、顔真っ赤。これは完全に起きてるな。

もう少しだけいたずらするか。

「起きてないみたいだし、今度は別の場所にしちやおうかな〜」

そう言っ顔を近づける。絵里先輩の唇に触れるまで、あと一センチほどだろうか。絵里先輩は顔を真っ赤にしたまま動かない。え、何考えてるの？普通起きるでしょ。

あとちよつとで触れてしまおう。というところで

「やっぱ起きないからやめとこ」

顔を離す。まあ、もともとするつもりなんてないし。それに、私が絵里先輩にキスするとか大問題だからね。

「あ、ああ…」

「つて、やっぱ起きてるじゃないですか」

絵里先輩は少し目を開けて残念そうな顔をしていた。え、残念そう…？

「みはね、おはよう」

ふにやりと笑いながら私におはようを言っってくれる。なに今のかわいすぎると思うんですけど。

よく考えたら呂律もしっかりしていない。まぶたもまだ重そうだ。

もしかしたらまだ眠いのかも…

「おはようございます。私、いったん学院に戻ろうとおも…」
「だあめ」

ちよ、ちよ、ちよ、何もつと強く抱きついてきてるんですか。しかもだめつて…

いい匂いするし、かわいいし。

やばい、やばい、やばい。

こういう時ってどうすればいいんだろう。

はあ…しょうがない…

「わかりました…」

そう言って、抱き返して絵里先輩のきれいな金の髪をすくようになる。朝なのに全然寝癖なんかついてなくてさらさらだ。

ほんと、絵里先輩の匂い好きだなあ…

その後、絵里先輩は寝てしまったが、私は起きてその寝顔を堪能することにした。

絵里先輩の寝顔普段の顔より幼く見える。ぎゅうつと抱きついて離れないところをみると絵里先輩は意外に甘えんぼなのかもしれない。

30分ほど、そのままでいたのだろうか。

6時になったらアラームが鳴ってしまい、夢のような時間は終わってしまった。

「絵里先輩、起きないといけない時間ですよ」

「んんう…み…はね…」

お、起きない…どうしよう…

「みはねさん！おはようございます」

亜里沙ちゃん登場。バツチリ目が覚めているのか元気よく挨拶をしてくれる。こう、なんか心がほっこりする。

「亜里沙ちゃん、絵里先輩が起きてくれないんだけど…」

「じゃあ、ほつといて朝ごはん食べましょう！」

「いや、ちゃんと起こさないとおつと」

亜里沙ちゃんは私の腕を引っ張ってくる。ご、強引だな…

ベッドから引きずり出されてしまった。

「お、きる…から、ちよつと…」

やつばい、絵里先輩がうるうるした瞳でしかも上目遣いで見つめてくる。

絵里先輩はベッドから降りようとするが、まだ脳が覚醒していないせいもあってぺたりと座り込んでしまった。

「お姉ちゃんって、朝弱かったっけ？」

亜里沙ちゃんは、首をこてんと横に倒しながら考えている。いや助けてあげなよ。

お姉ちゃんは昨日みはねさんと寝たから朝くらいは…とつぶやいている。

なるほど…

でも、絵里先輩かわいそうだし。

しょうがない…

絵里先輩を昨日のように抱き上げる。

「なっ!?!お姉ちゃんずるい!」

亜里沙ちゃんは私の腕をぐいぐいと引っ張って体を揺らしてくる。

「みはねえ」

絵里先輩は満足なのかわたしの首にて腕を回してくる。

か、かわいい。

こんなの、私が男子だったらすぐ好きになっちゃうんだろうなあ…

「さ、亜里沙ちゃん。とりあえずリビングまで行こう?そしたら、ご飯

一緒に作って欲しいなあ…だめ?」

亜里沙ちゃんは顔を真っ赤にして、放心状態になってしまった。

ん、あれ?熱でもあるの?大丈夫かな?

「あ、亜里沙ちゃん?」

「はっ、もちろんです!」

元気よく返事してくれたし、具合が悪いわけではなさそうだ。

「よかった♪」

とにかく、リビングに行こう。

亜里沙ちゃんにドアを開けてもらい、リビングへと歩き出す。

てか、絵里先輩、身長のわりには軽すぎだよなあ…ま、スタイルいいし。

ソファに絵里先輩を座らせて、亜里沙ちゃんと朝ごはんを作ることにした。

妹ってできたらこんな感じなのかなあ、なんて思いながら楽しい時間過ごした。

その後、私は一足先に学院に戻ることにした。

昨日は楽しかったなあ…なんて考えているうちに、教室の自分の席で寝てしまっていたようだ。周りはクラスメイトが登校してきたのか少しざわついている。

そんな中で私はさつきから誰かに頭をなでられているみたいだ。優しい手つき。知っている感触。

このままずっとこうしていたいー

でも、そろそろ起きないといけない。

「ん、んん」

「あ、みいちゃん起きた？」

この声はことりちゃん？そつと目を開ける。

目の前には…って誰!?初めてみる顔が机から目だけをのぞかせてこつちをじつと見つめていた。

「つてうわあ!？」

「あはは…穂乃果ちゃん…」

「穂乃果!何やってるんですか!」

「あ、ことりちゃ…ことり先輩」

「む…おはよう、みいちゃん」

ことりちゃんはむつとした表情をしている。

機嫌が悪くなった…?まあ、あらかた私が他人行儀だからといったところだろう。

私はそこに触れることなく疑問を口にする。

「あの…この方達は…?」

「自己紹介が遅れてすみません。私、ことりの幼なじみの園田海未と申します」

ことり先輩の隣に立っていた人がきれいな動きでお辞儀をする。

大和撫子、という言葉がよく似合うと思った。青色に近い黒い髪に

穏やかな笑みを浮かべている。園田海未さんか…素敵な人だな。

「私、高坂穂乃果！よろしくね！」

さつき、目の前で私の顔をガン見していた人は高坂穂乃果さんというようだ。サイドテールがチャームポイントだろうか。その笑顔からもわかる通りとても元気で明るい人みたい。

「よろしくお願いします。海未先輩、穂乃果先輩。私は桜みはねです」
ちようど私の自己紹介が終わったところで予鈴がなってしまった。

「あ、予鈴なっちゃった…みいちゃん、また昼休みに来るからね」

ことり先輩は手を振り、海未先輩は軽い会釈をして嫌がる穂乃果先輩を引つ張り自分の教室へと戻っていった。

「は、廃校?!?!」

「穂乃果!?!」

「穂乃果ちゃん!」

なんてやり取りが聞こえたような気がした…

って廃校!?

休み時間に廊下を見てみたら、廃校の張り紙が張り出されていたようだった。

*

「みいちゃん!お外で一緒に昼食べよう?」

ことりちゃ…ことり先輩がやってきた。学校なんだからちやんと先輩をつけよう。

あ、お昼ご飯いつも食べないんだった…

「わ、わかりました」

ことり先輩と中庭に出ると、すでにベンチのところに穂乃果先輩と海未先輩が座って待っていた。

「あれ?みいちゃんお昼ご飯は?」

「はは、忘れちゃって…」

実際忘れたというよりかは、お昼を抜いているだけなのだが…

その理由は食べたくないというよりは、理事長に出していただいてる生活費をあまり使いたくないという思いからだ。

ことりちゃんに心配かけるのも嫌だし笑ってごまかすことにする。

「じゃあ、はい、あーん♡」

ことり先輩が箸で卵焼きを持って私に差し出してくる。

「な、ことり！破廉恥です！みはねが困っているではありませんか！」

「あ、みはねちゃんばっかりずるい！穂乃果も食べたい〜！」

仲良いなあ…

とりあえず、卵焼きを食べる。

「ん、甘くて美味しいですー！」

「喜んでくれて嬉しい♪」

そのまま、楽しくお昼休みを過ごした。

あと10分くらいしか残っていないという時、金髪をなびかせた絵里先輩と、希先輩が来た。

「あなたが、理事長の娘さん？」

「あ、えっと、はい」

「廃校のこと、何か聞いていたかしら？」

「いえ、今朝知ったばかりです…」

「そう。ありがとう」

なんだか絵里先輩の表情が冷たい。さつきからずつと見ているが、少しも笑うことがない。

対照的に希先輩はなんでかわからないけどにこにこしてるし…

「あと、みはね、放課後生徒会室でお話があるわ」

冷たい眼差しのまま私に一言そう告げる。

なんか…私の知っている絵里先輩じゃないみたい。なんだか凍ってしまいそうだ。

「わ、わかりました」

「じゃ、みはねちゃんまたなあ」

絵里先輩と希先輩は校舎に戻っていった。

先輩たちが校舎に入るとすぐ、校内放送の音が響く。

《一年の桜みはねさん。至急理事長室に来てください》

次から次へと…

はあ…

「今日はありがとうございました。では、私はこれで」

三人と別れて理事長室へ急ぐ。もちろん廊下は走らずに。

前に一度だけ来たことはあるが、なかなか入りづらい。ていねいに
ノックを二回すると、中から理事長の返事が返って来た。

「失礼します。桜です」

「早かったわね♪」

「……。で、お話は？」

理事長は今朝のことりちゃんのように少し不機嫌そうな顔をする
と、無言で何かを差し出してきた。

「携帯、持っておいてちょうだい」

「ん、え？携帯…ですか？」

「ええ、いろんな人と連絡が取れたほうが便利じゃない？」

「そう…ですね。ありがとうございます」

「あ、ちなみに私の連絡先は入ってるわよ？」

くすくすと笑って理事長は言う。なんでドヤ顔なんだろう？

そんなことより廃校のことを聞きたかったが、理事長がそんなこと
ないかのように普通なので聞くに聞けなかった。まあ、私にはあまり
関係のないことなのかもしれない。

その後、少し雑談をしてから教室に戻って午後の授業を受けた。

*

ついに、ついにきてしまった放課後。

「失礼しま…って絵里先輩だけですか？」

「そうよ」

目も合わせてくれないんですけど…

あ、泣きそう。やばい。

「絵里先輩…はなしって、なんです…か」

ぽたりと涙が一筋こぼれた。やばい、なんでこんなことで泣いてるんだろう。

とつさに顔を見られたくなくて下を向いた。

「ああ、つて、みはね？どうしたの!？」

「なんでも、ないです」

「泣いてるじゃない!」

絵里先輩が優しく抱き寄せて頭をなでてくれる。絵里先輩…落ち着く匂い…

「だって、絵里先輩怒ってるみたいだし」

「お、怒ってなくはない…かな？」

「…っ、なんで」

「え、えっと…」

絵里先輩は困ったように眉を下げている。そんなに言いたくなくともなのかな。絵里先輩の顔をまっすぐに見ると観念したように口を開く。

「…はあ。だって、楽しそうにお昼ご飯食べてたじゃない。あーん、つてしてもらってたし」

それに、私はまだ一緒に食べたことない、なんて。

なんだ、そんなことか。そんなことで私泣かされてたのか。それに、今まで一緒に食べたことがないのは、そもそも私がお昼ご飯を食べてないわけで。誘われたらもちろんご一緒させてもらっていたと思う。

「じゃあ、今度先輩にもしてあげます」

「いや、そこは私がしてあげたいのだけど…」

あれ？してほしいんじゃないの？つて、いつまでこの状態でいなきゃいけないのだろうか。希先輩とかが入ってきてしまったらかなり恥ずかしい。

「せ、先輩…そろそろ…」

「ああ、ごめんなさい」

絵里先輩に解放された。ちよつと残念、なんて思っていないからね！

「それで、話っているのはね？今日も、泊まりに来ない？…あ、嫌だったらしいのよ？」

「え、迷惑じゃないですか？そんなに何度も行ったら…」

「私も、もちろん亜里沙も来てほしいと思っっているんだけど…だめかしら？」

私よりも背が高いが上目遣いでじつと見つめられる。も、もうこんなに行く以外に選択肢なんてないじゃないか。

お昼のあの真顔で怖い絵里先輩はどこに行っちゃったんだろう。上目遣いはずるいつて…

「じゃあ、お邪魔します」

「ええ！もちろんよ！」

と、そんなこんなで、また絵里先輩のお宅にお邪魔することになりました。

今回は約束通り亜里沙ちゃんのお部屋に泊まることにした。

亜里沙ちゃんのことや、絵里先輩のことをいろいろ聞かせてもらった。

もちろん寝る場所は別々だったから安心してほしい。

6. スクールアイドル

「みはねちゃん！お願いがあります！」

「な、何ですか？穂乃果先輩……」

「一緒にスクールアイドル：アイドル部やってください！」

え、いきなりすぎて思考が追いつかない。私がアイドル？無理無理、絶対無理。この容姿だよ？まあ、穂乃果先輩なら余裕でできると思うけど……

「ごめんなさい」

「ふ、フラれた!?!」

「そもそも、アイドル部って？」

「これから作ろうと思つて……あはは」

これから、つてことはまだないんだよね。

それに、さっきからこつちを気まずそうに見ている後ろの二人が気になる。

「えと、ことり先輩……と海未先輩もやるんですか？」

「う、うん……。穂乃果ちゃんが、学校存続のために頑張りたいって言うから、協力しようと思つて」

「本当は人前に出ることは嫌なのですが、穂乃果の本気の頼みなら協力しようと思います」

ああ……この幼なじみ二人、本当にいい人たちだなあ……

私もできることなら協力したい……うーん。

「あーなら、マネージャーとしてなら私も協力しますよ？」

まあ、陰ながら応援するくらいはいいだろう。学校存続のため、この三人のためならね。

「本当!?!みはねちゃんありがとう！」

穂乃果先輩は私の右手を両手で握るとぶんぶんと上下に激しく振

る。

人懐っこいわんちゃんみたいでかわいいなあ…もう。思わず先輩なのに頭をなでてしまう。

「それで、これからどうするんですか？まず、部活申請しなきゃでしょう？」

疑問に思っていたことを聞いてみる。

「あ、ああ…忘れてた！行こう、ことりちゃん、海未ちゃん！」
私もなのね、手離してくれないし…

と、いうわけで生徒会室にやってきました。

絵里先輩の前に一枚の紙を置く。

「…これは？」

怪訝そうな顔をされてしまって少しだけ悲しくなる。

「アイドル部設立の申請書です」

「それは見ればわかります」

「なら、認めていただけますね？」

さつきから絵里先輩の顔がこわい。周りの空気が凍ってしまうんじゃないかってくらいだ。お泊まりの時の甘々な先輩はどこへ行つてしまったの…

表情には出さず、心の中でがつくりと肩を落とす。

「いいえ。部活は同好会でも最低五人は必要なの」

「そ、そんなあ…」

「アイドル部…ねえ。じゃあ、ライブとかするん？」

「はい！」

「じゃあ、講堂の使用許可でももらったらええんやない？ライブしてからでも部の設立は遅ないと思うんやけど…？」

「ちよ、希っ！」

希先輩のおかげで、部活の設立はできなかったが、ライブをするこ
とになった。

新入生歓迎会の日の放課後に講堂を借りてライブ…か。

希先輩は何を考えているのだろう。

「やったあ！ライブだよ、ライブ！」

ちよ、喜びすぎなんじゃ…それに…

「グループ名や、歌とかダンスとか、どうするんですか？」

「……………」

え、何その反応…

「よし、グループ名は募集しよう！」

「ほ、穂乃果…単に考えるのがめんどくさかっただけですね」

「いいじゃん海未ちゃん、曲は…」

「それなら、私の友達にピアノが弾ける子がいるので作曲を頼んでみます。作詞だけですね」

「じゃあ、作曲のことはみいちゃんに任せてもいい？」

「いいですよ。ダンスは…みんなで考えるのが妥当だと思います」

「そうですね。じゃあ、今日の放課後穂乃果家でこれからのことを話し合います。もちろんみはねも参加で」

え、ええ…

「…わかりました」

*

「和菓子屋さん…ですか？」

「そうだよーさ、上がって上がって」

穂乃果先輩は楽しそうに、私の背中を押してくる。

半ば押し込まれるように部屋に入ると、和菓子屋さんだとは思えないほど、女の子らしいかわいらしい部屋だった。

「あ、みいちゃん遅かったね」

こことり先輩は、先に来て三色だんごを食べて待っていた。

「海未ちゃんは、弓道部で遅くなるんだって」

「じゃ、私たちだけでも話し合い…って、何漫画読み始めてるんです

か!？」

「大丈夫、大丈夫」

「ほ、穂乃果ちゃん…海未ちゃんに怒られちゃうよ?」

「大丈夫だつて」

「なにが大丈夫なんですか?」

海未先輩はいつの間に来たのか、穂乃果先輩の部屋のドアを開けてにっこりと笑っていた。目はまったく笑っていないけど。

ま、穂乃果先輩は見事なまでに海未先輩の雷を食らっていました。

「で、作詞なんだけど…海未ちゃん!お願い!」

「え、ええ!?なんで私なんですか!」

「ほら、海未ちゃん中学生の頃ポエム作ってたじゃん!だから…ね?」

え、さらつと言ったけど、それは私がいる前で言っていることだったのだろうか。

「それとこれとは別です!!!」

「海未ちゃん…おねがい!」

あーあ、ことり先輩に言われたら断れるわけがない。

海未先輩、もう逃げられないですね…

ご愁傷様です。

「み、みはねはどう思いますか!？」

「わ、私ですか!？」

うわ、こんなところで話を振られるとは思ってなかった。まあ…

「海未先輩なら、一番安心して任せられます。それに…私もお手伝いしますし…ね?」

完全に海未先輩の逃げ道を塞ぐ。

今回のことはやっぱり海未先輩に任せるのが一番いいと思うし。

「な、なら!仕方がないので引き受けます」

作詞してくれるみたい。まあ、私もちやんと手伝うことにしよう。

そのかわり…と海未先輩は続ける。

「練習メニューは私が作りますから」

ということ、とりあえず明日真姫ちゃんに作曲を頼んでみるこ

になり、お開きとなった。

く真姫く

「お願いっ！」

昼休み、いつも通りみはねと音楽室にきている。で、一曲弾き終
わったところでみはねがアイドルをやって欲しいと言ってきた。

ま、私がかわいいのは認めるけど、アイドルなんて…

「いやよ、なんで私が…」

「そこをなんとか！曲だけでも作ってよ！」

はあ…

私の家は両親とも医者をやっていて、将来は私も医者になるつもり
だ。

アイドル…そんなの、出来るわけがない。

私の音楽の道はもう絶たれているも同然だ。

「はあ…無理なのよ」

「なんで…？」

まったくこの子は…

「私、音楽は捨てて勉強しなきゃならないの！それに…アイドルの曲
なんか軽いじゃない」

「あきらめる必要はないんじゃないの!?!…ごめん…でも、本気だから、
練習だけでも見に来て欲しいな…」

悲しそうな顔のみはねに胸が痛む。

「私…私は…真姫ちゃんの音楽、大好きだよ…？」
手を握ってそんなことを言ってくるみはね。

この子絶対わかってない。周りの誰よりも魅力的な彼女。クラス
の子ども女子同士にもかかわらずみはねに惹かれている人が多いみた
いだし、よく話をしている人は学年は問わずたくさんいる。

同性なのについて思うかもしれないけど、ほんとそんなことが些細に感じられるくらい彼女は魅力的なのだ。

そんなかわいい顔で見ないでよ。困るじゃない…

「とにかく、教室に戻らないといけない時間よ。戻りましょ」

「…うん」

もう…見に行くだけならいいかしら、なんて思っている自分がいるわけ。

放課後になったら、みはねからグループ名が決まったと報告を受けた。なんで私に報告するのよ！

ちなみに、グループ名は『μ's』らしい。

きつと神話に出てくる女神のことを言いたいんだらうけど、九人もいないじゃない。

*

く希く

今日は生徒会の仕事がないからバイトしている神社のお掃除をしている。

おお、今日もやつとるなあ…

みはねちゃんたちはここ、神田明神で練習しとるみたい。

あれ？なぜか、電柱の陰に隠れて練習を見ている音ノ木生がいる。

ま、とりあえずここは…

後ろからそーっと近づいて、目の前の彼女の胸を一气につかむ。

「きやああああ!?!」

「まだまだ発展途上といったところやなあ」

「は、はあ?」

「でも、望みは捨てなくても大丈夫や!大きくなる可能性はある!」

「…なんの話?」

「ふふつまあ、何か悩んでそうやなあ?つて?」

「意味わかんない。帰ります」

ああ、本当に帰ってしまった。

あれは確か、一年生の西木野真姫ちゃん。

まさか…彼女も…

はあ…またライバル増えてしまいそうやなあ…

みはねちゃん。

ま、これから面白くなりそうやん♪

さつそく放課後に私と海未ちゃんですら歌詞を作った。歌詞を作るときに海未ちゃんのお家にお邪魔したんだけど…

海未ちゃんと二人きりになるのはとてもまずいということが発覚した。

「みはね、ここはどうしましょう?」

目線だけ上にあげて髪を耳にかける。

その仕草がなんとも色っぽくて…

「これなんてどうですか?」

いきなりぐいっと近づいてきたときなんて、もう…

と、まあこんな具合に苦勞(おもに私)して歌詞を完成させたわけだ。

曲名は『START:DASH!!』

後日、真姫ちゃんに無理やりそれを押し付けて曲つけてと言った。嫌がっていたはずなのに次の日には真姫ちゃんの歌声付きで完成させてくれた。

あれからの練習はとてハードだったと思う。なんでマネージャーの私まで参加してるのかわからないけど…階段ダッシュ…ほ

んとに地獄だ：

しかも、穂乃果先輩は休憩中ずつと私に抱きついたりしてくるし：大丈夫ですか？って頭をなでながら聞いてもみはねちゃん！しか言わないし、言葉のキャッチボールがたまに上手くいかない：ことりちゃんには笑顔で怒られるし。

なんか、周りに笑顔をふりまかないでとか言ってたけど、笑顔じゃなかったら真顔でいろってことなのかな：？もうどうすればいいのかわからなくなってしまう。

海未先輩は破廉恥です！とか言ってるけど：海未先輩は海未先輩でスキンシップが結構あつてこっちの心臓が持ちません。はい。

学校では、クласの小泉花陽ちゃんと星空凜ちゃん（とくに花陽ちゃん）にアイドルのマネージャーなんてすごいという話で仲良くなった。アイドルって言ってもスクールアイドルなんだけどね。

二人ともとってもかわいいし、興味があるならやってみない？と言ったら、二人とも自分に自信がないみたいで：

すつごくかわいいし、いいと思うんだけどなあ：

真姫ちゃんは、やっぱり少しアイドルに興味があるみたいだけど、勉強が忙しいからって逃げられてしまう。

そんなある日、アイドル募集を呼びかけたポスターの前で花陽ちゃんがとてもオロオロしていた。

「花陽ちゃん、どうしたの？」

「ひゃあ!? つてみはねちゃん！」

え、そんなにびっくりするのね。なんだかちよつと悲しいぞ？

「あのね、西木野さんの生徒手帳がここに落ちてて：」

「ああ、そうだったんだ」

「う、うんっそれで、お家まで届けようかなあつて」

それであんなにオロオロしてたんですか？

なんか、ほんとかわいいよなあ：小動物みたいで。

「じゃあ、私もついていこうかな」

「ほ、ほんと!? ありがとうございます」

と、まあ、真姫ちゃんのお家に来たんだけど…

めつちや豪邸じゃん。さすが医者さんの娘さんですね…

押すのをためらっている花陽ちゃんに代わってインターホンのボタンを押す。

あ、めつちや美人な人が出てきた…

真姫ちゃんのお母さん…だろうか。

「えっと、真姫さんの友達の桜みはねです。真姫さんはいますか？」

「……」

「えと、すみませーん」

え、めつちや見つめられてるんですけど。

え？なにこれどういうこと？

「あゝー！」

「はっ、ご、ごめんなさいね。真姫ちゃんはまだ帰ってきてないの…だから、上がって待っててもらえるかしら？」

「あ、えと、すみません。お邪魔します」

うわ、広いお家だなあ…

なんか場違い感とんでもないんですけど。

花陽ちゃんも緊張してるみたいだし。

「じゃあ、ここに座って待っててちょうだいね」

「は、はい…」

なんか、頭なでられてる…

やっぱり私って子供っぽいのだろうか…

真姫ちゃんのお母さんニコニコしてるし…

「かわいいわねえ…」

「あの、なにか…？」

「な、なんでもないのよー！」

しばらくしたら、真姫ちゃんが帰ってきた。

「なんであなたたちがここに…？」

「あ、真姫ちゃんおかえり」

「お友達が来るなんて珍しいわねえ」

「ママはあっち行ってて。なんでみはねのことなでてるのよ…」
そう、それ。私もずつと言いたかった！

「はあ…じゃあ、ごゆつくり〜」

おお、解放された。

「で、なんの用よ。えつと、小泉さん…だったかしら？」

「私はスルー!?!」

「みはねうるさい。で?..」

うるさいとか言いつつ頭撫でてきてるし。

「えつと…これ!..」

花陽ちゃんが生徒手帳を差し出す。

真姫ちゃんは少し驚いているようだけど…

「あ、ありがとう」

と受け取った。

「これ、ポスターの前に落ちていたんだけど…」

「べ、べつに、興味があるわけじゃないわよっ!?!」

「そ、そっか…」

「じゃ、勉強の邪魔しちや悪いから。もう帰るね〜」

「み、みはねちゃん待っててください〜」

「あら、もう帰っちゃうの?..寂しいわあ」

いや、もう最後真姫ちゃんのお母さんにつかまりかけたけど、とにかくダツシユ!

なんか、すぐく美人さんだけど真姫ちゃんとは性格が全然違う!

わざわざ勉強の、を強調して言つといたけど、ちゃんと伝わってる
といいなあ…

*

ライブ当日

結果はまあ、残念…その一言に尽きると思う。でも、絵里先輩の圧
力の前でよく言い返せたな、と穂乃果先輩を褒めたいくらいだ。

それに、ライブ自体はよかったと思う。ちゃんと気持ちが届いてき

たし。もちろんマネージャーだからという鼻屑目なしで、だ。

よく見たら、絵里先輩、希先輩、真姫ちゃん、花陽ちゃん、凜ちゃん…にこ先輩がきていたな…

え？にこ先輩って誰だって？

はあ…

あれは、私が理事長におつかい頼まれた時のこと。

たまたまA―RISEのライブがやっていたんだったなあ…

そこで偶然出くわしたすんごい変な格好した人。コートにサングラス、マスク。そう、この変な人が矢澤にこ先輩だ。

初対面からかなり偉そうな人だった。

しかも、小柄だったから三年生だとは思わなかったし。

まあ、ちよくちよくμ'sに絡んできて。練習の邪魔したりとかね。なぜか私には子ども扱いしてくるし…はあ…

にこ先輩に子ども扱いされるのはかなり心外だよ。てか、仲間に入れて欲しいなら言えればいいのに。

まあ…そんなこんなでμ'sのファーストライブは幕を閉じた。

で、私は今なにをしているのかというと…勧誘活動だ。って言うっても勧誘する人は決まっている。真姫ちゃん、花陽ちゃん、凜ちゃんの三人だ。

でも、なぜか教室には一人もいない…

探すのめんどくさいし…先輩たちは部活中だしなあ…

おっあれは…

窓からふと中庭を見ると、真姫ちゃんと花陽ちゃん。なにやってるんだろう…

あ、凜ちゃんも来た。って真姫ちゃんと凜ちゃん口論してないか？

花陽ちゃん困っちゃってるし、助けに行くか。

あ、あと勧誘もね。

「なくにやってんの？」

背後から真姫ちゃんに抱きつく。

「きゃあ!?って、みはね…」

「え、なにその冷たい視線…泣いちゃうよ?」

「ちよ、うるうるするのやめてよ!心臓に悪いわ!」

「そうにや、そうにや!みはねちゃんが泣いちゃうたら、凜たち、違う意味で死んじゃうにや!」

その様子はふざけている感じでもなく、むしろ私が困ってしまった。

「そ、そっか…?」

なんで死んじゃうんだよ。しかも違う意味っていういみがわからない。

ま、いいや。

「で、三人とも何してたの?」

「あ、えつと…その…」かよちゃんをμ sに入れてほしいんだにや!」

「そうよ!この子、アイドル向いてると思うのよ」

花陽ちゃんが喋ろうとしたところを二人が若干前のめりになって話します。

「って言われてるけど、花陽ちゃんはどうしたい?」

「え、えつと…でも…」

やっぱり、まだ自分に自信がないんだね。

しようがない。

「!?!」

花陽ちゃんの前で片膝を立ててひざまづき両手をにぎる。

え、ちよ、そんなに顔赤くされると恥ずかしい…けど…

「私は…花陽ちゃんと一緒にスクールアイドルやりたいな。まあ、私はマネージャーなんだけどね。向いてるとか向いてないとかじゃなくて、やりたいかやりたくないかで考えてほしい」

怖がらせないように優しく微笑む。

「一緒に、μ sの活動場所、屋上に来てくれるかな?みんな待ってるから」

「う、うんっ!」

よかった。これで断られてたらただの変人にしかならなかった…

「その…そこで固まってる二人はどうする?」

一応声をかけておく。

「行く(わ)!!!」

右手は花陽ちゃんと手をつないでいる。繋いでいると落ち着くつて言われたし、悪い気はしないな。

問題は左手、

「凜が、みはねちゃんと手繋ぐんだにや!」

「わ、私よ!」

女の子ってそういうの好きだよなあ…ほんと。もう、屋上つくし、静かにしてほしい。

「先輩たち、すみません。ちょっと話があるみたいなので、聞いてもらってもいいですか?」

「ん、どしたの?」

「いったん練習を中断しましょう」

え、ことりちゃんにはめっちゃ睨まれてる。私なんかしたかなあ。

花陽ちゃんは私と手を離す。

まだ少し心配そうだ。

「大丈夫」

そう言って、花陽ちゃんの背中を。そして、真姫ちゃん、凜ちゃんの背中をトンと押す。

「え、えっと…小泉花陽!一年生です!アイドルへの想いは誰にも負けません!わ、私をμ sに入れてください!!!」

言えた。答えはもちろん。

「うん…これからよろしくね花陽ちゃん!」

さすが穂乃果先輩、いい笑顔!

花陽ちゃんも大丈夫そうだ。

「で、二人はどうするの?」

今度は真姫ちゃんと凜ちゃんの背中を押す。

「り、凜、全然女の子っぽくないけど…μ sに入れてほしいにや!」

「私も、入ってあげてもいいわよ」

え、なにその真姫ちゃんの上から目線…

まったたく…

「私からもお願いできますか？先輩」

「もちろんだよ！よろしくね！」

みんないい人たちでよかった…

これで、sは六人に。…あれ？六人？

「もう部活作れるじゃん…」

7. 簡単だよ

「なんでですか!」

そう…私たちはメンバーが五人以上になったため、再び部活申請にきていた。

しかし、絵里先輩にアイドル部を作ることとはできないときっぱり言われてしまった。

「理由。聞いてもいいですか?」

あ、少し怖い顔になってしまったかもしれない。絵里先輩が一瞬ひるむ。

「…っ…それは、似たような部活があるからです」

そう言つて、絵里先輩は一枚の紙を見せる。

「アイドル研究部…部員数一人!」

「でも…それって…」

みんなが困惑する。

「アイドル研究部、最初から一人だったわけやないんよ」

そうか…つて、にこ先輩じゃん。

なるほどな…

「じゃあ、にこ先輩を仲間に入れればいいわけですね」

誰がなんと言おうと、それがたとえ絵里先輩でも、私はμ sと一緒に廃校を阻止してみせる。

少し強引だが、こうすれば何も問題ない。

「まあ、そうやんなあ?」

ふつと希先輩は嬉しそうに目を細めた。

「希先輩!ありがとうございます」

「うちはなにもしてないよ…あっ」

希先輩がちよいちよいと私を手招きする。耳を貸せということだろうか。

「えりちのことも、よろしくな？」

ああ：なんて優しい先輩なのだろう。

こくりと頷くと、希先輩は私の肩に頭を乗せてありがとう、と言った。

わわわ、なんて恥ずかしいことを：でも：

二人見つめあって笑いあう。絵里先輩のこともどうにかしなきゃいけないけど、まずはにこ先輩が先だな。

なんでこれからのことを考えていると、周りから刺さるような視線を感じる。周りを見ると、みんなが睨むように私と希先輩を見ている。

「希、後でとっても大事な話があるのだけど」

希先輩は絵里先輩からとてつもなく怖い笑顔をされていた。顔ひきつつてるよ、希先輩。

私は：

みんなに無理やり引つ張られて廊下に出されました：

あの後、希先輩との関係を問われ、怒られ、にこ先輩のところに行くことになった。

アイドル研究部の部室の前で、私たちは一度心の準備をする。

まあ、そんなもの必要ないのだが。

それだけ、私には自信がある。

みんなが頷いたところでドアをノックする。

「失礼します」

「誰？」

はい、早速睨まれました：と思ったら。

「みはねじゃないー！」

こわい、こわい、こわい!!!

めっちゃ笑顔。これでもかかってくらい笑顔。

にこ先輩は、なぜだか満面の笑みで私に詰め寄って来た。

「あ、あの：：お話があつてきました」

「なに？とうとうこのにこにーと…」

「違います。たぶんそれは違います」

理由はわからないが、即座に否定していた。

「じゃあなによ」

声のトーンが少し下がる。

「私たちがアイドル研究部に入れてほしいなーって」

「いやよ。なんでそんな子たちと…」

ちっ

てか、絶対ににこにーとアイドルについて語り合おうとか言おうとしてたな。

にこ先輩は、眉間にしわを寄せて他のみんなのことを睨みつけている。

「そうですか。じゃあ、さよなら」

押してダメなら引いてみるという言葉がある。さて、どうするのかな？にこ先輩は。

「ま、待ってー！」

にこ先輩が抱きついてホールドしてきた。

「いや、アイドル研究部に入れてくれないなら用はないんで」

私は冷めた顔で歩みを進める。

ちなみに、周りのみんながなにも言ってくれないのは、さっきのことをまだ怒っているからだと思う。また睨まれてるし…

「ーっわかったわよー！」

「やった♪」

にこ先輩、本当はずっとμ'sの仲間に入りたがっていたのだ。朝練とか毎日見てたし。やたら私に絡んでくるし。

「矢澤先輩！これからよろしくお願いしますー！」

うん。穂乃果先輩、元気がいいね！

「にこにーって呼びなさい」

「はいっ！にこ先輩！」

にこにーのくだりはスルーだね。うん。

「にこ先輩よろしくにゃー！」

「にご先輩も、アイドル大好きなんですわねっ！私もなんです！」
花陽ちゃんにご先輩が揃ったらアイドルについては最強な気がする。

「これからよろしくお願いしますね」

「にご先輩、よろしくお願いします♪」

「…どうも」

「っておい！真姫ちゃん、君はコミュ障なのか？なんだどうもって、にご先輩睨んでるよ。」

「ふんっ！練習行くわよー！」

あ、でもなんだかんだで嬉しそう…

屋上へ向かう部長の足取りは、今にもスキップしだしそうな軽いものだった。

屋上へ行ってにご先輩の持ちネタ？のにつっこにつっこにーつてのをすごいやらされました。絶対私やったときみんな引いてたよ…

全員固まってもん…真姫ちゃんやことりちゃんには頭なでられるし…

これからは、私たちはアイドル研究部の中々、sというグループになる。

*

（絵里）

まったく、希はなにをやってるのよ。

なに、みはねといちやいちやしてるのよ。なんで、見つめあっちゃってるのよ。

嫉妬が募り、だんだんと不安に変わっていく。

「まあまあえりち、みはねちゃんはかわいい後輩やん？」

「先輩後輩であんなことしないわよ!?!」

いや、まあ実際私はそれ以上のことをしてしまっただけけど……
ほんとにもう……

最近みはねは生徒会に来ないし、もちろん話す機会なんてほとんどない。さつきだって……

「あ、えりち、屋上で見てみる？にこっちも一緒に練習しとる」

希が指差す方を見ると、屋上が。そこでは、矢澤さんを中心に先ほどまでこの部屋にいたみはねたちの姿があった。

という事は、アイドル研究部になったという事か。

みはねがどんどん遠くなってしまう……

「えりちも、素直になったらいいんじゃない？」

「……なんの事かしら」

何も気にしていないかのような口ぶり。

そんな私に、希はなにも言わず優しく微笑むだけだった。

希先輩の部活動のビデオ撮影があったり、μ'sのリーダーは誰だとか様々な問題乗り越えたある日。

「た、大変ですう！」

部室に花陽ちゃんの叫び声が響いた。

「どうしたの？」

「ラブライブです！ラブライブが開催されることになりました！」

ラブライブ!?

「って、なに？」

「スクールアイドルの甲子園、それがラブライブです！噂には聞いてましたけど、ついに始めるなんて……！」

興奮が冷めないのか、いつもとかなり違ったキャラで熱弁してくれ

る花陽ちゃん。アイドル好きの彼女がここまで興奮するということ
は、よほどすごいことなのだろう。

「チケットの発売はいつでしょう？初日特典は…？」

「つて、花陽ちゃん見に行くつもりなの？」

「当たり前です！これはアイドル史に残る一大イベントですよ！」

さ、さつきから花陽ちゃんがすごい…

てか…

「てつきりラブライブ目指して頑張ろうってなるのかと思ってた」

そこまで大きな声で言っただけでもないが、全員が私のほう一斉に
向く。

「そっか、そうだよね！」

穂乃果先輩は瞳をキラキラさせて私たちもスクールアイドルだも
んね、と呟く。

みんなも少しだけその気になってきたようだ。

屋上でここ先輩と合流した。ここ先輩もラブライブのことを知っ
ていたようで、みんなでラブライブ出場の許可を取りに行くこと
になった。

相変わらずみんな行動が早い。

置いてかれないように、私も歩くスピードを速めた。

8. 逃げないで

まずは生徒会に許可を取りに行こうとしていたはずなのだが…

今私たちは理事長室にいる。それに、私たちだけではなく、生徒会である絵里先輩と希先輩もだ。

なぜかって？それは簡単。なぜか私たちの活動をよく思っていない絵里先輩がいる生徒会に申請しに行くよりも、直接理事長に許可を得てしまえば…という安易な考えのもとだ。

で、理事長室にきたらばつたり生徒会の二人と会ってしまったというわけ。

「へえ…ラブライブね…」

とりあえず理事長にラブライブのことを説明したわけだけど…

「私は反対です」

予想された通り、絵里先輩は私たちの行動をよく思っていないみたい。

「理事長は学校のために、学校生活を犠牲にすべきではないとおっしゃいました」

学校生活を犠牲に…か。ちよくちよく絵里先輩が理事長室で理事長とお話しているのは知っていたけど、そんなこと言われてたんだ。

でも、それって。学校生活を犠牲にしているのは絵里先輩の方ではないだろうか？私たちは、μ'sはスクールアイドルをやりたいっていうメンバーが集まっているわけで、別に嫌々やっているわけではない。それに、ラブライブに出たいのだから、学校存続のためというのも一理あるが、自分たちが出たいから申請に来たのだ。

「そうねえ。でも、いいんじゃないかしら？エントリーするくらいなら」

理事長は穏やかに言う。自然と私たちは笑顔になる。が、やっぱり

絵里先輩はとても不服そうな顔をしていた。

「ちよつと待ってください！どうして彼女たちの肩を持つんですか!?!」

「別にそんなつもりはないけど…」

「だったら、生徒会にも学校を存続させるために活動させてください！」

絵里先輩は私たちがいるのをおかまいなしに理事長に詰め寄る。

「うん…それはだめね」

理事長は真つ直ぐに絵里先輩を見据えて答える。即答だった。

「意味がわかりません…」

「そう…簡単なことよ?」

理事長の言いたいことがなんとなく私にはわかる気がする。希先輩がなにも言わないのも、きつとわかってるからだろう。

今の絵里先輩は、とてもじゃないけど見てもらえない。

「ただし、条件があります」

絵里先輩を見つつも内心安心していた私たちに理事長は視線を向ける。

「今度の期末試験で一人でも赤点をとるようなことがあったら、ラブライブへのエントリーは認めません。いいですね?」

ああ…もしかしたら、エントリーできないかもしれないなあ…

がつくりと肩を落としている穂乃果先輩、にこ先輩、凜ちゃんを見たらそう思わずにはいられなかった。

*

部室に戻って会議が始まった。もちろん議題は赤点回避について。

幸い一、二年生は教えられる人がいたのだが、問題は三年生にこの先輩。

他に三年生がいないため、教えられる人がいない。

困っていたところに外で盗み聞きしていた希先輩が先生役をかって出してくれた。

こうして私たちの赤点回避大作戦？は始まったわけだが…

正直なところ私は特にやることがない。

マネージャーなのにな…

必死になって勉強している三人と、教えている五人の声をBGMにうつらうつらと船をこぐ。

ここ、日が当たるからあつたかいんだよね。

「ふわあ…」

ねむいけど、今寝ちゃったらみんなに悪いしなあ…

何かやることないかな、と周りを見渡してみると、机の上に放置されている教科書が目に入った。

ことりちゃんの、だね。

いくつかあつたのでぺらぺらと目を通していく。あ、これ意外と簡単かも。

実は、一年生の範囲は何度も教科書を読んでいるせいでほぼ完璧、だと思う。

記憶力が案外いいのか一回読むとすぐ覚えてしまったり…

まあ、そのせいで漫画や小説にも感化されやすかったりもするみたいだけ。

こう、なんで自分のことは思い出せないのに記憶力はいいのかな…矛盾してるに程がある。まったく。

結局、テストの日までに3年までの教科書をほぼ覚えてしまい、先輩にも勉強を教えることになった。

私でも役に立つことができて嬉しかったなんて、恥ずかしいからみんなには内緒だ。

みんなの努力もあって、全員が赤点を回避することができて、sはラブライブにエントリーすることになった。

く絵里く

あの子たちがラブライブにエントリーしたと希から報告を受けて
数日、最近なかなか生徒会に来なかったみはねが突然やってきた。

「失礼します。最近来れなくてすみませんでした」

みはね…

「べつに、忙しそうなもの」

「…っ」

なんでそんなに悲しそうな顔するのよ。

「みはねちゃん、お仕事手伝ってほしいなあ」

「いいですよ」

なんで、希には笑顔なのよ。

「あ、棚の上の資料取らなあかなあ」

「私が取るので希先輩は座っててください。また、落ちたら私がいや
なので」

「うん、ありがとう」

なんで、希にはそんなに優しいのよ…

なんで、希のことはなでてあげるのよ…

なんで、なんで、なんでー

私だって頑張ってるのに。褒めてほしい。優しくしてほしい。な
のに…

「あ、そうだ。希先輩、ちょっと」

みはねは希の耳に顔を近づけて何か話している。やけに近い二人
にイライラする。

今は、仕事じゃない。集中するべきよ。

「ん、了解や。じゃあまたな。えりち」

みはねと話し終わると希はカバンを持って帰って行ってしまった。
どうすればいいのよ…

とりあえず仕事を進める。すると突然みはねに背後から抱きつかれた。

え…なんで…? どういうことなの?

「私は、絵里先輩が頑張ってるの…ちゃんとわかってますからね」

みはねはいったん離れると、椅子を私の隣に置いて座って私を見つめる。

手を優しく包み込まれる。

「絵里先輩は、自分が生徒会長だっという義務感だけで働きすぎです。頑張り屋さんなのは絵里先輩のいいところだと思います。でも、絵里先輩のしたいことは…?」

一呼吸置くとまた続ける。

「私は自分のこと我慢して欲しくありません。

ちゃんと、思ってることを教えてほしいです。私、年下だし知り合っ
てあんま経ってないし頼りないと思います。でも、絵里先輩の支えに
なりたい…もっと頼ってほしい。私の前だけなんてわがまま言わな
いから、素直になっってほしい…それで、私の力にもなってほしい…!
だめ…ですか?」

少し怒ってるように、でも優しく、力強くそう言ってきた。

わ、たしは…

ぽたぽたと涙がこぼれる。

「う、みはね…私、わたしっ…もっと、みはね…のこと、たよっ、て、
いいの…っ?」

恥ずかしいけど涙が止まらない。

「いいんだよ」

優しく頭をなでられて、正面を向かされて抱きしめられたかと思え
ばまたなでられる。

あたたかい…

「もう少しだけ…甘えててもいいかしら…?」

「時間なんか決まってるじゃない。甘えたいときに甘えてください」
「じゃないと疲れちゃいますよ、と。」

「あり…がとう」

しばらく、みはねの腕の中で泣いた。

みはねは泣いている私になにも言わず、優しくあやすように背中を叩いてくれていた。

「もう、大丈夫よ。ありがとう」

久しぶりに心の底から笑えた気がした。これもみはねのおかげね。心に張り付いていた重りが少し軽くなった。

「いえ、その…こんなときに言うのもあれなんですけど…」

「なあに？」

「μ、sのダンスのコーチ、やってみませんか？先輩、バレエやっていたんでしよう？」

「な、なんでそのこと…」

「亜里沙と希先輩から聞きました」

「そう…」

亜里沙のこと呼び捨てにしてるのね…

まあ、亜里沙の部屋で寝てから二人の距離はぐっと近づいた気はしてたけど…

「い、いわよ…」

「ありがとうございます！じゃ、今から早速行きましょう！」

早く、と言って私の手を取るみはね。その繋ぎ方は無意識なのか恋人繋ぎ…

「すみません。いきなり」

「大丈夫よ。むしろ嬉しい」

「今、私たち恋人同士に見えてるのかなあ？」

とつても優しく微笑んでそんなことを言ってくる。みはねが…恋人…

って、何考えてるのよ私!?

「じゃじゃーん！ダンススコッチ連れてきましたよー！」

みはね…それはかなり恥ずかしいのだけど…

「ええー生徒会長!？」

驚いていたり怪訝そうな顔をしていたり、反応はさまざまだ。

私なんか…

みはねはμ、sのみんななどいると、とても眩しい笑顔で笑う。

ー私と一緒に笑えたらいいのに。

「よろしく。じゃあ、基礎から始めるわよ」

「おお。えりちやる気満々やね?」

希!?なんでこんなところに…

「みはねちゃんに頼まれたんよ」

心読まれていることに驚く。

はあ…あの時話したのはこのことだったのね…

μ、sのダンスは、基礎からちゃんとできていなかった。かなり厳しくしてしまったかもしれない…

なぜか流れで明日の朝練も参加することになった。みはねの頼みなんだから、断れるわけないじゃない…

私が屋上に来た時はすでに、みんな昨日の基礎練をやっていた。自分でもわからないがその姿にイライラする。

「なんでそこまでするのよ!これ以上やったらって結果なんか同じだわ!」

いつの間にか、私はそう言って屋上を飛び出していた。頭の中がぐちゃぐちゃで、自分がなにをしたいのかわからない。

階段を降りたところで希に呼び止められる。

「えりち…えりちの本当にやりたいことは?えりちの好きなこと、や

りたいことをやればいいやん」

「私だって、好きなことやって、それだけでなんとかなるんだつたらそうしたいわよ！」

「えりち…」

「今さらアイドル始めようなんて、私が言えると思う？」

私はそう言い残して逃げた。

廊下を走って走って走ってたどり着いたのは自分の教室。なんにも考えず、ただ自分の席に座る。

「絵里先輩」

優しい声色。この声は間違えようもないみはねの声。

「絵里先輩はえらいですよ。いつも頑張ってる。でも、先輩のやりたいうことやってほしいんですけどな…」

みはねのその言葉に胸がぎゅっと苦しくなる。

私のやりたいこと…

私を見つめながら悲しそうに微笑むみはね。

その姿がとても儂げで、触れてしまえば消えてしまいそうで…うまく表現できないが、とてもきれいだった。

「絵里先輩！お願いがあります！」

みはねの後ろから、μ、sのメンバーが姿を見せる。高坂さんは笑顔で私に近づいてくる。みはねは私の隣に立っていた。

高坂さんが右手を差し出す。

「絵里先輩、μ、sに入ってください！私たちには絵里先輩が必要ですよ！」

そう言われた瞬間。

ああ…もう、頑張りすぎなくてもいいのかなって思った。私は、私のやりたいことは…

みはねと一緒に…！

「私をμ、sに入れてください…っ」

「はい！喜んで！」

私は差し出された高坂さんの手をとる。高坂さんは太陽のような笑顔で私を見ていた。

立ち上がった瞬間、みはねにふわっと抱き寄せられた。私の耳もとに顔を近づけて

「やつと素直になつてくれた」

そう囁いた。

私の頬を両手で包みこんで、こっん、とおでこをくつつける。

「これからは一緒に頑張りましょう？ 私はずっと絵里先輩のことちゃんと見てるから、支えになるから」

その言葉に涙が出そうになる。みはねはずっと私のこと見ていてくれたんだ。

みはねが遠くに行つてしまったと思つていたのは自分だけで、それは大きく間違いだったことに今さら気付く。

「ええ……」

私は力強く頷いた。

すると、みはねはふんわり微笑んでありがとうと言つて私のおでこにキスをした。

あ、今私の顔真っ赤になつてるかも……／＼

そんな私の頭をポンポンと優しくなでてくれた。

なんであなたはそんなにキザなことをするのよ。ロシアの血が流れている私でさえも照れてしまう。

「さ、これでμ、sは私を入れないで九人になつたわけだ」

みはねは満面の笑みでみんなを見る。

九人……？

「え？ みはねちゃんを入れて九人じゃないの？」

リーダーである高坂さんもよくわかっていないようだ。

「えー？ ちゃんと名付け親の人には責任を持つてμ、sに入ってもらわないとね」

名付け親？ この子は何を言っているのかしら？

みはねの視線の先では、ほおを赤く染めて気まずそうな顔をしている希がいた。

「ちよ、ちよお！みはねちゃん気づいとったん？」

「当たり前じゃないですか」

の、希!?!じゃあ…

「さ、希先輩にも、sに入ってもらいますよ！みんなも、いいよね？」

その言葉に、メンバーみんなが笑顔で頷く。

「こ、これからよろしくな？」

あら、希もまんざらでもなさそうね。嬉しそうに笑っちゃって。ふつつかわいいんだから。

きつと、本当はずつと前から仲間に入りたかったのかもしれない。でも、私のせいで言い出すことができなかったのね。

「よし、じゃあ、練習しよつか！」

みはねはよほど嬉しいのか、さつきからずつとにこにこしている。

「みーいーちゃーんー？」

「みはね！破廉恥ですよ！」

「先輩たちばかりずるいよー！」

「凜たちにもやるにゃー！」

「やっぱり、花陽みたいな子じゃ…」

「このにこにーをほったらかしにして！」

「はあ…お仕置が必要ね…」

そんなみはねに誤魔化されないとでもいうようにみんなが不満やらなんやらを口にする。

うわ、みはねってやっぱりモテモテね…

三年生の間でもかなり話題になってるし。

こんなにかわいくて、しかもかつこよくちや当然よね…

それにもものすごく優しいし…

「わ、私何かした!?!」

あ、逃げた…

「ほら、早く練習するよー！」

みはねは教室を出ると廊下を駆け出した。

みんな怒ってはいるけど、笑顔でみはねのことを追いかける。楽しそうね。ほんと…
誰にも負けないわよっ！

9. 合宿だ！前編

九人での初めてのオープンキャンパスでのライブは大成功だった。ただ、少しだけ問題が…

「桜みはねさんですよね!?一緒に写真撮ってください!」

「ほんとだ!私もお願いします!」

「私も!」

「……という具合に、私はなぜか中学生たちに名前が知られてしまっていた。

しかも、写真を求められたり質問攻めにあつた。しまいには、学校の同級生、先輩たちまでもが質問攻めにしてきたり、もみくちゃにされた。

あと…何人かに告白までされてしまった。

さらに、それを見ていた μ 、 s のメンバーには睨まれるわ怒られるわで大変だった。

「あら、みはねちゃん人気者ねえ」

「はあ…はあ…理事長…っ」

「これ、よかつたら見てちょうだいね?」

学校紹介のパンフレットを渡して去っていつてしまった…

不思議に思つてパンフレットを見る。何ページかめくつていくと、とある1ページが目にとまる。これ、私…?

そこに写っていたのはまぎれもなく私。制服紹介のページになっているようだ。

「ご丁寧に名前まで書いてある。げ、原因は理事長か…!」

いつの間にこんな写真…あ!入学式の時の…

なぜかカメラマンさんらしき人にたくさん写真を撮られた記憶がある。

むう、何でこんな写真使うのさ…

許可もなしに…いや、許可求められても断つてたけど!

オープンキャンパスが終わったあと、部室でこつてり怒られた。私何もしてないのに！

しかも、告白のことを言ったら…

「みはねちゃんは、sのなんだから、誰とも付き合っちゃダメ！」らしいです。いやいや、自分の身分はわきまえているつもりだし…私なんかのこと好きになるなんてあるわけないじゃないか。

「オープンキャンパス、大成功だったね！」

「安心するのはまだ早いわよ」

「や、やっともなと言ってくれる人が…！」

なんてやりとりを穂乃果先輩、絵里先輩、海未先輩がやっていた。「あ、でも、絵里先輩が入ったことによつて女性のファンも増えたみたいですよ」

何気なくそんなことを言ってみた。いや、まあ、事実なんだけどね。

うっ、絵里先輩に睨まれてしまった。

「確かに、絵里先輩、スタイルもいいし美人だし、こう、大人の女性っていうか」

お、おおう穂乃果先輩が語り出した。

さつきまで睨んでいた絵里先輩も、照れてるのかやめてよ…なんて顔を赤くしながら言っている。

「き、今日是用事があるから帰るねっ！みいちゃん」

そう言つてことり先輩は私に近づいてくる。…なんとなくやろうとしてることがわかる。ことり先輩は私にぎゅーつとはぐするとそそくさと帰っていった。

はあ…それやられると、みんなの視線が痛いんですけど…

「最近ことりちゃんすぐ帰っちゃうよね」

「ま、まさか彼氏かにや!？」

彼氏：ねえ。ことり先輩ほどかわいかったらいてもおかしくないけど…

そしたら、幼なじみの穂乃果先輩や海未先輩に報告の一つくらいはしていると思う。

「あ、そうだ！みんな、今日はにこがいいところに連れて行ってあげるわ！」

その一言で今日の練習は中止になった。

そう、にこ先輩が連れてきた場所は、秋葉原のとあるアイドルショップ。

へー、アイドルってこんなにいっぱいいるんだね。ま、*μ* sのみんなのほうがいいけど…

「あ、見て見て、この子かよちゃんに似てかわいいにやー！」

「つて、それ花陽ちゃんやん！」

「あー*μ* sのグッズが売ってるよ」

「に、にこの…にこのグッズは!？」

どうやら*μ* sのグッズも売られているみたいだ。うん。どれもかわいい！

「ねえねえ、これって…」

穂乃果先輩は一枚の写真を私たちに見せてくる。

みんなでそれを覗く。

これって…

「すみません！ここに、ミナリンスキーの生ブロマイドがあるって聞いたんですけど！あれ、ダメなんです！」

メイド姿の女性が飛び込んできた。

つてことり先輩…？

「こ、ことりちゃん！」

「ぴ、ぴいーコトリ？ワタシチガイマス！…サラバ!!!」

あ、逃げた…

が、すぐに捕まえました。

簡単にまとめると、メイド喫茶でアルバイトをしていたらしいで

す。

その理由は、自分を変えたかったから。自分は穂乃果先輩や海未先輩とちがって何も無いからって…

そんなことないのね…

そして後日、絵里先輩の発案でことり先輩作詞の曲を作って秋葉原でライブをすることになりました。

必死に考えて曲を作ったことり先輩。穂乃果先輩や海未先輩、μ'sのみんなに助けられてとてもいい曲ができた。

なぜか私は一日ことり先輩のお家にお泊まりすることになった。それ以外特に何もしてないのに、ことり先輩にお礼を言われてしまった…

後日、秋葉の路上ライブをしました。衣装はロングのメイド服。結構みんなノリノリで…

ライブはもちろん…大成功!!!

季節は夏まったただ中、もちろんμ'sは活動中だ。ラブライブ出場狙ってるわけだし。しかし、照りつける太陽を防ぐことのできない屋上でこの暑さはとても酷な話だ。予想できる通り、みんなはその暑さにやられてしまっていた。

「あつっーい！あ、そうだ！合宿しようよ！合宿！」

穂乃果先輩また、何も考えずにそんなこと…

「そんなこと言って、費用などはどうするんですか」

そう、合宿に行くのは大歓迎だが場所とか費用とかが問題なのだ。「こ、ことりちゃ」「ことり先輩のアルバイト代を使おうとしちゃダメですよ」

「うう…あ！真姫ちゃん！別荘とか持ってないの？」

「あ、あるけど…そんないきなり…」

「そうだよね…」

戸惑う真姫ちゃんにウルウルとした瞳でつめ寄る穂乃果先輩。

あれはすごい！なんだあの捨てられた子犬のような目は！

なんだかんだでみんなも真姫ちゃんのこと見てるし。

「わ、わかったわよー！」

あ、真姫ちゃんが折れた。

と、いうことで！合宿に行くことになりました！

あ、そうだ私…いつも制服で大丈夫だったからよかったけど…服、買わなきゃ…

合宿当日。

結局、私はあのあと服を買いに行った。まあ、そこまでこだわりもなかったから、ピッタリとした7分丈パンツに上は白のブラウスというなんともシンプルな格好に…

みんな、なかなかかわいい格好してるなあ。ま、元がいいから何着てもかわいいと思うけど。

ははは…なんか、悲しくなってきた。

「あの一ちよつと提案があるのだけど…」

そろそろ出発しようかとなった時、絵里先輩はとある提案をした。

…

『先輩禁止!?!』

絵里先輩の提案とは、先輩を禁止するということだった。先輩後輩はもちろん大事だが、踊っている時にそういうことを気にしてわいけない、という考えのもとだ。

まあ、私は前々から希先輩と話し合っているのを知っていたから驚きはしない。

「じゃあ、まず穂乃果から!」

「はい! いいと思います! 絵里…ちゃん」

「うん♪」

おお、なかなかいい感じなんじゃないかな?

「凜も凜もー! ことりちゃん?」

「うん! よろしくね♪ 真姫ちゃん?」

ことり先輩が真姫ちゃんに呼びかけると、みんなの視線が自然と真姫ちゃんの方を向く。

みんなにじーっと見つめられて真姫ちゃん顔を横にそらしてしまった。

「べ、べつにわざわざ呼んだりするもんじゃないでしょ?」

恥ずかしいのか、はたまたそう言うことに慣れていないのか、真姫ちゃんが誰かの名前を呼ぶことはなかった。

ま、ツンデレの真姫ちゃんらしくていいけどさ。

「みいちゃんは? 前みたいのことり♡って呼んでよ」

ことり先輩の次のターゲットが私に向く。

ギロリと絵里先輩に睨まれる。私何もしてないじゃん…

「前は、ことりちゃんだったじゃないですか…」

「ちえく、じゃあことりちゃんて我慢してあげる」

「み…は…ね? 私のこととは?」

「絵里先輩…怖いですよ…」

「先輩禁止! それに、敬語も取ってもらわよ!」

「む、むう…絵里ちゃん…これでいいでしょ?」

絵里ちゃんは笑顔になる。

「ハラショー!」

そんなやりとりしてたら、みんなも呼んで欲しいと言ってきた。はあ…なんでこんなことに…

「絵里ちゃん、希ちゃん、穂乃果ちゃん、ことりちゃん、海未ちゃん、凜、花陽、真姫ちゃん…:…にこちゃん?」

みんなの目を見ながら呼んでいく。

「にこのことはにここでいいわよ」

「そうする」

「穂乃果のことも呼び捨てがいいな？」

「わ、わかった。穂乃果」

「うん♪」

一通り終わったところで

「じゃあ、合宿に行くわよ。部長の矢澤さんから一言」

絵里ちゃん、なんて無茶振り…

「しゅ、しゅっぱくっ!」

アドリブ弱っ!?

とまあ、こんな感じで合宿に出発になりました。

「うわぁ…おつきい…」

「べつに、普通でしょ」

真姫ちゃん…これ絶対普通じゃない。

めっちゃ、もう、別荘、すごい。

「さ、案内するわよ」

とにかく、荷物を置いて練習をすることになった。

「海未ちゃん…それって…」

「合宿の練習メニューです」

「う、海は!?!」

すでに水着の穂乃果と凜が絶望的な顔をしている。

「私ですが…?」

わぁ…海未ちゃんがそんなボケをかますとは思っていなかった。

なんだかこう、じわじわと笑いがこみ上げてくる。

「違うよ!海水浴はないの!?!」

「それなら、ほらここに」

そこに書かれているのは遠泳10キロ。

いや、おかしいでしょ…

「こうなったら、凜ちゃん!」

「任せるにゃ!海未ちゃんあれ見て!」

「な、なんですか?」

「走れく!!!」

うわ、穂乃果の勇気がすごいと思う。

「ま、今回はいいんじゃないかしら?先輩後輩の垣根を取るいい機会になると思うわ!」

「そうやね」

ま、そうだよね。正直、今回の合宿はみんなが仲良くなるってことの方が重要な気がする。

「絵里ちゃん!」

大きな声で凜が絵里ちゃんを呼ぶ。

「今行くわー!」

おお、いい感じじゃないですか。凜も普通に呼べてたし。

「つて、あー!水着持ってきてないや…」

泳ぐのは諦めるかな…

「それなら、こっち」

真姫ちゃん?突然腕を引つ張られる。

「みはねに水着持ってきたのよ」

「え…」

「これに着替えて」

命令よ、と言わんばかりの威圧感。逆らえるわけがない。

真姫ちゃんが渡してきたのは白のビキニの上にベージュのズボンと水色のキャミソールを着るタイプの水着だ。

最初がこれってなかなかハードルが高い。

恥ずかしいから、その上に買っておいた白の薄手のパーカーを羽織った。

着替え終わった私を見た瞬間、真姫ちゃんが顔をそらした。…やつ

ぱり似合ってなかったのかな？

真姫ちゃんみたいにスタイル良くないし…

心に大きなダメージを受けたので、少し経ってからみんなのところに帰ることにする。

海に戻ると、みんなはすでに遊んでいた。

真姫ちゃんは…一人だけビーチパラソルの下で本を読んでいた。

「みんな、怪我しないようにね！」

とりあえずマネージャーとしてそう声をかけて、みんなの遊んでいる様子をビデオで撮っておくことにした。ことりちゃんがにこの顔面に大きめの水鉄砲で水をかけているけど平気だろう。

今度はスイカ割り。花陽が挑戦しているみたいだが、にこが邪魔をした。みんな楽しそうでもよかった。

「みはねちゃんも一緒に遊ぶにゃ！」

「う、うん…？」

なんでみんなの顔が赤いんだろう…？日焼け止めはしっかり塗っていたはずだけど…

って、にこいなくない？

あ、真姫ちゃんの隣に…

どんまい…

真姫ちゃんは張り合ってくるにこを気にするそぶりはない。

「真姫ちゃんも一緒に遊ぼう！」

「私はべつに…」

素直じゃないなあ…

ま、そんなところもかわいいんだけどね。

でも、そんな真姫ちゃんを絵里ちゃんや希ちゃんは気にかけているようだった。

結局私たちは夕方までたっぷり遊んだ。

ちよつと早いけど夜ご飯を作ることになった。が、まずは材料を買いに行かなければならない。

「私一人で行ってくるわよ。どうせ私以外みんな場所知らないし」

真姫ちゃんは一人で行こうとしてるみたいだ。はあ…まったく…

「私がついてくから」

「み、みはね…」

「ウチもお供するよ」

「はあ…勝手にすれば？」

ということ、真姫ちゃん、希ちゃん、私で買い出しに行くことになった。

10. 合宿だ！後編

夕日が照らす道を、真姫ちゃんと希ちゃんのでスーパーを目指して歩く。

「なんや、珍しい組み合わせやね〜」

確かに、希ちゃんの言う通りだ。まあ、珍しいといふかなんというか。

「どういうつもり…?」

おお、真姫ちゃんが今までにないくらい不機嫌な顔になっている。さすがに言い過ぎか。あ、真姫ちゃんに睨まれた…

「本当はみんなと仲良くしたいのに…なかなか素直になれない」

「なんで私に構うのよ…」

「ほっとけないのよ。あなたと似たタイプの人をよく知っているから。たまには無茶したほうがいいと思うよ、合宿やし」

希ちゃんの雰囲気が変わった気がした。いや、多分変わったんだと思う。途中いつものわざとらしい関西弁が消えていたし。

そのあと、真姫ちゃんも何も言わず三人黙って歩く。よく知っている、ねえ…

買い物は無事終わってあとは帰るだけ。

なぜか真姫ちゃんは先に行ってしまった。

あ…ガラの悪い男の人たちが歩いてくる。っ!?真姫ちゃん絡まれているじゃん!?

ふと気付くと隣にいたはずの希ちゃんは荷物を置き去りにして駆け出してしまった。

の、希ちゃん行動早すぎだし!ちよ、危ないから。

私は置き去りにされた荷物も手に持って走り出した。

お願いだから、なにも起きないで…!

少し離れている私の耳にも届く汚い笑い声。
人数は二人、これなら私でも大丈夫かな…

「ちよつと、汚い手で触らないで！」

男の一人が真姫ちゃんの肩に手を置くと、その手を払いのけながらまきちゃんは叫んだ。

私が行くまでおとなしくしてて…！

「ああ？ふざけんじゃねえよ！」

だめだ、間に合わない!?

真姫ちゃん男に押されそうになる。が、希ちゃんがかばって押されて倒れた。希ちゃんは倒れたまま動かない…

ま、間に合わなかった…！

やつと、真姫ちゃんたちのところまで来ることができた。

「真姫ちゃん、ちよつと希ちゃんのこと見てて」

荷物を押し付けて真姫ちゃんにそう言うと、私は男たちの方を向いた。

「次は君が遊んでくれるのかなあ？」

下品な笑い方で男は言う。

「遊びましょうか？」

少し、いやかなりイラつく。しかし、それを抑えながら私は真顔で言い放つ。

はっ、ふざけたこと言わないで。今のが遊びだったっていうの？希ちゃんや真姫ちゃんを傷つけて…

まず近くにいた男の人に力の限りタックルをする。

「ぐ、うう…」

頭を打ったのかその人は気持ち悪いいうめき声をあげて意識を失った。

もう一人には急所に蹴りを入れる。

「……っ!？」

「よくも、よくも私の大事な人たちに…さよなら」

につこりと微笑み、そのままもう一発思い切り蹴りを入れると男はカエルが潰れた時のような声を出して崩れ落ちた。

真姫ちゃんたちのところへ戻ろうとした瞬間、私の肩に声も出ないほどの衝撃と痛みが走った。

「みはね!」

「…っ」

もう一人仲間がいたみたいだ。手に棒のようなものを持っていた。

ああ…もつとよく周りを見ているべきだった…

だが、今さら後悔しても遅い。それに、真姫ちゃんや希ちゃんが狙われなかっただけよかったかな。そんなことを考えていたら男が、また棒を振りかざしてきた。降ってくる棒を今度はなんとかスレスレのところでかわし、みぞおちを狙って蹴りを入れる。

「うぐっ」

うまくいったみたいだ。そいつは動かなくなった。

「さ、真姫ちゃん。帰ろうか?」

にっこりと安心させるように微笑む。

とりあえず、希ちゃんは大丈夫だろうか。

駆け寄って確認すると、希ちゃんは特に目立った怪我もなく、普通に起き上がった。

肩が痛い…けど、二人にはもつと怖い思いをさせてしまった。それに比べたらこれくらい…

「みはね…肩…」

「大丈夫、大丈夫! なんともないよ! それより…怖い思いさせてごめん…」

「だ、いじよぶ…よ」

なんとか、別荘まで帰ってこれた。

一応あったことを報告すると、みんな心配そうにしていた。しかし、二人に怪我がないことを知ると、そのことがなかったかのようにまた賑やかになった。

本当によかった…

そのあと、にこがカレーを作ってくれてみんなで食べた。にこ、料

理上手なんじゃん！女子力高いなあ…

おいしいけど、腕…うまくあげられなくて食べづらい…

ご飯のあと、何をするかで口論になったが、お風呂に入って寝るということになった。

「お風呂、みんな先に入ってきてきちゃって。私、あとから入るからさ」

みんなぶーぶー言っていたけど、無理やり入れさせる。真姫ちゃんは心配そうな顔をしてこつちを見ていたが、笑ってごまかした。

肩どうなってるかわからないな…

みんなが出てきてお風呂に入ることにする。

服を脱ぐと、肩が青紫になってしまっていた…そりやあ痛いわけだ。ひとり、鏡に映る自分を見て笑う。

ま、放っておけばそのうち治るだろう。

*

「つて、みんなで寝るの!?!」

「合宿なんだし、当たり前だよ」

穂乃果、そういうの好きそうだもんね…

「みはねは、どこで寝る?」

絵里ちゃん。あ、隣で寝てほしいんだね…

まあ、暗いのが怖いのが知ってるの私くらいだし。いや、希ちゃんくらいは知っているかもしれないが。

「じゃあ絵里ちゃんの隣で寝ようかな」

「ふふっ、やったあ♪」

「ああ…絵里ちゃんずるい!」

穂乃果は先にことりちゃんの隣陣取ってたじゃんか。まったく…

私は端っこで、隣に絵里ちゃん上に真姫ちゃんというなんとも不思議な配置になった。

『おやすみなさい!』

部屋はもちろん真っ暗になった。

早速お隣さん震えてるよ…

「絵里ちゃん、手」

「みはね…ありがとう」

「恥ずかしいが、手をつないであげることにした。」

バリバリボリボリ

って、なんの音!?

突然謎の音が聞こえて全員が飛び起きる。

「真姫…で、でで電気つけて!」

絵里ちゃん怖がりすぎだつて…

電気をつけてみると、穂乃果がおせんべいを食べていた。

「いや、なんでおせんべい食べてるのさ!」

「そうよ!寝不足はお肌に悪いのよ!」

にこが起きる。つて顔…お化けみたい。美容パック…なのかな?

きゆうりみたいなのが顔にくつついている。

「くっ!」

そんなにこの顔面に枕が直撃する。

「ああ、真姫ちゃん何するん〜」

驚いた様子の真姫ちゃん。やったの、希ちゃんだな。

そこから枕投げが始まってしまった。

すやすやと寝ているのは海未ちゃんだけ。

まあ、ほんととは注意しなきゃいけない立場だが、そんな元気はとて

もじゃないけどないので端の方で見学をすることにする。

あつ!海未ちゃんに枕が直撃してしまった。

ゆらりと海未ちゃんは起き上がる。

「誰ですか…こんなことをしているのは…」

ひ、ひい!か、顔が鬼のようになってる!

「明日は…朝早くから…練習つて…」

「ご、ごめんね、海未ちゃん落ち着いて」

ことりちゃんが説得したが聞こえていないみたいだ。

すると、目にも留まらぬ速さでにこの顔面に枕が直撃した。

にこはそのまま後ろに倒れて動かなくなってしまった。

「超音速枕…」

うん、ナイスネーミングセンスだよ花陽！

とか言ってる場合じゃない。どうにかしなければ。

海未ちゃんがまた枕を振り上げる。

そうはさせない。これ以上犠牲者を出すわけにはいかないしね。

海未ちゃんに正面から抱きつこうと試みる。なんとかうまくいったが、振り下ろされた海未ちゃんの腕が私の右肩、ちようど今日怪我したところに当たった。

「…っ!？」

いやな汗が額ににじむ。

でも、こんなことで諦めるわけにはいかない。そのまま海未ちゃんを抱きしめる。

「み、はね…」

海未ちゃんの髪をゆっくりなでる。

「おやすみ、海未ちゃん」

少し声が震えてしまった。

海未ちゃんは私のほうに倒れ込んでくるともうすでにすうすうと寝息を立てていた。うん、ちゃんと寝てくれたみたい…

「みいちゃん！ありがとう♡」

「みはね、助かったわ…」

よかったね絵里ちゃん。これで安心して寝れるよ。

「よ、かった…」

私も限界がきてしまったようだ。肩が痛くて痛くてしょうがない。視界が霞んできて、白くチカチカと光っている。

「みはね…!?!ちよつと服脱ぎなさい!」

「真姫ちゃんが変態発言してるにや」

「そんなふざけている場合じゃないの！早く脱いで!」

真姫ちゃん、最後の方は叫んでいた。でも…

「い…やだ…」

今脱いだら、みんなにばれてしまう。

「真姫?…どういふことなの?」

「それがー」

真姫ちゃんは買い出しの時に私が殴られたことを話してしまった。

「ウチのせいやんなあ…」

「希のせいじゃないわよ。私があんな奴らに絡まれたりしたから…！」

「そんなことより、みはね服脱いでちょうだい」

絵里ちゃん、顔が怖いよ。そう言おうと思ったが声が出なかった。

絵里ちゃんに無理やり服を脱がせられる。

ああ、とうとうばれてしまった…

肩はお風呂の時よりも酷くなっていた。青紫色が広がり、腫れていた。

「なんで…なんでこんなになるまで言わないのよっ」

真姫ちゃんは泣きそうな顔で私を見ていた。

真姫ちゃん、ごめんね。君に、君たちにこんな悲しそうな顔してほしくなかったんだよ…

「ご、めんね…っ」

「謝るのは私たちのほうよ。無理させてごめんなさい」

そのあと、真姫ちゃんに手当をしてもらった。真姫ちゃんやほかのみんなも、ごめんねと何度も言っていた。

謝るのは私の方だと言ったらとても悲しそうな顔で絵里ちゃんに怒られてしまった。

手当も終わって、今度こそ寝ることにする。寝ている間、絵里ちゃんにずっと抱きしめられていた…

肩とかよりも、心臓が…と、思ったが今回はおとなしくしていることにした。

お隣の方のせいで、眠りが浅かったのか随分早く起きてしまった。なんとなく、外に出て海に行くことにする。

あれ…希ちゃんと真姫ちゃんだ…

あ、話終わったのかな？二人とも笑顔。

「なんの話してたの？」

「おお、みはねちゃん。おはようさん」

「みはね、肩、大丈夫なの…？」

「ん。二人ともおはよっ！肩は、真姫ちゃんが優しく手当してくれたら大丈夫」

優しくをわざと強調してみた。

案の定、真姫ちゃんは顔を赤く染めて、

「わ、私がやってあげたんだから当然でしょ！」

なんて言ってる。ふふっかわいい、かわいい♪

「あ、そうそう、真姫ちゃんにめんどくさい人って言われちゃったんよ」

ああ、確かに希ちゃんも真姫ちゃんもめんどくさいタイプだね。

多分あの時言ってた真姫ちゃんに似たタイプって、素直になれないところは絵里ちゃんに似てて、めんどくさいところは希ちゃんに似てるってことだよな？

「おーい…三人とも〜！」

あ、みんな起きたようだ。

そのあと、みんなは自然に手をつないで一列になった。私は後ろの方にいたんだけど…みんなが睨んでくるので仲間に入れてもらうことにした。

みんなで目を合わせあう。

「エリー。ありがとう」

真姫ちゃんと絵里ちゃんの目があう。

「ハラシヨー♪」

絵里ちゃんはかっこよくウインクをバッチリ決めて返事をした。ほんとに絵になる。

いろいろなことがあったが、合宿は無事？に終わった。

11. 大丈夫じゃない

はあ…肩痛い…

肩のせいで、うまく腕が使えない。しかも利き手側の肩だから、なんとも不便だ。

治る前に新学期が始まってしまおうとは思わなかった…

あげくの果てに、私の肩が負傷していると学校中に広まってしまい（広まる意味はわからないけど…）、クラスメイトはもちろんのこと、初めましての先輩たちまで私のところにやってくる。

休み時間になるたびに、たくさんの人に囲まれて疲れ切ってしまった。

いや、みんなの優しさはとても嬉しいんだけど…ね。

昼休みになり、また囲まれるのはごめんだということとで旅に出ることにした。

足は自然と生徒会室に向かっているみたいだ。生徒会室がもうそこだという時、前から三人組が歩いてきた。…リボンの色からして三年生だし、大丈夫だよな。

「あ?!みはねちゃんだよな?!」

「ほんとだ!かわいい♡」

「あ、そういえば。いつもはガード固いけど、今は何しても抵抗してこないんだって」

な、なにそれ。真姫ちゃんの真似じゃないけど意味わかんない!

まあ、確かに今は肩が痛くて何かされてもうまく避けられない。普段からいろんな人たちにちよつかいをかけられていてもやんわり避けているが…

「ねえねえみはねちゃん!お姉さんたちといいことしな〜い?」

「い、いえ。ちよ、ちよつと急いでいるので…!」

なんだか危険な気がしてその場から逃げようとするが、通り過ぎよ

うとした時に肩を掴まれてしまった。最悪なのは掴まれたのが右肩だったこと。

あまりにも痛くて力が抜けてしまい、いつの間にか壁に押し付けられていた。

「怯えちゃってかわいい♡」

ほ、ほっぺにキスされてしまった。み、μ、sのメンバーに知られたら…殺される。

怯えてるんじゃないくて、痛いんですよ。

「顔真っ赤だよ？」

そこまで赤くなってる気はしないんだけど…

「えと…、こんなことしても何にもなりませんよ…？」

今度は別の先輩が耳をやりわり噛んでくる。

さ、さすがにこの状況はまずい。

「んっ…ふあっ」

しかし、自分でもびっくりするくらい甘い声が出てしまった。いやだ、いやだ、いやだ。

こんなこと言うのはあれだけど、寒気がする。

「今の声聞いた？」

「うん…。かなりやばいかも…」

三人の先輩は顔を真っ赤に染めて、なんとも色っぽい顔で私を見つめている。

動きが止まった。今のうちに逃げなきゃ！

でも、さっき掴まれたせいで肩が痛くて力が入らない…それに…誰か…っ

*

く 絵里く

お昼休みになり、仕事が残っていたのもあって、希と二人で生徒会

室に来ていた。仕事は五分もかからないで終わってしまった。

「そういうば、みはねちゃん肩怪我してるせいで色々大変みたいなんよ」

「そうなの…心配ね…」

「やる？せやから、今から様子見に行ってみよ？」

ということ、みはねの様子を見に行くことになった。

二人して生徒会室を出る。

「んっ…ふあっ」

…ん？なんの声かしら？それになんだか？

ってみはねじゃない!?

そこには、三年生三人に壁に押し付けられているみはねがいた。

あまりよく見えないが、みはねは顔を少し赤く染めて涙目になっているようだ。

これは確実に…

隣を見ると、希も険しい顔をしている。

なに、私たち以外の人に触られてるのよ…!

いや、そうじゃない。

…なにみはねに触れちゃっててくれるのよ。

「みはね。なにしているの？」

「え、絵里ちゃん…っ」

みはねが私の方を向いた。

今すぐにもこぼれそうな涙を目にためて、顔を真っ赤にしている。

そういう顔をするから…他の人にそんな顔見せちゃダメじゃないの。

三人の生徒は私のことを見ると生徒会長…とつぶやいて固まってしまうていた。

「みはね、おいで…?」

私は優しく微笑む。

みはねは、三人から抜け出して私の胸に飛び込んできた。

普段の行動があんなだからちよつとびっくりしたが、素直に頼ってくれているのだと思うと顔がにやけそうになってしまふ。

「みはねちゃん、もう大丈夫やで」

希もみはねを優しくなでる。

さて、どうしようかしら…

「あなたたち！」

「「は、はい！」」

あら、私ってそんなに怖いかしら？三人とも同じ学年のはずなのに怯えている。

「あまり、私たちの大切なみはねをいじめないでくれるかしら？」

「「す、すみませんでした…」」

別に謝って欲しいわけではないのだけれど…

「いえ、これからは普通の生徒同士として仲良くしてあげてちょうだい」

そうにつこりと告げると、もう一度すみませんでした、と言って去っていつてしまった。

ふう…これで解決ね♪

みはねのほうを見ると、私の袖をつかんでうつむいていた。

「みはね、もう大丈夫よ？」

「……………」

みはねはなにも言わずに私の袖をつかんで動かない。試しに腕を動かしてみたが、はなす気はないようだ。こんな時にこんなことを思うのはあれだけど、かわいい…！

どうしたものか、と希のほうを見てみると案の定希も困った顔をしていた。

予鈴がなるまで時間はまだまだある。

「みはね、希、生徒会室に行きましようか」

生徒会室に連れてきたが、それでもみはねは手を離してくれない。

「みはねちゃん、いったんここ座ろな？」

希がみはねを椅子に座らせる。

私はしゃがみこんでみはねの顔を覗いてみたが、泣いてはいなかった。

た。

はあ…まったくこの子は…

「みはね、もう大丈夫よ」

手をぎゅつと握つてもものすごく優しくそういった。すると、みはねはぼろぼろと涙をこぼし始めた。希は少し驚いているようだったが、みはねの頭を優しくなでてあげていた。

「あ、のね…こわ、かったの…っ」

「うん、怖かったわね」

「え…りちや、たちとつちがつて、こわ…かった…:…:…っ」

すると、みはねは泣きながらもぽつり、ぽつりとあつたことを話してくれた。

肩を掴まれて痛くて動けなかったこと、ほっぺにキスをされたこと、耳を噛まれたこと。

私と希はうん、うん、と聞いてあげた。

でも、二人ともだんだん顔が険しくなっていた。

みはねになんてことしてくれてるのよ。

頭の中がふつつつと沸騰していくようだった。

みはねの最後の一言で、私の中で何かがプツンと切れた気がした。

「あのね…どうしようもないくらい、いやだった…:…:の」

希はとても悲しそうな、それにとても怒った顔をしていた。

「みはねちゃん、ちよつと、言いたいこと言ってもええ？」

「う、ん…」

みはねの返事を聞くと、希はみはねのことを抱きしめた。

「ウチ、頼りないかもしれないけど、もつと頼つてほしいんよ。それに…私、みはねちゃんが甘えたさんなの知ってるよ?」

希の心からの言葉だ。私もあまり聞いたことのない標準語。

その言葉を聞いたみはねは、びつくりしたのか涙なんて止まっていた。

もう、希に先越されちゃったわ…

それに、希はほおを赤く染めて、みはねの耳元で何か囁いている。すると、みはねの顔も真っ赤になった。みはねも何かつぶやいてい

る。

話が終わったのか、二人は笑いあつた。

「希…ありがとう!」

「どういたしまして。…みはねっ」

つて、なんで呼び捨てで呼び合っているのよ!?

「じゃ、じゃあウチは行くな!」

希は真っ赤になって生徒会室を飛び出して行ってしまった。

みはねのほうを見てみると、両手で赤くなった顔を覆っていた。

なんなのよ…

「もう、なんなのよ…」

「…え?」

声に出てしまったみたいだ。

「ねえみはね、わがまま、言ってもいいかしら?」

「…なあに?」

みはねの耳に顔を寄せる。

「いやだったら、押し返すなりしてくれていいから」

そう、ささやく。そして、まだ赤いみはねの耳にやんわりと齒を立てた。

「…んっ…絵里、ちゃん?」

「なんだかもう我慢できなくなっちゃったの。他の誰かがみはねに触れたなんて許せそうにないのよ」

消毒、と呟いて今度はぺろつと舐める。

「はう!?え、えええ絵里ちゃん!」

みはね、耳弱いのかしら?さつきからかわいい反応ばかりしてくる。やってるこっちの心臓がもたないわ…

「みはね…そんな反応されると…その…」

「…ん?」

「い、いやだったら言っただろ!」

「…いやじゃないよ?」

「…」つなに考えてるのよ!いやじゃないって…

「い、いいの…?」

「ん。絵里ちゃんならいいよ」

そ、そんなこと言われたらもうなにも考えられなくなるじゃない。

「絵里ちゃん、はやく」

みはねはそうやって目を閉じる。

え…それって、い、いいの!?

ほんとに？後から怒られたりしない？

頭はパンク寸前、いや、すでにパンクしているのかも。

でも、もう我慢できないわ…

ゆつくりと顔を近づけていく。

——生徒会室の床にうつる私とみはねの影は重なった。

時間にしてほんの数秒。

「ありがと。元気出た」

「よ、よかったわ」

あんなことをした後なのにみはねは平然としている。ああ…もう、この子には振り回されてばかりよ…

それが、幸せだったりするのだけれど。

12. 想い　　Part 1　　矢澤にこ

三年生三人に迫られ、さらに自分が思いのほか涙もろいと知った、さらにさらに絵里ちゃんと希ちゃ…いや、希との関係が少しだけ変わった日の翌朝。

いつもと変わらず誰もいない教室で、いつも通り自分の席から外を眺めていた。正確には空だが。

この時間は考え事をするのに最適なようで、意図的に思い出そうとしたわけでもないのに昨日のことが思い出される。

：随分と恥ずかしいことをした気がする。

肩はまだ痛むし、あの三年生たちが少しこわいというのももちろんだ。そりゃあ、今まで距離が近いかもと思った時は何度もあるけれど、女子校ならではのスキンシップというものもあると思うし、それにやんわりでも避ければ相手はそれ以上近づいてくることはなかった。もちろん、*μ* *s*のメンバーは含まれないが。

それに、*μ* *s*のみんなに触れられて嫌だと思ったことなど一度もないわけで。

そんなことよりも、問題なのはその後のほうだ。

自分でもなんであるなことをしたのかわからない。助けてもらったあげく、絵里ちゃんの制服をしつかり掴んで離さないというなんとも子供っぽいことをしてしまった。さらに、二人に優しくされてポロポロと泣き出すという…

“希って呼んで…?”

あんなに甘い声でしかも耳元で言われてしまったら誰でも赤面するって…

しかも、ちらりと盗み見た希の表情はいつもの雰囲気とは全く違い、不安と期待の入り混じったなんとも乙女、な顔をしていた。

いや、普段からかなり女の子なのだが、あんな表情をまさか私に向けてくれるとは思っていなかったわけで…とにかく今でも思い出すだけで心臓がばくばくと音を立てる。

それに――

絵里ちゃんとの2回目のキス。

まさか、自分でもあんなことを言うなんて思っていなかった。

それに、ほんとに…するとも思っていなかった。ああいうものは付き合っている二人がするもので、いくら仲良くなったからってホイホイするようなものではない。

それに、私と絵里ちゃんが…なんて、釣り合っていないにもほどがある。

そう、頭の中ではちゃんとわかっている。わかっているのだが、どうしても絵里ちゃんを目の前にしてああいう状況になると…

ああああああ!!!

私はなんてことを…!!!

顔が熱くてしょうがない。

誰が見ているわけでもないが、恥ずかしくなって机に顔を伏せる。

「なにやってんのよ」

頭上から聞こえる誰かの声。

全く予想もしていなかった事態。まって、こんな時間に誰かが登校してくるなんてあるわけない。冷静になれ、私。

「なに、無視?」

今はまだ7時だし。そんなことよりも、さっきの見られてたりして

…

「ねえってば!」

「もう…にこごうるさいよ!」

「なんでにこごが怒られるのよ!?!それに、気づいてたなら返事しなさいよ!」

にこはツインテールを揺らしながら叫ぶ。

「静かにしてよね、まったく」

「だ、だからなんで怒られるのよ……!」

「そんなことより、こんな朝早くにどうしたの?」

「なんであんたはにこの扱いがそこまで雑なのよ……。まあ、ここじゃなんだし屋上に行くわよ」

雑なんじゃなくて、それだけ私はにこに心を許してるんだと思うよ。と私は心の中で返す。

私の返事も聞かずに歩き出すにこをの背中を追いかけた。

*

くにごく

屋上でみはねと見つめ合う。

—————

最初の頃は、ただ一緒にアイドルの話ができればいいそれだけだった。

みはねと出会ったのは、私の大好きなスクールアイドル「A | R I S E」のライブの日だった。彼女はもともとライブを観に来たと言う感じではなかった。両手に買い物袋持ってたし。

普段だったら周りのことなんて気にならないのに、なぜか彼女から目が離せなかった。

彼女と私だけ世界が切り取られたような、そんな感じ。

真顔だったし、これといって楽しそうなわけでもなかったのに、彼女はA | R I S Eのライブが終わった後もずっとその場に残ってい

た。

ー話してみたい。

音ノ木の制服を着ているから、私と同じ学校の生徒だから、そう勝手に理由をつけて話しかけた。

話を聞いてみると、やっぱりA—RISEのファンというわけではなく、むしろ初めて知ったようだった。

でも、スクールアイドルには興味があるらしかった。

軽くスクールアイドルのことを教えてあげると、とても勉強になったと、ありがとうと優しく笑った彼女。彼女の笑顔を見たのはそれが最初だった。

…もつと笑ったらいいのに。

もちろん、お礼を言われたわけだし、私の話をこんなに真面目に聞いてくれたのは彼女が初めてだったし、とても嬉しかった。

最後にお互い自己紹介をした。そこで、彼女が最近現れた音ノ木のスクールアイドルのマネージャーをしていることを知った。

それから何度もあの子たちの、μ'sの練習を見にいった。

正直、レベルは最低だったし、スクールアイドルをかなりなめていると思った。

見るとイラつくし、何度もそんななら辞めてしまえと思った。

でもそれはきつと、あの子たちが羨ましかったからなんだと今ならわかる。

私も一年生の頃にスクールアイドルを結成したがうまくいかなかった。アイドル研究部はほとんど部員が辞めていき、最後は一人ぼっちになった。それは、部活だけでなく学校生活でも同じだった。

何度失敗しても立ち上がる。支えてくれる人がいる。そんなμ'sが羨ましくてしよすがなかった。

ま、その時は当然、私があの子たちと一緒にスクールアイドルをやるとは思っていなかったんだだけね。

何度もちよつかいをかけに行くたびに、みはねは楽しそうに笑って

くれた。

それが嬉しくて、最初は邪魔をするつもりだったのにいつの間にかみはねの笑顔を見に行くという理由に変わっていた。

たぶん、彼女は分かっていたんだと思う。私が、sを羨ましがっていたことを。不覚にも、仲間に入りたいと思ってしまうていたことを。

初めて部室に来てくれたと思ったたら、いつの間にか増えているメンバーと共に、アイドル研究部に入れてくださいだものね。やんなっちゃうわよ、ほんと。

でも、そのとき思ったのよ。この子たちとなら私のやりたいアイドルができるかもしれない。彼女と、みはねとなら！って――

それから、みはねは私にとってかわいい後輩から別の何かが変わってしまったんだと思う。

――

屋上はまだ九月になったばかりだといっても朝は肌寒い。

少しだけ冷たい風に背中を押された。それを合図に話し始める。

「みはね。あんたに話があるの」

「どうしたの？」

あどけない表情で首をかしげて聞いてくるみはね。

わからないでしょ？私がこれから何を言うのか。

知らないでしょ？私の中であんたがかわいい後輩からどんな存在になっちゃったのかを。

あんたは、まだ知らないでしょう？優しくして鈍感なあんたは、みはねは、私がどれだけその優しさに救われて、どれだけその鈍感さに苦しんだかを。

今、教えてあげるわよ。にこのこの想いを――

「…っ」

「…？」

ちよ、ちよつとまって、急かさないでよ！

今言うから、ちゃんとと言うから、ほんとすぐに言うから…！

「ねえ、結構時間経ってるけど？」

しかも顔こわい。とみはねは不審そうな顔で言ってくる。

「ああ、もう！わかってるわよそんなこと！」

待ってって言うてるじゃない。待つことなんて、バカでも犬でもできるとしてよ!?

ちがう、そう言う問題じゃない。

カッコつけて言おうとするから言葉が出てこないのよ。

私にはねのことをどう思っているの？

言うって決めたじゃない、みんなだ。私は三年だし部長だから、誰よりも最初に伝えるって決めたじゃないー

「好き。私があんたが好き」

言えた…！頭の中で考えていたように、全然かっこよくないけど。ちゃんと伝えられた…！

「私も好きだけど…？」

みはねは今さら何言ってるの?という顔をしていた。
伝わってないわよね…これ。

きつと、今までで一番勇気出したのに、ほんとこいつなんなのよ!?
「あのねえー!ここは真面目に言ってるの!アイドルのことだって、あんなのことだって、全部本気なの!!!」

年上の私よりも背の高い彼女を下から睨みつける。

みはねはさつきまでのにこにことした顔と違って真剣な表情で私を見つめていた。

「知ってる、にこの本気。私をただのマネージャーだと思わないでよ?私だって本気なんだから」

「な、何よいきなり」

「好きだって言ってるの、矢澤にこっていうアイドルを。初めて会ったとき、アイドルは笑顔を見せるんじゃないかって笑顔にさせる仕事だって言ったよね?にこを見ててほんとだなんて思った。にこといるといつも笑ってばかりだもん」

そう言ってふわりと笑うみはね。

「尊敬してるし、大好きだよ。にこのこと。ずっと一番のファンとして見守っていたと思うてる」

なによ、私がかっこよく決めたかったのに。

なんでみはねがかっこよく語っちゃってるのよ。

「この私が、そばにいさせてあげると言ってるんだから…最高の笑顔、ちゃんと見せなさいよ?」

「うん。だからにこは、ずっとアイドルでいてね?」

「ええ、約束してあげる」

さつきよりも格段と暖かくなった風が、笑顔でしっかりと指切りをする二人を包み込んでいた。

13. 想い　　Part 2　　星空凜

凜

今日はおちんといつもより早い時間に約束して学校に来た。

理由は大好きなみはねちゃんに大好きって伝えるため！

なんでそんなことになったのか？みんな気になるよね！

それはね、昨日みはねちゃんが三年生の先輩たちに襲われちゃった？
んだったって！

昨日の放課後、部室に集められたと思ったら、絵里ちゃんと希ちゃんがとても深刻そうな顔でそう教えてくれたんだ…。凜はよくわか
らなかったけど、それってよくないことなんだよね？

それに、絵里ちゃんはこうも言ってたにや。もしかしたら、みはね
ちゃんが誰かに取られちゃうのは時間の問題かもしれないって。

そんなの絶対やだ！みはねちゃんが他の人のものになったら凜と
も遊んでくれなくなっちゃうよね…？

みはねちゃんの周りにはいつもたくさんの人がいるんだ。
教室にいる時も。教室を移動する時も。

凜はそれがすっごく嫌なの。凜ももつとみはねちゃんと一緒にい
たいのに、いつもいろんな人に邪魔されちゃうの。

これは凜のわがままだけど、二人きりの時間がもつと欲しかったり
するのだ。

だから、この気持ちを伝えるんだにや！

「かよちん！今日は頑張ろうね！」

「うんっ！凜ちゃんは先に教室に行つてくれるかな？私はアルパカ
小屋に行つてくるね」

「わかったにや！」

きつと、かよちゃんなりに気を使ってくれたんだと思う。

昨日、帰り道にじゃんけんなどでつちが先に伝えるか決めただけど
…もうわかつている通り、凜が先なんだ！

「よーっしー！いっくにゃー！」

*

全速力で走って来たおかげでいい気分。

まだ静かな教室のドアをそつと開けると、みはねちゃんは自分の席
に座って空を眺めていた。

「みはねちゃん！おはよう！」

もしかしたら声が大きすぎたかも。

みはねちゃんは、びくつとしてこつちを振り向く。でも、凜の顔を
見ると、笑顔でおはようと返してくれた。

こういうちよつとした事でも、凜だけに向けられた笑顔だって思う
とどうしようもなく舞い上がってしまう。

「凜、今日は早いね？どうしたの？」

「好きだにゃー」

「…え？」

「凜、みはねちゃんのこと大好き!!!」

一度そう思ってしまうと何度も言葉に出してしまう。凜の悪い癖
だにゃ。でも、素直に言葉にしたほうがいいこともある。それは、今
回みたいの時。

だって、みはねちゃんが顔を真っ赤にしてるもん。

「り、んも…なのね…」

右手の甲で口元を隠して目をそらされる。

そういう表情、他の人には見せて欲しくないかも。

凜もってことは、きつともうにこちゃんが気持ち传达了ってこと

だよ。昨日、絵里ちゃんたちの話を聞いて誰よりも怒っていたのはこちやんだった。みんな怒ってたけど…

それに、気持ちを伝えるって言い出したのにこちやんだし。

絶対私が一番最初に伝えるからって言ってたもんね。

「もしかして、もうにこちやんに言われていたり…?」

わかっているけど一応確認する。

みはねちゃんは小さくそうだよ、と呟いた。

「それに、今日は覚悟しときなさいって言われて。やっと理由がわかった気がする…」

そう言っただけで顔を覆って照れちゃってるところも好きだなんて思っちゃおう。

いつからだっけ、みはねちゃんのことこんなに好きになったの。

最初はかわいい子だなんて思ってただけ。しばらくして話すようになって、凜のことかわいって言ってきてくれた…

その時は、なんで凜なんかのことかわいって言うんだらう? ってちよつぱり嫌な気持ちになってた。

みはねちゃんの周りには、かわいい女の子なんていっぱいいる。凜に言うんじやなくて、かよちんとか、もつと別の人に言えばいいのに。そう思ってた。

でも、ずつとみはねちゃんと接してきていつの間にか「かわいいなんて言わないで」から「自信を持ってかわいって言われたい」に変わった。

「みはねちゃん。凜、もつと頑張るね?」

「ん?なにを?」

「みはねちゃんに可愛いって言ってもらえるように、とか?」

自分で言っていてよくわからなくなっちゃった。最初は大好きって気持ちだけ伝えられればいいと思っていたのに。

みはねちゃんの机に手を置いてしゃがみこむと、頭の上に小さな温かい重みがのる。

「出会った頃から言ってる気がするけど。凜はかわいいよ」

「にやっ?!いきなり言われると照れるにやあ…」

「そんなところもかわいいの」

くすりと笑いながらゆっくりと凧の頭をなでてくれる。その手つきが優しく、ずっとそうしてほしうなんて思っちゃう。

「凧たち、ずっと友達…?」

「そうだね。ずっと友達だよ」

「凧がやだって言ったら…どうする?」

ちよつとずるい質問だったかもいけない。みはねちゃんはなでてくれていた手を止めて、少し悲しそうな顔をしていた。

「その時は…しようがないかな。私の一方通行じゃ成り立たないし」

そう言ってくしゃりと凧の頭をもう一度なでると手を離してしまった。

一方通行じゃ成り立たない。

それって、今の凧に言えることだよ。だって、凧の好きとみはねちゃんの好きは同じに見えて全く違う。

みはねちゃんの好きは、凧だけに向いている好きじゃないもん。

「凧ね、かよちんのこと大好きなの。でも、みはねちゃんのこと大好き。この違い、わかる?」

「んー。花陽は幼なじみだから、私よりもずーつと前から大好きだよね?」

「そうだにや。かよちんはこれからもずーつと大切な幼なじみ!でも、みはねちゃんとは友達ってだけじゃ嫌。凧は、もっとみはねちゃんと近い存在になりたいの」

友達よりも。

こんな感情初めてだからよくわからないけど。みはねちゃんに見合うかわいい子になりたい。

とびつきりかわいくなつて、みはねちゃんの隣を歩きたい。

きつと、凧の中でみはねちゃんは特別の特別。

だからー

「大好きだよ。みはねちゃん」

そう言つてぎゅーつとみはねちゃんに抱きつく。

「あ、ありがとう」

「みはねちゃんは、凜のこと…好き？」

「うん。凜のこと大好きだよ」

やっぱり、凜の好きとは少し違う気がしたけど、今は好きって言ってくれるだけで満足かな。

もう一度ぎゅっとしてからゆっくりとみはねちゃんから離れる。ちよっぴり寂しいかも。

でも、凜はかよちんのこと、みんなのことも応援したいから。

みはねちゃんに笑顔を向ける。

「あのね、今かよちんはアルパカ小屋にいるんだ」

「――凜、」

「ほら、行くにや！きつとかよちん待ってるよ！」

何か言おうとしてたけど、わざとそれを言わせない。

みはねちゃんは立ち上がると、もう一度頭をなでてくれた。

「わかった。行ってくるね」

「うん！行ってらっしゃい！」

静かになった教室に一人になる。

凜は、ちゃんと伝えられたよ。頑張ったよ。

実は、このアルパカさんたちは慣れるとすぐく懐いてくれるけど、慣れていない人だとすぐ唾を飛ばしたりするの。

でも、みはねちゃんには一回もそんなそぶり見せなかった。今となっては何回も手伝いをしてもらっているから慣れてるって思うかもしれないけど、本当に初対面の時から懐いていた。

動物には優しい人がわかるっていうけど、ほんとなんだね。

「この子たち、ほんと花陽に懐いてるよね」

「え、そうかなあ？ そうだったら嬉しいな」

みはねちゃんにも懐いてると思うけどな。

って、そうじゃなくて。伝えないと。

「あ、あのね。みはねちゃんに、お、おお話があるのっ！」

「なあに？」

ちよつとびびっくりしていたけど、にこりと微笑んでくれた。

「わ、私。μ s の中では全然目立つほうじゃなくて…」

「そんなことないよ」

まっすぐに見つめてすぐに否定してくれる。

か、顔が熱い…

みはねちゃんは否定してくれるけど、μ s のみんなはキラキラしててかわいくて、本当に私の憧れだ。

一員となった今では、みんなに追いつきたくて必死なのだ。

「でも…」

そう。この性格も直したい。恥ずかしがり屋で引つ込み思案で：人前だと全然喋れない弱虫な自分を。

「花陽。自分のペースでいいんだよ。今でもとつても魅力的だし、無理することないよ？ 花陽は花陽でいいの」

いつもみはねちゃんは私の欲しい言葉をくれる。

あの時も、私がμ s に入りたいけど自信がなかった時も。

「ありがとう。でもね、そう言ってくれるみはねちゃんのためにも：頑張りたいの！」

「そ、そんなこと言われたら、応援するしかないじゃん…」

みはねちゃんは隠すように赤くなつた顔をアルパカさんにうずめている。アルパカさんたちはよくわかつてないのか不思議そうな顔をしている。でも、喜んでいるみたいだ。

ふふつみはねちゃん、意外と照れ屋さんだよね。

「みはねちゃん、照れてる？」

「あたりまえ。嬉しいんだもん」

少しだけこつちを見て、私の制服の裾を掴む。

ああ、なんでこんなにかわいいんだろう。

なんでこんなに大好きなんだろう。

「あのね。ちゃんと、言いたいの」

「う、うん」

みはねちゃんはアルパカさんから離れると、まっすぐにこつちを向く。顔はまだ少し赤いみたいだけど、真剣な顔でこつちを見てくれた。いた。

ダメ：言いたいの言葉が出ない。自然に顔は下を向いてしまう。
恥ずかしい：でも、伝えなきゃ…

「そ、その…」

「うん」

うう。どうしよう、みはねちゃんのこと困らせちゃってるよね。

がんばって顔を上げて彼女のほうを見ると、さつきと変わらず真剣な顔で私を見ていた。

きつと、私がちゃんとと言えるように、自分の力でと言えるように待たせてくれるんだよね。

ほんとに、優しいみはねちゃんが大好き。

「わ、私は…みはねちゃんのことを、す、すす好きです！」

言い終わってからチラッとみはねちゃんのことを見ると、耳まで真っ赤にして固まっていた。

「あの、みはねちゃん？」

「うえっ!? あ、ごめん。その、わかっていてもやっぱり照れると言いますか。はい」

「えへへ。なんだか嬉しいな」

「もう、ほんとうこういうの慣れてないんだから」

慣れてない…？あれ？私の記憶によると、今までいろいろな人から告白されてたきがするけど…

しかも、にこちゃんや凜ちゃんからももう言われてるんだよね？

「慣れてるんじゃないの!？」

「へっ？慣れないよ、だって」

気持ちってみんなそれぞれ違うじゃん、ってぼそぼそと呟くみはねちゃん。

「そうなの？」

「そうだよ。好きにもたくさんあるからね。だって、花陽の好きは花陽にしか言えないでしょ？それと一緒に」

はあ…素敵な考え方をするんだなあ…

そんなこと、考えたことなかったかもしれない。そっか、私には私にしか言えない好きがあるんだ。

「好き…だなあ…」

「ん？」

「ううん！そろそろ教室に行こっか？凜ちゃんも待ってるよね」

「そうだね。行こう」

そう言って手を差し出してくる。

これって…手を繋いでもいいってこと？恥ずかしい、けど、繋ぎたい。

ゆっくりと手を伸ばすと、みはねちゃんは優しく掴んでくれた。

「嫌だったら言っただろ？」

「ううん。嫌じゃないよ。うれしい」

小さい頃からいつも凜ちゃんに手を引かれていたことを思い出す。あの頃は、凜ちゃんに無理に引つ張ってもらっていたような気がする。

でも今は、自分から手を差し出すことができたんだよね。

みはねちゃんとなら成長できる。

みはねちゃんもつと私のこと見てくれたらしいのに…なんてわがママが、心の中に浮かんですうつと消えていった。

15. 想い　　～ Part 4　　西木野真姫～

～真姫～

今日は、みはねに気持ちを伝える日。

べ、べつに、私が伝えたいからじゃなくてみんなが言うから仕方なくよ!?

ち、違って、気持ちは伝えたいんだけど…

ああ、もう！授業に集中できないじゃない！

隣で授業中にもかかわらずぼけっと外を見ているみはねを睨みつける。視線を感じたからなのか、目が合ってしまった。

何が、どうしたの？よ。どれもこれもあなたのせいじゃない。

私が朝来たときにはいつもはもうちょっとあとにくる二人がいて…

三人ともいつもとは違う雰囲気で、何があったのかなんて明白で。

花陽も凜も、いつも以上にみはねにべたべたで、みはねもまんざらじゃなさそうだし。

私のことなんて気にしていない様子で楽しく話す三人。そんなの、いつもクールで冷静沈着な私でも嫉妬…するに決まってるじゃない。

もしかしたら、なんて思ってしまう。

言うチャンスなんていくらでもある。

そうよ、私は昼休みにみはねと二人で音楽室に行くわけだし。そのときに言えばいいじゃない。

落ち着かない。

休み時間になるたびに彼女はいろんな人に話しかけられて、笑顔振

りまいて。イライラしてしょうがない。

いつもだつたらその様子を羨ましそうに見ている花陽と凜は、余裕な感じでいるし。

あ、こっちきた。

「まーきちちゃん！がんばるにや」

「お、応援してるからねー！」

「ああ、もう！わかってるわよ！言えばいいんでしょ！」

もう伝えるタイミングは決まってるんだから、変に急かすんじゃないわよ。

「その、二人きりになるのってやっぱり昼休みだよな？」

花陽は私の考えていることがわかっていているみたい。しかし、表情は少し曇っている。

どうかしたのかしら？

あいにく顔に出ていたようで、花陽は苦笑いをする。

「みはねちゃん、今日はいつも以上にお手紙もらってみたいだから…」

な、によそれ。それじゃあ、私との時間は？

いつもは何通かしかないしきくきくつと帰ってくるけど、花陽がそんな顔をするくらいだから、そうすぐに帰ってくれる量じゃなかったということだろう。

さつきまで授業中に考えていた作戦が頭の中でガラガラと音を立って崩れていく。

「だ、大丈夫にや。たぶん…」

「そ、そうだよ！」

これじゃ…伝えられなかったら、私はみはねに振り向いてもらえるせつかくのチャンスを逃してしまうことになる。

そんなの。そんなの嫌よ。

でも、どうしても音楽室で、あそこで伝えたいのよ。

私の中で、みはねとの特別な場所だからー

放課後、部活の時間までって考えたらあの時間しかないの。

次の休み時間、みはねは私に話しかけてきた。

「ねえ、真姫ちゃん。さつきからどうかした？すっごい視線を感じるっていうか…」

「べ、べつに見てないわよ！」

「そ、それならいいんだけどね？」

次の授業が終わったら昼休みだ。

もう、どうにでもなれ。いいわよ、伝えられなかったらそれで。

授業中、今度は今にも寝てしまいそうなみはねに心の中で宣戦布告をした。

*

花陽の予想していた通り、昼休みを告げるチャイムがなったと同時にみはねは教室から姿を消す。

私はいつも通り音楽室に行くことにした。

あれ…鍵がない。

もしやと思つて音楽室に急ぐ。

思った通り、音楽室のドアは何の抵抗もなく開いた。

「あ、真姫ちゃん！遅いよ」

私の特等席に座って手を振っているのは、みはねだった。

「はあ…なんているのよ」

「いつもいるでしょ!?!」

「そういうことじゃなくてっ」

「えつと…?」

なんのことを言っているのか本当にわかっていない様子で、顎に手をあてて首を傾げて考え始めてしまう。

「ばかなの?他の人との用事はどうしたのよ」

「そ、そんなの、ないって…」

完全に嘘ね。花陽がわざわざあんな嘘つくなんて思えないし、それにはねはねは私と意地でも目を合わせてくれない。

「今からでも行つて来なさいよ」

「行かないよ」

「だから…っなんでよ!」

「だって、真姫ちゃんと一緒に居たいから。それじゃダメ?」

みはねはバカみたいに真面目な顔をして言い放つ。どうしたらそんな簡単にそんな言葉がすらすらと出てくるのよ。

「だ、だったら勝手にすれば?!」

「やったあ」

本当に嬉しいのか、笑顔のみはね。

私の口から出てくるのは、かわいげない言葉ばかりで…

実際いつみはねに愛想を尽かされてしまうのかと気が気じゃない。

「ねえ、私のこと…好き?」

「い、いきなりどうしたの?」

「べ、べつになんでもいいでしょ?!好きなもの?嫌いなもの?」

みはねは何も答えずにしゃがみこんでしまう。

「…き……よ」

ボソボソと小さく何かつぶやいている。いくら耳のいい私でも、そこまで小さいと聞こえないわよ。

「もう一回言ってくれる?」

「だから、好きだってば!」

いきなり立ち上がったと思ったらそう叫ぶ。

び、びつくりした。それに、今好きって言ったわよね？
「そう」

びつくりするくらい冷静な自分がいる。本当は嬉しくてしようがなく、今にも顔がにやけそうになってしまいうくらいなのに。俯いているみはねの頭に手を乗せると、ゆつくりとなでる。

うれしい。うれしくて、照れているみはねがかわいくて、つい自分でもわかるくらいに顔が緩んでしまった。

「真姫ちゃんは？私のこと…好き？」

「好きよ。悪い？」

言葉がすんなりと出た。即答とか、自分でも驚きだ。

「わ、悪くない。うれしいです」

照れながらもおとなしく頭をなでられているみはねがなんだか犬みたいでかわいい。あげくのはてに、しばらく経つと目を細めて自分から頭をぐいぐいと押し出してくる。

…なでられるの、好きなのかしら？

今なら、言えるかもしれない。

「ありがとう」

「え…？」

「だから、今日は二人きりの時間ないと思ってたから。ありがとう…っ」

言えたけど、思った以上に恥ずかしい。

下を向いてしまったみはねの顔を覗き込めば、やっぱり顔を赤くしていて。

「真姫ちゃんと音楽室にくるの、私も楽しみだから…さ」

「はいはい。恥ずかしいなら言わなくてもいいわよ。そんなこと」

うれしくせに、やっぱり私は素直じゃない。いや、でも今日は素直なほうよね。

「言わないと伝わらないじゃん。とくに真姫ちゃんとか」

「伝わるわよ。バカにしないで」

「してないもん。じゃあ、私が今何思ってるかわかる？」

もんってなによ、かわいいんだけど。

今日はいつも以上につつかかってくるわね。

なに？反抗期なの？

まあ、こういうみはねはなかなか見れないし、ちよつとからかってあげようかしら。

「真姫ちゃん好き。とかでしょ？」

さあ、どんな反応してくれるのかしら。怒る？焦る？ねえ、どっち？

視線を向けるとそこにはりんごのように真っ赤な顔をして固まっているみはねがいた。

な、なにその反応。そんなの、ずるいわよ。

「せ、正解だけど…うう、もうこの話終わり！」

「え、ええ。わかったわ」

お互い真っ赤になって見つめ合う。

もう、みはねと出会わなかったらこんな気持ち知ることなかった。

この私がすぐ赤面しちゃうとかそうそうないわよ。ほんと。

そんな初々しいカップルみたいな時間は一人の訪問者によって壊された。

「あーやっぱりここにいた！」

その犯人は穂乃果。突然音楽室のドアを勢いよく開けたと思ったら、太陽みたいな笑顔でこちらへ進んできた。

みはねも私もんだか恥ずかしくて、思わずお互い顔をそらしてしまふ。

穂乃果はどんな状況なのかよくわかっているようで、笑顔でみはねの手をとる。

「真姫ちゃん！みはねちゃん借りてくね〜」

誰の返事も聞かずに、穂乃果はみはねの手を引いて走り出してしまった。

嵐のようね：私たちのリーダーは。

静かな教室で冷静になって思い出してみると、かなり恥ずかしいことしたと思う。

ふふっ 私たちなにをやってるのよ。

ーーーなんだか無性に自分で作ったあの曲を弾きたくなかった。

16. 想い　　～Part5　　高坂穂乃果～

～穂乃果～

廊下に二人の足音だけが響く。

私とみはねちゃん二人だけの。

音楽室にいるのを見つけて、真姫ちゃんのことを放置してみはねちゃんの手を引いて飛び出してきた。

手にお昼ご飯を持っていないあたり、もう食べ終わっちゃったのかな。こっちは大好きなパンそっちのけで探し回ってたのに…なんて不満を思いつつも、今この状況が嬉しいなんてよっぽど私はおかしいのかも。あはは…なんてね。

なんてつたつて二人きりで、しかも手を繋いで歩いてるんだから。好きな人と手を繋いで歩けたら、誰だって嬉しいのは当たり前だよ
ね！

「穂乃果…どうかしたの？」

頭の中でいろいろなことを考えていたら、そんな質問をされる。うしろから聞こえた大好きな声は戸惑いが隠しきれていなかった。

「あ、ごめーん！お昼付き合ってもらおうと思って」

「そっか。中庭…かな？」

「うん！」

会話も終わってしまつて、無言で廊下を進んでいく。
すぐに中庭について、いつものベンチに腰掛けた。

「大丈夫？」

座るなりそんなことを言ってくるみはねちゃん。

「ん？なにがー？」

そんなことを言いつつも、実際はなんのことを言っているのかなん

て分かっている。

たぶん、音楽室のことかな。

「なんか、様子がおかしかったかな? って」

「あはは…なんでもないよ」

そう言っただけ笑えば優しいみはねちゃんはそれ以上なにも言っていない。

ほんとはなんでもなくない。

だって、音楽室にいる二人の様子は付き合いたてのカップルみたくだったもん。昨日みんなで決めたルールを真姫ちゃんが破ると思えないし。とにかく、なんか嫌で。なんだかモヤモヤして、無理に笑顔を作ってみはねちゃんを連れ出した。

もちろん、真姫ちゃんには悪いと思っただけしあとで謝るつもりだよ。…穂乃果、すっごい悪い子かも。うう…

「ね、ねえ。なんか落ち込んでる?」

「そんなことないよ…」

「いやどつからどう見ても落ち込んでるよね!」

なんでばれちゃうのかなあ?

自分では隠し通せると思っただのに…

「頭なでてくれたら元気になるかも」

「え、ええ? ほんとに?」

「ほんとだよ!」

みはねちゃんはため息をつきながらも穂乃果の頭に手を伸ばしてくる。頭に手をのせると何か閃いたようにあつと声を漏らした。

私が不思議に思っていると、みはねちゃんは何かを企んだように笑ってぐしゃぐしゃやって穂乃果の頭をなで回してきた。

頭も一緒にぐるぐる回っちゃうくらい勢いでなでまわすもんだから目が回ってしまった。

しばらくして手を止めると、こつちを見る。

「ぷっ、ふっ、穂乃果の髪ぐしゃぐしゃ」

自分でやったくせにお腹を抱えて笑っているみはねちゃんを見て、つつい頬を膨らませてしまう。

「もう！みはねちゃんがやったんじやん！」

「ふ、ふふふ、あははっごめっ、ごめん」

謝ってるわりには全然反省していないようで、さすがの穂乃果でも怒ってしまふ。いや、そこまで本気じゃないけど。

そんな私の様子に気づいたみはねちゃんは。ごめんねと言いながら今度は優しく髪を直してくれた。

そうやって優しくなでるから、優しく笑うから、さっきまで怒っていたのなんて忘れてしまふ。

「もつとなでてくれないと許してあげないんだからね」

「わかりました」

ほんとはもう許してるけど、まだなでていてほしくてそんな子供っぽいことを言ってしまう。

海未ちゃんやことりちゃんという時とは違う心地よさ。

μ s のみんなと歌って踊っている時とは違う楽しさ。

どんなことでもみはねちゃんと一緒だと全然違うまったく新しい気持ちになる。

「みはねちゃん。真面目な話してもいい？」

「え、穂乃果に真面目な話なんてできるの？」

「で、できるよー！もう」

「ごめんごめん。いいよ」

ものすごく真面目な感じで準備してたのに、みはねちゃんがおちやらけてそんなこと言うから雰囲気なんてぶち壊した。

まあ、私はそんな真面目な雰囲気ですすなんて疲れちゃうだけだから、それが楽だったりするんだけど。

なんだかそれがみはねちゃんには筒抜けなようで、嬉しさ半分悔しさ半分だ。

でも、この気持ちはほんとに真面目だから。

「あのね。みはねちゃんのこと好きなんだ」

中庭に、私の声だけが響く。

みはねちゃんは、驚くでも喜ぶでも嫌がるでもなくずっと真面目な顔をしている。

本人は真面目なんだろうけど、私からしたらこれが結構面白くて、我慢は一応したけど吹き出してしまった。

「あ、笑ったなあ。にらめっこだったら穂乃果の負けだよ」

笑われたのが不意だったのか、少しだけ不機嫌になってしまったようだ。でも、わざと面白く返事をしてくるんだからそこまででもないのかな。

「そうだね。その、穂乃果は本気だよ。みはねちゃんのこと好きっただけ好き！それだけ伝えたくて」

ちゃんと伝わったかな。

なぜかみはねちゃんは両手をあげて降参のポーズをしていた。

「やっぱり私の負けだったみたい」

「え？どういうこと？」

「なんでもないよ」

「気になるじゃん！教えてよー！」

「はいはい。なんでもないから」

私がいくら聞き出そうとしても教えてくれなくて、顔すらも見せてくれなくなってしまった。

いい加減諦めておとなしくパンを食べていると、みはねちゃんは後ろを向いたまま話しかけてきた。

「その、き。今日は想いを伝えるデーみたいな日なの？」

「ん？ああ、そんな感じだよ！」

「え、冗談で言ったんだけど…」

「μ、sのみんなは本気だよ」

「…っ。なんで私なの!?他にいい人いっぱいいるよね!？」

みはねちゃんはこっちを向いて私の手を掴むと、ぐいっと顔を寄せてきた。そういうことすぐやっちゃうからみはねちゃんはダメなんだよ。

まったく、さっきの穂乃果の告白わかってるのかなあ？

「みはねちゃんのことを好きだって言ってるのに、そんなこと言われちゃうと傷つくかも」

「ご、ごめん。その、嬉しいんだけど…私の心臓がもたないっていうか」

「穂乃果に好きって言われても嬉しいんだ…えへへ」

「も、もう。当たり前じゃん」

当たり前前、その言葉に胸がキュンとする。

少女漫画とか大好きだし、いっぱい読んでるけど胸がキュンとするとか正直どんな感じなのかわからなかった。でも、今ならわかる。胸がキュンと苦しくなって好きって気持ち溢れてくる。

これが、恋…なんだよね。

答えなんて誰も教えてくれなくて、でもこの気持ちが間違っているなんて思わなくて。

——好き。

「好き。好きだよ。大好き！」

がつつりと言葉に出てしまって、みはねちゃんの反応をうかがってみたらぽかんとして固まっていた。

さつきから固まってばかりじゃん。

「ねえ、好きだよ？」

「わ、わかったから。私も穂乃果のこと好きだから…っ」

やっと言ってくれた。このままずっと言ってくれないかもって不安になっちゃったよ。

嬉しくなってみはねちゃんの顔を覗き込んだら真っ赤になって、見ないでって顔をそらされてしまった。

「照れ屋さんだね」

「ちよ、みんなのせいだから！穂乃果の言葉は直球すぎるんだよ。ばか」

「ばかだけどそれとこれとは別だよ！」

「はあ…まずばかってことを否定しようよ…」

そんな感じで楽しく話していたら携帯に一つの連絡が入った。

【お話は終わったかな？終わったならみいちゃんにそこにいるように言っておいてね】

それに手早く返信をしてから席を立つ。

「じゃあ、穂乃果はもうパン食べ終わったし戻るね！みはねちゃんはまだここにいてねー」

「え、ちよ、なんで!?!」

「また放課後ね!」

そう言ってみはねちゃんに手を振って走り出す。

みはねちゃんはなんか言っているみたいだったが、今度は邪魔しないように退散することにします！

伝えたいことも伝えられたし、今日の部活が楽しみな。

そのまま廊下も走っていたら先生に怒られた。

あはは…ごめんなさい…!!

17. 想い　　く Part 6　南ことりく

くことりく

中庭で大事な人とお話をしているであろう幼なじみにメッセージを送ったらすぐに返信がきた。

「わかった！ことりちゃん、ファイトだよ！」

文面だけでも穂乃果ちゃんって感じが出てて、少しだけ微笑む。きつと穂乃果ちゃんはちゃんと伝えられたんだろうな。私もがんばらなくちゃ！そう意気込んで目的の場所へ急いだ。

「みいちゃん！」

「あ、ことりちゃん」

律儀に動かずに待っていたのか、はたまた普通にのんびりしていただけなのか、みいちゃんはベンチに座っていた。

「待たせちゃったかな？」

「そんなことないよ。穂乃果も言ってくればよかったのに…」

「あれ？聞いてなかったの？」

「うん。そこにいてねって嵐のように走り去っていったから」

その様子を思い出しか、くすくすと楽しそうに笑うみいちゃん。

最近本当によく笑うようになったな、なんて思いながら私も一緒に笑った。

お母さんが女の子を背中に乗せて帰ってきたときは何事かと思っ

た。

その子の苦しそうな悲しそうな顔を見たとき、思わず自分が面倒をみると口にしていた。

やっと目を覚まして、初めて目があったときその綺麗な瞳に釘づけになった。そして、とても整った顔をしていて宝物を見つけたときのような嬉しさがこみ上げてきたことをよく覚えている。

みいちゃんは覚えていますか？あの目と目があったときのことを。三日間眠る姿を見ていただけなのに、会話をできたときの嬉しさは一生忘れることなんてできないと思う。それくらいだったんだよ？

みはねちゃん。とても素敵な名前だと思った。私が自分の名前を言ったとき、お似合いだって言ってくれたよね。それも本当に嬉しかったの。

よろしくって微笑んだのは少しぎこちなかったけど、それも含めてとてもかわいらしくて思わず抱きしめちゃいそうになったの、みいちゃんは知らないでしょ？

それから、お母さんと一緒にこれからのことについて話した。

みいちゃんは迷惑をかけたくなかったみたいだけど、本当は最初からみいちゃんをうちに迎えるつもりだったんだよ。

一緒に暮らさないって言ったときは少し寂しかったけど、それから一週間はずっと一緒にいたよね。最初の頃は何を考えているのかわからないことが多かった。でも徐々に自然な笑顔を見せてくれるようになって、毎日みいちゃんと過ごすのが楽しくて仕方がなかった。

みいちゃんが音ノ木に入学して初めて学校で話したとき、ことり先輩って呼ばれたのは本当に悲しかった。少し距離が遠くなっちゃったような気がしたの。

でも、ほんとはそんなことなかった。

穂乃果ちゃんがスクールアイドルと一緒にやろうって言ったとき

は断つてたけど、マネージャーをやるって言ってくれた時はその場で飛び跳ねちやいたいくらい嬉しくて。

それからは、いろんなことに協力してくれて、一緒にいる時間も増えたよね。

まだ出会って半年も経っていないのに、頭の中はみいちゃんのことであんなにいっぱいなの。みいちゃんは私がこんな事になってるってやっぱりわからないよね。

学校でみいちゃんの近くにいるときは余計に不安になった。

なんでかって？そんなの、周りがみいちゃんに向ける視線と一緒に感じていたからだよ。

みいちゃんの優しさは知っていたし、絶対にこうなることもわかっていた。だから、余計に嫌だった。

いつみいちゃんが他のの人にとられてもおかしくないって状況で一緒にいるのはすごく不安なの。

昨日、あんなことがあつて心配にならないわけがないよ。

みいちゃんは、私のそばにいてくれるって思ってたけどそれはわからないよね。だって、周りにはいっぱい人がいる。いつ誰にとられちゃうかなんてわからない。

「みいちゃん…っ」

「こ、ことりちゃん？…どうしたの？」

優しく声をかけられると、涙が出そうになるくらいに胸が苦しくなるの。

「あのね、好き…なのっ」

みいちゃんは何も言わずに悲しそうな顔をしていた。

そうやって見つめられるだけでも、身体中が熱くなるの。

こんな気持ち、困らせるだけだってわかってる。でも…

「ごめんね。好き」

みいちゃんを独り占めしたいって思っちゃうの。
そんな私を何を思っただけ抱きしめてくれるみいちゃん。
その優しさが、辛い。うれしいのに辛いんだよ。こんなのおかし
いよね。

「ごとりちゃん。なんでそんなに泣きそうなの？なんで謝るの？こと
りちゃんは何も悪いことなんてしてないじゃん」

だから大丈夫、そう言っただけ背中を小さな子をあやすように一定のり
ズムで優しく叩かれる。

「ありがとう。ごめんね」

「ほら、落ち着くまでこうしてるから」

もつとこうしてほし。落ち着くまでじゃなくて、好きな時に
好きなだけこうしてもらいたい。

私だけを見て。私のそばにいて。

言いたい。気持ちだけが焦っていく。

「みいちゃん」

「どうしたの？」

「…みいちゃんっ」

「ごとり…ちゃん？」

今はこれ以上を求めてはいけない。

みんなと約束したんだもん。だから、今は我慢しないと。

こんなの、

「苦しいよ…」

そう呟くと、勘違いしてみいちゃんはぱつと手を離す。

「ご、ごめんね！そうだよね！」

その様子はやっぱりいつものみいちゃん。かっこいいのにかわ
いくて、かわいいのにかっこよくて。誰にでも優しくして自分のこと
は鈍くて。そんなみいちゃんが大好き。

だから、もつとって抱きついた。

どうしたらいいのかわからないみたいであわあわと手を動かして
いたみいちゃんに、ちゃんと気づいてほしくて。

「好きな」

もう一度呟く。そうしたら、みいちゃんは私の背中に手を回してくれた。

「今日は甘えんぼなの？ふふっ私も好きだよ」

「みいちゃんが悪いんだよ？」

こんなに好きにさせるから。

この想いはどんなことがあっても消えない。誰にも負けない。だから、正々堂々と勝負するの。

みんなに負けなくらいに、好きが伝わりますように。

そんな気持ちでより強く抱きしめた。

二つの鼓動が重なって一つになっていくのが、心地いい。

「みいちゃん。放課後にね、大事なお話があるの」

「わかった」

ことりの番はもう終わり。そろそろもう一人の幼なじみに譲ってあげないと。

名残惜しく思いつつも、ゆっくりとみいちゃんから離れる。

「次は弓道場に行つてね。海未ちゃんがいるはずだから」

「わかった」

笑顔を向けて手を振るみいちゃん。

走り去って行く彼女の背中を見ると、また胸が苦しくなってくる。

胸に手をあてながらも、笑顔でみいちゃんを見送った。

18. 想い　　～Part7　園田海未～

～海未～

昼休みはいつも穂乃果とことりとお昼を食べているが、今日は三人別々だ。というのも、私たちアイドル研究部^μsのマネージャーであるみはねに想いを伝えるためらしいのです。

ことりと穂乃果は昼休みに伝えると朝から意気込んでいた。

二人に流されて私も昼休みに伝えることになりましたが、正直なにをどう伝えればいいのやら。

言い出しっぺであるにこのもと、好きと伝えても付き合う付き合い合わないの話はしないとのこと。

そ、そもそも、そんなの恥ずかしくすぎます！

確かに私はみはねのことをお慕いしていますが、正直こんなこと初めてでどうすればいいのかわかりません。

恥ずかしいと言って今まで逃げてたが、さすがに自分がこういう状況になると少しは勉強しておけばよかった…とそのことを後悔し始めてきている。

幼馴染の二人曰く、みはねに好きという想いが伝わればどんな感じでも問題ない。らしいです…

というわけで、お昼は弓道場に行くことにしました。

*

お昼前まではそわそわして落ち着かなかった私も、一度弓道着に着

替えてしまえば気が引き締まって落ち着いてきた。

μ、sの活動が中心になってた最近は、弓道部をサボっていたわけではないが弓道に没頭する時間が減っていたのは確かだ。

「……やっぱりこの空気はいいですね。」

いつものポジションに立ちゆつくりと深呼吸をする。
さて、始めましょうか。

没頭しすぎていくつ矢を放ったのかもわからなくなってきた頃、遠慮がちに拍手の音が聞こえた。

まさかこんなところに人が来るなんて、と驚いて振り向く。そこには瞳を輝かせて私を見ているみはねがいた。

「なんだ…みはねでしたか？」

「ごめんね。邪魔しちゃったかな？」

「そんなことないですよ。こちらへどうぞ」

そう言うと嬉しそうにこっちへ駆け寄ってくる。座るようにながすと、少し戸惑った様子を見せた後にその場にちよこんと正座した。

「海未ちゃんが弓道やっているの初めて見たけど、すっごいカッコいいね！」

「ありがとうございます」

みはねは前のめりになって、すごく眩しい笑顔でそう言ってくれる。

そんなみはねに嬉しく思いつつも、とある感情がふつふつと浮き上がってくる。

触れたい。みはねに触れたい……

私は何を考えているのでしょうか。そ、そそそんなの破廉恥です！
今すぐこの場を離れて頭を冷やさなければ…と思い、勢いよく立ち上がる。

「すみません。制服に着替えてきますね」

「わかった！私のこと気にしなくていいから」

そそくさとその場を後にする。ああ、ほんとうに私は何をやってい
るのでしよう。

とにかく、昼休みもそこまで残っていないし早く着替えて伝えるこ
とだけ伝えてしましましょう。

「すみません。って、ずっとそのままでしたのですか？」

みはねは私が出て行った時と同じ体勢で待っていた。もちろん正
座である。

なんのことを言われているのかわからないのか、私の質問にきよと
んとするみはね。

きつと、ずつと正座をしていたならそろそろ足を痺れさせてしまっ
てもおかしくない頃だろう。

「…みはね。少し立ち上がって見てくれませんか？」

「へ？なんで？」

「なんでもです。はやく」

少し圧をかけて言うときみはねはおずおずと立ち上がった。

「わ、足がっ」

しかし、すぐにバランスを崩してこちらに倒れてくる。そうなるこ
とを予想していたので、倒れてくるみはねを受け止めてゆっくりと座
らせた。

私としたことが少し意地悪がすぎましたね。

「ふふっずつとその体勢でいるからですよ」

「あーいやあ、なんかこの空気の中で動くのもなんか悪いことをして
いるような気がして…ね」

「そんなに堅苦しいでしょうか？」

「うーん。どうなんだろう？まあ、緊張はするかも」

まだ痺れているのかみはねは足をさすっている。

痺れが取れるまでは下手に動かないほうがいいので、私たちはしば
らくじつとそのままでいることにした。

「はあ…なんか落ち着くなあ…」

みはねは突然私に体を預けてそんなことを言ってくる。

「いきなりどうしたのですか？」

「なんか今日は疲れちゃって」

みはねは遠くを見つめて苦笑いをする。

みんなに気持ちを伝えられて大変だったのだろうか。

「そうなんですか？」

「うん。みんながいつもと違って、いろいろとびつくりしちゃった」

でも…とみはねは続ける。

「すっごく嬉しくてね」

その笑顔から本当に喜んでいることがわかる。

そんなみはねの様子を見てこちらも笑顔になる。

しかし、それと同時に私も伝えなければと思うってしまうのも当然のこと。

「あの…私も伝えちゃダメですか…？」

「え、あ、うん。い、いよ？」

見るからに動揺しているみはねがかわいいやら面白いやらで、さっきまでの緊張なんて解けてしまっ

「よく聞いていてくださいね？」

「は、はい！」

ああ、この気持ちは言葉じゃ表せないくらいに大きくて…でも、言葉にしないとふわふわと飛んでいってしまいそうなくらい不安定で…

こんなにも私の心をかき乱す。

「みはね、私はあなたのことをお慕いしています」

「う、うう…ありがとう…っ！」

みはねは私に勢いよく抱きつくつと、顔を私の胸元へぐりぐりと押し付けてきた。顔が赤くなっていることをバレたくないのだろうか、耳まで真っ赤…いや、耳を見なくとも鼓動の速さと身体の熱さでわかってしまう。

「私もね、海未ちゃんのこと好きだよ」

「はい。ありがとうございます」

「あのさ、もしかしたら…今日みんながいつもと違かったって言ったけど、私が気づいてなかったただけなのかも…なんて」

「今さら気づいたんですか？」

「だって…」

そのままみはねは黙ってしまった。

「みはね。そんなに深く考えなくていいですよ」

「海未ちゃん…」

また沈黙が訪れる。

ドキドキとうるさいくらいに鳴る心臓の音が全身を伝わる。きつと、みはねにも伝わってしまったことでしょう。だって私にもみはねの音が聞こえてくるんですよ？

冷静に考えてみると、それだけそばにいてということだ。恥ずかしい…でも、うれしい。

だめだ。また、みはねに触れたいという気持ちが大きくなってくる。

少しだけ…そう思ってみはねの触り心地のいい髪に触れる。触れた瞬間びくりと肩を震わせたみはねだが、一回、二回となでるとおとなしくなった。

髪をなでるたびにふわりとみはねの香りがする。

なんでこんなに着くのでしょうか。

なんで、もっとなで思ってしまうのでしょうか。

「みはね…」

今度はみはねの頬に手を添えてこつちを向かせる。

初めての感情、初めての想い。

「あの、その…すみません」

自分で目を合わせといてこんなに恥ずかしくなるなんて。それはそういうことに慣れていないから？それとも相手がみはねだから？

いや、答えなんてわかりきっている。

「どうしたの？海未ちゃん」

「い、いえ！とにかく、そのままのみはねでいてくださいね？正解なんて、ないんですから」

「そうだね。海未ちゃんもそのまままで…ね？」

「はい。もちろんです」

みはねの中の私が少しでも大きくなっていてくれたら…

そんなことを思ってみはねを強く抱きしめる。

私の中のみはねはどんどん大きくなっていくのに、みはねの中の私の存在がそのまま変わらないなんて不公平だ。

「海未ちゃん、苦しい」

「ふふ、みはねのせいですよ？私をこんなにして」

「私なにもしてないよ！なんか誤解されそうない言い方しないで！」

「そんなことないです。私はみはねに…」

「わかった！私が悪かったから。もう苦しくないから」

そんなことをしているうちに、昼休みの終わりを告げるチャイムが響く。

ああ、せっかくなところだったのに。

「残念ですが、教室に戻りましょうか」

「うん：海未ちゃんがこんなに意地悪だったなんて」

「なんですか？よく聞こえませんでした」

「な、なんでもない！」

「ほんとに聞こえていました」

「わー！ごめんなさい！」

まったく、そんな顔するからいじめたくなってしまうのですよ。

関われば関わるほどいろいろあなたが見えてくる。

欲張りな私は、もっとたくさんあなたを見たいのです。だから…

これからも私にたくさんのみはね、あなたを見せてくださいね？

先に行ってしまったみはねを追いかける。

あなたは一体誰のものになるのでしょうか？

みんなが幸せになれる道があれば…なんて、そんなことを思っ
てしまっ
た。もう私はやっぱりあなたに恋をしているのでしょうかね。

だって、普通は自分のものにしたくなるものなのでしょう？
でも、みはねの優しさを知ってしまったからは、みんなと、なんて
思わずにはいられないのです。

まあ、少しは独占欲というものもあるんですけどね…

19. 想い 　　Part 8 　　東條希

　　希

放課後の始まりのチャイムが鳴る。

今日は特別な日。たぶん、ウチとえりち以外の他の人はもう特別なことが終わって、ウチらのことを待っているんだらうけど。

次はウチの番。その次はえりちな。

たしか、えりちは生徒会室って言ってたから…ウチはみはねのことをそこまで連れていく、で、ウチの想いも伝えると。

これからの行程を頭の中で確認していると、少しだけ不安そうな顔をしたえりちがウチの席まで来た。

「私は先に生徒会室に行ってるわね」

「了解や。じゃあ、また後でな」

そんなやりとりをして、ウチはみはねの教室、えりちは生徒会室へ向った。

みはねが教室にいなかったらどうしよう。なんて考えが頭をよぎるが、みはねの教室を覗いてみるとみはねは自分の席でうつ伏せになっていた。よかった。

みはね。みはね。と心の中で何度も言葉を練習してから声をかける。

「みはね、寝ちゃってるん？」

「ん、んう…のぞみ？おはよう」

ほんとうに寝ているとは思っていなかった。

へにやりと力のない笑みをこちらに向けてくるみはねは、いつにも増して幼く見える。もしかしたら、高校生には見えないかもなあ…なんて、それは失礼か。

「おはようさん。もう、寝癖ついとるよ」

みはねの髪をすくようになでる。

そんな言葉は口実で、本当はみはねを見て顔が赤くなってしまっているだろう自分の顔を見られないようにするためと、みはねの頭をなでたいという気持ちから。でも、そんなことにも気がつかない鈍感なみはねは、ありがとうともう一度こちらに笑顔を向けた。

「珍しいね？希が一年生の教室に来るなんて」

”希”

まだ言われ慣れていない呼び方にいちいち照れてしまうのは、惚れた弱みということだろうか。

昨日決めたことなのに、前から呼んでいたかのように自然にそう呼ぶみはね。ウチは名前を呼ぶだけであんなに緊張してたのに、なんて少しおかしくて笑ってしまう。

「そ、そうやね。あのなあ、今日は部活に行く前に生徒会室に来てほしくて…」

「わざわざ呼びに来てくれたの？ありがとう」

「どういたしまして。ほな、行こか」

みはねと二人きりで廊下を歩くのはそこまでめずらしくはないが、今日ほど緊張しているのは初めてかもしれない。その原因はどう考えても昨日のせいだ。

自分でもなんであんなことを言ったのかわからない。たぶん、みはねと少しでも距離を近くしたかったから…なんかなあ。

”じゃあ、私のことも呼び捨てにして?”

ウチの後にみはねもほおを赤く染めながらそんなことを言ってきた。びっくりして、嬉しくて…やっぱり照れてしまっただけ。そんなん言われるなんて思わないやん。

ああ、もうほんとに、かわいいにもほどがある。

「みはね」

意味もなくその名を呼ぶ。少し前を歩いていた彼女はこつちをみてなに？と首をかしげた。

期待していた反応と違って少しむっとなってしまう。

「…みはね！」

今度は少しだけ強めに。それでも彼女は首をかしげるばかり。もう、そういうことじゃないんよ。

「どうしたの…？」

「みはねのあほ！鈍感！ウチの気持ちちつともわかってくれへん」

「え、ええ…そんなんじゃないよ…」

みはねはウチの理不尽な八つ当たりで眉をきゅつと下げて困った顔をしてしまう。そんな顔もかわいいと思ってしまうウチはそうとう重傷だ。

こんなにかわいいから、こんなにも好きだから、困らせたくないけど困らせたくなくなってしまおう。

「だから、みはねって…言ってるやんか」

「うーん…」

その場に足を止めて考え始めてしまう。そんなみはねをよそにウチは先に行くことにする。

背後からあ、と漏れた声が聞こえたと同時にウチの体は後ろに引つ張られた。

「わっ！なんなん!？」

「希！」

「な、なに？」

「のーぞーみー！」

みはねは突然ウチの名前を連呼し始める。ほ、ほんとになんなん！いきなりすぎてどうすればいいのかわからなくなってしまおう。

「希。希ちゃん？希さんっ…のぞみん。のんちゃん！」

「い、いきなりどうしたんよ」

いろいろな呼び方でウチの名前を呼ばれる。

の、のんちゃんって…ちっちゃい子じゃあるまいし。

「あれれ？のんちゃんの時だけすっごい反応してなかった？」

なんでそんなに鋭いのか、新しいおもちゃを見つけたかのような眩しい笑顔でそんなことを言ってくる。

「そ、そんなわけないやん？」

「そっか。あ、どれがいい？」

「は……？」

「だから、今言った中でなんて呼ばれたいかなって」

そ、そんなこと考えてたんやね。ウチが思っていたこととやっぱりちよつと違ったけど、それでもなんだか心がほっこりする。名前、呼ばれてうれしいとか……絶対言えないなあ。

「ど、どれでもええ……よ」

「うーん。じゃあやつぱり希でいいか」

そのまま、また歩き始めるみはね。

今度はウチがみはねの制服の袖を掴んでその邪魔をする。

自分でもなんでそんなことをしてしまったのかなってわからない。

「どうしたの？生徒会室行くんでしょ？」

そうだ、生徒会室に行かなくてはいけない。

でも、生徒会室についてしまつたら……今度はえりちの番になる。ウチはまだ伝えられていないのに。早く伝えないと。みはねに、ウチの気持ちを知ってもらいたい。

そんな自分と心の奥にいる臆病な自分が対峙する。

何度も伝えようと口を開くがその度に臆病な自分が邪魔をして……

ただ口をパクパクと動かすのみで、伝えたい言葉は音にならずに消えてしまう。

苦しい。見つめられているだけで身体中がじんじんと熱くなる。鼓動はどんどん速くなり、うまく息ができない。

「そ、その……っ」

シワになってしまふんじゃないかってほどにみはねの制服を握りしめる。言わなきゃ、言いたい……言えない。どうしよう。

「……ううあ、え……と……」

どうしたの？大丈夫？

目の前にいるのに声が遠くから聞こえたかのような感覚。

もつと、もつと近くで。ウチは大丈夫だから。

「ウチは、その……みはね、の……こと」

言わないと。ちゃんと言葉にして伝えたいー

「…好きなん」

「う、え…つと…ごめんっ」

自分の気持ち言葉になつた瞬間にウチが見たのは、みはねの困つた顔だけで。謝罪が聞こえたと思つたら、その後すぐに視界からみはねが消えた。

ふわりとみはねの匂いがする。ウチは今、みはねに抱きしめられている…？

「み、みはね？」

びつくりしてトントンと背中を軽く叩くが、まだ離してはくれないようだ。

「もうちよつとだけ…」

より強く抱きしめられてそんなことを言われてしまえば、こっちが離れたくなくなってしまう。

前の時だつてそうだ。椅子から落ちたウチを受け止めてくれたあの時も。強く、優しく抱きしめられたら誰だつて好きになつてしまふ。

きつとそれだけじゃないのはわかっているけど、引き金はたぶんあれだつたんだと思う。

「好き。迷惑じゃ…ない？」

「迷惑なわけではない。私も希のこと好きだもん。うれしいよ」

「そっか…そっか」

肩に顔を埋める。今は廊下に誰もいないから、なにも気にすることはない。

うれしい。伝えてよかった。そんな気持ちで胸がいっぱいになる。もしかしたら、引かれてしまうかもしれない、今までのように仲良くできなくなるかもしれない、なんて考えてた自分がばかみたいだ。

みはねがそんな人じゃないの知ってるのに。

「はは、希くすぶつたいよ」

「みはねがもうちよつとつて言つたんやん」

「そうだね」

さつきと違ってみはねの声が直接頭の中に響いて聞こえる。それだけ近くにいる。そう思うだけできゆうつと胸が苦しくなる。

ああ、もう逃れられないんやろうなあ。

お互い離ればいつも通りに戻ってしまつて…

二人並んで、えりちの待つ生徒会室に急いだ。

20. 想い　　く Part 9　　絢瀬絵里く

く絵里く

朝からずっと、いや、もしかしたら昨日からずっとそわそわしているかもしれない。

だって、告白するのよ？さすがの私でも緊張くらいするわよ。ええ、するに決まってる。

さつきから生徒会室をうろちよろして、生徒会長の面影なんて微塵もない。

「希、大丈夫かしら…」

なんて、今は親友の心配より自分を落ち着かせることに専念したほうがいいわね。

自分の席に座って深呼吸。

落ち着くのをエリーチカ。そう、私ならできる。

そう意気込んだと同時に生徒会室のドアが開いた。

「み、みみみはね！好きよ!!!」

突然のことに混乱してそんなことを叫んでしまう。

ああ…やってしまった。だって、そんなにすぐ来ると思わないじゃない。

生徒会室のドアからは、目を見開いて固まっているみはねと呆れた顔をした希の姿があった。

「えりち…それはウチがいなくなっただ後に言うべきやん？いや、普通の人ならそう思うと思う」

「ご、ごめんなさい。いろいろとタイミングが良すぎて…」

そんなの言い訳だとばかりの顔で睨まれてしまえば段々と語尾は弱くなっていった。

「はあ…ほな、ウチは行くから。部室で待つてるからね」

「希！ありがとう！」

「ウチのことはいいから、この固まってるみはねをなんとかするのが先やで」

希はみはねを部屋に押し込むと、手をひらひらと振って去っていった。

沈黙。

二人きりになったはいいけれど、あんなことをしてしまった手前どうすればいいのやら。

みはねはさつきから私から少し離れたところに座っていて、下を向いてしまっている。

「あ、あの。みはね？」

「つな、なに？」

声をかけるとあからさまにびくりと反応するみはねに少し苦笑する。

そんなに身構えなくてもいいじゃない。

「その、さつきのことなんだけど…ほんとなのよ？」

すると、さつきまでの強張った顔をしていたみはねはどこへいったのやら、最初は我慢して、だんだんところえきれなくなったのか声を出して笑い始める。

「は、はは…っそ、そんなの気にしてたの？」

そんなのって、少しひどいわよ。私からしたら一世一代の告白だったんだから。

「き、気にするわよ！本当はもっとかっこよく伝えるはずだったんだもの」

「そうなんだ。でも、ドアが開いた瞬間に叫んじやうくらい私のこと考えてくれてたんだなあ…って嬉しかったよ」

そう言っただけでさっきまでと違って優しく微笑むから、ほんとにずるいと思う。

「その、でも、ちゃんと言い直してもいいかしら？」

みはねは私の隣の席に座り、しっかりと頷いてくれたのを確認してからまた私は口を開く。

「私はあなたのが好きよ。もしかしたら、一目惚れかもしれないわ。でも、仲良くなって、近くでいろいろなみはねを見るたびに…もっともっと好きになった」

きつとこれからも、新しいみはねを知ってはどんどん好きになる。そんな気がするの。

一緒にいるだけでこんなにドキドキして、誰かと仲良くしているのを見るだけでもやもやして嫌だって思っただけ。この気持ちを一人で抱えるのももう辛くなってしまった。

ごめんなさい。だから、みはねにぶつけてしまいたくなってしまうた。

本当は、伝えてはいけない気持ちなのかもしれない。それでも私は…私たちは伝えることを決意した。

「好きよ。どうしようもないくらい大好き」

だって、誰にも取られたくないんだもの。

私たちの知らない人が、みはねの隣に立つなんて絶対に嫌よ。

「ありがとう。私も好きだよ」

はにかみながらみはねはそう言う。

好き。私が待ち望んでいた言葉なのに、いざ受け取るとなると心に重くのしかかる。

全然、私の中の気持ちは軽くなる。これじゃあ、意味ないじゃない。

「う、れしいわ…」

ひとつ、またひとつと瞳から涙が溢れる。

なんで私は泣いているのだろうか。泣くつもりなんてまったくないのに、なんで。

「絵里ちゃん？泣いてるの…？」

「ごめんなさい。すぐに止まる、から」

いくら拭いても全然止まってくれない。

どうしよう、みはね困らせてしまう。

がたり、と椅子の音があったと思っただら腕を引っ張られて立たされる。そして、そのままみはねに抱きしめられた。

「絵里ちゃん。どうしたの？」

すぐ耳元で私の大好きな落ち着く声がある。

その問いかけに何も答えることができない私は、ただ涙をこぼすのみ。

みはねはゆつくりと離れると、今度はおでことおでこをくつつけてきた。

「絵里ちゃん…？」

これでもかかってくらい優しく名前を呼ばれば、無意識のうちに心の奥底にしまったはずの気持ち顔を出す。

「ごめんなさい。みはねの好きをみんなももらってるって思ったら、悲しくて」

優しく人差し指で涙をすくわれる。少しだけくすぐりたい。

「ごっちこそごめんね」

「いいえ、違う。みんなに言っている好きは軽いと思っていたのに、抑えきれなくなるくらいに重くて。だめね、私」

「やっぱり悪いのは私だよ。こんなの最低だって、わかってる。でも、誰も傷つけない」

苦しそうにつぶやくその声にさらに悲しくなる。

みはねが悪いわけじゃないのはみんなわかっている。こんなことになったのは私たちのせいだもの。

優しいみはねは誰か一人だけを選ぶなんてことあるわけがない。

そして、それが悪いことだと思ってしまう。

本当は、私たちがそうさせたのに。私たちが、自分たちの重さをみ

はね一人に押し付けたのだから。

わかっていたはずなのに、だから、言うつもりなんてなかったのに。やっぱり私は優しいみはねに甘えてしまった。

「ごめんなさい。今のは忘れてちょうだい」

「…無理しないでいいよ」

苦しいのは、辛いのはみはねも同じはずなのに、彼女はなお私の心配をしてくれる。

「こんな気持ちにさせちゃってるのは私なんだしき。それに、私にはみんなにそんなことを言ってもらう資格はないんだよ」

すつとくつついていたおでこを離すとみはねは悲しそうに笑った。

そんな顔をしてほしくなくてみはねの頬に向けて手を伸ばすが、その手が何かに触れることはなかった。

さつきよりもきつく抱きしめられる。

行き場のなくした手をゆつくりとみはねの背中に回す。もう片方の手はもつとみはねと密着するようにみはねの後頭部へ。

「みはね？」

「絵里ちゃん。私ね、みんなのこと好きだよ。絵里ちゃんのこと大好き」

「ええ、わかっているわ」

「こんなのおかしいよね。だって、こんなの」

そのまま口をつぐんでしまうみはね。

「いいの。私たちはそれだけで十分よ。きつとみんなもそう思ってるわ」

だから、あなたは何も間違っていない。少しも私たちに悪いことをしてるって思う必要なんてないの。

ゆつくりと彼女の髪をなでる。

しばらくすると、みはねはありがとうと呟いて離れた。

その顔は何やら吹っ切れたかのような晴れ晴れしい笑顔。そして、その漆黒の瞳は少しの曇りもなく、輝きを放っていた。

このままいい感じで終わるはずだったが、一つだけ忘れていたことがあった。

「ねえ、さつきみんなにそんなことを言ってもらう資格はないって言ったわよね」

「う、うん。言ったよ…?」

「それ、間違ってるわよ。だって、あなたのことを好きになるのは私たちの自由じゃない。だから、そんなこと言わないで」

「ぐ、ごめんなさい…」

少しだけ強く言うと、しよぼんとした顔で謝る。

「わかってくれればいいのよ。ただ、そんなこと言われると私も悲しくなってしまうわ」

こくりと頷くみはねの頭に手を置くと、みはねはもう一度ごめんなさいと呟いた。

「ふふったまには先輩らしいことしないかね」

年下のあなたに甘えっぱなしの私じゃないんだから。

「先輩禁止なの?」

「もう、それとこれとは別よ。こういう時は先輩なの」
「なにそれずるい」

だって、みはねのことも甘やかしたい。こう、なんていうのかしら。甘えてほしいというか、ね?

不服そうに頬を膨らませるみはねを、いつも妹の亜里沙にやるようになでるとまんざらでもなさそうで。

「はあ…いつも頼りにしてるよ。絵里ちゃんのこと」

「ふふっありがとう」

「うう…もう、先行くからね!」

抱きしめようとしたら、そんなことを言っでするりと腕から抜けられてしまった。

がつくりと肩を落とすが、こんなことで落ち込んでなんかいられない。先に廊下へ出てしまったみはねを追いかけて急いで私も廊下へ出る。

絶対に先に行ってしまったと思っていると思っていたのに、ドアを出てすぐのところまで待っていてくれた。

こういう小さな優しさが嬉しかったりするのよね。

「ほら、部室でみんな待ってるよ」

「ええ、早く行きましょう」

21. みはねのこたえ

好き、ね。

まさか、みんなに好きとか：言われるなんて思っていなかった。

ため息をつきながら横をみる。

隣で歩く絵里ちゃんは、スキップでもするんじゃないかってくらいにご機嫌だ。

「なんだかご機嫌ですね」

「ええ、みはねと一緒にいるだけで嬉しいもの」

嫌味をこめて言ったのに、満面の笑みでそんなこと言われてしまえばなにも言い返すことなんてできない。はあ、なんでこんなにかわいいかな。

絢瀬絵里。

金色の髪に空のように真っ青な瞳。それに、ただ金髪だけじゃなくてきちんと手入れもされていてさらっさら。誰もが見惚れてしまうほど整った顔立ちをしている。それだけでなく、スタイルもずば抜けていいのだ。

容姿が完璧なだけでなく、頭も良くて運動神経もいい。初めの頃は生徒会長という責任のせいか、きつい顔をしていることが多く冷たい印象だったが、μ、sに加入してから柔らかくなったその表情。もともと優しい人なのだが、ようやくそれに気づいた生徒たちが一生懸命話しかけているのを最近よく見かける。

と、まあ。なにを言いたいのかというのと、私と釣り合ってなさすぎる。

今こうして隣に立っていることさえもが驚きなのだ。

そして、それは絵里ちゃんにのみ言えることではない。

μ、sのメンバーはみんなレベルが高い。それぞれがそれぞれのいいところがある。

ほんわかしているところ、元気なところ、ツンデレなところ、表情が豊かなところなど、言い出したらきりが無い。

それに対して、どこにでもいるようなそこまで明るくない赤系のブラウンの髪に真っ黒な瞳。どこからどう見ても凡人の私は、sのみんなどとは不釣り合いだ。

なんて、そんなことを言ったらまた隣にいる生徒会長様に怒られてしまおうだろうけど。だって、事実なんだから。

「あら、入らないの？」

考え事をしてたらしいの間にか部室についていたようだ。

「ごめん、入る入る」

ドアをゆつくりと開ける、が、いつもと違う雰囲気にしただけ困惑する。普段ならわいわいと楽しそうに話しているのに、きょうはなぜだかお通夜状態。

あの三バカトリオですらも静かに座っている。

とりあえずこういう時は。

「希。これ何があったの？」

「え、ウチに聞くん？」

「ええ！なんでみはねちゃん希ちゃんのこと呼び捨てにしてるの!？」

質問に対しての答えは返ってこず、そのかわりに穂乃果が大きな声で質問をしてくる。

「べつに。深い意味はないよ？それに穂乃果のことも呼び捨てにしてるし」

「そ、そうだよね」

また沈黙。こういう空気はそこまで好きじゃない。

どうしよう、と困っているところに助け舟が来た。

「ねえに」。これからどうするの？」

絵里ちゃんは後から入って来てその場に立っていたが、自分の席に座りながらここに問いかける。

「なについて。みはねに返事を聞くしかないでしょ？」

「返事？なんの？」

「はあ…あんだほんとダメね。私たちはみはねのことが好き。付き合いたって思っているんだけど…?」

つ、付き合う!?私か、誰かと…?

「な、なにそれ…」

「よく考えなさいよ。あんだの返事一つで全てが決まるんだから」

そうだ…断るってことは、相手を傷つけることになる。

でも、私は…私と付き合っても誰も幸せになれないと思う。

「私は…でも」

「ねえ、みいちゃんは私たちのこと好きだよね?あの言葉は嘘じゃないでしょ?」

ことりちゃんの言葉が胸に刺さって息がつまる。

「そ、うだよ。嘘なんかじゃない」

あの言葉は嘘ではない。そんなに軽い気持ちで好きだなんて、すくなくとも私は言わない。いや、言えない。

「だったら…!」

「まあ、ことり。みはねの話も聞きましょう」

海未ちゃんは優しくことりちゃんを制すると、じつと私の目を見た。これは、私にちゃんと自分の気持ちを言えということだろうか。

そうだ。ちゃんと私もみんなに答えないと。

「私は、みんなのことが好きだよ。でも、全員のことが好きだから、全員と付き合う。そんな簡単なことじゃないでしょ?だからー!」

付き合えない。その言葉がなかなか喉に突っかかって出てこない。

苦しい。こんなにも好きなのに、みんなのことが大切なのに、突き放そうとしている自分がいやだ。

「好き。μ、sが大好き。みんなが大好き…!この気持ち、どうしたらいいの…?みんなのことを考えると、胸が苦しくなる。こういう時は、どうすればいい?」

少しだけ弱い自分。こんなダメだってわかっているのに、きっぱりと断ることができない。きつと、私の中に断るなんて気持ちが少しもない。

「みはね」

絵里ちゃんはいつの間にか私の前に来ていて、そつと頬に手を差し出して来た。ひやり、と少しだけ冷たい手が触れる。

「みはね。私たちはそれを覚悟で気持ちを伝えたの。だから、そういう道もあると思うのよ」

「そうだよーみんなおんなじ気持ちだよ。だから、べつにそんなに気にしなくてもいいんじゃないかなあ?」

「うん。みいちゃんがちゃんと平等にしてくれれば問題ないよね」

絵里ちゃん。穂乃果、ことりちゃん。

そんなんで大丈夫なのだろうか。私に、みんなを幸せにすることはできるのだろうか。

震える手を前に出せば、いつの間にか私を囲んでいたみんなに手を掴まれる。

大丈夫。言葉にしくなくてもその思いが伝わってくるから不思議だ。

「みんなのこと、幸せにしたい。みんなと、笑っていたい…!」

「この気持ちは本物だ。だから、
「それでも、いいかな?」

ぴつたりと重なる答えに自然と笑顔になる。

さつきまで静まり返っていた部屋は今までで一番騒がしいかもしれない。

笑い声や謎の叫び声、これでもかってくらいに輝いている。

そんな中、さらに朗報が。

μ'sのランキングが19位になっていたのだ。

ラブライブの出場権は20位以内のチームのみ。このままいくと私たちはラブライブに出場することができる。

「やったあーこのままいけば、ラブライブだよね!」

リーダーの穂乃果を始め、メンバー全員が喜ぶ。

まあ、このままいけばの話だが。

「よし、文化祭でも盛り上げてこのままラブライブに出場するぞー!」

『おー!』

みんなの気持ちが一つになって、やる気が高まる。

そんな私たちに、小さな亀裂が入っていることなんてまだ誰も知らない。

St Valentine's Day

みなさんどうもこんにちは。桜みはねです。

今日は2月14日。

そう、女子も男子もドキドキなバレンタインデーです。なんでも、女の子が好きな男の子にチョコをプレゼントする日だそうで。

最近では友チョコって言って女の子同士で交換したりもするみたい。

音ノ木坂学院での1日はどうなるのでしょうか？気になります？

私は別に気にならないんだけど。

だって、バレンタインデーって英語でSaint Valentine's Day。聖バレンタインの日ってことだよ？それに、人が殺された日を記念にしたってなにかで読んだ。そんなに日に楽しむのってちよつと気がひけると言いますか…うん。こんなこと言ってたらつまらない人になっちゃうよね。ごめんなさい！

てことで、気を取り直して今日一日……た、楽しく過ごすぞ…。お、おー！

*

今日はいつもと違ってみんな早い時間に来ているようだ。

学院内は楽しそうな声と甘い香りに包まれている。

「あ、みはねちゃんおはよー！」

「おはよう」

教室に入るなり気づいた人たちが挨拶をしてくれる。ここまではいつもと変わらないんだけど…

「はいっこれチョコレート！」

「あ、ずるい私も。これ受け取って〜！」

次々とオシヤレにラップピングをされたチョコレートを渡される。少したかそうなものから手作りまで、レパートリーはいろいろだ。

そんな彼女たちに笑顔でお礼を言いながら自分の席に向かう。

お、落としそう。

って、私の机がたくさんのチョコで埋まってる…

ど、どうしよう。どうすればいいの？まっつて、すっごい嬉しいんだけど、ほんとどうすればいい？

この状況でありながらもチョコはどんどん増えていく。

とりあえず、このままだと授業も受けられない。仕方がないのでロッカーに入れるに行くことにする。が、ロッカーを開けた瞬間どさどさと何かが落ちる。

チョコ、チョコ、チョコレート！

おい、置く場所ないやないかい。

み、みんなの優しさが、少しだけ…辛い…

丁寧に入れ直す。一つ一つを見ると丁寧にメッセージが書かれていたりとなかなか手が込んでいるみたいだ。本当にありがたい。

手に持っていたぶんは、どうすることもできないのでとにかく無理やり詰め込んだ。

「みはねちゃん。靴箱に行ったほうがいいと思うよ」

突然クラスの子にそんなことを言われる。んん？

「え、なんで？」

「チョコが溢れてた」

学院内に住んでいる私は当然靴と上履きの履き替えがない、と思いきや。もちろん外に出ることがあるのでみんなと同じ場所に設置されている。もちろん私がここに住んでいることは誰も知らないんだけどね。

とにかく早く行こう。

「…わ、わぁ」

私が目にしたのはその機能を果たしていない靴箱の姿。蓋、閉まってないし。なるほど、女子はこういうことするのが好きなのか。

「あ、みはねやん。おはよう」

立ち尽くす私に後ろから声をかけて来たのは希だった。

「いっぱいやねえ」

隣に並んで二人で私の靴箱を見る。

「うん。嬉しいけど、どうすればいいのかなって」

まだまだ生徒たちは来るようで、挨拶をしてはチョコをくれる。ちゃんと一人一人にお礼を言いつて受け取る。

当分ご飯には困らないかも。なんて馬鹿なことを考えている場合ではない。

「みはね。ウチからもプレゼントやで」

ぐんと袖を引っ張られて手に渡されたのは紙袋が何枚かとゴミ袋用の大きなビニール。てつきりチョコを渡されると思っていた私は予想外のことにびっくりしてしまう。

しかし、これはこれで嬉しいのでありがたくもらうことにする。

「あ、ありがとう」

「ええよ。みはねモテモテやし。こうなること予想してたからな」

にっこりと微笑む希の目は少しも笑っていないかった。

「ねえ、なんか…怒ってる?」

希の様子がおかしいので、他の人にはまってもらって希とちゃんと向き合って話す。

「怒つとらんよ。ほら、みんな待ってるやん」

「みんなじゃなくて、私は希のこのほうが気になる。ほら、何かあるなら言つてよ」

そう言うと、顔をそらす希の顔は真っ赤になって。

促すように赤くなつた頬に手を添えてこちらを向かせれば観念し

たようだ。

「う、ウチも渡したいのにみんなが渡すから…っ」

ああ、もう、そんなにかわいいこと言うから希の熱が私にもうつってしまったようだ。あっつい。

「ごめんね」

「い、いいんよべつに。はい、ウチからもこれ」

下を向きながらおずおずと出されたのは真っ赤な箱。ふふっ希みたい、なんて言ったらもつと赤くなって怒るんだろうな。

「ありがとう。嬉しいよ」

「う、それ、本命やから!」

いきなり顔を上げるとそんなことを叫んで走り去ってしまった。

本命：最後にすごい爆弾落としていかれた。やばい、顔がにやけそう。

*

教室に帰る途中に私と同じように自分の靴箱と格闘している少女が一人。たくさんの人からチョコをもらっているようだ。

「絵里ちゃん。大丈夫?」

「あら、みはね。はあ…少しだけ甘く見ていたわ」

小さくため息をついているが、その顔は嬉しさが滲み出ている。

まあ、こんなに関心する自分の好物があれば嬉しくもなるよね。それに、高校時代のバレンタインはこれで最後だもんね。

「あ、そうだった。みはねにも、ハッピーバレンタイン!」

「わあ…ありがとう!」

普通に渡されたそれは、水色の可愛らしい箱でメッセージカードが挟まっている。

嬉しく思いつつもメッセージカードが気になって仕方ない。

「見てもいいわよ」

そんな様子がわかったのか。はたまた自分も見たいのか、くす

くすと笑いながらはやく、と急かされる。

メッセージカードを開くときれいな字で日本語でも英語でもない字で何か書かれていた。

Я тебя люблю!

ふむ、ロシア語だな。

とりあえず顔を上げて絵里ちゃんの顔を見ると、してやったりといった顔をしていた。

「これロシア語でしょ？」

「そうよ。私からみはねへの想いよ」

ふーん。本人からしたら私が読めないって思っているんだろうけど。

「愛してる、なんて大胆だね」

「な、なんで!？」

驚く絵里ちゃんを見て今度は私がほくそ笑む。

実は、そこまで難しいのじゃなければロシア語のフレーズくらいわかるんだよね。

しかも、愛してるなんてけっこう有名でしょ？

「私も愛してるよ。絵里」

耳元で甘く囁いてかぷりと耳に歯を立てれば私の勝ち。

そのまま教室に戻ることにする。

背後からずるいわよ、とか好きとかいろいろ聞こえるが、そろそろ時間もやばいのでひらひらと手を振って逃げることにした。

あとで何か言われそうだな…

*

なるべく目立たないように教室に入ったが、どう頑張っても目立ってしまうようだ。

そりゃあ、袋いっぱいチョコ入れて担いでたら誰でも見るわ。そ

それはそれはシユールな光景だろう。

余っている袋にも机などのチョコを丁寧に入れていく。

と、そこに爆笑している凧と心配そうな顔をしている花陽、あきれた顔をしている真姫ちゃんが来た。

「凧、なんでそんなに笑ってるの」

「だって、サンタさんみたいなんだもん」

人のことを指差しながら言うてくる。失礼だなあ。まったく。

「ふおっふおっふお。どこにみんなからもらったチョコを回収するサンタさんがいるんじゃない？」

ふざけて返せばお腹を抱えて笑い転げる。

花陽は笑うことなく一生懸命私の手伝いをしてきているが、ボケたわけだし少しだけでも笑って欲しかった…ぐすん。

そろそろ予鈴がなろうとしている頃には私の机もすつきりした。

「手伝ってくれてありがとうね」

「ううん。その、これ。今渡すべきじゃないかもしれないけど…」

「ありがとう！めっちゃ嬉しい！大切に食べるね」

「喜んでくれて嬉しいな」

ああ、やっぱり癒される。柔らかい笑みを浮かべてチョコをくれる花陽をみると最高に心が温まる。

「凧もかよちんと一緒に作ったんだ。はい、あげるにや」

ちよこんと私の手のひらに少しだけ自信なさげにチョコを置く凧はやっぱり女の子だ。こういった、ちよっとした仕草がとても可愛らしい。

「ありがとうね」

頭をわしゃわしゃとなでると安心したのか自然な笑顔。

そんな顔されてしまうと心臓がうるさくなってくる。やめろとは言わないけど、うん。なんていうのかな。とにかく心臓が悪い！

真姫ちゃんのほうをちらりと見ると顔をそらされてしまった。

そんなことをしているうちに担任の先生が来てしまったのでそれぞれ自分の席に戻っていった。

真姫ちゃんは、やっぱりこういう行事は好きじゃないのかな？なんてことを考えながら隣を見るとぼつちり目があつてしまった。

手にポケットを突っ込んでそわそわとしているが、私とは関係ないだろう。と、前を向くとみはね、と小さく私を呼ぶ声が聞こえた。

周りには聞こえないような本当に小さな声だったが、私にはしっかりと聞こえた。

なんでかなんて、そんなの大切な人の声くらいどこにいたって聞こえるよ。なんて少しかつこつけすぎかな。

隣を見ると片手で顔を隠して好き、と一言。そのままこちらに小さな箱を投げてくる。

しっかりとキャッチして先生にバレないように机の下で見ていると、赤いリボンがかかっているが透明な箱。中にはトリユフが入っていた。手作り…だ…

もう一度真姫ちゃんの方を向くとさつきまでと違って普通になつてしまっていた。

好き。小さく呟かれたその言葉とその表情を思い出して時間遅れに嬉しさがじわじわとこみ上げてくる。

幸せ、だなあ…

*

今日一日、学年問わずいろいろな人からチョコをもらつて来たわけだけど、その中に本気で告白してくれる人もいた。

女子だらけの中にいると、やっぱり同性に恋心を抱いてしまうものだなあ…と改めて実感した。まあ、私が人のことを言える立場じゃないんだけどね。

それに、お昼休みには絵里ちゃんや海未ちゃんもチョコをもらつては告白されているみたいだった。

他の μ 、sメンバーもファンの子たちによるチョコ攻めで忙しい1日だったようだ。

そんな1日もそろそろ終わる。あとは部活をして終わり。少しだけ早い部室に行くことにしよう。

誰がいるかな、一番かな。と少しだけうきうきしながら部室にはいるがどうやら一番乗りじゃなかったようだ。

「みはねか。ちようどよかったわ」

「早いね?にこのくせに」

「ぬわんですって!?!あんたいい加減私のことバカにするのやめなさいよー!」

「え?にこはそんな私が好きなんでしょ?」

「うぐっ!否定できない自分が悔しい!」

まあ、部活いや、アイドルに関しては真面目なにこが部室に一番最初に来ることは別に珍しいことじゃない。

今のはいつものにこのスキンシップというか、ね?

こうやって乗って来てくれるから楽しいのだ。うん。

「で、何がちようどよかったの?」

「ほら、まだ渡せてなかったから」

そう言っぴらひらひらと何かを見せてくる。

あれは、く、クッキー!

しかも、手作りだよね。あれ。

「くれるの?」

「まあね。ほら、受け取りなさい」

「ありがとう!」

よくく見てみると、そのクッキーはにこの顔をしていた。

「かわいいでしょ?妹たちにも手伝ってもらったのよ」

自分の妹たちを自慢したくてしようがないような顔で言ってくるにこが、かわいいというか面白くて。つい吹き出してしまうと不機嫌な顔で怒られる。

「くだいてから食べるね」

「なんでよ!普通に食べなさいよ!」

「それはそれでどうかと思うけど…」

自分の顔食べられてるの想像してごらんよ。結構あれでしょ。私だったらちよつと傷つく、かも。

まあ、にこはそんなことないんだろうけど。

「うるさいわね。これで、バレンタインを思い出したらにこの顔が出てくるでしょ」

ああ、それもそうか。本人がいいならやっぱりちゃんと食べることにしよう。それに、にこの手作りとか絶対おいしいし。

そうこうしているうちにも部員はどんどん集まってきた。

しかし、モテる二人は放課後になった今でもチョコを渡されているようでなかなかこない。二人は逃げるのが上手いから、捕まえるのに相当苦労しているのだろう。

なんとか二年生が三人そろって部室に来る。

「やあ、海未ちゃんは人気だねえ」

「そんなこと言わないでください！私だって困っているんです」

「まあまあ、海未ちゃん落ち着いて？」

能天気な幼なじみと苦労人。そしてうまく二人を中和させているもう一人。なんともバランスがいいのが二年生の幼なじみ組。

「そうだ、みいちゃん。はいこれ」

私に気づくなりチョコをくれることりちゃん。お菓子作りが大好きな彼女のことだから、クオリティも高いことだろう。

「ありがとう！」

「はい。穂乃果も作ったんだよー」

今度は穂乃果。箱がみんなより少し大きい。

「何を作ったの？」

「えつとね、チョコパン！」

眩しい笑顔で何を言っているんだ。

「穂乃果らしいね。ありがたくいただきます」

「うん！穂乃果の気持ちいーっぱい込めたからきつとおいしいよ！」

まっすぐな言葉に心奪われる。ズキユンって感じでこう、胸に突き

刺さる感じ。

お礼を込めて頭をなでるとやっぱり犬の耳と尻尾が見えた。

「み、みはね、私も…っや、やっぱり無理です！」

海未ちゃんは顔を真っ赤にしてブツブツと何かつぶやいている。

どうしたのかな？

「海未ちゃん、恥ずかしくてみはねちゃんにチョコ渡せないんだって」

海未ちゃんの代わりに穂乃果が答えてくれる。

てことは、チョコを用意してきてくれたってことだよ。やばい、

嬉しい。

「…くれないの？」

「いや、あの…私からもらっても嬉しいですか…？」

なんでそんなに自信ないかな。嬉しいに決まってるじゃないか。

海未ちゃんからもらえるんだよ？

「嬉しいに決まってる。もらえなかったら悲しいな…なんて」

言い終わると同時に顔の前に出されるきれいにラッピングされた可愛らしい箱。その奥には目をぎゅつとつぶっている海未ちゃんの顔が見えた。

「あ、ありがとう。すっごい嬉しい！」

箱を持っている手を軽く引っ張って自分の腕の中に海未ちゃんを閉じ込める。

「本当にありがとね」

海未ちゃんのかわいらしいおでこに軽くキスをする。案の定海未ちゃんは照れてしまって、私の腕の中でプルプル震えていた。小動物か！

「来年も、楽しみにしてくださいね？」

「うん。期待してるね」

「はいっ！」

そのまま見つめあって…

「いつまでそうしているつもりかな？みいちゃん？」

「みはね、いい加減にしないと、ね？」

「海未ちゃんばっかりずるいよー！」

「はわわっすごいです」

「海未ちゃんがうらやましいにや」

「部室で何やってんのよ」

「そんなんまた怒られるで？みはね」

「ほんっと学習能力ないわね」

なぜか攻められるのは私のみで。まあ、確かに私が悪いかもだけど
さ。もう少し優しくしてくれてもいいじゃん！

バレンタインは甘い香りと甘い雰囲気がいっぱい詰まった日にな
った。みんなの中もより深くなったと思う。でも、幸せと同時に
こんなに怒られるなんて：ハッピーエンドで終わったかったです。

いや、こんなにみんなに想われて私は幸せ者だよね。

なんだかんだでアイドル研究部の部室はいつも以上に賑やかだ。

やっぱりμ'sのみんなが大好き！ホワイトデーのお返しの際は
楽しみにしててね。

朝はあんなこと思ってたのに、やっぱりバレンタインって好きか
も。

そんなこんなで私は笑顔で今日1日を終えるのでした。

2.2. 相談とお願い

部活の時間は終わり、帰る時間となった。まあ、部活というほどのことはしていなかったけど。

いつもならみんなを家まで送るといふ任務があるのだが、今日はお昼にことりちゃんと約束をしたので二人で残ることになった。

みんなは少しだけ不満そうな顔をしていたが、今一番気になるのは、ことりちゃんが少しばかり元気がないということだけだ。

「みいちゃん、ありがとう」

「ううん。どうかしたの？元気ないように見えるけど…？」

「みいちゃんは優しいね…あのねー」

暗い表情と重い口。何度も言おうとするが、何かをためらっているようにまた閉ざす。

ことりちゃんは何度かそれを繰り返すと、震える手を握りしめてゆつくりと息を吐いた。

「私、留学するの」

私の鼓膜をことりちゃんの甘いかわいらしい声が揺らす。

「りゅ、うがく…？」

全く予想もされていなかったその言葉に動揺する。留学ということとは、ことりちゃんは遠くに行ってしまうってこと、だよな。

信じたくない。そんなことあるわけない。そう思いたいが、返事もせずただ悲しい顔をすることりちゃんを見てしまえば、本当のことなんだと痛感させられる。

「まあ、まだ行くかな行かないか決まっていらないんだけど…ね」

決まっていらないと言っても、そんな顔で言われたら、行くなって決め

ているかのように錯覚させられてしまう。

いや、もしかしたら行きたいけど私たちのことがあるから踏み出せていないだけなのかも。

「いつから言われてたの?」

「合宿のちよつと前くらい…」

「このこと知ってるのは…?」

「今のところお母さんとみいちゃんだけだよ…」

「…そっか」

ことりちゃんははどうしたいのだろうか。私にできることはなんだろうか?」

「その…穂乃果とかには相談しないの?」

「本当は一番に穂乃果ちゃんに相談したかったんだ…」

「ん、そっか。その…私にできることとかあったらなんでも言ってみて?」

「…なんでもいいの?」

「う、うん。いいよ」

ことりちゃんが少しでも元気になるのなら…

そんな恥ずかしいセリフは言えなかった。

って、なんかことりちゃんがにこにこしながら近づいてくる。

え、え?」

「こ、ことりちゃん?」

かわいい子にましてや好きな子に接近されるとさすがにドキドキするわけで。

ぎゅつと私に抱きつくのと、耳に息を吹きかけられる。

「みいちゃんと、キスしたい」

顔を離して首をかしげるその仕草さえも、わざとやっているんじゃないかってくらいに思えてくる。

それほどまでに本気モードで言ってきているようだった。

「へ?」

ワンテンポずれて、返事ともいえないようななんとも間抜けな声を

出す。なにやってんだ私。

「だめ…う…ことりたち恋人同士だよね？」

「そ、そう…だよ？」

その問いかけに肯定はするが、はつきりとしたものにはならなかった。

恋人同士って言っても、ついさっきなつたばっかりなんだが。てか、*μs*のみんなと付き合うことになったしね…

「じゃあ…」

「いや、でも！」

「初めてはみいちゃんがいい」

「な、なおさらだめでしょ!？」

「なんで、私の一番をもらってほしいの。みいちゃんは、初めてじゃ…？」

少しだけ期待をした目でこっちを見つめてくる。

そんな顔で聞かれてしまえば嘘をつくことなんてできない。

ああ、絵里ちゃんと2回もしてるんだよなあ…

「は、初めて…ではないです…」

その言葉に目を見開くと、ふーんと少しだけ拗ねた顔をする。そういう顔も、可愛らしくて困ってしまうのだが。

「みいちゃん？誰としたのかな？」

顔をもうほんとに唇が触れてしまいうんじやないかってくらいに近づけてそんなことを聞いてくる。

威圧感が…すごい。

これ、言わないほうがいいんじゃないー

「言わなかったら、どうなるかわかってるよね？」

ですよね。

もうどうにでもなれ…!

「え、り…ちゃん、です」

「ふうん。絵里ちゃんと…」

目が合っているはずなのに、さらにその奥をのぞかれているかのような感覚。

実際にことりちゃんには見えているのかもしれないな、と少しだけ怖くなる。

「え、絵里ちゃんは悪くないからね!?悪いのは私だから…!」

「え?そんなのわかってるよ?...とにかく、ことりともキスしなさい」

わかってるんかい。

「え、えと、私なんかでーんんんっ!」

いいの。その言葉は言えなかった。

「ん、つちよ、ことりちゃ...んう」

心の準備ができていなかったせいか、心臓が張り裂けてしまうんじゃないかってくらいにばくばくと鳴る。

何秒かわからないくらい長い間触れ合っていた気がする。

しばらくすると、満足したようだ。

「ぷはっ...はあ、はあ、続きはまた今度するんだからね!」

いや、満足はしていないらしい。そんな言葉を私に浴びせると赤くなった顔を隠すかのようにプイツとそっぽを向いてしまう。

「じ、じゃあ、帰ろうか?家まで送っていくよ」

手を差し出すと、当たり前のように握ってくれて。

なんだか、恋人っぽいかも?

「みいちゃん、ありがとうっ」

ああ、私この笑顔に弱いんだよなあ。

*

昨日は本当は何もなかったんじゃないかってくらいに平和な今日。びつくりするくらいにこれといったこともなく、もう部活の時間になっちゃった。

「そろそろ学園祭だし、ラブライブに出場できるか決まるだいじなきだから、張り切って練習するぞー!」

穂乃果のテンションメーターがこれでもかかってくらいにふりきれている。

練習も少しやり過ぎてるし、ことりちゃんの話の聞ける感じでもなさそうだ。

「無理しすぎちゃダメだからね?」

って言っても聞かなそうだけど…

「大丈夫、大丈夫」

ほら、まったくもう…

そのあと、誰も怪我することなく無事に練習は終わった。あとは着替えるだけです。

「みんな、早く着替えちゃいましょう」

絵里ちゃんのその一言でみんな着替え始める。

かなり気まずいんだよね…この状況。

私はマネージャーの仕事だから着替えないし。目のやり場に困っていると、まだ着替えている途中のことりちゃんが口パクでこつち来て、と言ってきた。

そんなこと言う前に早く制服着てよ…

心の中でそんなことを言いながらもちゃんということは聞く。

「ど、どうしたの?」

「……………」

無視ですか?え?私さつき呼ばれたよね?しかも目もあつてるよ?いや、見つめられてるけど…

「こ、ことりちゃん?…:…ん!?!」

ことりちゃんにいきなり口を塞がれた。…ことりちゃんの口で。

ああ、なんか昨日も同じことあったような気がする。もう私は動揺するどころか冷静だ。

「ことり!なにしてるんですか!?!」

ほら、海未ちゃんも驚いてるよ。

しかも、海未ちゃんの声が大きかったせいでみんなの注目的になつちやったし…

てか、息できない!

「はあ…はあ…ちよ、ことりちゃん！」

とにかく酸素を求めて口を離す。

「ダメだよ？ちゃんとキスしてくれなきゃ…ね？」

「で、でもみんな…」

「みいちゃんおねがぁい。今だけ…」

うぐっかわいい。

しかも、留学のことも考えると…

ああ、私ごんだけ甘いんだよ…

ことりちゃんの耳元に顔を近づける。

「…どうなっても知らないからね？」

あ、耳真っ赤になった。

はあ…本当は恥ずかしいのに、たぶん昨日言ったこと気にしてるんだろうな…

絵里ちゃんとキスしたって言ったあとのあの表情を思い出す。

ことりちゃんがちらちらと絵里ちゃんのほうで盗み見ていることで確信する。ことりちゃん、やきもち妬いてるのかも…

もしほんとにそうだったら、かわいすぎる。

まあ、あの表情は決してかわいいなんて言えるレベルじゃなかったけど。

触れるだけのキスをする。それだけなのにことりちゃんは顔を真っ赤にして目をぎゅっと閉じている。そんな顔されちゃったら本当に我慢できなくなる…

「んっ、……んう」

息継ぎをさせてあげる余裕もなく続けた結果、ことりちゃんは足りなくなつた酸素を求めて顔を離そうとする。

…そんなの許さないんだから。私にこんなことさせといて。それに、さつきちゃんとしなきゃダメって言ったのは誰だったっけ？

「んんっ…あっ」

腰を抱いて逃げられないようにしてしまえば私からのキスを受け入れるしかない。

もう今の私たちにはお互いのことしか考えることができない。

周りにみんないるとか、この後どうするとか、そんなことは少しも考えられない。

前言撤回。

ことりちゃんから甘い声がもれると全身に寒気が走る。あ、やばい。もうこのあと死ぬんじゃないかな。

あとが怖いのでそろそろやめなきや。いや、まあ、すでに手遅れなのだが。

ちゅつとリップ音を鳴らしてからキスをやめると、ことりちゃんはへなへなとその場に座り込んでしまった。

「さ、早く着替えてね?」

「みいちゃんずるいよ…」

「ずるくないよ。誘ったのはそっちでしょ?まったく、着替えてくれないとみんな帰れないよ?」

「わかったよお。みいちゃんのばか」

はいはい。なんとか着替えてくれる気になったようだ。

あたかも何もなかったかのようにことりちゃんに着替えを促す。

「みはね?なにしてるのかしら?いや、なにをしていたのかしら?」

肩をがっしりと掴まれて思い切り引つ張られれば、そこにはにっこりと微笑んだ絵里ちゃん。

怖い…

その後ろでは他のメンバーが顔を真っ赤にさせていたり、私を睨んでいたり。

「え、えと、ごめんなさい…?」

そういった瞬間すんごい冷たい目で睨まれた。絵里ちゃんをどうにかしなければならぬ。

こういう時はどうすれば…

あ、そうだ!

「え、絵里ちゃん」

もちろん返事はしてくれない。

絵里ちゃんの腕をこっちに引つ張る。

突然のことにびつくりしてか、うまい具合にこっちに倒れこんでくる。

「今日…久しぶりに泊まりに行っても、いい？」

恥ずかしかったのもあって、耳元で周りに聞こえないように囁いた。

それを聞いた瞬間、絵里ちゃんは顔を真っ赤にさせた。

「しょうが、な、いわね」

いいと答えてくれた。

いいんだ。よかったけど驚きで自分が言い出したにも関わらずなにも答えることができなかった。

23. ふたたび

「なんで突然泊まるなんて言い出したの？」

私は今、絵里ちゃんと絵里ちゃん家へ向かって歩いている。そう、今日は絵里ちゃんの家にお泊まりするのだ。

「最近行ってなかったし、たまには一緒にいたいなあ…なんて」

これは本心だ。でも、あの雰囲気を変えたくてという理由ももちろんあったりする。

「そ、そうなの…その、じゃあ今日は私の部屋で寝てくれる…？」
少し不安そうに聞いてきた。

ああ、前に泊まった時は亜里沙と一緒に寝たんだっけ？

「もちろん。今日は絵里ちゃんとずっと一緒にいるよ。絵里ちゃんがそれを望むならだけどね」

なるべく優しく微笑んでみる。普段やらないことやるもんじゃないなあ…

今、ちゃんと笑えてる気しないし。

不安になつて横目で絵里ちゃんを見る。

あ、かわいい。顔を真っ赤に染めちゃってる。

「みはね、大好きよ」

「ん、私も大好き」

そう答えて絵里ちゃんの手に分の手を絡める。

ぎゅっと握り返してくれた絵里ちゃんはやっぱりかわいかった。

「ただいま〜」

「おじやまします」

ドタドタとリビングの方から走ってくる音が聞こえる。

「みはねさん!!!」

亜里沙がぎゅーっと抱きついてきた。

ああ、もうほんとに癒しの塊だ。さすが亜里沙だね。

「今日は泊まりに来たよ」

「やったあ♪あ、お姉ちゃんもおかえり」

「ええ、夜ご飯作っちゃうからお風呂はいつちやってね？」

「うん！…みはねさんも一緒に入る？」

うぐっ！かわいい。かわいいすぎる。

でも、うーん。

「私は一番最後に入るから、先に入って？」

「…わかった」

シユンとしてしまった亜里沙に少しだけいたたまれない気持ちになる。

まあ、絵里ちゃんのご飯作つてるところ見てたいししょうがないよね

…

おわびに頭をなでてあげる。

「えへへ〜お風呂はいつてきます」

うん。機嫌も直つたみたいだ。

亜里沙は鼻歌を歌いながらお風呂に入ったみたい。

「さ、ご飯作っちゃうわね」

楽しみの始まりだ！

絵里ちゃんのご飯を作つているところを観察している。

たまに視線が気になるのか、私のほうを見てくるがにこりと微笑むと顔を赤くして料理に 戻ってしまう。

かわいいなあ。こんなかわいくてきれいな人が私の彼女さんなんだよなあ…

そんなことをのんびり考えているうちに、亜里沙はお風呂から出てきてご飯は作り終わってしまったようだ。

「…いただきます！」

「絵里ちゃんの作るご飯は美味しいね！」

「あ、ありがとう」

「きつと、いいお嫁さんになるね？」

「…もう、ばか」

今日何度目かわからないが顔を真っ赤にしてそらす。
かわいい、かわいい。

「あ、そうだーみはねさん、今日一緒に寝ませんか？」

「え…」

亜里沙がそういった瞬間、絵里ちゃんがすごく悲しそうな顔をした。

あ、やばい。そんなかわいい顔されたらもつと見たくなくなってしまう。

ちよつとくらいなら大丈夫かなあ？

うーん。

「あ、うん。ソウダネ」

ちらつと横目で絵里ちゃんを見る。

「…っ」

絵里ちゃんから表情が消えた…気がする。

「あ、やっぱー」

「お風呂はいつてくるわね」

私が断ろうとしたら絵里ちゃんに遮られてしまった。

絵里ちゃんはそのまま食器を片付けてリビングを出ていった。

「あ、お姉ちゃん…」

やってしまった。

絵里ちゃんを傷つけた…

「亜里沙、ごめんね。今日は、絵里ちゃんとずっと一緒にいたいんだ」
私のその言葉に亜里沙は何かを考え始める。いくら考えてもわからないのか、しばらくするとこちらに目を向ける。

「…どう、して？ 亜里沙じゃだめ？」

「ううん。亜里沙がだめとかじゃなくて…」

大切な、大好きな絵里ちゃんとの約束は絶対守りたいんだ。今日、一緒にいるって約束したからさ」

恥ずかしいのがバレないように、亜里沙の頭をくしゃりとなでる。

「そっか… 亜里沙もお姉ちゃんのこと大好き！…もちろんみはねさん

のことも。だから、今日は我慢します！」

「ありがとう。亜里沙はいい子だね」

今度は優しくなでてあげると、早くお姉ちゃんのところ行ってあげて、と言われた。

もう、お風呂からは出ているようだ。

絵里ちゃんの部屋の前まで来て深呼吸をする。よし！

「絵里ちゃん、入るよ？」

返事がない。ここで折れるわけにもいかないの、ドアを開けて中に入る。

ベットに膨らみがあるのでそこにいるのだろう。

「絵里ちゃん、さっきはごめん…」

今日、絵里ちゃんと一緒にいたいんだけど…」

「出たって」

布団から顔を出さずにそう告げられる。

「っ！本当にごめん！だから…」

「みはねの顔なんて見たくない！亜里沙とよろしくやってればいいじゃない！もう出たって!!」

顔を見ることはおろか、枕を投げつけられてそんなことを言われてしまえばさすがの私も心が折れてしまう。

嫌われた。絵里ちゃんに嫌われてしまった。

「そっか。ごめんね…」

枕をベットの上にそっと戻すと絵里ちゃんの部屋から出ていった。

ドアを出てすぐ、絵里ちゃんの部屋のドアを背にして座り込む。

「嫌われた…」

言葉を出してみると、余計に悲しくなってきた。何も考えられない。

人に嫌われるのはこんなに辛いことなのか。いや、絵里ちゃんに嫌われたから…？

とにかく、亜里沙に報告しに行かなければ…

そう思いリビングへ行くこうと歩き出した時だった。

「……っ!?!」

もしかしたら、私のことを見ていた神様が絵里ちゃんを傷つけたことを怒っているのかもしれない。絶対そうだ。

自分でもなにが起きたのかわからないくらいに派手に転んで目の前の壁に激突する。そしてそのまま重力に引っ張られて背中から床に落ちていく。

突然のことにかっこよく受け身を取れるわけがなく体は床に向かっていく。

ああ…このままいなくなることができたら…

「いったい」

まだ肩も治っているわけでもないのにおもいつきり打ってしまった。また、手の甲を切ってしまったらしく血が出ている。

情けない。自業自得。そんな言葉が頭に浮かぶ。

「みはねさん!？」

あんな音を立てたら誰でも気づくに決まってる。

亜里沙が飛んできてくれた。

「ははっなんか壁に体当たりしちやった」

「笑ってる場合じゃないです!どこか怪我してませんか?」

こんなの、たいしたことない。私は亜里沙に心配してもらえるほどの人間じゃない。

「大丈夫。体がちよつと痛いだけだよ」

そう言って笑えば亜里沙は少し落ち着きを取り戻す。

「そうですか。とりあえず、亜里沙の部屋行きましょう?」

「ん、ありがとう」

亜里沙が肩を貸してくれて、やっとの事で亜里沙の部屋までついた。

「さ、亜里沙のベッドで横になつて?」

「ううん。ここで大丈夫」

そう言って床に座る。

「ダメ!!!」

「大丈夫、大丈夫。気にしないで」

少し眠くなってきたってしまった。

目を閉じると何かに優しく包まれる。

亜里沙に抱きしめられたのだ。

「亜里沙…？」

何も言わずに抱きしめてくる。

いい匂いだ。絵里ちゃんと同じ匂いがする。

「いい匂い。大好きな匂いがする」

「そう…ですか。もう、無理しないでください…！」

最後の言葉は私に言い聞かせるというよりは、亜里沙の心からの願いのように聞こえた。ありがとう。

「絵里ちゃんに、嫌われちゃった…」

涙がひとすじ流れた気がした。

あ、もうまぶたが重い。

再び目を閉じると、私を抱きしめていた亜里沙は離れてしまった。

亜里沙は、はあ…とため息をつくど部屋から出て行ってしまったようだった。

く絵里く

ついさっきみはねが部屋に来た。

謝ってきた。一緒にいたいって言ってくれて嬉しかったけど、頭に

浮かぶのはみはねの隣で笑っている亜里沙。

素直になれずに追い返してしまった…

私のほうが年上なのに大人気ない。

頭ではわかっているけど、みはねのことになると感情で動いてしま
うようだ。

それだけみはねが大好き。言葉じゃ足りないくらいに愛している。

果たしてその気持ちはみはねに届いているのだろうか？

みはねは本当に私のことが好きなのだろうか？

みはねは優しいから、私を悲しませないようにと無理をしていたら

…

ましてや、みはねはμ，sのみんなが恋人。

これから我慢しなければならぬことも増えてくると思う。

亜里沙にまで嫉妬しちゃうとかほんとうにダメね…

ため息を一つついて布団をかぶり直すと部屋の外からなんだか普段は聞かないような音が聞こえた。壁に何か激突したような、そんな感じの音。

どうしたのかしら。

しばらく息を潜めて部屋の外の様子を伺う。

隣の亜里沙の部屋が開く音がした。

亜里沙とみはねの話し声が聞こえる。

「みはね…」

やっぱり、私なんか…

「おねえちゃん？入るよー？」

みはねと話し終わったのか、亜里沙が私の部屋を訪ねてきた。なにを言われるのかしらね。

「いいわよ…」

亜里沙が入ってくる。

悲しそうな、また怒っているような顔をしている。

何があったのだろうか。

「どうしたの？」

「それが…みはねさんが、思いつきで転んじやって…」

さっきの音はみはねが転んだ音だったのね…

大丈夫なのかしら。

怪我とかは？まだ肩も治ってないのに。

そんな不安を悟られないように、私は感情を殺す。

「そう、それで？」

「それでって…心配じゃないの？」

「だって、亜里沙のベッドで寝ているのでしょうか？なら、心配することはないじゃない」

「…てない。みはねさんは今まで亜里沙のベッドで寝たことなんてない！」

「え…」

「どういうこと？」

「何回も亜里沙の部屋で寝てたじゃない。」

「私の部屋に泊まった時は、一緒にベッドで寝たわよね？」

「…どうして。」

「みはねさん、お姉ちゃんのこと大好きだよ。亜里沙なんかじゃダメなの！みはねさん、お姉ちゃんに嫌われたって泣いてた…！」

「亜里沙は涙を拭いて続ける。」

「今、亜里沙の部屋にいるから。みはねさんのこと、お願い！」

「っ！なんて私はバカだったのだろう。亜里沙…ありがとう。」

「亜里沙もみはねのことが好きなのに、私なんか気に使ってくれて

…

「私はベッドから降りて亜里沙の部屋に駆け込んだ。みはね…！」

「ドアを開けるとベッドを背にして座って寝ているみはねがいた。」

「その顔はとても辛そうで、見ているこっちが泣きそうになってしま

「みはね…」

「声をかけるとみはねはうつすらと目を開けた。」

「え、り…ちゃん…ごめん、ね」

「みはねの今にも消えてしまいそうな微笑みをみて、いてもたってもいられなくなって抱きしめてしまった。」

「みはね…ごめんなさい」

「なんで絵里ちゃんが謝るの…？絵里ちゃん、私のこと…：…：嫌いに

「嫌いになんかなくてないわ！」

「もっと強く抱きしめる。この気持ちが、みはねのことが大好きって

「ほん、と…？」

「本当よ！みはねのこと大好きよ！」

「じゃあ…その証拠に、キスしてほしい」

え…？

みはねが目をうるうるさせてキスをねだっている。

ハッラシヨー!!!

かわいいすぎるわ。

とりあえず、ここではだめよね…

そう思いみはねをお姫様抱っこする。

軽すぎる。この子、ちゃんとご飯食べているのかしら…

「うえ!?!絵里ちゃん!?!」

「おとなしくして?私の部屋に行くわよ」

「う、うん」

みはねは戸惑いながらも私の服をぎゅつと握っている。かわいい

…

「部屋に着くと亜里沙はいなかった。

どこ行ったのかしら?はあ…あの子にも無理させてしまったわね

…

とりあえず、みはねをベッドにおろしてっと。これからどうしよう

か…うーん。

「絵里ちゃん」

「…何かしら?」

「ごめんね…?」

みはねの目からは今にも涙がこぼれそうだ。

「私、絵里ちゃんの迷惑になってる。付き合ってたのだから…絵里ちゃんの本当の意思かもわからないのに…」

とうとう目から涙がこぼれてしまった。

みはね…

「前にもいったけど、私は誰かに好意を向けられるような人間じゃないの。しかも、記憶もない。自分が何者なのかもわからない」

記憶がない。その言葉で全てが繋がった。理事長が命の恩人、学校に住んでいる。そういうことだったのね。

私は今まで自分のことしか考えていなかったのね…

みはねにこんな辛い思いさせてる。

「みはね、私はみはねのことが好きよ。私、自分のことしか考えてなかった。今日も嫉妬とかいっぱいしちゃったし」

「嫉妬…？」

「そう。みはねのことが大好きすぎて…ね」

「あり、がとう。わたしのことが好きになってくれて。絵里ちゃんのと大好きだよ」

みはねが抱きついてくる。

みはね、本当は甘えん坊さんなのね。

「絵里ちゃん…」

「ふふつなあに？」

「絵里ちゃんとキスしたい…」

今にも消え入りそうな声。

みはねは私のこと好きだって自惚れてもいいのかしら。それには私だけの恋人。

「あ、その、いやならーんっ」

優しくみはねにキスを落とす。

「いやなわけ、ないじゃない」

そう言つて、またみはねに口付ける。なんども角度を変えて。

かわいい。一生懸命に応えようとしてくれている。

「絵里ちゃん、大好き」

ちよつと、いつものかっこよさはどこへ行ってしまったのかしら。

かわいすぎて理性が持ちそうにないわ。

「私も大好きよ」

さすがにやばかったので、最後にもう一回キスを落としてからやめる。

みはねは少し物足りなさそうな顔をしたけど、一応は満足してくれたようだ。

「じゃあ、寝ましようか」

「うんっ！あの…一緒に寝たいな…っ」

「いいわよ」

やった、と笑顔でベッドに入るみはね。

私もベッドに入ってみはねを抱きしめる。

あ、そういえば

「みはねって、亜里沙のベッドで寝たことないの?」

その言葉を聞いた瞬間みはねの肩はビクリ反応する。

「ねえ、どうなの?」

みはねは恥ずかしい?のか、ぎゅうつと顔を押し付けてくる。

「えっと、その、そんなにくつつかれると…ね?」

さすがに理性が持ちそうもないので、少し離れようとする。が、みはねは離れてくれなかった。

「亜里沙に対しての大好きと、絵里ちゃんに対しての大好きは…違うの」

「え…?」

つまり、どういうことだろうか?

「絵里ちゃんとは、ずっとくつついていたいっていうか…絵里ちゃんに触れられるの、好きっていうか…うう…」

なにこれかわいい。

こんな顔見せるのは私だけって思ってもいいのかしら。

ことりとキスしてる時はあんなにイケメンだったのに…ふふっ

かわいいみはねもかっこいいみはねもどっちも好きだからいいか。

「絵里ちゃん、全部声に出てるよ…それに、絵里ちゃんの前でだけだよ。こんなに余裕なくなるの」

「うそ?」

「ほんと、それにことりちゃんとの時と絵里ちゃんとの時とは全然違うのー!」

そういつて、もつと私たちの間に隙間はないんじゃないかってくらいにくつついてくる。

「どう違うのか聞きたわ」

「教えてあげない。あ、そうだ」

「むう…どうしたの?」

「えつとね？一回しか言わないからよく聞いててね？」

「う、うん。わかったわ」

「絵里ちゃん、好きです。大好きです。私と付き合ってください……！」
「…っ!?そんなの…そんなのずるいわよ」

「返事、聞かせて？」

そんなのもちろん

「私も大好き。その…よろしくお願いします」

「ありがと絵里ちゃん」

「こちらこそありがとう」

誰かと想いが通じるってこんなに幸せなことなのね。

もう一度みはねをぎゅっと抱き直す。

「私、みんなにも私のこと言わないと…」

「みはねがそうしたいのならそれでいいと思うわ。少なくとも、私はみはねのこと知れて嬉しかった」

「うん。ありがとう。だ、いす…き…すう…」

みはねの息が一定になる。

なによ、もう、こんなにドキドキさせといて寝ちゃうのね。

まあ、こんな風にちゃんと気持ちを確かめあえるなんて思ってもいなかった。

涙が出そうになるけど、頑張ってこらえた。

今は、もう少しだけこの幸せに浸っていたい。

おやすみなさい。私のかわいい恋人。

みはねのおでこに一つキスを落とすと、私も夢の世界へと意識を手放した。

24. 反省

右手に痛みが走り、目をさます。

窓から射す光に目を眩ませながらも右手を上げてよく見て見ると少しだけ腫れていた。

ああ、そういえば昨日ぶつけたんだった。とそんなことをぼんやり思い出しながら寝返りをうつと、あどけない顔ですやすやと寝ている絵里ちゃんが目に入った。

いつしかと全く同じシチュエーションだがそのときとはおおきくちがう。

それは、絵里ちゃんが私の恋人だということだ。まあ、恋人はあと八人もいるわけなんだけど…

そんなことを考えながら、目の前にある金色の髪をすくようになっていく。

「み、はね…?」

起こしてしまったようだ。目をこすりながらあくびを一つ。

「おはよ。絵里ちゃん」

「んう、おはよう」

まだ眠そうだけど、笑顔で返事をしてくれる。

こんなに幸せでいいのかなあ、私。

*

「じゃ、学校に行きましようか」

絵里ちゃんと学校へ行くのは初めてだ。

なんか、今付き合ってる感出てるんじゃないかな?なんて考えてしまふ私はそうとう幸せすぎて頭がやられているようだ。

「ねえ、みはね」

「な、なに?」

「手、繋ぎたいのだけど…だめかしら?」

遠慮がちに制服の袖を引っ張られる。

絵里ちゃんと手繋げるの!?

「喜んでー!」

思わず反射的に返事をしたのはいいけれど、絵里ちゃんが私の右側にいることを思い出す。

手をつなぐと自然と私の右手を取るわけで…

「あ、やっぱ、だめー!」

右手は今怪我をしている。

手をつないだらばれてしまうかもしれない。

そう思ってたのだけど、絵里ちゃんは勘違いをしてしまったよ
うだ。

「そ、そうよね…ごめんなさい」

「ち、違って…!絵里ちゃん、こっち側に来て」

絵里ちゃんを無理やり左側にする。

私の意味のわからない行動に困惑しているようだ。

まあ、これではれることはないだろう。

「絵里ちゃん、手」

「え…?」

なかなか手を取ってくれないので、強引に絵里ちゃんの手をとって指を絡める。

「だから、手繋ぎたいんだってば」

すると、絵里ちゃんはさっきまでの悲しそうな顔はどこへやら、最高にかわいい笑顔になった。

学校の近くになるにつれて生徒が増えてくる。

私の隣にいる絵里ちゃんは学校の生徒会長をやっている。また、容姿も完璧なわけで、女子しかいないこの学校でも人気者だ。

つまり、注目の的なわけですね。

「生徒会長とみはねちゃんが手繋いでる!」

「あの二人ってどういう関係なの!?!」

うっみんなの視線が痛い。

完全に私恨まれるパターンでしょ…

てか、なんで私の名前まで!?

絵里ちゃんは慣れているのか、気づいていないのかよくわからないが平然と歩いている。

「あの、みはねちゃん!」

突然、後ろから腕を引つ張られた。

後ろを振り返ると、全く見覚えのない人:だと思う。たぶん。

リボンの色が緑色なので三年生かな?

「な、なんですか?」

「その、生徒会長とはどういう関係なの、かなあ?って…」

その言葉で周りに人が集まって、同じようなことを聞いてくる。

やっぱりそうだよね…

「みはねとは、ふ、普通に友達よっ!」

絵里ちゃんはあたふたしながら答える。

動揺しすぎ:てか、ちよつと傷ついたぞ今の言葉。友達:ねえ…

私は絵里ちゃんの手をぎゅつと握ったままでみんなに向かつてにつこりと微笑む。

「絵里ちゃんは、私にとって大切に特別な人ですよ。もちろんμ、sのみんなもですけどね?」

うわ、自分で言つといてすつごく恥ずかしい。

でも、ほんとのことだしいいよね!

「あ、で、でも、みなさんのこともとっても好き:ですよ?」

恥ずかしさを誤魔化すつもりでそうつけ加えると、さっきまでざわついていた周りは突然静かになってしまった。

え、あれ?なんで静まり返つてんの?

ちよ、かなり恥ずかしいんですけど。

だって、ほんとのことだよ?μ、sのみんなは特別な人だし、学校のみんなも知らない人はいるかもだけど、いい人たちばっかだから好きだし。

みんなのことだから、楽しい感じのノリで返してくれると思ったのに…

さらに恥ずかしい思いをしてしまった。

「みはね…行くわよ」

そして、なんで絵里ちゃんはそんなに不機嫌になってるのだろうか。

私と手をつないだまま生徒をかき分けてずんずん歩いていく。

あつあの後ろ姿は！

「の、希！助けて！」

「あ、みはねとえりちゃん。おはようさん」

「あら希、おはよう」

「えりち、なにやってるん？」

希は私のことを見ながら、ちよつと気まずそうな顔をする。そりやそうだよね。こんなズルズル引きずられていたら…

「いろいろと…ね。生徒会室に行くわよ」

この後、希も一緒に生徒会室に行くことになった。

絵里ちゃんが朝のことを言うと、希は、自業自得やんといって助けてくれなかった。

そのおかげで、私はHRが始まる直前に教室に駆け込むことになった。

…まだ、体のあちこちがすごい痛いのに。なんて、やっぱり自業自得だけど。

無事、誰かに怪我がばれることもなく放課後になった。

さて、いつも通り凜と花陽と真姫ちゃんと部活へ行きますか。

「みはね、ちよつと。凜と花陽は先に部活にいつててくれる？」

「ん？了解にや？」

「わかった。みんなには少し遅れるって伝えておくね？」

「ありがとう。お願いするわ。みはね、行くわよ！」

え、ちよつと話が見えてこない。

真姫ちゃんの顔を覗いてみると、怖い顔をしていた。

それから何かを言える雰囲気でもなくなってしまったので、二人無

言で歩き続ける。

私、何かしちやつたのかなあ？

「ま、真姫ちゃん…？」

真姫ちゃんに声をかけると盛大なため息をつく。そんなため息してそんなに呆れた顔されると心がチクチクと痛みます…

「みはね、その手の怪我どうしたの？」

「え…!？」

まさかの変化球。

まさか怪我がバレているとは思っていなかった。気づかれないうちに右手はなるべくみんなに見えないようにしていたのに…

「気づいたのはついさっきだけどね」

「ご、ごめんなさい」

「なんで謝るの？それは、なにに対しての謝罪なわけ？」

真姫ちゃんは表情を変えずに、むしろさつきよりも眉間にしわを寄せながら答える。

「だって、真姫ちゃん怒ってる…」

少し涙が出そうになってしまいそうだが、頑張つてこらえる。

そんな私を見てか真姫ちゃんはまたため息をついた。

「とにかく、音楽室に行くわよ」

怪我をしていないほうの手を引いて音楽室まで連れてこられた。

いつもは真姫ちゃんと一緒に座っているピアノのいすに私だけ座らせられる。

少しの沈黙。その沈黙を破つたのは私の方だった。

「真姫ちゃん、なんで怒ってるの…」

「みはね、それ本気で言ってる？もし本気だったら許さないわよ」

さつきからずつと我慢していたが、そろそろ限界。

普段とは違う真姫ちゃんを見て、涙がこらえられなくなる。恥ずかしいけど、ポポポロと涙が溢れて止まらない。

顔を見られたくなくてうつつむこうとしたが、それは真姫ちゃんによつて阻止された。

「はあ…本当にあなたは…」

「ご、めんなさい…っ嫌いにならないで…」

「嫌いになんかなってないわよ。で、どうして怪我したの？それ」
心なしかさつきよりも柔らかい顔をしている…と思う。

「えと…絵里ちゃん家で転んだ時にぶつけちゃったみたい？」

真姫ちゃんの顔を見ると、なんとも複雑そうな表情をしている。

「はあ…もうこの際、どうして絵里の家に泊まったのかとかは聞かないでおいてあげるわ」

「ん、うん…？」

「絵里は怪我のこと知ってるの？」

「怪我してるのは真姫ちゃんしか知らないよ？」

「なるほどね。それで、なんで私が怒っているのか聞いたわよね」

「――教えてあげる。」

そう耳元で囁かれる。

その瞬間、一気に顔に集まる熱。

その様子を見て真姫ちゃんは満足そうに微笑む。

「どうしてほったらかしにしたの？」

「え…？」

「だから、その怪我なにも手当てしないでずっとほったらかしにしていたんでしよう？そんなの…許せるわけないじゃない」

真姫ちゃんは目をそらして少し拗ねているような顔をする。

ほんとに、優しすぎだよ。真姫ちゃんは。

「こんなの、睡つけとけば治るよ」

いや、まあ、腫れているときはこういう言い方はしないか。なんていえばいいのかよくわからないが、とにかくほつといても治ると思う。実際のところ、体の痛みの方が重症な気がするし。

「へえ…そう」

私の言葉を聞くなりツツコミを入れることもせず妖艶な笑みを浮かべてじりじりと私に近づいてくる。

「え、ちよ、真姫ちゃん」

そのまま右手を掴まれる。

「じゃあ、私が治してあげる」

にこりと笑ったと思ったら、そのまま私の右手をぺろりと舐めた。
「え、や、ちよ、ごめんなさい！普通に手当てしてくれたら嬉しいです
!!!」

「はいはい。しょうがないわね」

その後、真姫ちゃんは怪我の手当てをしてくれた。

「つて、これちよつとおおげさじゃない？」

わたしの右手は包帯が巻かれている。

そんな大したことないと思うんだけど…

「はあ…かなり強く打ったでしょ？この前の肩よりはマシだったけど」

そうなのかなあ？自分ではよくわからないや。

「真姫ちゃん！ありがとう！」

「わたしに治療してもらえるとかレアなんだからね」

素直にお礼を言うのと、真姫ちゃんはそっぽを向いてそんなことを
言ってきた。

トマトみたいに赤くなってるのばれてるよ。かわいいなあ…

「ほら、練習行くわよ」

「はーい。あ、ちよつと待って」

真姫ちゃんの制服の袖をグイツと引つ張る。

そのまま振り返った真姫ちゃんにキスをひとつ。もちろん口に。

「なっ!?!」

「お礼！つて言っても私なんかのキスだけど…真姫ちゃん大好き！」

「あ、当たり前でしょ!?!」

口ではそう言いつつも真っ赤になって自分の唇を触っている真姫
ちゃんは、やっぱり最高にかわいかった。

「あー！みはねちゃんと真姫ちゃん遅いよー！」

「ご、ごめんね？穂乃果」

そう言つて穂乃果の頭を撫でる。

「えへへ〜！つてその怪我どうしたの!？」

あ、いつもの癖で右手でなでてしまつていたようだ。

穂乃果が大きな声でそんなことを言うから、みんなの視線が私の方へ向く。

「あー、怪我しちやつて…。真姫ちゃんが手当てしてくれてたんだよね」

「そ、そういうことよー！」

おいコラ、顔が赤いですよ。真姫ちゃん。

そう思いながらふつと視線を向けた先には絵里ちゃんと希がいた。

希が口パクで大丈夫？と聞いてきたので、笑顔で返す。すると希も笑顔を返してくれた。

絵里ちゃんはと言うと、ものすごい悲しそうな顔でこつちへふらふらと歩いてきていた。

「みはね…その怪我…」

ああ…今すぐにでも泣き出しそうな顔してる。そんな顔して欲しくないのに…

「大丈夫だよ」

「でも…それ、昨日の…」

とうとう泣き出してしまった。

泣いてる顔もかわいいけど、やっぱり嫌だな。

ふわりと優しく抱きしめる。

「だから、大丈夫。絵里ちゃんのせいとかじゃないから」

そう言つてあやすように背中を撫でる。

それでも、でも…と泣き続ける絵里ちゃん。

周りのみんななわ困惑しているようで、絵里ちゃんに心配の言葉をかけている。

そんな中、真姫ちゃんだけは不満顔で…

その理由はわかつてる。

けど、今は絵里ちゃんをなんとかしなければならぬ。

「絵里ちゃん。ほら、笑顔、笑顔」

だめだ。涙止まってくれないなあ。

「泣いてると、キスしちゃうぞ〜?」

い、いや、絵里ちゃんがかわいすぎるとかで言ったわけじゃないぞ!?

って、誰に弁解してるんだろ…

その言葉に反応したのは、絵里ちゃんではなく周りのみんなで。

「なにも言わないと、本当にしちゃうよ?」

それでも泣き続ける絵里ちゃん。

だめだー。しょうがない。

絵里ちゃんの顎をぐいっと上に持ち上げる。

すると、顎を持ち上げている手をギュッと握られた。

視線を少し落とすと、目一杯に涙をためている絵里ちゃんの顔があつて。

なんか、もう、みんなの前とかどうでもよくなってきてしまう。

目からこぼれてしまった涙を人差し指ですくう。

それだけではやっぱり涙は止まってくれそうにもなくて。

「絵里ちゃん。泣かせてごめんね」

ゆっくりと顔を近づける。

優しく、ごめんねって気持ちを入れてキスをする。

それ以上のことはせず、すぐに離す。

そしてそのまま優しく抱きしめてあげる。

すると、絵里ちゃんの腕が私の背中に回ってきた。

「私のほうこそ、ごめんなさい。痛かったでしょう?」

「だから、大丈夫だよ。絵里ちゃんに泣かれてる方がずつとつらい」

「みはね…」

泣き止んではいるがまだ目が潤んでいる絵里ちゃん見つめ合う。

「って、いい加減にしなさいよー!」

あー、いい雰囲気だったのに…

「もう、にこどうしたの?」

「どうしたのじゃないわよ!なに絵里に手出してるのよ!」

「あ、やきもち?」

「なっ!?ち、ちがつ」

「なんだ、違うのか…ま、私なんか相手じゃ妬かないよね」

「どうやら違かったようだ。絵里ちゃんのこと独り占めされてたのが嫌だったわけじゃないらしい。」

「そんなことよりも練習しようよー!もうすぐ学院祭だし!」

穂乃果が、我慢できないというふうに声を上げる。

最近の穂乃果は少し張り切りすぎのような気がする…周りのことちゃんと見てるかな?

ことりちゃんもまだ言いだせてないようだし…

こればかりは二人を信じるしかないんだけど。

「邪魔しちやっつてごめんね。練習しようか」

「そうですね。練習を再開しましょう」

海未ちゃんが声をかけるとまたいつものように練習が始まる。

そういえば、私もみんなに言わなきゃいけないことがあるんだっ
た。

でも、みんなの邪魔をすることなんかできなくてまた別の日でもいいか、と意識を練習するみんなに戻した。

25. 秘密

どんどん学院祭へと日が進み、μ、sの練習にも力が入ってくる。そのため、曲の仕上がりも今まで以上にレベルの高いものになってきていた。

今日は練習を早めに切り上げてもらい、部室に集まってもらった。本当はこの場でことりちゃんに留学の話をしてもらえたらと思っていたんだけど、本人が今はみんなに学院祭に集中してほしいからって遠慮してしまった。学院祭が終わったら絶対に話すと約束したので大丈夫だとは思うけど。

だから、今日は私の話を聞いてもらうだけ。

「ごめんね。大事な時に時間とってもらっちゃって」

突然のことにもかかわらず、みんなは快く承諾してくれた。これから話すことは、まだ理事長とことりちゃんと絵里ちゃんしか知らない。

付き合うことになったわけだし、誰かが知っていて誰かが知らないというのはあまり良くないと思う。

「いえ、最近は練習がハードだったのでちようど良かったです」

「海未ちゃん、ありがとう。そう言ってもらえると助かるよ」

こんな私の勝手なことみんなは笑顔でいいと言ってくれる。

そんなみんなにだからこそ、隠し事はしたくない。

そこまで重要なことではないが、少しだけ言うことがためらわれる。私は今更なにを怖がっているんだ。

記憶がないのはどうしようもないことだし…

いや、これから先迷惑をかけてしまうかもしれない。やっぱり言う

べきだ。

私が話し始めるのを真面目に待っていてくれるみんなを見て、少しだけ安心して緊張がほぐれる。

「その、ね。私、ここに入学する一週間くらい前以前の記憶がないんだ。それだけ伝えておきたくて」

「記憶が…ない？」

穂乃果はきよんとしている。まあ、突然こんなこと言われても意味がわからないよね。

「それって、病院で診てもらったりしたの？そもそも、なんで？」

「真姫ちゃん。みいちゃんはね、本当になにもわからないんだよ。知っていたのはみはねって名前だけ」

「音ノ木坂学院の前で倒れていたところをことりちゃんのお母さんに助けてもらったんだ。突然こんなこと話してごめん。困るよね…」

「困らないわよ」

真姫ちゃんは力強くはつきりと言った。その真剣な眼差しに思わず息を飲む。

「そもそも、それって何か関係あるのかにや？みはねちゃんはみはねちゃんでしょ！」

「凜の言うとおりのよ。あなたの記憶がないからって、私の気持ちは変わらない」

凜とにこの言葉に少しだけ涙が出そうになる。変わらないと、私は私だと言ってくれる。その言葉が温かくてじわりと心にしみわたっていく。

「…ありがとう。あ、そうだ、ことりちゃん。あのことも言ってもいいかな？」

首をかしげることりちゃんの耳元で学校に住んでいること、と言えば少しだけ困った顔をされる。

これは理事長とことりちゃんと私だけの秘密。

でも、伝えておいたほうがいいと私は思うんだけど…

「…うーん。言ってもいいとは思うけど、お母さんにも伝えておかないとね。私から言っておくね？」

「ううん。私も一緒に言うよ。約束破っちゃうわけだし」

「…わかった」

ことりちゃんが頷くのを見てからみんなのほうを向く。

「私、実はここに住んでるの。このことは本当は誰にも言っちゃいけないんだけど。みんなにだけは、伝えておくね」

「みはねちゃん、だからいつも朝早いんだ…」

「花陽がアルパカのお世話をしているところ、いつも見てるよ」
「そ、そうだったんだ」

少しだけ恥ずかしそうに笑う花陽がかわいくて思わず笑みがこぼれる。

「今度、また手伝いに行くよ」

「うんっ」

驚きつつも普通に接してくれていることにひどく安心する。

私はなにを恐れていたんだろう。

「そうだったのね。みはね、いつも送ってもらっちゃってごめんなさい」

絵里ちゃんはなにを思ってたか謝ってくる。絵里ちゃんが謝ることなんてないと思うんだけど。

「私が好きでやってるんだから気にしなくていいんだよ。それに、謝られるより…」

「ふふっそうね。いつもありがとう」

か、かわいい。

上目遣いでもじもじとお礼を言う絵里ちゃんはいつもの凜々しさとはまた違ってとてもかわいらしい。

みんながいるときにこんな顔するのって珍しいような…

あ、もしかして昨日のこと…いや、そんなことないか。

昨日の私の告白を思い出し、それが原因かと考えるがそうだったとしてもそうじゃなかったとしてもどちらでもいいかなと思ひ直し、目の前のことに集中することにした。

「その、このことは誰にも言わないでほしいんだよね。私が勝手に話したことなのに、面倒かけてごめん」

座りながらで申し訳ないが、できる限り頭を深く下げる。

「それだけウチらのこと信用してくれてるってことやんな。嬉しいことやん」

顔をあげれば希の慈悲深い翡翠の瞳で穏やかに微笑まれる。

「それに、もっとみはねのこと教えてほしいんやけど」

予想外のことに私は少し驚くが、周りのみんなはうんうんと頷いて希に賛同している。

「え、私のことって言われても…」

「じゃあ、はいはい！穂乃果聞きたいことがあります！」

「は、はい。どうぞ」

穂乃果は元気よく手を上げる。そんなことしなくても、普通に聞いていいんだけどね。まあ、そこがなんとも穂乃果らしい。

「えつとね。好きな食べ物は何？」
がくっ

きつと、部室にいる全員が私と同じことをしただろう。

あんだだけ勢いよく手をあげるものだから、勝手に誰も聞かないようなすごいことを聞くものだと思ひ込んでしまっていた。

好きな食べ物…か。

「んーつと、手料理…かな。気持ちがかもってるものが好き」

これは、質問の答えになっていないかもしれない。

でも、こう、誰かが自分のために作ってくれてるものってすっごくおいしいよね。心もポカポカするし。

「みはねらしいわね。じゃあ、得意なことは？」

今度はこのが興味なさげに聞いてくる。いや、確かに流れるにそんな感じだけど、興味ないなら乗らなくてもいいよ。

スタートが穂乃果のせいだ、自己紹介の時の質問タイムみたいだ。

「得意なことかはわからないけど、記憶力がいいこと。だから、暗記？とか？」

「聞かれてもわからないわよ！まったくもう」

いや、私にもわからないんだからしようがないじゃん。そんなつまらないものを見るような目で見ないで！

「じゃあ、好きなタイプとか？」

いや、真姫ちゃんも適当に聞かないでよ。

とかなんだかんだ言いながら、答えを真面目に考えている私を誰か褒めて。

好きなタイプって結構難しい。うーん。

「す、好きになった人…です」

「ふーん。逃げるなんてずるいわね」

「嘘は言っていないからいいの！」

だって、他に思いつかなかったんだもん。好きになった人が好きなタイプって当然のことだもん。別に逃げてないし。

みんなも少しだけ不満そうな顔をしているが、ここはなんとか見逃してほしい。

「じゃあ、私も質問しちやおうかしら」

「ん？いいよ」

絵里ちゃんはいつものおきまりの考えるポーズで考え始める。その姿はなんだか生徒会長をやっている時のようだ。

「そうね…今一番好きなものは？」

真剣な面持ちでそんなことを聞いてくる。

その質問は周りも興味があるようで、じいっと全員に見つめられる。

この質問は考えるまでもない。答えはもうすでに決まっている。

「ものじゃないけどいい？」

「え、ええ。もちろんいいわよ」

「えつとね…みんなだよ。μ、sのみんなが今私の中で一番好きで、一番大切」

しんと静まり返った部室に私の声が無駄に大きく響く。

みんなは動きが完全に止まってしまっている。全くと言っていいほど無反応だ。

「え、なんかごめんなさい」

なんだか恥ずかしいやら悲しいやらで心が折れそうになってきた。少しも反応してくれないとか…本当に辛い。

「ねえ、なんでみんな無反応なの？ごめんね？謝るから普通に戻つてよ…」

もう本当に心からそう思う。何か悪いことしちゃったならいくらでも謝るから勘弁してほしい。

そろそろ泣きそうになってきた頃、質問をした張本人の絵里ちゃんがいきなり席を立った。そのまま無表情で私のところまで来ると、なんの前触れもなく抱きついてきた。

「なによそれ。そんなの反則よ」

私も好きよ、ともつと力を込められた。結構きつく抱きしめられているはずなのに、壊れ物を扱うかのように優しく不思議と嫌じゃない。むしろ、ずっとこのままでいてほしいくらいだ。

「あ、絵里ちゃんばっかりずるいよー！」

そう言つて今度は穂乃果が。

まあ、御察しの通り最終的にはみんなに抱きつかれた。

もう何が何だか分からなくなって、それでも嬉しくて楽しくて、なにかもなんでもいいやつて思っちゃったりして。

本当はみんなに自分のことを話して、この心の暗闇から救い出してほしかったのかもしれない。

今私の心をやさしく照らしてくれているμ、sという名の光を、手放したくないというのは私のわがままだろうか。

いや、もう本当に今はなにも考えたくない。

この幸せな時間がずっと続けばそれで十分だ。

26. 今日は雨の日

学園祭はついに明日に迫っていた。

これまでを振り返ってみると、穂乃果は少し頑張りすぎだと思う。それに、ラブライブのことしか見えていないような気がする。

ことりちゃんは海未ちゃんに相談することに成功してみたのだが、穂乃果はことりちゃんの様子がおかしいことに気づく気配はない。

このことで、後々何か問題が起きなければいいんだけど…

部活も終わり、自分の部屋の窓から空を見上げると、どんよりとした黒い雲が空をおおっていた。少しだけ気持ちも暗くなる。なんだか、こう、胸がざわつくというか…

今はまだ降っていないが、今夜は雨が降るらしいいろいろと心配だ。

明日の学院祭では屋上での野外ライブだから、多少の雨なら大丈夫かもしれないけれど、中止になってしまう場合も考えられる。

そんなことをぼんやり考えていると、ポケットに入っていた携帯が震えた。

(なんだろう?)

慣れた手つきでメッセージを見ると理事長からだった。

内容はいつもどおり夕飯に使う材料を買って届けてほしいというもの。

なにを買うのかを確認して、買い物する場所を決める。これならあそこがよさそうだな。

この様子だと絶対に雨が降るし、ちゃんと傘を持っていこう。

いつしか買ったあまり使われていないビニール傘を持ち、ことりちゃんがプレゼントしてくれたお財布とともにスマホをバッグの中に適当に入れて部屋を出た。

*

買い物ですませてお店をでると、予報の通り雨が降り出してしまっていた。

急いでことりちゃん家に荷物を届けて、帰って寝よう。

雨なんて嫌いだ、バーカ。

なんて心の中で言っただけで立ち止まって空に向かってあつかんべーをする。

って、一人でなにやってんだ私…

買ったものが濡れないようにしっかりと傘に入るように持ち、気を取り直して歩き出す。

「あ、あれは…?」

雨が降っているにも関わらず、真正面から傘もささずに一人の少女が走ってくる。

あれはどっからどう見ても穂乃果だ。

「穂乃果!!!」

「あ、みはねちゃん!」

「こんな雨の中なにやってるの!?!」

明日は大事なライブがあるのに…!

こんなので風邪でもひいたらどうするつもりなのだろう。かろうじてフードは被っているが、髪から水が滴り落ちるほど濡れている。

「あはは…明日のために少しでも身体動かさないとこうと思って」

雨が降っていることなんかまったく気にしていないのか、穂乃果はいつものように笑顔で答える。

「今日はもう帰って寝なさい」

「え、やだよ!まだ走り足りない!」

「わがまま言わないの!風邪でもひいたらどうするの!?!」

とりあえずこれ以上濡れてしまうことを防ぐために、私の傘に入れ

ようとす。

「大丈夫って言ってるじゃん!!!」

「あ…っ!？」

しかし、腕を思いきりはたかれてしまった。

地面に傘が落ちて、私にも雨が降り注ぐ。

——冷たい。

「みはねちゃんはうるさいんだよ！穂乃果が大丈夫って言ったら、大丈夫なの!!!」

みはねちゃんなんか、記憶ないせいでことりちゃんとかみんなに迷惑かけてるくせに！

みはねちゃんは別に一緒に踊ったりするわけじゃないし、μ'sのメンバーじゃないもん！穂乃果の気持ちなんかわかるわけない！もう穂乃果に口出ししないで!!!」

「あ、え…」

穂乃果は一息でそれを言い終えると、私を睨みつける。

その瞳の奥がまったく見えず、深い闇に包まれたような気持ちになる。

急なことで反論することはおろか、言葉が喉に詰まって息すらもうまくできない。

何か…言わなきゃ…

「とにかく、風邪…ひいちゃうから…」

地面に落ちた傘を拾って、それを無理やり穂乃果に握らせる。穂乃果は一瞬驚いた顔をしたが、それ以上反応はなかった。

「…ごめんなさい。さよなら」

それだけ告げると私は一目散に走り出した。

止まることもなく走り続けてことりちゃん家に着くと、息も整えずインターホンを押した。

「みいちゃん…？」

インターホンのカメラで私を見たのかすぐに出てきてくれた。心配そうに私を中に入れてくれることりちゃんに涙が出そうになる。

「はい、これ。遅くなっちゃってごめん」

「それは大丈夫だけど…傘、忘れちゃったの？」

「そう、なんだ。私ってばバカだね」

声が少し震えてしまったのはなんでだろう。

こんなにも悲しいのは、苦しいのはなんでだろう。

「みいちゃん。今日はうちに泊まって？」

するりと温かい手に私の冷たい手がとられ見つめられる。

いつもなら嬉しいはずなのに、今日はなぜだか少しも嬉しいと思えない。

ことりちゃんがさっきの穂乃果と重なって見える。

それにこわくなって、一歩後ずさると私とことりちゃんの手は簡単にほどけてしまった。

「ごめんね」

ことりちゃんから目をそらすと、玄関から飛び出した。

背後からことりちゃんが私の名前を呼んでいたけど、聞こえなかったふりをした。

まさか、穂乃果にあんな風に思われていたなんて。いや、もしかしたら穂乃果だけじゃないのかもしれない。

だめだ。どんどん思考がネガティブになっていく。

雨が降ってることなんか気にしないで走り続ける。

雨のおかげで涙が出ていることに気づかれなからむしろ感謝だ。さっきまではあんなに嫌だったのに、おかしいね。

走っても走ってもなかなか学院に着かない。

まるで、今の私とみんななどの心の距離の遠さを言われているような気分だ。

明日…どうなるのかな…

27. 私のせい

学院祭当日。

私は朝から憂鬱な気分だ。いや、朝からというか昨日からかな？
昨日の雨のせいで制服はいまだに乾く気配を見せないし。今日1日は学院祭にもかかわらず、ジャージで過ごすことになりそうだ。
今日は多少の雨は降っているが、このくらいなら何とかライブはできるだろう。

「頭痛い……」

ズキズキと痛む頭を抱えて顔を歪める。昨日は帰ってから一睡もしていない。それが原因だろうか……？

あんなことがあつて、のんきに寝られるわけがない。

だって、私は……私はもしかしたら……

それ以上考えてはいけないと警報がなっているかのように頭ががんと痛む。

穂乃果は大丈夫かな。あんなに濡れていたし、風邪ひいたりしていないといいんだけど。

学院祭が始まってから、私はずっと自分の部屋にこもってそんなことをずっと考えている。考えて何かが変わるわけでもないのにな。

「みんなのところ、行かなきゃだよね……」

頭ではわかっているが、正直今はみんなに会いたくない。

昨日、穂乃果に言われたことが頭から離れないからだ。なにも考えないようになしてもなかなか頭から離れてくれない。

みんなもそう思っていたら……と考えると怖くなる。

でも、私にも仕事があるから行くしかない。

「あら、みはね」

「っ!?…え…あ、こんなところでなにやってるの?」

突然かけられた声に振り向くと、目の前には絵里ちゃんがいた。

「ー本当は私なんかに名前呼ばれたくないのかも。」

いつもどおりに名前を呼ぼうとしたが、そんなことを思ってしまった
て名前を口にすることができなかった。私ってどれだけ臆病なんだ
…

「なにって…それはみはねもでしょ。早くみんなのところに行きま
しょう?」

「う、うん…」

手を差し出されたが、気がつかなかったふりをして歩きだした。

*

みんなはもう衣装に着替え終わっているようだった。あとは絵里
ちゃんが着替え終わればあとは時間になるのを待つのみだ。

「私も着替えてきちゃうわね」

絵里ちゃんは衣装を手にとると着替えに行ってしまった。

なんだか遅れてきたこともあって気まずい。いや、それだけじゃな
いのはわかっているが。

とにかく、みんなの顔を見ることができない。

どうしよう、どうしよう…

「なにやってるのよ。この超キュートなにこにーを見て感想とかない
わけ?」

部屋の入り口で立ち尽くすことしかできない私を見かねてかにこ
が話しかけてきてくれた。

今はその優しさが少しだけこわい。

「と、とっってもかわいい…です」

うまく会話ができない。

もう何を言ったらいいのかも分からなくなってくる。敬語になっ

ちやったし。

「みはね？大丈夫ですか？」

どう考えてもいつもと違う様子の私に海未ちゃんが優しく声をかけてくれる。

海未ちゃんはそつと私の方に手を置こうとしたが、それがわかった瞬間に思わず手を払いのけてしまった。

「…っ。だ、大丈夫です。先に、屋上で待って…ます！」

いたたまれなくなつて、後ろを向いたままそれだけ言つて部屋を出ていった。

触られるのが…怖かった。

みんなが悪いわけじゃない。そんなことは絶対じゃない。

私が悪いんだ。みんなは普通に接してくれているのに…優しくしてくれているのに…

その優しさが信じられなくなっている自分がどう考えても悪い。

*

雨はまだぱらついているけど、お客さんは来てきている。亜里沙や穂乃果の妹の雪穂ちゃんもいた。

ステージをぼんやりと眺めていると、時間になったようだ。

雨が降っていることを感じさせないような笑顔。そんなμ'sのみんなを見つめる。

(あれ？穂乃果…少しふらついてる…)

一瞬穂乃果がふらついた気がしたが、普通に曲が始まったので頭の中からその考えがすぐに消える。

最初の曲の「No brand girls」が終わった。

μ'sメンバーは拍手と歓声に包まれる。

結構ダンスが激しめだし内心ハラハラしていたが、何事も起きず終わったので安心した。

しかし、ホツとしているのもつかの間、突然穂乃果が力尽きたよう

に倒れた。

周囲がどよめき始める。

メンバーからも不安が感じとられる。

みんなのそんな顔を見た途端、さつきまで動く気配すらなかった足が勝手に動いた。

走ってステージまで行きステージ上に飛び乗る。

「み、みはねー！」

絵里ちゃんが切羽詰まった顔で私を呼ぶ。

とりあえず穂乃果を保健室に連れて行こう。

「私が保健室まで運ぶので、お客さんを…お願い、します」

そう絵里ちゃんに告げて、穂乃果を抱き上げる。

体、熱い：やっぱ風邪をひいてしまったのか。ごめんね。

私は罪悪感でいっぱいだった。

穂乃果は親に迎えに来てもらって車で病院に連れて行かれた。

*

私と絵里ちゃんは校内放送で理事長に呼び出された。

今回のことはすぐに理事長の耳にも届いたらしい。

絵里ちゃんと理事長が話しているのをぼんやりと聞く。実際あまり頭に入っていないのだが、ラブライブへの出場を辞退という言葉だけははっきりと聞こえた。

全部私のせい：みんなに合わせる顔がない：

私は、みんなといえるべきではない。

そんなことだけが頭の中でぐるぐる回っていた。

気がつくといつの間にか絵里ちゃんに手を引かれて部室まで来ていた。

ドアの向こうではみんなが不安そうな顔で待っていた。

絵里ちゃんがラブライブ出場を辞退するということをみんなに伝えた。

みんな悔しそうだったが、最後はランキングからsの名前を部長であるにこが削除した。その顔は悔しさとともに悲しさが滲み出ていた。

「みはね。さつきから何だまりこくってるのよ」

「に、あ、えと…」

にこちゃんがこつちを見ながら怪訝そうな顔をする。

「言いたいこととかないわけ？」

「え、あ、ごめんなさい。…矢澤先輩」

「はあ!?何その呼び方」

名前で呼ぶことも、タメ口で話すこともできず。敬語で先輩呼びになっってしまった。

「さつきから様子が変よ?みはね」

絵里ちゃんがそう言って手を伸ばしてくる。

とつさに体を引いてしまう。

「え、あ、絢瀬先輩。大丈夫…です」

絵里ちゃんがとても悲しそうな顔をする。そんな顔してごめんなさいなんて言わないで。悪いのは絵里ちゃんじゃない。なんでいつもみたいに絵里ちゃんって呼べないの?なんで、いつもみたいに接することができないの?

私が悪いのに涙が出てきそうになっってしまう。今泣いたらみんなに余計嫌われる。

「ご、ごめつ…なさい。私、しばらく部活…こないようにしますね…っ」

私は部室から、みんなから逃げるように飛び出した。

*

〜真姫〜

なによあれ。いきなりにこちゃんや絵里を先輩呼びにして敬語まで使っちゃってよそよそしいし。

それに…何かに怯えているような表情。

「どうしよう…。みはねに嫌われちゃったのかしら…」

今にも泣き出しそうな絵里に同情する。

そりゃあ、本気で好きな人にあんな反応されたら誰でも傷つくわよね。

「なによあの態度。言いたいことあるならちやんと言えつての！」

にこちゃんは机に自分の拳を思い切り叩きつける。

口調は怒っているけど、表情は悲しそうで…

「でも、本当にどうしたのでしょうか？」

「みはねちゃん、泣いてたにや」

そう、みはねは泣いていた。

そんなのを見てみんな黙っているはずがないわよね。

もちろん…私も。

「あつ…」

ことりが何かを思い出したといった感じで口を開く。

「昨日も様子がおかしかったと思う…」

それに…と、ことりは続ける。

「そういえば、みいちゃんって今日みたいな雨の日に学院の前で倒れてたんだよね。お母さんが倒れているのに気づいてうちに連れてきたんだ…」

ことりはとても優しいけど悲しい顔をして続ける。

「初めて会った時、自分がここにいと迷惑になるって思ってたね。記憶がないのとかも結構気にしてて、なのに周りのことばっかだし…」

「みはねなら、自分のせいでこんなことになったとか思ってたそうやね

「?…それだけだとも思えんけどな」

希の言う通り、他にも何かある気がする。

「ぐすつ。とりあえず、明日話を聞きましょう」

絵里はまだ立ち直れてないみたいね。

「あの…明日みはねを部屋まで連れてくるの私に任せてくれる?」

普段ならこういうことは隅でみんなの様子を見ている私だけど、今回はなぜか勝手に前に出ていた。

「真姫…。はい、お願いしますね」

「ええ」

穂乃果の事もだけど、みはねのことも私たちにとっては大事な仲間…いや、仲間以上だし。

絶対になんとかして見せるんだから!

28. 真姫ちゃんとふたりきりで

く真姫く

学校内を探し回り、みはねの姿を探す。

雨降ってるし外には出てないと思うんだけど…

あくまで冷静を装っているが、内心はかなり焦っている。

「あ…」

屋上へのドアの前に座り込んでいる少女が一人。

こんなところにいたのね。

「みはね…」

私の声に反応してぱつと顔を上げる。

目からは涙が溢れていて、その体は震えている。

ねえ、あなたはなにに怯えているの？

「みはね」

目をそらしてしまった彼女の名前をもう一度呼ぶ。今度はさつきより強めに。

「ま、…っ。にしぎ、のさん」

「…っ！」

最初にいつも通り真姫ちゃんと呼ぼうとしたのかわからないけど、苦しそうな顔をして西木野さんと呼ぶ。

なにそれ。私のことは西木野さんって呼ぶの？

「ふざけんじゃないわよ…」

「っごめんなさい。ごめん、なさい」

「やめてー！」

「…っ」

「もう、謝らなくていいから」

こんなみはねを見て涙が出そうになる。

この子は何に怯えているのだろうか。

安心してほしい…そう思いゆっくりとみはねに近づいていく。

みはねは両手で顔を覆って、いやいやと頭を横にふる。

みはねの手を優しく掴んで顔を見ると、やっぱり泣いていて。

「みはね。大丈夫だから」

「や、私…ひつく」

大丈夫、そう言つて正面から両腕でみはねを優しく包み込む。

ん？みはねの体、熱い。

おでこに手を当てるとやっぱり熱い。

「今日、うちに泊まりなさい」

私は嫌がるみはねの手を無理に引いて自分の家に向かった。

*

家に着くと誰もいなかった。

そういえば、ママが今日は家に帰れないって言つてたわね。

そのほうが好都合か、と思いながらみはねの手を引いて自分の部屋に入る。

みはねは入ろうとしなかったが無理やり引いて部屋に入れる。

「座って」

ベッドに座るように促すがやっぱり座ってなんかくれなくて、怯えたような目で私を見ってくる。

仕方がないから無理やり座らせる。

おとなしく座っていることを確認しながらあるものを探す。

「あった。ほら、熱測って」

「な、んで…？」

「いいから。はやく」

みはねはおずおずと体温計を脇に挟む。

数分したら測り終わったみたいで、私に体温計を渡してくる。

「えーっと、38.2℃!?!ばっかじゃないの!」

は？この高熱のなかでずっといたわけ？

前の怪我のこともそうだけど、もう少し自分の体を大切にしなさいよ！

お説教は後でいいから、とにかく今は休ませないと。

制服を着替えさせてベッドに寝かせる。もちろん無理やり。

「いろいろ持ってくるわね」

返事なんか返ってこなかったけど、苦しそうに顔を歪めるみはねを見たら怒りなんか吹っ飛んでしまった。

急いでリビングに行って必要なものを探す。

冷えピタ、お水、風邪薬…はこれでいいわね。食べ物…は後でいいか。

あれこれと考えているうちにかなり時間が経ってしまった。

手にいろいろ持って部屋に戻るとみはねは寝ていた。よかった、ちゃんというわね。

とりあえず冷えピタをはらなきやね。

「う…ん。きらい、に…なっっちゃ、やあ」

みはねが涙をこぼしながら寝言を言う。

なんだか、これが心の声だと思おうと怒りがこみ上げてくる。

…誰がいつみはねのことを嫌いになったのよ。でも、不安にさせてる私たちも悪いわよね。なんで不安になったのかはわからないけれど…

汗でくっついてしまっているみはねの前髪を横に流すようにそつと撫でる。

「大丈夫。みはねのこと大好きよ」

おでこにキスを一つ。

なんだかいけないことをしてる気がしてきたわ…

うん。冷えピタはりましょう。

「ん、あれ、ねちゃって…」

起こしちやっみたい。

ま、ちようどいいし薬でも飲ませようかしらね。

「みはね、薬用意したわよ」

「…なんで」

「は？」

「なんで…わたしなんかそこまでしてくれる、んですか」
「やっぱり予定変更。さきにお説教ね。」

「なんでって、好きだからに決まってるじゃない」

「う、そ…」

「嘘じゃないわよ。私の気持ちを勝手に決めないで！」

「ま、あ…」

「ちゃんと名前呼びなさいよ。前みたいに普通に話してよ。傷つく
んだけど？」

「ごめ、ん…なさい」

横になっているみはねの手を引いて体を起こさせる。

びっくりしているみはねをよそに、そのまま抱きしめた。

「理由はわからないけど。不安にさせてごめんなさい。私がみはねの
こと嫌いになることなんか絶対ないんだから」

ぎゅゅと強く抱きしめる。

「苦しくても我慢してよね。今、どうしようもなくこうしたい気分な
のよ。」

「くる…しいよ」

「やだ。まだ離さない」

「ん、もつとぎゅってして。真姫ちゃん」

「な、なによそれ。かわいすぎるんですけど。熱のせいかな、はたまた
泣きそうないか目が潤んでいるみはねの破壊力は抜群だった。」

「みはねと出会わなかったらこんな感情知ることなかったのかも。」

「あのね…」

「なに？…どうしたの？」

「わたし、こわいの。みんなのじやまに、めいわくになってるんじゃない
かって」

「はあ…やっぱりそんなことだろうと思った。そんなわけないじゃない
ん」

「ごとの予想は的中していたようだ。まあ、なんでこんなに不安に

なつたかの理由はわからないけどね。

「でも…」

「でもじゃないの。私にはみはねが必要だし、迷惑なわけないでしょ」
みはねの目からほろほろと涙が溢れてくる。

その涙を人差し指ですくって、おでこに、ほっぺたに…唇にゆつくりと口付けていく。

「くすぐりたいよ。真姫ちゃん」

「ごら。逃げないの」

そのまま二人してベッドに倒れ込む。

お互い引き寄せられていく。そして、どちらからともなくもう一度唇を重ねた。

「大好きよ。みはね」

「真姫ちゃん。だいすき」

そのまま強くみはねのことを抱きしめた。

「ねえ、真姫ちゃん。その…おなかすいちゃった」

しばらく経ってから、みはねは恥ずかしそうにそう言った。

「ん、じゃあ、何か食べるもの持ってくるわね」

ベッドから降りようとすると、体が後ろに引っ張られる。振り返れば下を向いて私の袖を掴んでいるみはねがいた。

「ちよつと、取りに行けないじゃない」

おとなしく待ってて、と言ってまた歩き出す。が、さらに強く腕を引っ張られる。

「もう…どうしたのよ?」

「いっちゃやだ。やっぱりいっしょにいて」

今度は上目遣いで、しかもさつきよりも目を潤ませて見つめられる。

熱のせいかもしれない。ふわふわしているし。

か、かわいすぎるでしょ。ばかじゃないの!?

「何か食べないと、薬も飲めないじゃない」

「真姫ちゃんがいっちゃんうならのまなくていい」

「だめよ。すぐ取ってくるから」

「ほんとに？ちゃんともどってくる？」

戻ってくるって…それじゃまるで私が逃げるみたいない方じゃない。

こんな弱ってる子置いてどこに行くってのいうのよ。まったく。

まあ、弱っていなくてもみはねから離れるなんてことできないんだけど…

そんなばかなこと考えているみはねの頭を撫でる。

「ほんとにすぐ戻ってくるから。おとなしく寝てなさい」

おでこにキスをするとみはねはおとなしくなった。

「…ん。まってる」

その言葉を聞いてから部屋を出て、ダッシュで階段を駆け下りてリビングへ。

冷蔵庫を開けるとヨーグルトがあった。

「これでいいわよね」

ヨーグルトとスプーンを取る。

そのまま急いでみはねの待つ自分の部屋へ急ぐ。ドアを開ける前に息を少し整えて、何もなかったかのような顔で部屋に入る。

ベッドまで近づくと、みはねが前のめりになって抱きついてきた。

「ちよ、っと」

ヨーグルトが落ちるから、置くまで待つて欲しいんだけど…

「ほら、すぐ帰ってきたでしょ？」

「ん。でも、真姫ちゃんいなくてさみしかった」

ぎゅうつとさらにくっついてくる。

みはねって、実は寂しがりやで甘えん坊なのかしら？いや、確実にそうね。

ってことは今まで無理させちゃってたってことじゃない！

はあ…気づけてよかった。

「ほら、ヨーグルト持ってきたから食べて？」

こくりと頷く。その姿が小さい子みたいでかわいい。

ヨーグルトをスプーンですくうとみはねの口元まで持っていた。

「え、じぶんでたべれるよ」

「いいから。ほら、あーん」

今日はみはねをぐずぐずに甘やかすって決めたの。

他の人にならこんなこと絶対にやらないけど、みはねには…ね。

おとなしく口を開けるみはねにヨーグルトを食べさせてあげる。

「真姫ちゃんがたべさせてくれたから、おいしい」

ふにやりと笑ってそんなことを言ってくる。

ああ、もう、ほんとずるい。

みはねのかわいさに悶えながらも、最後までちゃんと食べさせることができた。

「じゃあ、薬飲んでね」

あとは薬を飲ませて寝かせるだけ。なんだけど…みはねはなかなか薬を飲もうとしない。

さつきからみはねの視線は薬と私を行ったり来たり。

「みはね…？」

「ね、このおくすり。にがい？」

薬を私に押しつけるようにしてそんなことを聞いてくる。

そりゃあ、薬ってほとんど苦いものでしょ？

「当たり前じゃない…って、なんで？」

「いや、その…」

「まさか、苦いのがやだとか言わないわよね…？」

そう言った瞬間、目をそらすみはね。

なるほど、とことん子どもってことなのね。

「ちゃんと飲めたら。今日はずっと一緒にいてあげるけど？」

「ほんとう？」

「嘘なんか言わないわよ。ずーっと…ね」

みはねは私が言い終わらないうちに薬を口に放り込むと水をゴクゴクと飲んだ。

その様子を見て少しだけ笑ってしまう。

「真姫ちゃん！のめたよ！」

キラキラとした瞳でそんなことを言うもんだから、一瞬思考が止まってしまった。

「みはねはえらいわね」

頭をなでてあげると嬉しそうに目を細めた。

かわいい。本当にかわいい。

ああ、これは、私が見はねから離れられないわ。

次の日、みはねの熱は下がっていて一緒に登校した。

一緒の時間に出ていつもの私の通学路を通って音ノ木坂へ。そんな単純なことなのにこんなに恥ずかしくて嬉しいのは、絶対にみはねのせい。

だって、いくら周りに誰もいないからって手を繋ぐなんてありえないじゃない？

しかも、恋人繋ぎで。

29. 絢瀬さんはぐい乱心

く絵里く

——絢瀬先輩。

昨日みはねにそう言われた。言われただけならまだしも、いやそれだけでもつらいがああ、あの怯えた表情が脳裏にこびりついて離れない。思い出しただけで涙が出そうになる。

私、みはねに嫌われるようなことしちやつたのかしら…
いや、でも…

こんなこと考えていても答えが見つかるわけではない。

今日、放課後に穂乃果を除いた⁴ Sのメンバーでみはねに話を聞こうと思っているし…

ああ…でも、もし真姫が連れてこられなかったら。

妹に心配をかけないために家ではなるべく普段通りに過ごして、いつも通りなんの変わりもなく登校してきて、自分の席に座ってみればこの調子。考えていなかったぶん、今になって不安が広がっていく。いろいろと考えているうちに朝のHRもいつの間にか終わってしまっていた。

ため息をつきながら最初の授業の準備をしていると、いつもと同様に希が私の席まできた。

「えーりち。なにむずかしい顔しとるん?」

「希…」

「みはねのこと考えてるんやろ?」

さすがはいつも一緒にいるだけのことはある。簡単に私の考えていることを当てられるのは希や亜里沙…あとはみはねくらいね。

希はにやにやとしながら、わかっているわかってるとかなんとか言っ

ている。そんな親友を少し不機嫌になって軽く睨みつける。そんな私を見てにふつと笑ってから真剣な顔になる希。

「今日、ちゃんと話聞こな？」

「ええ。もちろんよ」

「つてことで、お昼暇やしみはねの教室のぞいてこよ？」

その問いかけは私に聞いているというよりかは決定事項のようだった。

*

お昼休みになり、お弁当を持って希と二人教室を出た。

みはねはまたあんな顔してないかしら？

そんなことを考えながら歩いていく。

「あー！絵里ちゃんと希ちゃんにや！」

「凜ちゃんは今日も元気やなあ」

「凜ちゃん早いよお！」

「かちゃんが遅いだけにや」

教室が見えてきたところで花陽と凜にあった。いつも通りの二人に安心しつつも、ある疑問が浮かび上がる。

あれ？いつもは真姫とみはねとお昼一緒に食べていなかったっけ？

その疑問は聞くこともなく答えが見つかることとなった。

「ちよつと、二人とも見てみて！」

私と希は凜に腕を引っ張られながら、みはねたちの教室のドアまで連れていかれる。

「ほら、あそこみてください！」

若干興奮気味の花陽が指を指す場所にはみはねと真姫の姿。

なんというか、その…真姫がみはねのことをものすごく甘やかしていた…

ええ、そうよ。これでもかかってくらい。

…今までは真姫の位置が私だったはずなのに！そんなの認められないわあ！

私もみはねのこと甘やかしたい。絵里ちゃんってあのかわいい声と笑顔で呼ばれたい。

うああ!?真姫がみはねにあーんってしてる。私もあんまりしたことないのに…

みはねは真姫にすり寄って甘えてるし。甘えてるみはねかわいいわあ！

ってちがあああう!!!

なんだか頭がおかしくなりそうだわ。

「いや、もう十分なってるけどなあ」

もう、なんなのよ…

このまま私から離れていっちゃったりして…

もし、もしもだけど別れたいっていつてきたら…

「うん。ウチの声聞こえとらんなあ。全部声に出してるの教えてあげようと思ったんやけど」

もう本当に私ってばみはねのことになるとダメね。ダメダメね。

後輩の真姫に嫉妬してしまうなんて先輩の威厳なんてあったもんじゃない。あ、先輩後輩禁止なんだったわ。

「ねえ、凜ちゃんと花陽ちゃん。お昼食へ行こ？」

一度考え出すと止まらなくなってしまう。

こんなにも私は想っているのに…なんて、本人に言わないと意味ないのだけれど。

「ウチこんなのが親友だとか恥ずかしいわあ…」

最後にそう言い残して、心底呆れた顔様子で後輩二人の手を引く希とくすくすと笑う花陽、声を上げて笑っている凜なんか知らない。

…聞こえてないんだから！
やっぱり嘘。さすがにそんな顔で置いていかれてしまうなんて
e a r t b r e a kしそうだわ。いや、もうすでに崩壊し始めてい
る。

「もう、置いていかないでよおお！希ってばあああああ！」

今日は真姫ちゃんとずっと一緒だ。

朝一緒に登校して、休み時間もずーっと。

お昼休みは真姫ちゃんがお弁当を食べさせてくれたし…あれは
ちよつと恥ずかしかったけど。

もつと頼ってもいいんだよ。甘えてもいいんだよ。って言われて
るみたいで嬉しい。

私、いらぬ人間じゃないんだって思えるから。真姫ちゃん、本当
にありがとう。

「そんな気持ちを込めてちよつと抱きついてみたりもした。

ぐりぐり頭を押し付けるようにすると、どうしたの？って優しそ
うな顔で笑うからほんとずるいと思う。

「みはね。ちよつとついてきてくれない？」

放課後すぐに真姫ちゃんに手を掴まれた。

これは、お願いじゃなくて強制ってことだね。

連れてきてこられたのはアイドル研究部の部室。私が今最もきた
くない場所。

「ま、真姫ちゃん…ん。その…」

私なんか来ていいところではない。

なんで真姫ちゃんはこんなところに私を連れてきたのだろう？

私：私は、みんなにひどいことしたのに。今までだって、自分の意見を押し付けて練習とかも仕切ったり：

私はμ、sのメンバーなんかじゃなかったのに：

涙が出そうかどうかどうしようもなくなる。

でも、今ここで泣いたら、真姫ちゃんに嫌われちゃう。

そんなの…嫌だよ：

そう思いぐつところえる。

「大丈夫だから」

私の右手が真姫ちゃんの両手に優しく包み込まれる。

これだけでも安心できちゃうんだから、真姫ちゃんはすごい。

「私がついてるわ」

いつも、私の欲しい時にその欲しい言葉をくれる。

真姫ちゃんがここに私を連れてきたってことは何か意味があるということだ。

私は真姫ちゃんを信じる。

だから…頑張らないと！

「真姫ちゃん、ずっと手…つないでくれますか…？」

その言葉に応えるかのように真姫ちゃんは強く手を握ってくれた。

大丈夫。真姫ちゃんもついてる。

大丈夫、大丈夫。

そう自分に言い聞かせるように深く息を吸う。

「じゃあ、行くわよ」

「うん」

真姫ちゃんが部室のドアを開けて中に入る。

そのあとに続いて私も：

真姫ちゃんの後ろから覗くように前を見る。

そこには、穂乃果を除いたμ、sのメンバーがそれぞれ自分の席に座っていた。

みんなの顔をしっかりと見ようと真姫ちゃんの横までいく。全員の姿がしっかりと目に入った瞬間、穂乃果に言われた言葉がフラッシュバックする。

視界がどんどん暗くなって、最終的には真っ黒で何も見えなくなる。

私は、必要ない人間なの？

そもそも私は…何者なんだろう？

私は、みんなのじやま。いらない、の…？

ぐるぐると回るそんな疑問。

考えたくもないのに、意識が勝手にそっちへ持っていかれる。

——ミンナノジヤマナワタシハイライナイニンゲン。

そんな言葉が私の知らない誰かの声で脳内に響き渡り、だんだん呼吸ができなくなってくる。まるで見えない誰かに首を絞められているようだ。

嫌な汗が背中を伝い、体はフラフラで立っていられなくなってきた。

「みはねー！」

真姫ちゃんが見つないでいる私の右手を引っ張って抱き寄せた。

私の鼻孔をくすぐる真姫ちゃんの匂い。

「そのまま深呼吸。大丈夫、私がいるわ。私にはあなたが必要なのよ」そう言っつとんとんと、優しく背中を叩かれれば視界が明るくなって、さつきまでこらえられていたはずの涙がぼろぼろと溢れ出してしまう。

落ち着く匂いを肺いっぱい溜め込んで真姫ちゃんにこれでもかかってくらい抱きつけば、もう安心しきってしまったって涙の止めかたなんて忘れてしまう。

真姫ちゃんはそれに気づいてか、私の頭を優しくなで始めた。

「真姫。その…説明してくれるかしら？」

絵里ちゃんの声が聞こえた。だけど今はまだこのままでもいい。

30. 泣き虫

（絵里）

今私の目の前には、真姫に抱きつくみはねとみはねを抱きしめる真姫の姿。

みはねは泣いているのか肩を震わせている。

真姫はそんなみはねの髪をやさしく、今まで見たことないようなやさしい顔でなでている。

それにみはねの取り乱しように気がなくなってしょうがない。さっきのみはねの見えるこっちまで泣きたくなくなってくるような表情にはどういう意味があるのだろうか。

抱きしめた後、真姫はみはねに何を言っていたの？

「真姫。その…説明してくれるかしら？」

その言葉にみはねはまったく反応しない。

胸がズキズキと痛むのはきつと気のせい。

そう思うことにした。

「ええ。もちろんよ」

みはねを抱きしめたまま、真姫は顔だけこちらに向けた。

真姫は昨日私たちと別れてからのことを順を追って話してくれた。

昨日、みはねが一人で泣いていたこと。

そのみはねには38度の熱があつて、真姫の家に泊めたこと。

——みはねは自分がみんなの邪魔で必要のない人間だと、嫌われてしまったと思っていること。

「…どうしようもないのよ」

真姫もかなり困ったように眉を下げている。

「誰が！いつ！あんたのこと邪魔だつて言ったのよ！」
「ここは相当頭に来ているのか、いつもより声が低い。

怒っている理由はおそらくそんなことを言っているみはねにではなく、そんなこと言わせてしまった自分たちに対しての怒りだろう。
なんでわかるのかって？

そんなの、私だつて同じ理由で頭にきているからに決まってるわ。
「そうだよ。ことり、みいちゃんのこと好きじゃなくなったことなんて一度もない…！」

「そうですよ。だからみはね、顔をあげてください」
「みはねちゃん…！」

「凜は邪魔だつて迷惑だつて思ったことないよ…？」
ちゃんと話がしたい。

この気持ちをみはねに伝えたい。
みんなが、そう思っているはず。

「その、みはねが大丈夫なら、ひとりひとりみはねとちゃんと話さない？」

あの告白の時のように、ちゃんとみはねとぶつかりたい。

みはね…お願いよ…

「みはね。つて言ってるけど、大丈夫？」

真姫は優しくみはねに問いかける。

「だ、いじよぶ。…っだいじよぶ」

やっと顔を上げてくれた。

つて…これはやばい。

周りを見ると案の定みんな顔を背けている。

なんでかって？よく考えてちょうだい？

みはねは、さつきまで泣いてたせいか目が潤んでいるのよ。

しかも、真姫の制服を両手でぎゅっつつかんでいて…

そう。なんか小動物みたい。

こう…守ってあげたくなる感じ？

こんな時にこんなこと思うのとっても不謹慎だつて思うけど、かわ

いすぎるわ。

*

μ sのひとりひとりとお話することになった。

本当はものすごく怖い。

でも、絵里ちゃんの真剣な声を聞いて私も応えなきゃって思った。
今は部室でひとり。

誰からだろう…？

ガチャ

「みはねちやくん！凜からだよく！」

凜はいつも通りの笑顔で部室に入ってくる。それに少しだけ驚く。

「そ、そっか」

「うん！…みはねちゃんは凜のこと嫌い？」

「そ、そんなわけない！」

そんなこと、絶対にあるわけない。

「よかったにや。凜ね、みはねちゃんのこと大好きだよ。だから…」

凜は私の手を握り、真正面から見つめてくる。

「だから、凜がみなみちゃんのこと嫌ってるのか思ってた欲しくないよ」

そのままほっぺにキスをされた。

顔が熱くなるのがわかる。

凜を見ると顔を赤くしている。

「凜。ありがとう。私も凜のこと大好き！」

お返しに凜のほっぺにキスをする。

凜はしやがみこんでしまった。

え、どうしたんだろう？

「ずるいにや〜」

いきなり立ち上がったかと思うと、抱きしめられた。

「よし！凜の番は終わり！次の人呼んでくるから待っててにゃ〜」
「う、うん！」

*

「み、みはねちゃん。次は花陽だよ」

次は花陽か。

なんとなくそんな気はしてたけどね。

「その、隣いいかな？」

「あ、うん。どうぞ」

「ありがとう」

花陽は椅子に座ると深呼吸をひとつ。

何かを決心したかのように話し始めた。

「私がおね、今こうして、sをスクールアイドルをやっているのは、みはねちゃんのおかげなんだ」

「え、私…何もしてないよ？」

「みはねちゃんは今もう忘れちゃったかな…？私に、一緒にスクールアイドルやりたいって言ってくれたんだよ」

うーん。あ、そんなこと言った記憶ある。

あの時は、何をどう考えても花陽は、sに入るべきだって、この子と一緒にスクールアイドルをやりたいって思っていたから。

「覚えてるよ。だって、本当に花陽とやりたかったんだもん」

「あ、ありがとうっ！その…私もおね、みはねちゃんと一緒に頑張りたいんだ。一緒にいたい。その…大好きだから」

「こ、こちらこそありがとう。そんな風に思ってくれて。うん。私も花陽と一緒に頑張りたい」

そう言っただけで花陽に抱きつく。

そんな私を花陽は優しく受け止めてくれる。

「みはねちゃん。これからよろしくお願いします」

*

「次はにこ…せ」

「先輩とかつけたら殴るわよ。あと、敬語使っても殴るから」

な、殴るの？アイドルがそんなこと言っているの？

それにとってもじゃないが今のにこはアイドルにはふさわしくない表情をしている。

「ご、ごめんなさい」

「はあ…。あんた、にこのことばかにしてる？」

「し、してないけど…」

「あつそ。じゃあ、にこの気持ち勝手に決めつけてくれる？誰があんたのこと嫌いなんか言ったのよ。嫌いなら付き合ってなんか言わないし。邪魔だったら、必要なかったらアイドル研究部に入れてないっての」

にこは、一息で言い切ると私の肩に手を置いた。

そしてそのままの顔が近づいてきて…にここと私の唇が重なり合う。

「…やわらかい。」

「にこのはじめてあげたんだから、感謝しなさい」

ちゅつとリップ音を鳴らしてからぺろりと舐められる。

「な、なめっ！」

「うっさい。今ので伝わった？これで伝わってないとか言ったら怒るわよ。あんたのこと、好きだから」

次からはちゃんと自分で部活きなさいよ。と言ってそのまま出て行ってしまった。

「ずるいよ。かっこよすぎでしょ」

まだ心臓のドキドキがおさまらない。

にこはたまに年上らしくなるからいくつ心臓があっても足りないよ。

*

「みはね。その…顔真つ赤ですよ？」

海未ちゃんは私を見るなり今触れてほしくないことを普通に口にする。

もう、にこのせいで顔が熱い！

「き、気にしないで」

「ふふつかわいいですね。みはねは」

柔らかい表情で見つめられる。

おさまりかけていた心臓がまたも速く脈打ち始める。

「私は…みはねと付き合えて幸せです。みはねが私のことを海未ちゃんと呼んでくれるのも。学校内で会ったときに笑顔で手を振ってくれるのも。…そばにいてくれるだけで嬉しいですし、幸せです」

な、は、恥ずかしい。さすがに、sの曲の作詞をしているだけある。その素直な言葉に心打たれてしまう。

「わ、たしも…海未ちゃんと一緒にいると幸せな気持ちになるよ」

「ありがとうございます。その…もし、わからなくなったら、どうしようもなく不安になったら言葉で伝えてください。私はずっとみはねの味方していると約束します」

そう言つて私の右手を両手でぎゅつと握つてくる。

「大好きですよ」

「ありがとう海未ちゃん。頼りにしてる」

「はい！」

本当に嬉しそうに笑う海未ちゃんを見て、私もたまらなく嬉しくなる。

*

さつきの海未ちゃんとは一変、明るく希は部室に入ってくる。それも希なりの気遣いなのだろう。

「やつほーみはね♪」

「希…」

「ウチな、思うんよ。みはねがいなかったら今こうしてμ、sは存在してないかもって」

希はにこにこしながらそんなことをいう。

でも、突然真面目な顔になった。

「μ、sのみんなはみはねのこと大好きよ。ウチも…ね」

「希…うん。ありがとう」

「ウチが誰かのこと呼び捨てで呼ぶことってなかなかないんよ。もしかしたら、みはねが初めてかもなあ」

ふわっと私を抱き寄せると、耳元に口をよせる。

「だから自信持ってくれと嬉しい。ウチの1番はいつでもみはねやからな」

よしよしと頭をなでられる。

希の1番。こんな私が誰かの1番になれるなんて…

「そんなの、嬉しすぎるよ。希大好き」

「うん。ウチもみはね大好き」

そのままちよつとの間、希に甘えさせてもらった。

*

次に入ってきたのはことりちゃんだった。

「みいちゃん。大丈夫？」

ことりちゃん。最初の言葉が大丈夫って、優しすぎだよ…

「大丈夫だよ」

「そっか」

そのままゆるゆると頭を撫でられる。

「ことりはね、みんなみたいに言葉で伝えるのって、実はそんなに得意じゃなくて…」

知ってる。

言葉で伝えられないけど、すぐ表情に出ちやうことも。

だからこそ、ことりちゃんがちゃんとと言えるようになるにも言わずにおとなしく頭を差し出す。

「ふふっみいちゃんかわいい」

「なっ!?!」

なんで。なんで、そういう言葉はすぐに出てくるんだろう…

「みいちゃんは、ことりのこと好き?」

だから、何でそんなようなことは普通に聞けるんだろうね。

「むしろ、ことりちゃんは私のこと好き?」

「ふえ!?!、ことり?」

いきなりのごとでびっくりしたのか顔が真っ赤になっている。かわい。

「好き」

2人の言葉がかぶった。お互いびっくりして目を丸くして見つめ合う。

「ぶっあははー!」

「あ、ことりちゃん。笑ったなあ」

笑われたことにちよつと拗ねてみる。

なんか恥ずかしいし、ひどいよ。

「みいちゃん好き。ずっと、ずっとことりのこと見ていてほしいの」

小さくそう呟かれる。

でも、ちゃんと聞こえた。

ことりちゃんの本気の気持ち。

ずっと見ていてほしい、か。

「ん、ちゃんと見てるから。誰よりもそばで。だから、ことりちゃんも

私のこと見ててくれる?」

「うん!?!ずっとね!」

「私…がんばるからね」

なにをがんばるのだろう?自分でもよくわからなかった。

でも…いや、今はまだ考えるのはやめておこうかな。

*

凜、花陽、にこ、海未ちゃん、希、ことりちゃんと続き、真姫ちゃんをのぞくと残りのメンバーはひとりだけ。

「みはね…」

「絵里…ちゃん…」

もしかしたら、今回彼女を一番傷つけてしまったかもしれない…

あの時。私が絵里ちゃんを拒否してしまった時、すごく悲しい顔をさせてしまった。

「みはね。今回のこと、謝りたいの」

私のそばに駆け寄ってくるなり本当に申し訳なきような顔でそんなことを言ってくる。

謝る？謝らなきゃいけないのは私のほうだよ。

「ごめんなさい」

深く頭を下げるその様子を見て動悸が激しくなってくる。

違うのに。

なんで、なんで…？

絵里ちゃんはなにも悪くないよ。

悪いのは私。私が嫌われるようなことをした。私が全部悪いの。

「…や…」

「どうしたの？」

「いや……やだーあやまらないでー」

どうしてこんなに悲しいのだろう。

なんで、こう感情がうまくコントロールできないのだろう。

涙が溢れ出して止まらない。

「みはね落ち着いて。大丈夫よ。私はここにいるわ」

優しく抱き寄せられて、背中を心地よいリズムで叩かれる。

「やだあ。わたし…つこと…きらいになっちゃあやあ…」

「大丈夫。大丈夫だから。大好きよ、みはねのこと」

絵里ちゃんは小さい子のように泣きじやくっている私を強く抱きしめる。

それに甘えるようにぎゅうぎゅうと絵里ちゃんにしがみつく。

大好きな絵里ちゃんの匂いに、絵里ちゃんにつつまれる。

「えりちゃん、すき。きらいにならないで。いなくならないで。どこにもいっちゃやだ。ずっとそばにいて。ひっ…く、ごめんなさい…このまえはやなたいどとつてごめんっなさい…」

伝えたい言葉がかするりと口から溢れでる。一度始まるともう止まらない。

ふふつと軽く笑って絵里ちゃんは耳元で答える。

「この前は確かに傷ついたけど、みはねのこときらいになんかなるわけないでしょ？こんなに好きなのに」

一度止まった涙が、まだ残っていたかのようにぼろぼろと涙がこぼれる。こんなに想われているのになにを不安に感じていたのだろう。

なんてばかなこと考えていたのだろう。

「絵里ちゃん大好き。もう少しこのままでいたい」

「もちろんよ。私も叶うことならずっとこうしていたいもの。あ、そうだ…これからは絵里って呼び捨てで呼んでちょうだい？」

「ん…なんで？」

「だって、好きな人にはそう呼んでもらいたいじゃない。ね？いいでしょ？」

耳元でそんなに甘く言われたら断れるわけがない。いや、絵里ちゃんにお願いされてしまった時点で断るのは難しいんだけど…

「ね、はやく」

浅く呼吸を繰り返す。

そして覚悟を決めて口を開く。

「え…り…」

そう言った瞬間、絵里の頬がこれまでにないくらいに緩くなる。

「もういつかい」

「…絵里っ」

「みはね」

「絵里」

お互いの名前を呼び合う。

恥ずかしいけどなんだか嬉しい。

「みはね好き」

「ん、絵里…好き…」

それからどちらからともなく唇を重ねた。

そのあと、入ってきたメンバーたちになにがあつたのかと問いただされたのは言うまでもない。

「他の人の邪魔はしない約束だったじゃない…」

「絵里はいつまでもみはねにくつついていそうだから例外よ。このポ
ンコツロシアが！」

「う、うう…せっかく久しぶりのイチヤイチャだったのに」

「うっさいわね！いつまでもうじうじしてんじゃないわよ！」

言い合いをする二人を見てなんだか笑いがこみ上げてくる。

「ふふっあはは！ふ、ふたりとも…」

「なに（かしら）？」

ふたり同時に振り向いて見事に返事もハモる。

これは、もう…

「ほんとに仲良いね」

そう言うともみんなも笑い出す。

そっか、みんながいるから楽しいんだ。みんなと一緒になのがこんなにも嬉しいんだ。

この場に穂乃果がないのがとてもさみしい。

「みんな、大好き」

今私はうまく笑えているだろうか。なんだか少し歪んでしまっている気がしてならない。

そんな私を絵里とにこが抱きしめてくる。

「私もよ。大丈夫だから」

「ほんとにばかね。まったく」

絵里の抱きしめる腕が、にこのそう眩く声がとてもあたたかくて涙が出そうになる。

希も、海未ちゃんも、ことりちゃんも、凜も、花陽も、真姫ちゃんもみんなが私のほうに寄ってくる。みんなに抱きしめられた結果、やっぱり少しだけ泣いてしまった。

——ありがとう。

3 1. 自分の立場

今日の放課後はひとりぼっち。

特にやることもないので自分の教室の自分の席で運動部の活動を見ることにする。

べ、別にみんながいなくて寂しくなんか…ううん。寂しいに決まってる。

せつかくみんなと仲直り？ああ、喧嘩とかしてたわけじゃないし…なんだろ。前みたいに接することができるようになれたのに、か。

まあ、みんなは穂乃果の…いや、高坂先輩のお見舞いに行ってるから仕方がないのだが。

行かないでも言えないし、私なんかと一緒に行くのも…ね…だから今日はぼっちでお留守番なのです！

今回は高坂先輩のお家にお見舞いもかねてラブライブのことを報告しに行くらしい。

それによつて、*μ's*がどう変わっていくのか、これからの活動をどうしていくのかとても重要な日になりそうだ。

しかしながら、今の私にできることはこうして教室で大丈夫かな？どうなってるかな？って心配することくらい。

「はあ…ひまあ…」

ついに堪え切れなくなつて、ぐでーつと机に突っ伏する。

やることもない！かといつて寝れるわけでもない！

まあ、寝るなら自分の部屋に行かなければならないし。

うう…しかも今日は学校で寝ることになるんだよね。

今日のはあのお世辞でも柔らかいとは言えないソファで寝ることになるのか。いや、まあ、机で寝るとかよりはまりましたが。

なんだかもう悲しい人間になってきたな、私。

なんて意味のないことを考えながら、自分の腕を枕にしてから外に目を移す。

今日もいい天気だなあ。あ、あの鳥達仲良しだなあ…ぴったりと寄り添って飛んでいる。

ああいう関係に私たちもなりたいな。

「ひまなら私とお話しでもする？」

「うん…つてうわあ!？」

突然の言葉にその声が聞こえた方を向けば、今ここにいるはずのない人の姿。

え、え、絵里!?!今普通に返事しちゃったよ。びつくりした。

「なあに?そのお化けでも見たみたいな反応」

くすりと笑って頭をなでるその仕草は妙に大人っぽくてどきりと心臓が跳ねる。

いろんな意味でびつくりした…

でも、なんで…??

「なんでいるのって顔してる。ふふっなんだかみはねがないのさみしくて様子見に来ちゃった」

今は17時半くらい。

高坂先輩のお見舞いに行ってからわざわざ来てくれたんだ。

でも、わざわざ戻ってきてもらっちゃって申し訳ない気持ちにもなる。

でも、本当に嬉しい…!

「つて、さつきからなにも言ってくれないけど表情はころころ変わってるわよ?」

「あ、はは…ごめんなさい」

「謝ることではないけどね」

「うん。嬉しかったから…さ」

随分と素直なその言葉に目を丸くする絵里。

すると突然両手で覆って顔を隠したかと思ったら、ずるいじやない

と一言。

「ずるいのは絵里のほうだよ。ほんと、好きが止まなくなると」

もう好きだ。どうしようもないくらい好きになっちゃったみたい。

絵里ちゃんを見れば嬉しそうに、かつ困ったような顔をしていた。

「もつと好きになって欲しいって思ってる私はわがままね」

「っ…わがままなんかじゃないよ。私だって、おもってる、もん」

嬉しい、好きだ。心からそう思う。

目が合えばふたりで笑いあう。そんな幸せな時間。しかし、しばらくすると、絵里は何かを決心したかのように深く息を吸って真面目な顔になった。

「あのね…」

「うん？どうしたの？」

たぶん、高坂先輩のことだろう。

そう思いながらも絵里の言葉を黙って待つ。

「穂乃果…にね、伝えたの。ラブライブに出場しないこと…」

「うん」

「辛そうだったわ。みんな」

「そっか」

「ええ…」

絵里はそれだけ言うとう目を伏せてしまう。きっと、絵里自身もかなり辛かったのだろう。彼女は先輩という立場でなかなかがんばっていると思う。

「よく頑張ったね。絵里、お疲れ様」

涙を必死にこらえている絵里の頭をなでる。

しばらくすると、絵里は我慢できなくなったのか抱きついてきた。

私の肩に目元を押しつけて震えている。それでもなお、私の前で涙は見せまいと堪えているのがよくわかる。

なんだかそれが嫌で、こういう時にこんな立場を利用するような形になってしまふのは自分でも少しずるいと思うが、絵里は私の彼女だ。

彼女には、大切な人には我慢なんかしてほしくない。

泣いてほしいとは思わないが、泣くのなら私の前だけにしてほしい。

「私の前では我慢しなくていいんだよ」

「ふ、うわあ…んっ…ひっく…」

絵里がこんなになつてまで頑張っているのに、私なんかはなにもしてあげられなくて。

むしろ、こんな変な独占欲かわからないがわざわざ泣かせてしまつて…

ほんとに…そんな自分が嫌い。大嫌いだ。

あれから数日、高坂先輩は体調も足もよくなつてもう学校に来てみるみたいだった。

まだ、ラブライブのことを引きずっているみたいだけど、それは周りのみんながなんとかフォローしている。

少し心配ではあるけど、私のできることはただ見守ることだけ。

私なんかはどう言う資格はない。

ちゃんとわかつているつもりだけど…やっぱり寂しいな…

朝のいつもの時間。何気なくいつもはほとんど触らない携帯をいじっていたら、突然画面が光って振動し始めた。

「んっ…ことりちゃんからだ」

あまり使わないがだいぶ慣れてきたその操作を行い内容を確認する。

《今日の放課後、お話ししたいことがあるので〇〇公園に来てくれる

と嬉しいです」

お話し…か。

わかったと一言返事を入れて携帯をしまった。

*

公園につくとことりちゃんではなく海未ちゃんがいた。

そのことに最初は驚いたが、海未ちゃんに近づくとつれ冷静になつていく。

ああ、海未ちゃんもいるということは、やっぱりそういうことなのだろうか？

「みはねも呼ばれてたんですね」

「海未ちゃん」

海未ちゃんの少し悲しげな表情を見て予想が確信に変わる。

「なんとなく予想はしていましたけどね」

「そうだね。私たちが呼ばれたってことはそういうことだよね…」

気まずさのあまりふたりとも黙りこくってしまう。

あたりには誰もいなくて静かで重い空気が私たちを包む。

「ま、まあ、ほら！私たちが暗い顔してちゃダメだと思うんだ。海未

ちゃんもいつもみたいに素敵な笑顔で笑っててよ」

「なっ!?みはねはそうやって恥ずかしげもなく…っ」

今度は顔を赤くさせて黙ってしまふ海未ちゃん。

え、なんで？

「ふたりともっ…待たせちゃってごめんね…っしてみいちゃん！海未ちゃんに何したんですか〜！」

「ええ!?何もしてないよ〜！」

なんで私が怒られるんだろう…

やっぱり、予想していた通り留学の話だった。

ことりちゃんは行くことを決めただけ、高坂先輩のことを気にして

いるみたいだった。

海未ちゃんはことりちゃんに寄り添って話を聞いてあげている。

私はそんなふたりを見ていることしかできない。

幼なじみだし：私なんかには入ることできないよ…

頭ではわかっているつもりだが、やるせない気持ちでいっぱいになる。

話が終わった後、ふたりを家まで送ってから学校まで戻った。

ことりちゃんに泊まって行つてと言われたけど、断った。

今はどんなに寂しくてもひとりでいたかった。

それはきつと、最近自分にできることがなさすぎているせいだろう。

自分の無能さは自分が1番分かっているつもりだよ…っ！

机を思いきり叩くが、ただ手が痛くなっただけだった。

3.2. 謎は解けたけど嬉しくはない

「みはね、あのね。今日、学院存続をお祝いしようと思うのよ」

私の目の前には我らが音ノ木坂学院の生徒会長様と副会長様の姿。なんとも眩しいものですね。

目がチカチカするよ。なんて、言い過ぎか。

絵里と希が揃って私の教室に来るのはとてもめずらしい。

どちらか片方がっていうのはたまにあるけど、2人と会うのはたいてい生徒会室か部活の時だけだ。

そもそも、3年生が1年生の階にくること自体がそう頻繁にあるわけではない。

「そうなんだ。よかったね」

うん。冷静に答えられた私を褒めてほしい。

なんでかって？

よく考えてみてほしいな…

3年生がくること自体なかなかないのに、絵里と希が1年の教室に来たんだよ？

あの、生徒会だし、sメンバーとして学校でも有名人の2人が…

！

まあ、それだけじゃないのだが。

とにかく、この二人揃うと人気者オーラがすごい。

にこでもいたら、また違うんだけどなあ…

「だから、放課後みはねも集合してな？」

ああ、周りの視線が痛い。このたくさんの人たちの中には本気で好きいな人もいるんだろうな…

誰にも譲ってあげないけど。

「おい。みはね〜？」

てか、今日もかわいいなあ。

「みはね？どうして黙ってるのかしら？」

絵里が私の目の前で手を振る。

あげくの果てにこちらに顔を寄せて至近距離で見つめられる。

「っは!？」

「お、戻ってきたみたいやね」

やばい。にこにこしてこっち見ないでいただきたい。

ちよつとしたことでも顔が赤くなってしまう。

「話聞いてなかったやろ？怒るよ？」

むすつとした希は珍しく、普段あまり怒らない希が怒っているのを少し見て見たい気もする。しかし、こんな周りに人がたくさんいる中で怒られるのはさすがにバツが悪い。

ここは素直に謝っておくべきだろう。

「ご、ごめんなさい」

「ま、怒るのは冗談やけどな」

素直に謝った私がばかみたいだ。くやしい…

希は口角をくいつとあげて、イタズラが成功したみたいなお子どもっぽい笑顔を向けてくる。

さつきまでくやしさが勝っていたのに、そんなかわいい顔されたら得した気分になってしまう。

うう…反則だ…

「ま、とりあえず放課後迎えに来るから。ちゃんと参加してちょうだいね?」

「参加しなかったら…どうなるんやろなあ?」

あ、何その黒い笑み。さつきまでと違ってとても怖い。

目が笑ってない。

絵里もちよつと苦笑いしてるし。

「そんな怖い顔したら、かわいい顔が台無しですよ?」

希の柔らかくすべすべとしたほっぺたを笑顔を作るようにつまむ。

目をぱちくりとして、頭から湯気が出たんじゃないかってくらいに顔を赤くさせた希。首まで真っ赤になってる。

「そ、そそそんなことあるわけないやん！みはねのばか！」

「わぷっ」

私の顔を両手で押して顔を逸らそうとしてくる。いや、まって、痛いから。普通に顔も首も痛い。希が自分で顔そらせばいいでしょ！ねえ！

てか、そもそも私は何も間違っていない。ばかでもないし、希がかわいなのはまぎれもない事実だ。

そんな希と私のやり取りを微笑みながら見ていた絵里は時計に視線を動かす。

「ふふっじゃあそういうことで」

時間になったのか、そんなことを言いながら絵里が近づいてきたと思っただけにキスされた。

きやあつと悲鳴とも黄色い声ともとれる声が周りから聞こえる。

やばい。絵里のファンが…怒るよね。

「絵里…周りに人いっぱいいるのに」

私が少しだけ睨みつけると、絵里は肩をすくめながら悪びれもない顔をする。反省の色はまったく見えない。

「そうね。じゃあ…誰もいなかったら素直に喜んでくれるのかしら？」

「そ、そういうわけじゃ…」

私の否定の言葉を聞くなり絵里が悲しそうな顔をする。

今の言い方だと絵里にキスされて嬉しくなっていくことに…

「あ、ちがくて！周りに誰かいても嬉しいからってこと！」

「みはね…みはねえ!!」

ぎゅーつと抱きつかれる。

ああ…尻尾と耳が見える…

絵里だったら狐さんみたいなふわふわの尻尾が似合うかな？もちろんきれいな金色の。

それにしても周りの方々写真撮ってるんですけど。

なにこれ。明日新聞でも作られてて私が殺されるとかそんなパターンじゃないよね？

「むう…えりち！もう帰るよ！」

「ちよ、希痛いわよ」

私から離れようとしない絵里の制服の襟を引っ張るようにして引き剥がす。あ、ダジャレみたいになっちゃった…

さすがに首がしまつていそうでかわいそうだ。

「あはは…希優しくしてあげて。待ってるからね」

「ん、しゃあないから迎えに来てあげるわあ」

手をヒラヒラとさせながらお騒がせ三年生は去っていった。

さつきから思っていたけど、なんだかいつも優しい希と違って少しだけ態度が冷たい気がする。

希は実はツンデレなのかな？

いや、目指してるの？真姫ちゃんが、最近自分の気持ちをストレートに伝えてくるようになったと思ったら今度は希か。

素直にさせたいなあ…

っていけないいけない！周りのみんなどうにかしないと！

はあ…放課後早く来ないかな…

「存続が決まったということ、部長のここから…思えば、
s
が結成され…どれほどの…」

『かんぱーい!!!』

「ってちよっと！最後まで聞きなさいよ！」

さすがにこ。ギャグ線高いわあ。

それに花陽、めつちや笑顔でお米を差し出さないでほしいな。まあ食べるけどね。あ、やばいこれおいしい！

ご飯を急いで口にかきこんで飲み込む。

なんだかんだ言いながらも、楽しんでしまっている自分がおかしくて笑ってしまう。

ちらりと夫婦感を醸し出して椅子に座っている絵里と希を見てみると何か話しているようだった。

「なー話してんのっ?」

「ああ、みはねか。今、えりちにμ s やってよかったでしょ? って聞いてたんよ」

なるほど。μ s やってよかった…ねえ。

「どうなの? 絵里」

「ん、ええ。正直、私がいなくても結果は同じだったんじゃないかって…」

そんなこと思ってたのかポンコツめ。

「μ s は10人。それ以上でもそれ以下でもダメやってカードは言うてるよ」

当たり前のようにμ s は10人って言うってくれる希。その言葉を聞いて心がぽかぽかと温まる。

「そうだよ。絵里がいなかったら私はどうなってたんだろうなあ…絵里にどれだけ助けられたか」

「そんなー私のほうがみはねに助けてもらってばかりよ!」

私はほとんど何もしてないよ。ちゃんとみんな自身の力でここまで来たんだから。

って否定しても、絵里や希にうまく言いくるめられてしまうだけだと思うので、あえて何も否定しない。

そういえば、最近の希の様子について聞きたいことがあったんだ。

「あ、そうだ希。あのさ…」

希に話しかけた瞬間に向かいの窓側にあるベンチに座っていた海未ちゃんが立ち上がる。

「すみません。突然ですが、ことりが留学することになりました。2週間後に日本を発ちます」

タイミングが悪かった。

ほんとにタイミングが悪い。なんでよりによってこんな時に。

驚くみんなをよそに、今度は海未ちゃんの隣にいたことりちゃんが話し出す。

「前から服飾の勉強したいって思ってた…ごめんね、もっと早く話そうと思ってたんだけど…」

ことりちゃんが沈んだ顔でそう告げる。

「戻ってこないのね？」

椅子から立ち上がり絵里は問いかける。

その言葉にことりちゃんは俯く。

「高校卒業するまでは…」

『高校卒業するまでは』ということはスクールアイドルはもう一緒にできないということだ。

周りのみんながざわつく。

そんな中一人だけ、高坂先輩がゆらりと立ち上がった。

「どうして…言ってくれなかったの。海未ちゃんは知ってたんだ」

部屋に少しの沈黙が訪れる。

その沈黙を破ったのはやっぱり高坂先輩で。

「どうして言ってくれなかったの…私と海未ちゃんことりちゃんはずっと…」

いなくなっちゃうんだよ!?ずっと一緒だったのに…」

「何度も言おうとしたよ。でも…穂乃果ちゃんライブやるのに夢中で…ラブライブに夢中で…」

聞いているこつちが涙が出てくるようなやりとり。高坂先輩の言っていることは今のことりちゃんにとつては悲しくなるだけだ。

何か言いたくてもいうことはできない。

幼なじみ同士でしか分からない話だとも思うから。

「聞いてほしかったよ、穂乃果ちゃんには。一番に相談したかった

…っ」

この場にいるのが耐え切れなくなったのか、ことりちゃんは泣きながら飛び出してしまった。

「ずっと穂乃果を気にしてて…黙っているつもりはなかったんです。分かってあげてください」

海未ちゃんのそんな言葉を聞いても高坂先輩は目を見開いたまま固まってしまっている。

ことりちゃんのこと…追いかけてきや。

「高坂先輩の気持ちかわからないわけじゃないですけど…もつと他に掛けてあげる言葉、あったんじゃないですか？」

厳しいようだけど今は仕方ない。

今は私の中ではことりちゃんが最優先だ。

私は出て行ってしまったことりちゃんを探しに部屋を飛び出した。

*

く絵里く

ことりとみはねがいなくなった今、この教室には静寂が訪れていた。

「高坂…先輩…？」

穂乃果は目に涙をいっぱい溜めてぽつりと呟いた。

前々から気になっていたことがある。それは全員が気づいていたけど、誰も触れてこなかったこと。

「穂乃果…こんな状況で聞くのもあれだとは思うんだけど。みはねと何かあったの…？」

ついに聞いてしまった。

学院祭のあたりからみはねの様子はおかしくなった。その当時、穂乃果は倒れていた。

そして、その後も二人が仲良くしているところを見た人はいない。周りから見ると2人に何かあったのは確実に……
ちゃんと聞かないことには何もわからない。

「穂乃果ちゃん。ウチらには聞く義務がある思うんやけど？」
「うん。…あのね」

穂乃果はゆつくりと学院祭の前日にみはねと何が会ったのかを話してくれた。

「あんたねえ……！」

「にこちゃん。落ち着くにやあー！」

やっぱりいちばん仲間思いのにこが穂乃果につかみかかろうとする。しかし、隣にいた凜が止めてくれた。

今ここですべきことは穂乃果を咎めることではない。

「ほんとに、穂乃果はみはねがμsのメンバーじゃないって思ってるわけ？」

「ことりが、みんなが、みはねのこと迷惑だって言ったこと……ありませんよ。穂乃果はそう思ってたんですか……？」

「みはねちゃんは、一緒に踊ったり歌ったりしていたわけじゃないよ。でも、私たちのサポート……私たちじゃできないようなことまで、やってくれました……」

真姫の言葉も、海末の言葉も、花陽の言葉もどれも今の穂乃果には重くのしかかる言葉だった。

「どうしよう……穂乃果……みはねちゃんにひどいこと……」

「今、穂乃果、あんたがあいつにどれだけのことを言ったのかちゃんと理解できた？」

今度は掴みかかろうとはせず、ゆつくりと穂乃果に近づくと穂乃果

にハンカチを差し出した。その姿はやつぱり先輩そのもので、普段から一年生みたいだと言われているが、この時ばかりはお姉さんのなオーラが出ていた。

「こはやつぱり私たちの部長ね。」

こういう時だけかつこよくなつちやつて。そんなこと言ったら本人に怒られるだろうけど…

「みはねは穂乃果にそんなこと言われたなんて一言も言っていなかったわ。むしろ、全部自分のせいにしてた…。たぶん…穂乃果と距離を置いてるのは自分が穂乃果の…」

邪魔なんだと思っっているせい。その言葉は音にならずに消えた。穂乃果は私が言いたいことがわかったのか力なく膝から崩れ落ちた。

「ごめん、なさい…。それで、…つく、高坂先輩って…」

ついにぼろぼろ泣きだしてしまう。

「穂乃果。とりあえず今日は帰りましょう」

泣き止まない穂乃果を海未が立たせる。

「みんな、後片付けをしてお開きにしましょう」

不安そうな顔をしていたが、みんなちゃんと片付けはしてくれた。

みはねとことりはどうなったのだろうか。

みはねのことだからうまくやっているとは思っただけけれど。

みはね…あなたは周りに優しすぎるのよ。

そのくせ自分にはその優しさが全く向かない。

みんなそんなあなたのことが大好きだけれど、たまに思うの。なん
でって。

どうしてそこまで…

もつと自分にも優しくしてあげてよ。

私はあなたからもらってばかり。私は何もあげられてない。

もつと私を…ううん。私たちを頼ってよ…

恋人としてでも仲間としてでも…なんでもいいから…

33. Run away

〜ことり〜

どうしてこんなことになっちゃったんだろう。

私が穂乃果ちゃんに留学のことを黙っていたせいかもしれない。

自分のせいなのに、悲しくてどうすればいいのかわからなくなって逃げ出してきてしまった。

「ことりちゃん！待って!!!」

「…っ」

この声は大好きな大好きなあの人の声。

——ことりのこと追いかけてきてくれた。

ううん。心のどこかでは追いかけてきてくれるんじゃないか。追いかけてきてほしいって思ってた。

だから、ほんとに来てくれるなんて…そんなの嬉しいよ。

でも、天邪鬼な私は足をとめることなんてできなくて…

「待ってって言うてるのに」

ぐいっその後ろに引つ張られたかと思ったら優しく抱きしめられた。

「なんで…なんで追いかけてきてくれたの…?」

「なんでって、心配だったから。ことりちゃん泣いてたし」

やっぱり誰にでも優しいみいちゃんのことだから、心配したって言うと思ってたよ。

たぶん、ことりじゃなくても…

「それに…ことりちゃんは私の彼女だからね。好きな人が悲しいときは、一番に慰めてあげたいじゃん」

「な、あ、ええっ」

そんなこと言ってくれるなんて思ってもいなくて、動揺して言葉が出てこない。

それをどう捉えたのかわからないけど、みいちゃんはことりの耳元で、ダメ？って囁いた。

「ダメじゃないよ…嬉しい」

後ろから回されている手を優しく解く。

みいちゃんのほうを向くとなんだかとても複雑そうな顔をしていった。

「どうしたの？みいちゃん」

「だって、手…」

ああ…なんでこんなにかわいいんだろうね。

抱きしめてほしくないって思われちゃったとか考えているんだろうなあ。

みいちゃんと向かい合ったのはちゃんと意味があるんだよ。ふっ♪

飼い主に捨てられた子犬のような顔をしているみいちゃんに、そのまま前から抱きつく。

「もつとぎゅってしてくれなきゃいやっ」

その言葉にみいちゃんの顔は一気に赤く染まる。照れながらもちゃんとぎゅってしてくれている。

さつきまで、あんなに恥ずかしいセリフをすらすらと言っていた人とは思えない反応。

でも、そんなところもかわいくて、大好きでどうしようもなくなっちゃう。

みいちゃんと一緒にいるだけで悲しい気持ちがあんどなくなっていく。ほんとに不思議だね。

「よ、よし…家まで送っていくから帰ろうか」

もうこんな時間に時間経っていたんだ。

一緒に帰ってくれるのはものすごく嬉しい。けど…

「あの…手…繋いで帰っちゃダメ？」

「い、いいよ」

なんだか今日はひどく甘えたい気分。

いや、みいちゃんには常に甘えていたいし…甘やかすのも好きなんだけど、なんて言ったらいいのかな？

手から直接伝わるみいちゃんの熱が心地よい。今はそれだけで十分だった。

帰り道でも穂乃果ちゃんのことを聞いてくるわけでもなく他愛ない話をしてくれる。

そんな楽しい時間はすぐ過ぎちゃうもので家に着いてしまった。家に入らなきやいけないのはわかってはいるけど、みいちゃんの手をなかなか離せない。

そんなことをみいちゃんは何も言わずに待っていてくれる。

「あの…あのね…」

「うん。どうしたの？」

ふわりと優しく微笑んで、次の言葉を待ってくれる。

「もっと…もっとね…」

「うん」

「みいちゃんと…一緒にいたい…っ」

わがままだし、困らせちゃうかも。

でも、このままバイバイするのは嫌で…

もっと一緒にいたい。もっと触れてほしいって気持ちの方が勝ちやっつて、ついに言葉にしてしまった。

みいちゃんは少し驚いたような顔をしたけど、さつきと変わらない笑顔を向けてくれていた。

「よく言えました。じつは私も一緒にいたいと思ってたよ」

私の頭を優しく撫でながらそんな嬉しいことを言ってくれる。

それからの時間は本当に幸せで。

今まで自分から進んで触れてきてくれなかったみいちゃんが、不意打ちでキスしてきてくれたり、一緒にベッドで寝て抱きしめてくれたり…

たぶん、ことりのこと喜ばそうとしてくれてるんだなあっていうの

がすごく伝わってきて。嬉しくて。

「ねえみいちゃん。まだ起きてる？」

「ん…起きてるよ。どうかしたの？」

今日なら、言える気がする。

「あのね…私のこと、ことりって呼んでほしいの」

今までずっと気になってた。希ちゃんのことと絵里ちゃんのこと
も呼び捨てで呼んでいること。まあ、絵里ちゃんは最近だけど…

「ん…そうだな…」

「…んえ？」

何か考え始めるみいちゃん。

やっぱりことりって呼び捨てで呼びたくないのかな…

「じゃあ…」一緒にいられるようになったら、かな」

みいちゃんは何を言っているんだろう？

考えてもわからないので、素直に聞いてみる。

「どういうこと？」

「ことりちゃんとずっと一緒にいられるようになったら、そう呼ばせてもらおうかな」

ずっと一緒に、そっか。ことりが留学しちゃうからそんなこと言ってるんだね。

きつと、優しいあなたは今呼び方を変えたらことりの決心が鈍っちゃうってわかってるんだね。

「ほら、寂しくなっちゃうし」

確かにみいちゃんの思っている通りで、今ことりって呼ばれたら離れたくなくなっちゃうと思うんだ。

だから、帰ってくるまでお預けってことなんだね…

「わかった。ごめんね」

「ううん。こっちこそごめん」

おやすみを言ってどちらからともなく手を繋いでキスをして、私た

ちは二人一緒に夢の中へと落ちていった。

34. おちる

今日はことりちゃん以外のみんなで屋上に集まることになった。私はその様子をみんなの輪から少し外れたところで見ていた。

「ライブ？」

高坂先輩のその問いに、絵里が笑顔で答える。

「そう。みんなで話したの、ことりがいなくなる前に全員でライブをやろうって」

それに希もつづく。

「来たらことりちゃんにも言うつもりよ」

「思いつきり賑やかなのにして、門出を祝うにや！」

笑顔ではしゃぐ凧の後ろからにこがチョップをお見舞いする。

「はしゃぎすぎないの」

「にこちゃんにすんのー！」

屋上に笑顔が溢れる。

みんな、暗い空気を少しでも明るくしようとしてくれているんだ。

でも、高坂先輩の顔に笑顔はない。

そんな様子に海未ちゃんは心配そうな顔をする。

「まだ落ち込んでいるのですか？」

「明るくいきましよう！これが9人の最後のライブになるんだから」

絵里がなるべく明るくしようと声をかけるが、高坂先輩は何か考え込むような顔をしている。そんな様子にみんなの視線が集まる。

私もその様子を見守る。

私はなにも言わない。見守るだけ。と何度も心の中で唱え続ける。

そんな中、突然高坂先輩が口を開く。

「私がもう少し周りを見ていれば、こんなことにはならなかった」

「そんなに自分を責めなくてもー」

「自分がなにもしなければこんなことにはならなかった！」

花陽が声をかけるが、それを否定するように言葉を続ける。

「あんたねえ！」

「そうやって、全部自分のせいにするのは傲慢よ」

「でもー」

「それをここで言ってるなんになるの？なににも始まらないし、誰もいい思いもしない」

確かに絵里の言う通りだと思う。それはここにいるみんなも思っていることで。

そもそも高坂先輩のせいだけじゃないし、今この場で言っても空気が悪くなるだけ。

「ラブライブだって、まだ次があるわ」

「そつ！今度こそ出場するんだから落ち込んでる暇なんてないわよ」

真姫ちゃん、にこと場の空気を沈めないように明るめの声で話す。

「出場してどうするの？」

その空気を壊すかのような声。表情。

「もう学校は存続できたんだから、出たってしょうがないよ」

「穂乃果ちゃん…」

高坂先輩の言葉で花陽の目に涙がたまる。

私は、やっぱりなにも言わない。

大好きな人たちが悲しい顔をしているのはものすごく嫌だけど、こればかりは私が出る幕ではない…と思う。

「それに無理だよ。A—R—I—S—Eみたいになんて、いくら練習したってなれっこない」

その言葉を聞いたにこが拳を握りしめる。

「あんたそれ、本気で言ってる…？」

絞り出すように静かに声を出す。

「本気だったら許さないわよ」

高坂先輩はそれに答えない。

「許さないって言ってるでしょー！」

にこが高坂先輩に向かってくっついてかかろうとする。

「だめ！」

私は一瞬動きかけたが、真姫ちゃんか真正面からにこを押さえ込んでくれた。

しかし、真姫ちゃんよりもだいぶ小柄なにこが押している。

真姫ちゃんもおさえるのが辛そうだ。

「離しなさいよ！にこはね、本気だと思ったから、本気でアイドルやりたいんだって思ったから、sに入ったのよ！ここに賭けようって思ったのよ！それを、こんなことくらいで諦めるの!?!?こんなことくらいで、やる気をなくすの!?!?」

怒鳴るにこ。いつもは練習で賑わっているこの屋上は何処へやら。今日はあまりの空気の悪さに息が詰まりそうになる程だ。

とうとう花陽は泣き出してしまう。

「じゃあ穂乃果はどうすればいいと思うの?どうしたいの?」

そんな中、冷静に絵里が高坂先輩に聞く。

ちよつとの沈黙。

「答えて」

高坂先輩の目がだんだんと虚ろになっていく。

「やめます」

みんなの息を飲む声。

「私…スクールアイドル、やめます」

みんなはなにも言わずに驚いた表情で固まる。

そんなみんなの様子に、もう言うことはないともいうかのように屋上のドアに向かっていく。

みんなはその様子を目で追うことしかできない。

そんな中、海未ちゃんが動いた。

高坂先輩のことを追いかけて腕を掴む。

そのまま振り向いた高坂先輩の方をめぐらして右手が振りかざされる。

それは…だめだよ。海未ちゃん。

屋上に乾いた音が響く。

右頬が痛い…

「みはね…!？」

「みはねちゃん…!？」

よかった。高坂先輩はなにもないみたいだ。

なんとなく予感がしていた私はギリギリのところが高坂先輩と海未ちゃんの間に入ったのだ。

それよりも、かなりの力で叩いたんだろうな。音もすごかったし。ははっ何より痛い。

「高坂先輩、大丈夫…ですか？」

私の問いに答えてくれなかった。それだけ驚いたのだろう。

「あなたがそんな人だとは思いませんでした…」

「最低です…あなたは、あなたは最低ですっ!!!」

その言葉を聞いた高坂先輩は屋上を飛び出して行ってしまった。

今回は追いかけないほうがいい…かな…

「海未ちゃん手見せて」

「な、なんでですか？そんなことより…」

「いいから見せて。ほら、出して」

半ば強引に手をとる。

「ほら、やっぱり…。赤くなっちゃってるじゃん。痛かったですよ？大丈夫？」

「だ、大丈夫…ですよ。そんなことより！すみません…。みはねこそ痛かったですでしょう？」

ああ、泣きそうな顔してる…

「大丈夫、ほら、赤くなってるだけ。保健室行こっか？」

「は、い…」

絵里たちに目でごめんねと謝ってから、海未ちゃんの手を取って屋上を出る。

「なーんか、海未ちゃんと手繋いだの初めてかも」

「…」

「なんで黙っちゃうのさ。返事してくれないと悲しいな？」

「なんで、なんでそんなに優しいんですか？私、は…穂乃果のことを…それに」

なんでこの子はこんなに自分を責めているんだろう。

「私のことは、自分からあたりに行ったようなもんだから気にしないでね。高坂先輩のことは…高坂先輩自身が自分に嘘ついていたのが…みたいな感じなのかなって思ってたんだけど…」

「そう…です」

「海未ちゃんは優しいね」

繋いでいる手に少し力を込める。

海未ちゃんもそれに応えるかのようにぎゅってしてくれた。

「ほら、保健室に着きましたよ」

あいにく保健の先生は不在だった。

海未ちゃんを先に保健室に入れてから自分も入る。

ドアを閉めて、ついでに鍵も閉めた。

「さ、ふたりきりだよ。海未ちゃん」

「な、なにがですか？」

え、これだけ言ったら伝わると思っていたんだけど…

「ほら、おいで」

両手を広げてみる。

「なに、やってるんですか？」

ちよ、本当にわかってない？

待つて待つてこういう時は誰かに甘えたいものじゃないの？てか、甘えてほしいんだけど…

なんだか、恥ずかしいやら虚しいやらでとりあえず手をおろす。

「…手、冷やそうか」

私は頭も…か。あはは…

海未ちゃんに背を向けてカチャカチャと何か手を冷やせるものと探していると、背中に柔らかい温もり。

一瞬思考が止まる。

えーと、今私はどんな状況なんだ？

もしかして、もしかすると…

「みはね…」

背後からくぐもった海未ちゃんの声が聞こえる。

それと同時にお腹に腕が回されてぎゅつと力が込められる。

「う、み…ちゃん…？」

あまりの急激な展開に頭がついていけない。

やばい…顔が熱い。

と、どうしようかと考えていたらそのまま後ろに引つ張られる。

「つとと、なにになに？」

海未ちゃんはなにも言わないまま私の背中に顔を埋めている。

「…っ」

後ろに行きすぎてふたりしてベットに倒れこんでしまった。

私の下敷きになってしまった海未ちゃんが心配になって見てみると、私の制服の裾をつかんだまま今にも泣きそうな顔をしていた。

「う、海未ちゃん!?!どーしたの?」

なにも答えてくれないし。

本当にどうしたんだろう。でも、なにも答えてくれない。

自分でも恥ずかしいけど、わたわたすることしかできない。

すると、とうとう海未ちゃんのかわいい顔がゆがんでほろほろと泣き出してしまった。

海未ちゃんは顔を見られたくないのか片手で口元を覆ってしまう。

「…だめ。見せて」

言っただけはつとした。私はなにを言ってるんだろう。

ぶんぶんと頭を振って理性を保つ。

理性? そうか、あまりにも海未ちゃんがかわいいから、泣き顔までもきれいだから…

って、いくら自分の彼女だからってそんなことしていいはずない。

でも、キスクらいなら…いや、相手はまだまだそんなの知らない純粋な子だよ?

だめに決まってるじゃないか。

自問自答をぐるぐると繰り返しているといきなり抱きつかれた。

ああ、なんで私は自分の記憶はないのにこういう気持ちは覚えてるんだろう。

そのまま胸にぐりぐりと頭を押し付けられる。

——かつ：かわいいっ！

海末ちゃんは顔を上げその潤んだ瞳で見上げてきた。

「こうしてても…いいですか？」

か、かかかかかかかわ：

なんだこの破壊力。

頭の中でパキパキと何かが崩れていく。

我慢しろ、私：

なんとかこらえてそのまま押し倒すというような真似をしなかった私を褒めてほしい。

…やっぱ無理。ちよつとだけ。

まだ涙が溢れ出ている目元に顔を寄せて、ちゆつと涙を吸う。

「なっ!?み、みはね…？」

その瞬間、真っ赤に染まる顔。

なんだかいけないことをしている気分になり、ごめんねと言って顔を離す。

「や、嫌ですつやめないでください！」

私の首に手を回して海末ちゃんと私の顔がぐつと近くなる。

「え…つと」

「私、私は今までこんなこと思ったことなくて、どうしたらいいのかわからないんです。私も…みはねのこ、恋人です！もつと…みはね、あなたに触れて欲しい…！もつと恋人らしいことしたいんです。わがままですみません…」

触れてほしい。恋人らしいことがしたい。

「その言葉…ほんとう？」

その問いにこくりと首を縦に振られる。

…つやばい、もう我慢できない。

海未ちゃんの腰に手を回して体を密着させ、
そつと、優しく、目の前にあるきれいな唇に自分の唇を重ねる。
一回、二回とその柔らかな感触を、海未ちゃんの味を確かめるかの
ように繰り返す。

「んっ…みはね、好きです」

キスの間にそんなこと言われたら、止まらなくなっちゃうじゃん。
なんだかいつものことだけど、本当に余裕がない。
気持ちばかりがもつともつと焦ってしまう。

「ねえ海未ちゃん。あーんってして？」

「え、あ、あーん…？」

少し口を開いた海未ちゃんに自分も口を開いて重ねる。

ここまできたらもう止めることなんてできなくて自分の舌を押し
込んだ。

一瞬海未ちゃんの体が固まる。

そんなのおかまいなしに口の中にある海未ちゃんのを探しだす。
見つけた。

絡め取ろうとすると、海未ちゃんは顔ごと後ろに逃げようとする。
そんなことさせないと頭の後ろに手をやって固定してしまう。

「んっんっ…みはね…」

キスがどんどん深くなっていく。

それにつれて、さつきまで逃げようとしてた海未ちゃんが私の制服
をくしゃくしゃになるほど掴んで密着してくる。

あ、やばい。やりすぎたー

やつと理性が戻ってきた時にはもう手遅れだった。ゆっくりと顔
を離すと、目の前には顔を赤くした海未ちゃん。

「ご、ごめん。やりすぎちゃった」

「だ、だだ大丈夫ですっ」

その後、戻ってきた保健の先生によって鍵をかけていたことを思い出した。

保健の先生はものすごくお怒りのよう。

海末ちゃんは真っ赤のまま固まっていて何も言わないし…私が言い訳をして説得することになった。

なんとか笑顔で保健室を送り出さるといふ状況にし……ん？何があつたか知りたいって？めんどくさいなあ…

まったく面白くないよ？

「保健室に鍵かけてまで何してたの！」

海末ちゃんフリーズ中。

「あはは…」

「もう…ってあら？みはねちゃんそのほっぺたどうしたの？」

「いや、それが…海末ちゃんにひっぱたかれちゃって…ははっ」

なんで名前知ってるんだらう？

ま、今はそんなことどうでもいいか。

「それで、冷やそうと思ってきたんですけど先生がいなくて…」

ちよつとかっこよく笑顔を決めてみる。これは絵里の真似。なんてね。

「つご、ごめんなさいね。少し用事があつて…」

「いえ、先生…こんなの恥ずかしくて…鍵閉めちゃって。ごめんなさい…」

その…悪いことした後こんなお願い悪いとは思ってるんですけど…」

「り、理由はわかったわ！なあに？」

わかつてくれた？生徒会の力つてすごいんだなあ…

なんか先生の顔が赤いけど、いいか。

「先生に…冷やしてほしいなって…」

今度はごとりちゃんの真似をして先生を少し見上げるようにする。なんとかなって！おねがい！

「も、もう…：しょうがないわね」

先生が私のほっぺに触れる。

先生ちよろいな…：この学校の先生ってみんながみんな優しいよね。つてか、

「先生の手…：冷たくて気持ちいい」

あー、いい感じにひやっとしてて気持ちいいです。思わず先生の手を掴んでしまう。

「みはねちゃんは本当にかわいいわねえ」

その後はちゃんと氷で冷やしてもらいました。これだけ…：だよ？
ほら、面白くもなんともなかったでしょ？

で、復活した海未ちゃんが、今日はことりちゃんの家に寄りたいたい
言ったのでそこまで送ることになった。

「ありがとうございます」

「いいえ。このくらいならいつでも」

まあ、ことりちゃんとか絵里とかいろんな人のこと送ってるし。

「あと…：嬉しかったです」

「ん？なに…：んっ!？」

「ん。キス…：です」

何が？と言おうとしたらキスをされてしまった。

不意打ちはずるいよ。

しかもその後、手で唇を触って顔を赤くさせるから…：！

もう、なんてかわいいのでしょうか。

「そ、そんな赤い顔してたらことりちゃんに何か言われちゃうからね
!？ちゃんと冷ましてから入るんだよ!？…：じゃあ、私は帰るね。それと
…：私も嬉しかった」

「…：っ！はい！気をつけて」

その言葉を背に受けながら振り返らずに手を振る。

今絶対顔赤くなってるから見せられない…

「かわいすぎだよ。ばかあ!!！」

そのまま私は学校までダッシュした。

35. 天然たらしはなんとやら

く希く

昨日は大変なことがあった。

ことりちゃんやんが留学しちゃう前にみんなでライブしようって思ってたのに、まさか穂乃果ちゃんがスクールアイドルやめるって言い出すなんてなあ…

まあ、えりちは穂乃果ちゃんともう一回しつかり話をしたいって言ってたし、まかせちゃって問題ないやろか。

カードがそういつてるのかって？あははつまあ、そうやね。

そんなことよりも…いや、そんなことで済ませちゃいけないのかもしれないけど…

「はああ…もう、なんなんよ」

そう。ウチ、東條希は少しばかり機嫌が悪い。

その原因はウチの、いや…ウチらの恋人さんなんやけど…

最近、こんなことばかりが起きているせいでウチのこと全然見たくない。いろいろな問題にかかりつきりなのはわかるけど、たまにはかまってほしい。

なんて、面と向かって言えないあたり、自分のせいでもあるんやけどね。

普段教室では凜ちゃんや花陽ちゃんと一緒にいて仲よくしてる

みたいだし、お昼休みは真姫ちゃんと音楽室で二人きり。放課後は、生徒会がある時はウチもいるのにずーっとえりちといちやこらしてるし…

で、生徒会がない時はことりちゃんと一緒に帰ったり、にこつちの買い物に付き合ったり。

昨日は海未ちゃんと保健室に行った後一緒に帰ったみたいだし。恋人つなぎで歩いてるのウチは見たんやからね。

ウチだけ、最近みはねとなんもしてない。

恋人らしいことがしたいとかわがままは言わないから、ただ、一緒にいたい。二人きりの時間がほしい…

誰もいない放課後の教室に自分のため息の音だけが響く。

そろそろ帰ろうか、なんて考えていた矢先、突然ドアが開いた。

「あ、希！こんなところにいた」

なんで…

「靴がまだあったから昇降口でずっと待ってたのに全然来ないんだもん。学校内探し回っちゃったよ」

口調は怒っているのに顔はとても穏やかに笑っている。

なんで、ここにみはねがおるん…

それに今、ウチのこと探してたって…

「なんで何も言ってくれないのー？やっぱり…最近二人きりの時間取れなかったから…」

みはねは片手で口を覆いながら、気まずそうに視線を落とす。

二人きりの時間が取れなかったって気にしてくれていた…？

それになんでそんな悲しそうな顔するの？

「私のこと嫌いになっちゃった？」

「…っ!?そんなわけないやろ！」

あーもう、恥ずかしい。

普段だったらこんなこと言われても余裕を持って返事できてたのに、今はこんなに余裕のかけらもない。

「ん、そっか…よかった」

そんな幸せそうに笑わんでよ。

我慢できなくなっちゃおうじゃん。あほ。

「何しに…来たん？」

「何しにつて、希に会いに？」

「な、なんで」

わざわざ会いに来ることないやろ。

それに、ことりちゃんとかの問題はどうしたんよ。

「希に会いたかったから。それに、なんだか最近希素直じゃないし、私になにかしちゃったかなあ？つて気になつて」

みはねが一步、また一步と近づくと、鼓動が高鳴っていく。

素直じゃなかった？ウチが？

…そっか。最近のみはねと会おうと機嫌が少し悪くなつてた…かも？そんなにあからさまに態度に出ていただろうか。

いや、でもそれは我慢するためで…

普段なら、みはねのことじゃなければ気づかれないようにうまくできると。

「素直じゃなくは、ないんやない？」

「そう？気のせいならいいんだけど」

「もう用は済んだ？そんならウチは帰るね」

話が終わったから帰つてもいいんかな？

これ以上いると離れられなくなっちゃいそうだし。

「え？」

鞆に持つて帰るものを入れてみると、ヘンテコな返事が返つてきた。

なぜか目の前のみはねが困惑している。

なに、このまま帰る流れちやうの？

「どうしたん？」

「ご、ごめん…その、なんていうか…せつかく二人きりになれたのにすぐ帰るつて言い出すなんて思つてなかったから…」

あからさまにがっかりしているみはねに少しの期待。

それは、ウチともつと一緒にいたいつてこと？もし、もしそうなんだとしたら…

「ごめんね。帰る邪魔しちやっただかな…その、送っていくよ…？嫌だったら大丈夫だけど」

「嫌なんて思わへんよ。ただ…みはねはウチのこと恋人だって思っていないんじゃないかなって思ってたから」

そう言った瞬間、なんだかみはねの雰囲気が変わった。

変わったというか、怒ってるような悲しんでるような？

「その…一応、理由聞く」

むすつとして、なんだかちっちゃい子みたいな喋り方になっている。そんなところもなんだかわいく見えるのは、きつと相手がみはねだからだろう。

今なら、思っていること全部言える気がする。

「それは、ウチがいるのにえりちとは平気でいちゃついでるし」

「…う」

「ウチなんかそっちのけで他のみんなと放課後デートしてるし」

「ううっ！」

「しまいには、その…えりちがみはねが自分から告白してくれたって言ってたから…」

「そ、それは…」

「ううん。いいんよ、べつに」

「全然よくない」

後ろで組もうとしていた両手がみはねの温かい手に包み込まれる。突然のことに困惑して手を引こうとすれば、より力を込められてそれを阻止される。

「ごめん。やっぱり私がそんなこと思わせちゃってたんだね…」

そのままみはねは床に片膝をつき、どこかの物語の王子様がお姫様にするような姿勢になった。

「…言われてから気づくようなバカでごめんなさい。東條希さん、こんなバカでよかったら付き合ってくれませんか？」

下からじつと見つめられる。

なに、これ。かつこよすぎやろ。

「ウチのこと、好きでいてくれてるって思ってもいいん？」

「もちろん。言葉じゃ伝えきれないくらいに大好き」

「ウチ、みはねの彼女でもいいん？」

「そんなの、私がお願いたいくらいだよ」

「私のこと、大切にしてくれる？」

思わずいつもの関西弁が抜けてしまった。

「今まで希だから大丈夫だって、心のどこかで思ってたんだと思う。本当にごめん。でも、これでもかかってくらい希のこと大切にしたい。私だけのものになってほしい」

そういつて手の甲にキスされてしまえば、ウチの顔は面白いくらいに熱くなり、緩みきってしまう。

なんなんそれ。ウチのこと大好きだって自惚れてもいいんかな。

いや、みはねのことを信じたい。信じてる。

「ウチ、みはねのこと大好きや」

「ありがとう。私も希のこと大好き」

立ち上がってしっかりと抱きしめられる。こんなにもみはねと近いのはいつぶりだろう？

なんだか、幸せやなあ。

えりちもこんな気持ちだったのか。こりやあ、自慢したくなるのも当然やんなあ。

「みはね。今日、うちに来ない？」

「え、いいの？行きたい！」

「じゃあ、出発や！」

このままずっと一緒にいたいなんてわがままなこと考えて、先のことなんて考えずに自分の家に招待してしまった。

こんなん、すぐ考えればわかることやったのに。

*

「さ、上がって上がって」

「お、お邪魔します」

なんだか表情がかたい。もしかして…

「緊張してるん？」

普段はペースを狂わせられればなしだから、たまにはからかってやろう。

と、思っていたのはいいけれど…

「う、うん。好きな人の家だからね」

ちよつと頬を赤く染めてそんなことを言う姿に心臓がうるさくなってくる。

話そらさなきゃ。

「ひ、一人暮らしやから、そこまできれいじゃないかもやけど…」

「一人暮らし…なの？」

「あれ？言ってなかったっけ？」

「わかんないけど、たぶん今知ったかな」

一人暮らしってことは、いまさらだけど今日はみはねとずっと二人つきりってことやん!?

「と、とにかく座って」

「うん」

「なんや緊張してきたわ」

お茶を入れながら会話をしようと試みる。

「なに？意識してくれてんの？」

「なっ!?そんなわけないやろ!？」

「…だよー。冗談だよ」

へらへらとした笑顔をして誤魔化そうとしている。

ウチは知ってる。無理してる時、わざと笑うこと。

「ほんとは…めっちゃドキドキしてるー!」

なんでだろう。言うつもりなんかなかったのに、とつさにそう叫んだ。

「っありがとう。うれしい」

さっきの顔とは打って変わって、満面の笑みを浮かべるみはね。

そうか…ウチ、みはねのこういう顔が見たかったんだ。無理した笑

顔じゃなくてほんとに心から笑っている顔を…

「ウチな、みはねの笑顔好き」

「…」

あれ？なんか黙ってもうた。

なんか、顔を両手で隠してバタバタ暴れているし。

「みはね？大丈夫？」

心配になって近づいて手を伸ばしてみると、いきなり抱きつかれた。

「あーほんと疲れとか吹っ飛ぶ。希かわいすぎ。ほんと好き」

「い、いきなりなんなんよ！」

「いつも思ってるけどね」

もう、ほんとに振り回されてばかり。

恥ずかしくなって離れようと思ったけど、離してくれなかった。

むしろ、もっと強く抱きしめられてしまった。

「みはねって、いつもみんなのこと甘えさせてくれるけど…甘えることも多いよなあ？」

突然の問いにびっくりしたのか目を丸くさせている。

「うーん。自分ではやりたいようにやってるだけだからわかんないや」

や、やりたいようにやってるとか…

「天然たらしやん」

「ええ!?ひどい！」

「ひどくない！もう、みはねなんか知らん」

「え、ええ…」

あからさまにがっかりしている。

耳と尻尾が生えてたら…なんや、それ、かわいいわあ。

それにしても、天然さんであんなことしてるとかもう…

ウチだってちゃんと頭では理解してるつもりだけど、みんなにやきもち妬いてしまう。

「今日は、ウチに甘えてみない？」

甘やかしてもほしいけど、甘えてくるみはね…見たい！

「へ？」

「だーかーらー、甘える？」

「えと、どう甘えればいいのかわからないっていうか…」

「はあ…じゃあ、もうみはねの好きにしてや。ウチは普通に過ごすから。あ、そだ、そのうちお風呂はいつちやっつてな」

「あ、う、うん。わかった」

なんだから、ウチのこと全然恋人としてみてないやろこいつ。いらいらする。

こんなことしてるから素直じゃないって言われてしまうんだろうか。

ーウチだってみはねとイチヤイチヤしたいのに！

みはねはいつの間にかお風呂に入ったみたいだ。

「どうすればいいんよ」

とにかく、今日は泊まりに来た友達をおもてなしってことで考えよう。

うん。それがいい。

「ねえ、希〜！」

お風呂場の方からみはねが呼んでいる。

なにかあつたのかな？

「なあん？どうかした？」

とりあえずお風呂場のドアの前まできた。

当然いまみはねは何も着ていないだろう。

つて、何考えてるん！

「いや、ほら、着替えどうしようかと思って…」

あ、着替えとかそういうことまったく考えてなかった。

「適当に持つてくるから待つてな」

「んー。ありがと」

自分の部屋に逃げるように入る。

う、ウチいま何考えてたんよ。友達。友達が来てるだけや。よし、大丈夫。

うーん。適当に動きやすいゆるい服を持って行くことにした。

「みはね。もってきた…よ!？」

目の前には何も着ていないみはねの姿。

「な、ななななななで出てきてるん!？」

「え?ダメだった?...あ、お見苦しい姿をお見せしました」

自分が何も着てないことに気づくと、タオルだけとってお風呂場に戻って行った。

めっちゃきれいやったな…

肌とかすべすべしてそうだったし。

って、だからほんとに何考えてるん!ウチ!

恥ずかしくなって服だけ置いてリビングに戻った。

しばらくするとみはねが出てきた。

「その…きつきはごめん」

「べ、別に平気やで」

「なんか、絵里とかことりちゃんとかは普通にお風呂はいつてきたりとかしてたから。感覚おかしくなってるのかも」

苦笑しながらそんなこと言う。

それ、完全にウチが悪いやん。

友達同士だって思ってるんだから別に気にすることなかったのに。

ウチが意識しまくってるせい。

謝ろうと思って顔を上げると、髪がびっしよりと濡れているみはね。

「なんで髪の毛濡れてるん…?」

「あ、いや、急いでたのと、ドライヤーの場所わからなかったから」

「もう、こっち座って」

ドライヤーを用意して、みはねを無理矢理座らせる。みはねの髪をかわかしはじめる。

あ、髪の毛さらさらや。

感触を楽しむように乾かしているとみはねが嬉しそうに目を細めた。

「気持ちいい。もつと」

な、なにこの生き物！かわええ！乾かし終わったら今度は丁寧にかかしていく。

「はい、終わり。ご飯食べてはよ寝よ」

「んんう…もつと頭なでて」

終わったのに、ウチの手を無理矢理頭まで持って行って目を閉じるみはね。

そのかわいさに負けてゆるゆると頭を撫でる。

しばらくそうすると満足したみたい。

「ありがとう。えへへ」

「ほら、ご飯一緒に作ろや」

「あれ？希お風呂は？」

「ウチいつも寝る前に入るんよ」

「…そうだったんだ。じゃあ、早くご飯作らないとね」

おうどんさんを二人で作って食べた。

他愛もない話をしながらご飯を作ったり食べたりするのって楽しいんやね。

今まで一人でやってたから全然知らなかった。

湯船につかりながら今日のことを振り返る。

今ならのんびりとなにも考えなくて済む。

一緒にいると、やっぱり大好きなんだなって思う。どんどんみはねに溺れていく。

そんな感じでぼーっとしていると、いつの間にか1時間も経ってしまっていたみたいだ。

みはね、もう寝ちやつてるかなあ？

手早くドライヤーで髪の毛を乾かしてリビングを覗いてみる。

ありや、やつぱりいない。

今度は自分の部屋を覗いてみる。

「みはねく？寝ちやつた？」

返事がない。

ベッドの上を見てみるが誰もいない。

「どこにおるん？」

部屋に入ってベッドの方に近づいてみる。

あ、床に寝てるやん。なにやってるんよ。ベッドで寝ていいって言うたのに。

「みはね。そんなところで寝たら風邪ひくよ」

「んう…」

トントンと肩を叩いてみたが起きる気配がない。

今度は揺すってみる。

「ほら。起きろ〜！」

「の…ぞみい…？」

あ、起きた。

体を起こして、眠そうに目をこすっている。

「ベッドで寝ていいって言うたのに」

「んー？ベッドは、のぞみのぼしよ」

「ウチも一緒に寝ればいいやん？」

「んーん。のぞみやあでしょ？」

な、なに。やあって。かわいすぎるんやけど。

「嫌やないよ。一緒に寝よ？」

ちよつとの沈黙。

考えてるみたいな顔をしている。

なに考えてるんやろ。

「ウチはみはねと一緒に寝たいなー？」

そう言うとはあつと花が咲いたような笑顔になった。

「ん。のんちゃんどねる」

「の、のんちゃん!？」

いつしか聞いたかわいあいあだ名に大きい声を出してしまう。

そんな声を聞いてか不安そうな顔をされてしまえば、なんだか悪いことをしてしまった気分になる。

「いやだった？ごめんなさい」

しゅん、と小さくなるみはねに罪悪感はさらに大きくなる。

「い、嫌やないよー」

「んう。よかった」

とりあえず立たせてベッドに寝かせる。

ベッドに入るなり、いい匂いするとか言ってるバカを放置して自分も入る。

「おやすみなあ」

おやすみが返ってこない。不思議に思っ隣を見てみると、なんとも複雑そうな顔をしたみはねがいた。

「のぞみ。ぎゆうしていい?」

「はあ…お好きなように」

聞くなりぎゅつと抱きついてくる。

って、今ウチみはねに甘えられてる?

なんだか嬉しくなってみはねの頭をなでる。

「ねえ、寝る前におやすみのちゅーしてほしい」

は!?!なにいつてるん!?

驚いて何も言えない私を見てみはねはまたもやしゅんと肩を落とす。

「したくないならいいけど。希ともっと近づきたい触れたいなって」

「ウチも…よ…」

恥ずかしかつたけど、めっちゃ恥ずかしかつたけど、みはねに触れるだけの小さなキスをする。

「ん…っありがとう。おやすみ、希」

「ん、おやすみさん」

大好きよ。ウチの大切な彼女さん。

いつの間にかすやすやと寝てしまったみはねを起こさないでいどに強く抱きしめる。

今だけは、あなたのそばにいさせてください。

誰よりも近くに…

園田海未誕生日記念

5.....4.....3.....2.....1.....

三月十五日となった瞬間に、携帯の通知音が鳴る。

去年までは幼なじみの二人からだけだったのに、今年はそのほかに六件ある。

私の誕生日というだけで、特別なことは何もないのにこうやって起きてまで待っているのは、これをひそかに楽しみにしているから。

ぴったりに送らなくてもいいのに、なんて言いつつもこんなにも嬉しいのはどうしてでしょうか。

一つ一つしっかりと読んでから返事を送る。

しかし、たった一人からだけきていない。それが他のメンバーからもらった嬉しさと同じくらいに私を悲しくさせる。

「みはね…」

そう、私の恋人：桜みはねからだけ来なかったのです。

教えたわけではないが、みはねなら送ってきてくれると思っていたのでショックは倍以上だった。それからしばらく待ってみても何もこなかったので悲しみが怒りに変わってくる。

「はぁ…私は何を期待していたのでしょうか…」

みはねが悪いわけではないのに、勝手に傷ついて怒って。本当に私は何をしているのでしょうか。

もうこんな時間ですし、寝ることにしましょう。

誕生日ではあるが、もちろん学校に行かなければならないわけで。いつも通りに穂乃果とことりと朝待ち合わせて学校に行く。

「海未ちゃん、お誕生日おめでとう」

待ち合わせ場所にはすでにことりがいて、私を見つけるなりかけよってお祝いの言葉を言ってくれた。

「ありがとうございます。あら…穂乃果はまだきていないのですね」

「うん。そろそろ来るかなあ…?」

相変わらず穂乃果は朝が弱いようで、毎日のようにギリギリの時間に来る。家まで迎えに行くことも少くはない。今日も起こしに行かなければならないでしょうか…

「海未ちゃんおめでとー!!!それと、遅れてごめんね!」

そう考えていた矢先、背後から穂乃果の叫び声が聞こえたかと思ったら思い切り抱きつかれた。

その衝撃に耐えながらも、見なくともわかる幼なじみに呆れた顔を向ける。

「穂乃果…はあ、いろいろと言いたいことはありますが、今回はやめておきましょう。ありがとうございます」

「さ、学校に行こうか!」

「まったく、あなたが言うことですか…」

「待ってよ、穂乃果ちゃん!」

三人で他愛とない話をしながら歩いていたら、モヤモヤなんてなくなる…わけでもなくて。

心にしこりのようなものを抱えながらも二人に合わせて笑顔を作る。まあ、学校で会ったらおめでどうのつくらいは言ってもらえるでしょう。そう言い聞かせた。

*

今日はすこぶる運がないみたいだ。ましてや今日こんな思いしなくてもいいじゃないですか…はあ。

朝の浅はかな考えをしていた自分を呪ってしまいました気分です。

おめでどうの一つくらいもらえる？なんですかそれ。おめでどうどころかまだ一回もみはねと会っていないですよ。

なんでですか！呪ってしまいたいとか言っていてすでに呪われていると言うのですか!?

…すみません。少々取り乱しました。

「海未ちゃん、大丈夫？」

「うんうん。なんか元氣なく見えるよね！」

お昼休みにお弁当を食べていると、ことりと穂乃果に心配そうな顔をされてしまった。そんなに顔に出ていたのだろうか。

「平気ですよ。大丈夫です！」

つい甘えてしまいたくなってしまいう衝動をなんとかこらえ、そんな強がり言ってしまう。

悲しくても、そう答えないといけない。そんな気がしてしまう私はやっぱり強がりです。でも、そんな気持ちとは裏腹に泣いてしまいたい自分もいるのです。この気持ちに気付いて、なんて困らせてしまうだけですね。

「あ、そういえば。みはねちゃんにはなんて言ってもらったの？何かもらったとか？」

「ことりも気になる！みいちゃんってけっこうキザだから…どんなプレゼントもらったの？」

ふ、二人とも痛いところをついてきますね…

言えない…けど、かと言って嘘をつくのもおかしいですよね。

「実は、なにももらってないんです」

「え…？おめでどうくらいは…」

「だから、おめでどうもなにもまだもらってないんです…！」

「み、みいちゃんが…？」

「はい…」

私もできればこんなこと言いたくはないですよ。でも、本当にまだなにももらっていないんです。プレゼントが欲しいなんて言わないので、おめでどうの一言だけでも欲しいのに。

でも、わざわざ自分から言ってもらいに行くのも変じゃないですか。そんなの私には無理です！

「穂乃果、ちよつと行ってくる!!!」

穂乃果は真顔で立ち上がると教室を出て行ってしまいました。

もう、今日は追いかけて怒る元気もないです。なんだかなにもしてないのに疲れました。

きつと穂乃果のことだから、みはねのところにも行ったのでしよう。

「海未ちゃん。きつと、何かわけがあるんだよ」

だから心配ないよ、なんて優しい言葉をかけられてしまえば、意外と脆い私の心はボロボロと崩れてしまいそうになる。

「ありがとうございます。ことり」

今の私にはぎこちない笑顔でそう告げることしかできなかつた。

数分後、嵐のように去って行った穂乃果は嵐のように戻ってきた。

「海未ちゃん！みはねちゃん連れてきたよ！」

穂乃果は真姫の手を引いている。真姫の先にはみはねがいた。なんだか予想外のことに言葉もなにも出ない。

「つて、ちよつと！なんで私まで…！」

「それはみはねちゃんが真姫ちゃんから離れないから」

「ご、ごめんって」

今日は私の誕生日なんですよ。今まで生きてきてそんな考えたことなかったのに、よりによって今出てくる。

なんで私の誕生日なのにおめでどうも言ってくれないんですか。

なんで私の誕生日なのに真姫とくつついてるんですか。

「ほら、みはねちゃん！海未ちゃんに言うことあるでしょ！」

なんでそんな気まずそうな顔するんです。

「お、お誕生日日…お、おめ、でどう」

なんで真姫に隠れながら。そんな歯切れの悪いおめでどうなんて欲しくないです。そんなの…！

今日は私の誕生日なんですよ!?

「ありがとうございます。無理に連れてきてしまってますみませんでした」

ぽろり、涙が一粒こぼれる。

年下の、ましてや好きな人にこんな姿を晒してしまって恥ずかしい。いや、泣いている姿なんかとつくに見られているわけだが。

「ほら、みはねがちゃんと説明しないから勘違いしちゃったじゃない」

「だ、だってえ…」

「いいから、ほら！めんどうくさい」

真姫とみはねがこそこそ話し出したと思ったら、真姫が仏頂面でみはねを前に押し出した。

みはねはよろけながらも私の元まで来ると、優しく涙を拭ってくれた。

そんな優しき、今はいらないます。なんて、嬉しくてしょうがないのに。

「泣かせてごめん。放課後、私の教室まで来てくれる?」

なんだかよくわからない私はとりあえず頷く。

その反応にホツとしたのか、安堵の笑みを浮かべてみはねは真姫を連れて教室に戻って行ってしまった。

「みいちゃんらしくなかったね」

「どーしたんだろう?」

ことりと穂乃果もよくわからなかったようで、頭にハテナを浮かべていた。私たちだけで考えても答えが見つかるわけがない。「とりあえず、放課後みはねに会ってきます」

*

夕日が照らす教室にみはねと二人きり、見つめ合う。

かれこれ5分くらいこうしていたでしょうか。なんとも気まずいが、不思議と嫌ではなかった。

「あ、あの…!」

「はい!」

突然大きな声を出すものだからびっくりしてしまった。

「今日は、本当にごめん」

深々と下げられる頭の動きを呆然と眺める。

「か、顔をあげてください!いつまで下げてるんですか!」

「ご、ごめん…」

今日はいつになく自信なさげな彼女が少し心配になってくる。

体調でも悪いのでしょうか。何か嫌なことでも…?

「海未ちゃん」

「みはねのことだから…また何か…」

「海未ちゃん!!!」

「は、はい!」

前を向くと小さな紙袋を渡される。

これ…なんでしょうか。

「その、誕生日プレゼント。気に入るかわからないけど、結構頑張ったんだ」

まさか、プレゼントをもらえるなんて思っていなかった。どうしましよう、また涙が出てきてしまいそうです。

「開けてもいいですか?」

「もちろん」

そういつて笑った顔は赤く染まっていた。それは、夕日に照らされたせい?それとも…

ゆつくりと丁寧にテープを外して中を見ると、小さな箱が。

それを開けて見たら、小ぶりの青色の石が埋めこまれたリングが入っていた。

「これは…」

「アクアマリン。海未ちゃんの誕生石だね」

取り出して光に当てるとキラキラと輝いている。

…あら?

リングの内側に何か文字が書かれている。

” I will love you forever ”

「気づくの早いよ、もう」

「これ、まさか。みはねの手作りですか?」

文字を見た瞬間、少し不格好だけどみはねの字だとすぐにわかった。

「うん。絵里に作りかた教えてもらったんだ。ごめん、慣れない作業で昼休みに作り終わったばかりなんだよね」

だから、渡すときに頑張ったって…

こんなに幸せだと思った誕生日は生まれて初めてです。

大切な人に、世界にたったひとつだけの気持ちのこもったプレゼントをいただけるなんて。

「ありがとうございます…っ。大切にします」

「うん。それ、貸して?つけてあげる」

「はい!お願いします」

右手を優しくとられて薬指にゆっくりとはめられていく。

途中、みはねに見つめられていることに気がついて、お互い目があつてしまい真っ赤になった。

「うん。ぴったり！似合ってるよ海未ちゃん」

「本当に、嬉しいです」

チュツと軽く私の薬指にキスを落とされて、ますます顔が熱くなる。

あなたのせいで心の波が引いたり満ちたり、悲しんだり喜んだりと大忙しです。まったく。

みはねのおかげで最高の誕生日になりました。

私も、あなたに永遠の愛を誓います。

ずっと、何があろうと私がそばにいます。本当に大好きですよ。

ただ…

「サプライズのようなものはこれからあまりしないでほしいです」

「なんで？」

「今日、とつても寂しかったんですからね？…そのぶん、もう少しだけ一緒にいてください」

36. 聞きたいことがあるんです

「みはね。朝やで」

「ん、んん〜」

もうちよつと…だけ。

「起きないと朝ごはん抜きやで」

朝ごはん…食べたい。

ん？朝ごはん？いつもは食べてない…

てか、いつも誰もいない…

「わあ!?! すごいえば希のお家にお泊まりしてたんだった!」

「あ、やっと起きた。おはようさん」

「お、おはよう!」

やばい。朝から女神スマイルもらっちゃった。あ、みんな知ってる？知らないよね？希の笑顔ってめっちゃかわいくて癒されるんだよ！

しかも、希のベッドで寝ているとか…そう考えるだけでやばい。

「ほら、ちやつちやとごはん食べて。学校行くで?」

「わかったあ」

なるべく急いで、かつ味わいながら食べる。

めっちゃおいしかった。朝からこれとかほんと最高。

ごはんを食べ終わってから制服に着替えていつもより早い時間に家を出た。

いつもって言っても、絵里とかことりちゃんとかの家泊まった時よりもってことになるかな。

あのふたり…なかなか起きてくれないし。

「あ、今別の人のこと考えてるやろ」

「な、んではれたの?」

「なんとなく。顔見たらわかる」

希拗ねてる？・やきもち？・やばいほんと嬉しい。希っていると癒されてばっかだな。

下の方を向くと希の手が視界の端に入った。

「あのさ…繋ぎたいな？手」

「い、いいん!？」

「え？なんで？繋ぎたい」

「ウチも…」

ほら、かわいい。

当たり前のように恋人つなぎをする。

この子、私のなんだから誰も手え出すなよ？って気持ちで希をこっちにくつと引き寄せる。

「なあなあ。ちよつと聞きたいことあるんやけど」

「ん？なあに？」

「あんなあ、μ sのみんなの好きのところ！聞きたい！」

μ sのみんなの好きのところ…ねえ。

「うーん。別にいいよ？」

「やった♪じゃあ、まずは…一年生からにしようか。花陽ちゃんとか？」

一年生からね。基本は一年生組と一緒にいることが多いからね。

「んつとねえ。小動物みたいなところ。だけど、たまにめつちやズバツと言ってくれるところかな」

最初の方はおどおどしてばかりだったのに、最近はダメなところちゃんと注意してくれたりとかめつちや頼りになるんだよ。

この前なんか、ちゃんとご飯食べないと倒れちゃうよ！って悲しそうな顔しながら怒られた。

「真面目に答えてくれるんやな」

くすくすと面白そうに笑う希。

なんだよもう。真面目に答える感じじゃなかったの？

不機嫌そうな顔をしているとそれに気づいたのか、ごめんごめんと謝ってきた。

「次は凜ちゃんな」

「はいはい。凜の好きなどは、ものすごい甘え上手？で、すぐすり寄ってきてくれるところかな。でも、たまに照れちゃうところもかわいー」

「ベタ惚れやんなあ」

ベタ惚れ…そんなの当たり前。

みんなの事好きだもん。

「そう。みくんなにベタ惚れですよ」

「ん、んん！次！真姫ちゃん！」

わざとらしく咳払いなんかして、照れをごまかしてんのかな？

「真姫ちゃんねえ…。ふつうにかわいくないところって言ったら好きなどころに聞こえないかもなあ」

「それ悪口やん」

「ちよ、違うよ！ちゃんと続きあるから！」

「はいはいどーぞ」

「もう…こう、なんて言うのかな。妹みたいな時とお姉ちゃんみたいな時のギャップがすごくかわいい。素直に甘えられなくてこつちに八つ当たりしてくるのも、甘えてほしくてもものすごく柔らかい笑顔でおいでって言うってくるのもほんと大好き」

やっば、にやけがとまんない。

真姫ちゃんは本当に最近素直になつてきたと思う。心を開いてくれてるって一番わかりやすいから喜びも倍増だ。

「む…次。穂乃果ちゃん…ってこれ聞いてもええの？」

だんだん希の機嫌悪くなつてきてる…？

ま、いいか。

「んー。高坂先輩の方はわからないけど、私はまだ好きだからね。聞いてもいいよ」

あんなことがあつたからといって嫌いになるわけでもないしね。

「うん、太陽みたいなどころかな」

「いきなり漠然としてるなあ」

「だって好きなんだもん」

ほんと希の対応が冷たくなつてきてる気がする。

やっぱりやきもち妬いてくれてんのかな。

そうだったらしいなあ…

「海未ちゃん！」

「照れ屋さんなどところ。あ、知ってる？照れ屋さんだけど海未ちゃんってああ見えて実はすごい大胆なんだよ」

「え、そーなん？」

「うん。そんなところも好きなんだけどね」

この前の誘い方は尋常じゃないくらいやばかったもんな。

ま、私にしか見せてくれない姿ってことかな。それはそれで嬉しい。

「ことりちゃんは？」

「なんかね、あの雰囲気やらあの笑顔やら声やら全部！」

「それはわかる気がするわ」

「だよね。かわいいもん」

「次はにこっちゃん」

にこ。あんまり関わってないように見えて実は結構関わりがある。

あるっていうか、にこには隠し事がすぐバレるっていうか。

いきなりお弁当渡されたときはびっくりした。

あの時のセリフは確か：『あんたが食べてないこと気づいてないとも思った？ちゃんと食べなさいよね。あんたに倒れられたらμsはおしまいなんだから』だったと思う。

あの時は嬉しすぎてにこに抱きついて泣いてしまった。

「小さいけど大きいところ。みんなのことちゃんと見ててお姉ちゃんみたい」

「小さいけどな」

「小さいけどね」

ふたり揃って笑い出す。

にこは一緒にいなくても笑顔にしてくれるからすごいよね。

「次…えりち…」

「なんか聞きたくなさそうだね」

「だって、みはねはえりちのこと大好きやん」

「まあ…なんだかんだ一番関わってるかもしれないね」

「やろ？まあ…聞く、けど」

絢瀬絵里。この学校に来て一番最初に知り合ったといっても間違いではないと思う。ことりちゃんはもちろん除くからね？

容姿端麗、頭脳明晰。おまけに運動神経もいいときた。それに生徒会長もやっていて、女学院のこの学校でもたくさんの人から告白されていている人気者。それでいてたまに抜けてるところもあって…

ま、いろいろとパーフェクトな人だ。

私が最初に手を繋いだのもキスをしたのもお泊まりしたのも絵里だったな。

「一緒にいたいなって思えるところ？…なんだろう、絵里がそばにいてくれるならなんだって出来る気がするんだよね。絵里のためならなんでもしたいって思えるところって言えば伝わるかな？」

「えりち愛されてんなあ。…羨ましい」

「まあ、みんなのためなら私にできないことでもなんでもしたいって思ってるよ。みんなのためなら命だつて惜しくないからね」

なんて、少しかっこつけすぎただろうか。

「そのみんなって、μ sだけやないやろ」

なんでわかっちゃうかなあ。

うん。この大好きな音ノ木坂のみんなが、この街の人が、たくさんの方が笑顔になってくれたらなって思う。

まあ、私にできるのせいぜい近くにいる人たちくらいかな…

「そっか、そっか。みんなのこと、ちゃんと大好きなんやね」

え、希のことは聞かないの？

あれか、別に聞くほどのものことでもないか思ってたんでしょ。

こうなったら、勝手に話始めてやる！

「希の好きなおところはね…」

「い、いいよ！ウチのことは」

案の定やめさせようとしてくる。しかし、こんなんをやめてあげるほど私は優しくない。

「かわいくて、優しくして、笑顔が素敵で」「ちよお！無視るな！」

繋いでる手をブンブンしながら止めてくる。

「まだ途中なんだけど」

「ウチのことはほんといいから」

「だめ。最後までちゃんと言わせて。ほら、しーっ」

「うう…」

「陽だまりみたいにあつたかくて、私のことも包み込んでくれるところ。一緒にいるだけで落ち着くのは希が一番かな。つつい甘い甘えちやうような、でも、めっちゃぐずぐずに甘やかしたくなるのも希だけ。こうやって、手を繋いでくれるだけでも舞い上がっちゃうくらい嬉しいし、学校内で会えた時に優しく微笑んでくれるのも好き。周りに希は私のものだって言いたくなっちゃうし、自分のものだって叫びたくなっちゃうくらい大好き」

なんでだろう。希は私の中でやっぱり特別な人で、絵里の事も、sのみんなとも違う。

自分でもよくわからないけど、ほんつつつとに大好き。

「は、恥ずかしいわあ。でも…嬉しい」

はにかみながら嬉しいと言ってくれる。それだけで私も嬉しくなってきたやう。

そっか。私はこの笑顔を守りたいんだ。

希には笑っていてほしい。この気持ちはやっぱり恋以外考えられないよね。

「私、希と付き合えてほんとに幸せ」

「ん、ウチも幸せ」

こんな日々がずっと続けばいいのに。

もし私の記憶が戻ったら…

ううん。今はそんなことよりも、大切な人たちとの大切な時間をしっかり噛みしめながら生きていこう。

ってなんかおかしいな。

死亡フラグたっちゃったみたいなきもちになったから、やめよう。うん。

死ぬ気なんて少しもないからね!?

37. これは日常？

〜真姫〜

「ふんふっふん♪」

この鼻歌を歌っていつになくご機嫌な彼女。
わかってるとは思うけどもちろんみはねよ。

よく考えたらどんな人なのかって紹介されてないわよね。って、誰に紹介するのかしら。

「みはねちゃん。今日はご機嫌ね」

「みはねちゃんの髪サラサラ」

「ねえねえ。私とも遊ぼう？」

「ちよ、みはねちゃんは凜たちと遊ぶのでいっぱいじゃないや！」

うん。なんていうか、ものすごく人気なの。

μ s の中では海未とか絵里とかが女子から人気だけど、みはねは本当に特別。

背は私より少し低いくらい、希と同じくらいね。顔はとても整っていて、お人形さんみたいにかわいいわ。

それに、こう、性格がものすごくいいって言えば伝わるかしら。困ってる人がいたら迷わず手を差し伸べちゃうし。本人が自分の魅力にまったく自覚がないのがムカつくくらい。

それに、見た目や性格がいいだけじゃなく、頭がいいのもポイントが高いのかしら？

運動は…いいってわけでもないのに、一生懸命でかわいいし。そう！かわかつこいいの！

コホン…とにかくモテるのよ。

「真姫ちゃん助けて！」

なんで説明している間にクラスメイト…だけじゃないわね、他の学年の人もいる…

に襲われかけるのよ。おかしいでしょ。

「自分でなんとかしなさいよ」

「いじわる。…じゃあ、三年生の教室行ってくる」

はあ…本当に大好きよね。絵里と希とにこちゃんの三年生組のこと。

べ、べつに妬いてなんかないし。

「はあ…こっちきなさいよ」

後ろを向いて歩き出そうとしたみはねの腕を引つ張る。

案の定バランスを崩してこっちに倒れてくる。そこまではよかった。でも、ここまで受身が取れないとか想定外。

みはねの顔が私の顔のすぐ横にある。片方の腕は私がつかんでいるけど、もう片方は窓についている。ほんとに近い。壁ドンならぬ窓ドンね。

周りの女子が黄色い声または悲鳴をあげているくらい。

「真姫ちゃんいい匂いする」

「つて、なに言い出すのよ！」

ぺしつと頭を叩く。

「痛い…真姫ちゃんがいじめる。私はこんなに真姫ちゃんのこと好きなのに…」

周りの目も気にせずそんなことを言ってくる。あれ、この状況っていろいろとまずいんじゃないの？ま、そんなの今に始まったことじゃないけど。

「いじめてないわよ」

みはねにはどうも甘いみたい。

頭を優しくなでてあげると嬉しそうに笑って抱きついてきた。

まったくもう、しょうがないわね。

今日のみはねはいつも以上に甘えんぼみたいだ。私の首元にグリグリと頭を押し付けてくる。

「今日は甘えんぼね?」

「ん。今日希と学校来たんだけど、みんなの好きなどこの話ししながら来たの。そしたら、ほんとに大好きだなあって」
たぶん私にしか聞こえないくらいの声。

昨日は希の家に泊まったのね。

それにしても、周りの人たち写真撮ってるんだけど。

「ほら、そろそろ離れなさい」

「えー。もうちよつと」

「こら、くつついてこないの」

「とか言いってるけど無理に離そうとしないじゃん」

周りに助けを求めようと顔を上げると、微笑ましそうに見ている花陽とニタニタと嫌な笑みを浮かべている凜。

「これは…みんなに報告にや」

「ちよ、凜ちゃん邪魔しちやダメだよお」

「どうしたの、あんたたち?」

タイミングがいいのか悪いのか。

もう、にこちゃんが来ちやつたじゃない。

「真姫ちゃんがみはねちゃんにデレデレしてるにや」

「つて、こら!なに言ってるのよ凜!」

「凜、真姫ちゃんはデレデレなんかしてないよ?」

「みはね、ずいぶんとご機嫌じゃない」

あーもう。せっかくの幸せな時間が…

まあ、でも、あんなことがあった後でもみんな普通だし、ちよつとは安心したかも…?

たぶん、みはねのおかげね。

えーと、なんで私はこんなことになってるんだろう…？

右には絵里。左には亜里沙と雪穂ちゃん。

あ、雪穂ちゃんっていうのは学院祭の時ライブを見にきてくれた高坂先輩の妹ね。

その時に少しだけ話して仲良くなったんだ。

「あ、あの！私、すぐみはねさんに憧れてるんです！」

「え、えっと、私憧れられるような人間じゃないよ？」

「そんなことないよ！みはねさんのこと亜里沙大好きだもん」

ぎゆうって左腕に抱きついてくる。やっぱり亜里沙かわいい。

って、なぜか絵里が右手を強く握ってきた。

チラツと盗み見てみるとこっちは見ていないが、ほっぺを膨らませている。なんだ、拗ねてるだけね。

かわいい。いじりたい。ああー。

「ありがとっ私も亜里沙大好きだよ！」

「ふわああああ」

亜里沙顔真っ赤。かわいすぎてきゅんきゅんする。

ちらっ

ちらっちらっ

って、さつきから何回ちら見するのお姉さんよ。

「絵里？どうしたの？」

どうしたのかなんてわかっている。でも、かわいくてかわいくてしょうがないんだもん。なんか、今なら好きな子をいじめたくなくなっちゃう男の子の気持ちにとっても共感できる。

「な、なんでもないわよっ。」

「ふーん」

素直じゃない子にはお仕置きかな？

するっと、絵里とつないでいた手をうまくほぐく。

そのままその手を亜里沙の頭に乗つけてなでる。

絵里は…と、あ、つないでいた手を自分の手で握りしめてる。下を向いていて表情はよくわからないけど、悲しんでいることはたしかだ。

「みはねさんも絵里さんも、うちのお姉ちゃんとは全然違って亜里沙が羨ましいな」

「そうかなあ？穂乃果さんがお姉ちゃんだったら毎日楽しそうだけど。ね、お姉ちゃん」

「え、ええ…そうね」

妹たちの話も耳に入っていない様子。

って、あ！

「絵里危ない」

絵里の腰を抱くようにしてこっちに引き寄せる。

私が道路側を歩くべきだった。

絵里は前から来た自転車に気づかず、また自転車のほうもスマホをいじっていてぶつかりそうになってしまっていた。

私が気づかなかつたらぶつかってただろ。

「あ、ありがとう。みはね」

「いや、ぶつからなくてよかったよ。てか、私の大事な絵里が怪我したらどうすんだし。ちゃんと前見て運転してほしいんだけど」

「み、みはねさんかっこいい」

「みはねさんなんだから当たり前だよ。お姉ちゃんも怪我とかしなくてよかった」

「ちよ、2人とも褒めすぎ。ほんとに怒ってんだから」

慕ってくれるのは悪いことじゃないし、むしろ嬉しいからいいんだけどね。

「みはね。その…」

絵里は話しかけてきたが下を向いている。

まあ、なんとなくいいいたいことがわかる気がする。

「絵里。手、つなぐよ。あと、さつきは意地悪してごめん」

「ううん。みはねありがとう」

今度は恋人つなぎで歩く。

それに気づいた亜里紗と雪穂ちゃんはキヤーキヤー騒いで、二人もつなぎたいと言ってきた。でも、私の手はあと一個しかないよ…

「じゃあ、今日は我慢するねっ。雪穂はなかなかみはねさんと会えな

いし、つなぎなよー!」

「い、いいの?ありがとう!」

「まあ、会いたいわって言ってくれれば会いに行くけどね」

結局雪穂ちゃんとも手をつなぐことになった。そのあとはかわいい妹たちの話を聞きながら歩いた。

「あーあ、もう家に着いちゃった。送ってくれてありがとうございました」

「どういたしまして。このくらいどうってことないよ」

「ええ。楽しかったわ」

「あ、あの!お姉ちゃんいるんで、家、上がっていきませんか?」

「絵里。高坂先輩と話してみたら?」

「みはねは?」

私は行かないほうがいいと思うな。

それに…

「私はことあと海未ちゃん家に行かなきゃなんだよね」

「そう…それならしょうがないわね。またね、みはね」

「みはねさん、また泊まりに来てくださいね!」

「みはねさん!今度ゆつくりお話ししましょう」

「うん。みんなまたね」

私はここからそこまで距離もない海未ちゃんの家に向かった。

38. 誰のもの

ふう：海未ちゃん家にやっとなつた。

まさか途中で中学生たちに捕まるなんて…

しかも、サインくださいとか写真一緒にとつてくださいとか私アイドルちやうし。

てか、ほんといつかのパンフレットのせいでこんなに大変な目にあうなんて。もう、理事長のばか。しかも、私なんかのサインもらつてどうするの？ 写真とつて何になるの？

つと、そんなことより絵里はちゃんと高坂先輩とお話しできてるかな？ 心配だ。

さつきからこんなことを考えながら海未ちゃんの家の前を行ったり来たり。

最終的にはインターホンの前で立ち止まってウンウン唸っている。つて、このまま家の前で固まってたら不審者に思われちゃうな。

周りに誰もいないことを確認してからインターホンに手を伸ばす。海未ちゃんちに入るのは2回目。

ほんとに大きな家だ。たしか、有名な日舞の家元だったっけ？ 和風：というか、もうまさに和だよな。

この表札の園田つて見るだけでもう雰囲気すごい。

「みはね。さ、中へどうぞ」

「お邪魔します」

「あ、お茶を用意するので先に部屋に入ってください」
「わかった」

あー、心臓がいろんな意味でばくばくしてる。

この家にいる時点で緊張がすごいけど…

なんで。制服だつて思うじゃん。なんで私服なの？ かわいすぎでしょ!?

そんなことを考えながらも海未ちゃんの部屋についてしまった。
深呼吸をしてから入る。

…海未ちゃんの匂いがする。って、私のほかあ。何考えてるの。
「みはね…あの、何してるんですか?」

「何もしてない!海未ちゃんがかわいいのが悪い!」

「って、何で私が怒られるんですか!?!それに…かわいくないです…」
顔を真っ赤にして抗議してくる。

そーゆーところがかわいってこと、何でわかんないかなあ?

「まあ、うん。その…お話って?」

「はい。ことりのこと…なんですけど」

「うん」

「この前、行かないでって言ったんですけどダメでした…それにもう…」

「海未ちゃんは優しいね。私は何も言えなかったのに。まあ、まだどうなるかはわからないし、ね?」

「はい…」

「私は海未ちゃんの味方だからね」

「ありがとうございます」

「ううん。好きな子の味方なのは当たり前でしょ?」

「…っ!」

「ほら、おいで?」

この前は同じことやって恥ずかしい思いしたけど、今度こそ…!

海未ちゃんは戸惑いながらも私の腕の中に来てくれた。

か、かわいい。めっちゃ嬉しい。

海未ちゃんの頭に手を伸ばそうとしたところ、携帯の通知が来たことを知らせるバイブの音になる。

って、タイミング悪っ!

自分のだったらほっとくけど…海未ちゃんの携帯だ。大事な用だったら大変だし。

「はあ…海未ちゃん、携帯なってるよ?」

「…はい」

すごい残念そうな顔してるってことは、海未ちゃんも嬉しかったってことではないのかな。

なんて都合のいい解釈をしてしまうのは、やっぱり浮かれているせいだろうか。

「みはね…」

「ん？なあに？」

「あの…穂乃果が明日話したいことがあるから講堂に来てって」

明日…話しがある…？

「そうなんだ！行つてきな？」

「はい…！」

よし、笑顔になった！よかった、よかった。

「その…」

「ん？」

「今日、家に誰もいないんです。だから…泊まっていってくれませんか？」

…はい？

え、海未ちゃん家に泊まってるの？

え、え、え？ちよ、え？

しかも、ふたりきり？なにそれ。

「い、いいの？」

「泊まってるってくれたほうが嬉しいです」

てか、毎回誰かの家に行くところならない？

べつに嬉しいからいいんだけど、私浮気者みたいじゃん？って一人に決められてない時点でダメ人間だ…

でも、みんな同意の上で付き合ってるんだから…私にできることは全員をちゃんと幸せにすること！よし、大丈夫。うん。

「ご飯でも食べますか？それともお風呂にしますか？」

そんなよく聞くフレーズを聞いて少しだけ調子に乗る。

「じゃあ、海未ちゃんで。なーんてね」

破廉恥です！とか言つてひっぱたかれたりして。ま、そんなことはしないと思うけど。

「…いいですよ。私もみはねがいいです」

ほらね？…つて、ん…う…いいって言った？

「え、ちよ、ん？」

「みはねと…キスしたい、です」

「ちよ、ちよつとま…んっんんう」

目の前は大好きなかわいいかわいかわい海未ちゃんの顔。

唇には前にも触れたことのある柔らかい感触。

キス…されてる？

「みはねからはしてくれないんですか？」

少し熱っぽい潤んだ瞳で言われてしまえば、私の余裕なんてすぐになくなる。

「い、いいの？」

「当たり前じゃないですかっ」

聞き直したのがいけなかったのか、恥ずかしげに顔を染めてそらされた。

あ、え、そこで顔赤くなるのか。

「じゃあ目を閉じてくれるかな？」

素直に目を閉じてくれたその整った顔を、私の顔の真正面に来るように動かす。

ほおを紅潮させて目を閉じている愛しの彼女にそつと口づける。

「嬉しいです」

「よかった。海未ちゃんかわいい」

もう一度キスすると、海未ちゃんは少しだけ困った顔をした。

「その…みはねの一番つて誰ですか？」

「私の一番…好きな人つてこと？」

「そうです」

唐突な質問に戸惑いと疑問を抱きつつ、真剣な海未ちゃんに答えねばという思いが生まれる。

うーん、一番好きな人。みんな同じくらい好きだけど、そんな答えじゃ許してくれないんだろうな。

「なんて言えばいいのか。この前希にみんなの好きのところ聞かれ

たけど、それと同じようなものかなあ」

「どういうことですか？」

説明できるかな？いや、自信はまったくないが、今頭に浮かんだことを素直に言葉にする。

「この前希に、みはねはえりちのこと大好きやからなあって言われたんだ」

「確かにそんな気がしますね」

自分ではよくわからないんだけど、周りから見るとそう見えるのかな…

「うーん。それで、考えてみたんだけどね。みんなそれぞれ違うんだよね」

「はい？どういうことか聞いてもいいですか？」

私の言ったことに首をかしげる海未ちゃん。その反応が正しいよね。だって、自分でもよくわかっていないんだから。

「うん。まあ、実はよく考えてもわからなかったんだけどね」

「そうなんですか？」

私は、本当に意味がわからないといった顔をしている海未ちゃんにうん、と一つ頷いてまた続きを話し始める。

「希に絵里のことが大好きだって言われた時、本当にそうだなって思っただんだ」

「そう…ですよ。私から見てもみはねにとって絵里は特別な人に見えます」

「んー…うん。確かに絵里は私にとって特別だよ。絵里のためならなんでもできるっていうか、絵里と一緒にいられるならなんでもできる、なんでもしたいって思う」

海未ちゃんは少し悲しそうな顔をしたが微笑んでくれた。

「ここまで希にも話したことだ。」

「でも、かといって絵里だけが特別ってわけじゃないと思うんだよね。希と話してて、希にはずっと笑顔でいてほしいなって思っただんだ」

「笑顔でいてほしい、ですか」

「うん。これってさ、やっぱりちゃんと希に恋してる証拠だと思うん

だよね」

「そうですね。私もみはねには笑っていてほしいなっています」

そう言ってふわりと笑う彼女の姿に自分の鼓動が早くなっているのがよくわかった。

「うれしいな」

「他の人のようになります。花陽や凜、真姫のことはどうなんですか？」

「え、と。花陽はなんかこう守ってあげたい。凜は私の前では女の子でいてほしい。真姫ちゃん…もつといろんな表情、感情を見せてほしいかな。もちろん私の前だけでね？」

「ふっみんな愛されてるんですね」

「もちろん！」

「じゃあ…ことりや穂乃果は？」

二年生のこの二人。出会ってからいろんなことがあったよね。

「ことりちゃん。ことりちゃんは…ずっとそばにいて欲しい…。高坂先輩は、私のことをもつと見てほしい。あはは…私、わがままかな」
もうどつちも無理かもしれない。

でも、やっぱり諦めきれなくて。諦めたくなくて。

海未ちゃんのほうを見るとなんとも複雑そうな顔をしていた。

「…私のごとも教えてほしいです」

希は自分のことは聞いてこなかったけど、やっぱり海未ちゃんは聞いてくると思ってた。

そんな海未ちゃんを見て、私の中でとある感情がどんどん大きくなっていく。

「…め……たい」

「なんですか？」

「海未ちゃんのこと、独り占めしたい。私だけの海未ちゃんだけでほしい」

海未ちゃんはやっぱり顔を真っ赤にさせていて。

押しに弱くてすぐ赤くなっちゃうところも大好きで、愛おしくて。

「私も本当はそう思っています」

「そうだよね。ごめん。でも、ふたりきりの時は海未ちゃんだけのもの」

その言葉だけで嬉しそうに笑ってくれる。

私はみんなから幸せをもらってばっかだ。

「みはね。私はみはねだけのものですよ。いつでも」

「そんなこと言われたら調子乗っちゃうよ」

「みはね。もっとこっちへ来てください。今だけでもみはねと…」

今だけじゃないよ。

それを伝えたくて海未ちゃんを押し倒し、そのまま強引に唇を奪う。

海未ちゃんはまだ理解できてないのか少しの間固まっていたが、しばらくすると理解できたのか徐々に顔が赤く染まっていった。

私にしか見せてくれない顔。

大好き。もう本当にどうしようもないほど好き。

「ね、もっといい？」

「はいっ…あ」

今度は優しく触れるだけのキスをしてから海未ちゃんの首元に顔を埋める。

首元で息を深く吸い込むと、海未ちゃんの香りがした。

なんかもう、理性とかなくなりそう。

ちゅつと軽くキスを落として様子をうかがう。何をどう思ったのか海未ちゃんは顔を斜め上にあげて白くてきれいな首筋をあらわにした。

いいのかな？

確認をすることもなく首筋にキスを落としていく。

海未ちゃんって普段髪おろしてるから、別に大丈夫なんじゃ…？

うーん。まあ、大丈夫だって信じよう。

もう一度首筋…少し考慮して後ろのほうにキスをする、今度は軽く歯を立てる。

くすぐったいのかぴくりと体を震わせる反応がかわいくて我慢できなくなってきた。

キスをしている場所をきつく吸う。

「…っ」

少し痛かったかな？名残惜しいけど顔を離す。

さっきのところを見てみると、白い肌にくつきりと残る赤。

やば、にやけが止まらなくなりそう。

「ごめん。つけちゃった」

「い、いえ！嬉しいです。そ…その！私のこと、海未って呼んでくれませんか？」

「え、ええ!?呼び捨てでいいの?」

「はい…そのほうが恋人らしいかと…」

「そ、そっか。うん。わかったよ、海未。こ、これでいい?」

「はいっ！みはね」

その後は一緒にご飯を作って食べて。

…二人でお風呂に入って、一緒に寝ました。

うん。恋人同士なら普通のことだと思う。

夜に海未ちゃんが隣にいることに意識しすぎて寝れなくなったのはまた別の機会にでも…

39. 講堂での会話

ここは講堂の入り口。

今日、ことりちゃん日本を発つ。

理事長にことりちゃんのお見送りを誘われたが、それを断ってまでここにいるのには理由がある。

「海未。いっておいで」

「はいっ」

講堂のステージには高坂先輩が立っていた。

海未が講堂に入ったことを確認して私はその場を後にする。

——あの二人なら大丈夫。

「あら、みはね。こんなところにいたのね」

「ん、ああ。絵里。そうだ、ちよつと頼みたいことがあるんだけど」
首をかしげている絵里の耳元に顔をよせる。

「その、μ、sのみんなを講堂前に来るように伝えて？」

ほんと私が自分で呼べばいいだけなんだけどね。

「え、ええ。わかったわ」

ふつうに言えないの？と顔を赤くして怒られてしまった。絵里の反応がいちいちかわいいせいだから反省はしないけど。

*

すぐにみんな集まってくれた。
そして、とりあえず伝えるべきことは伝えた。
あと私にできることは、ここで海未と高坂先輩の話が終わるのを待つことだけ。

暇だ。

なるべく邪魔にならないように海未のどこ行くか。
そーっと講堂に入って二人に近づいていく。

高坂先輩はステージの上に立っていて、海未は席のところ立って話しているみたいだ。

あ、海未の笑い声。

「もー！なんで笑うのー！」

「いえ、そんなのもう慣れっこです」

楽しそうに笑う海未に安心しつつ、話の内容がとても気になる。
なんの話だろう。

「なんの話してるの？」

好奇心のほうに勝ってしまい、邪魔だと思いつつも会話に入る。
「みはねちゃん…」

高坂先輩は少しだけ気まずそうな顔をしたが、海未がすぐに私に笑いかけてくれたおかげで悪い雰囲気にはならなかった。

「ああ、みはね。いえ、穂乃果が私たちに迷惑をかけてる話です」

「ちよ、そんな言い方しないでよ！」

「なるほど。海未、いつも振り回されっぱなしだもんね」

いつもがんばってると思うよ。

よしよし、と海未の頭を撫でると微笑んでくれた。

「むう…海未ちゃんばかり…」

「何か言いましたか…？って高坂先輩！そんなことより、ことりちや

ん」

「そ、そうですよー！ことりも私と同じ気持ちだと思います。穂乃果に引っ張って行ってほしいんです！」

「でも…」

海未の言葉を聞いてもステージの上でもじもじとしている高坂先輩を見て我慢の限界が近づいてくる。

幼なじみでずっと一緒だったんだから、今さら遠慮なんてする必要ないでしょ。

「はあ…私は迎えに行きます。高坂先輩はどうしたいですか？」

「それは…私も…」

高坂先輩のはっきりしない様子に怒りが込み上げてくることはなかったが、かなり困ってしまふ。どっちか決めてもらわないと、私も行くに行けないし。

そんな時、突然海未が歌い出した。

「だって可能性感じたんだ♪そうだススメ♪後悔したくない目の前に」

「僕らの道がある♪」

最後は海未の声に高坂先輩の声が合わさる。

「うん！みはねちゃん！行こう!!!」

私と高坂先輩はことりちゃんを迎えに行くことになった。よかった…

「ふたりとも、こたりのことは頼みましたよ。さあ、私たちも準備をしなければなりませんね」

40. みんな一緒に

ことりちゃんを連れ戻すために空港へ向かうのはいいけど、体力が

：

なんて言っている場合はなくて、とにかく走る。

空港に入ってからことりちゃんがいるであろう場所へ向かう。

「ことりちゃん！」

私よりも早く見つけた高坂先輩がことりちゃんの腕をつかんだ。

それでも、ことりちゃんは振り返ることはしない。

「ことりちゃん!!!」

さつきよりも大きな声。

「ことりちゃん、ごめん。私、スクールアイドルやりたいの。ことりちゃんと一緒にやりたいの！いつか…別の夢に向かう時が来るとしても…！」

そう言うと、掴んでいた腕を離し正面にまわって抱きついた。

「行かないで！」

「ううん。私のほうこそごめん。私…自分の気持ち、わかってたのに」
ことりちゃんは涙をこぼす。

感動的だね。

でも…

「私の存在忘れられてる？」

ボソツとつぶやいたその言葉をちゃんと拾ってくれたらしいことりちゃんが私のほうを向く。

「みいちゃんも来てくれたんだね！本当にうれしい！」

ことりちゃんは高坂先輩から離れて私に抱きついてきた。

「みいちゃんはどう思ってる？」

はあ…私が来たのは自分の気持ちをちゃんと伝えたいと思ったか

らでもある。こんなところで逃げたら、これから先もなにかあったら逃げ続けることになるかもしれない。ちゃんと自分の気持ちを伝えられるようにならないと…

「私は…私はね、ことりちゃんが留学したいならそれでいいと思ってた」

「うん。そっか」

「でもね、心のどこかでは行かないでずっと叫んでいたよ。でも、この気持ちを伝えたらことりちゃんが自分で答えが出せない、邪魔になっちゃうって思ってた…」

「そんなこと…」

「ううん。ことりちゃんは優しいから。だけど、私…ことりちゃんのこと大好きみたい。ずっと、そばにいてほしい…ことりちゃんど、いや、ことりとこれからも一緒にいたい！私と、一緒にいてくれますか？」

抱きしめられる力が強くなる。

さつきまでされるがままだった私も少しでもこの気持ちが伝われば、ことりちゃんの背中に手をまわす。

「私も…ことりも、みいちゃんどずっと一緒にいたい」

「…ありがとう。ことり」

「うんっ。やっことりって呼んでくれた」

その笑顔をずっとそばで見たい。そう思ってしまった。

「これからもずっと一緒にいるから。そばにいるから、ね？」

「うん！」

ふたりにっこり笑いあう。

「つと、そうだ！今日ライブやるから急いで学校に戻ろう！」

「ことりちゃん、みはねちゃん！急ごう」

私はことりの手を取ると、高坂先輩の背中を追いかけ走り出した。

く海未く

みはねと穂乃果を送り出した後、みんなと合流した。

ステージの準備を大急ぎで終わらせると、私たちのライブを楽しみにしてくれている人たちが講堂の席を埋め尽くした。

「ちゃんと来るのかしら」

「大丈夫ですよ。みはねと穂乃果なら」

「それより、衣装はどうする？」

「制服のままでもいいんじゃない？スクールアイドルなんだし」

ふふつやっぱりみんなとこうしているのは楽しいですね。

そんなことを考えていると、突然にこに手を引っ張られてみんなより少し離れたところに連れて行かれた。

「にこ、どうしたんですか？」

にこはしばらく気まずそうな顔をしてから口を開いた。

「はあ…気づいてないと思うから言っておくけど、首のところ見えるわよ」

首…？……………あ！

「え、あ、ほほほ他の人は!?!」

「たぶん気づいてないと思うわ」

「そ、そうですか」

「まったくみはねも…。あんたもあんたよ？海未。まあ、髪がかかっている時はバレないとは思うけど、踊っている時はわからないから気をつけなさい」

「は、はい。ありがとうございます」

「みんなくー！お待たせくー！」

どうやら穂乃果が帰ってきたみたいですね。

隣にもちちゃんところがある。

…今みはねのほうを見たらライブどころではなくなっちゃってしまいそ

うですね。

視線をそらそうとしたのになぜかバツチリと目があつてしまった。
なんでそんな笑顔で私を見るんですか。まったく…

*

急いで学校に戻ってきた。

ステージ裏に行くまえに講堂の客席を見るとたくさんの人が、
Sのステージを待っていてくれた。

裏で待っているみんなのところに行くとき最初に海未と目があった。
なんだかそれが嬉しくて自分でもびっくりするくらいに顔が緩ん
でしまう。

「さ、みんながんばってね！」

「うん！ーよし！ーい！」

「2！」

「3！」

「4！」

「5！」

「6！」

「7！」

「8！」

「9！」

…あれ？続きは？

なんでみんなこっち向いてるの？え？

「あんだビシツと決めなさいよね」

「ほんとよ。みはねのせいで止まってしまったわ」
にこと絵里にあきれた顔で見られてしまう。

いきなり絵里と希に腕を引つ張られみんなの輪に入る。

「10！」

希と絵里がそう叫ぶ。

そんな…そんなの…嬉しすぎるよ。

「ほら、みはね」

絵里に耳元でそう囁かれる。

「うん。μ，s！」

『ミュージック…スタート!!!』

みんなはひとりずつ私にハグをしていくと、ステージへ飛び出して行った。

みんな…私のこと、μ，sの一員だつて…

みんな大好き。ほんとに大好き！

「みんな！ありがとう!!!」

観客の声に負けなくらいに大きな声でそう叫ぶ。

みんなにちゃんと気持ち伝わりますように…

*

「はあ…終わったー！」

「みんなお疲れ様。すつごくよかつたよ」

みんなにタオルと水を配りながら声をかける。

「ウチらにちゃんと届いとつたよ。みはねの声」

「うんうん！ありがとうつて聞こえたにや」

「あはは…ちゃんと聞こえててよかつた。改めて、みんなありがとう！大好き！」

みんな顔を赤らめながらも満面の笑み。

でも一人だけ浮かない顔をしている。

「みはねちゃん…穂乃果の事も、好き？」

「ど、どうしたんですか？」

「だって…だって！あんなひどいこと言っちゃったもん。今だって高坂先輩って呼んで、穂乃果にだけ敬語だもん」

そうだった。私は学院祭の前日に高坂先輩に…

「嫌いじゃ…ないよ」

「…っなんで！」

「なんでって。あれは私のせいでもありませんし…それに」

「みはねちゃんは何も悪くない！穂乃果が悪いの！ごめんなさい。ずっと謝りたかった。だから、嫌いにならないで」

今にも泣き出しそうな顔。

周りのみんなを見ると、みんなも同じような顔で高坂先輩の事を見つめていた。

「嫌いになんて…ならないから。大好きって言ったでしょ？」

「でも…」

「はあ…ほ、のか…のこと好きだって。私の彼女なんでしょ？もっと自信持ってよ」

そう言って抱きしめる。

一度高坂先輩呼びに慣れてしまったから、呼び捨てにするのは少し気恥ずかしい。

まあ、最初は意地悪のつもりでやっていたんだけど、ね。

「ありがとう。名前で呼んでくれるだけでも嬉しいよ。みはねちゃん大好き」

「たぶんそのうち前みたいに戻ると思うよ。私も大好き…だから」

その後はなぜかみんなに抱きつかれて、揉みくちやにされて。最後はやっぱりみんなで泣いた。

41. 生徒会、劇

どうしましょう。

やっとまたみんなそろってライブができた。それは嬉しいわ。でも、でも…生徒会の引き継ぎのことをすっかり忘れてた。まだ次の生徒会のメンバー決まってるじゃない。

生徒会はその時のメンバーで次のメンバーを決めることができる。まあ、拒否られてしまったらそこで終わりなのだけど…

そのため何かインパクトを残す必要があるわけだ。ちなみに去年は必要なメンバーが揃ったため何も行われなかったわ。

「はあ…」

「えりち？どうかしたん？」

「ああ…希。それがね…」

次期生徒会メンバーのことを忘れてしまっていたことを正直に話す。

「それはやってもうたな。あ、そや」

「ん？」

「インパクト残すなら、ウチにいい考えがあるよ」

「え、生徒会で劇…?」

「そうなの。もちろんみはねも参加よ。ちなみに希のアイディアだから」

「一応私も生徒会の一員だし参加はするよ」

「ならよかった。でな、実はもう何をやるかは決まってるんよ」

そう。みはねが来るまでの1時間ほどで大体のことは決まっちゃった。もちろん理事長の許可もちゃんと取ってある。

「私たちで、ロミオとジュリエットをやりましょう!」

え…ロミオとジュリエット。確かこの前読んだような…ってあれ!?

しかも私はどっちもやらなきゃいけないとか…ちよつと。

「公演は二日間やるつもりなの。それで、みはねにはロミオとジュリエットのどっちの役もやってほしいの」

そんなキラキラな目で見られたら断れるわけがない。わかっててやってるのかな。いや、ポンコツだしわかってないな。

「はあ…まあ、うん」

押しに弱い自分がたまに恨めしい。

「ありがとう!」

「たーだーし、条件があります!」

「なんや?」

ふっふっふ。私だけがこんなのフェアじゃないもんね。

「1日目は私がロミオ、希がジュリエット。2日目は私がジュリエット、絵里がロミオね。生徒会長には目立ってもらわないとだし」

これで納得できるっちゃできるかな。

「ウチが…ジュリエット…!？」

「私がみはねのロミオ…!？」

みはねのつてなに…？

最後はバシツとかつこよく決めてもらったほうが生徒会に対しての関心もできるし、*μs*の人気も上がるはずだし。

「はい決定。じゃ、演劇部のみんなに協力してもらえよう明日から行動開始だね」

「1週間でロミオとジュリエット!?間に合うの…?」

さすがの演劇部の部長さんでも驚きだったようだ。演劇部でも難しいというのに、素人の私たちができるのだろうか。今ごろになって不安になってきた…

でも、こんなところでやめるなんてできないよね。

「間に合わせるんです。部長さんの力を借りなければなりません。私も会長たちもあなたを頼りにしてるんです」

「そ、そんな言われちゃったらやらないわけにはいかないな。ビシバシ指導するからよろしくね。みはねちゃん、みんな」

「ありがとうございます!」

「それで、ロミオとジュリエットといえばキスシーン。そこが一番難しい重要なと思うからがんばってね」

キスシーン…あるのか。

「キ、キキキキキスス…キ、ス…」

希が壊れた機械のようになってしまった。

の、希さん?大丈夫ですか?

「あの、本当にキスするわけじゃないし。大丈夫だよ?」

「やって、みはねとキスシーン…」

希顔真っ赤。そういうかわいい顔、他の人には見せたくないんだけどなあ。

「大丈夫だよ。私がリードするからね」

希の頭をポンポンとなでる。
なんか絵里がムツツとしてる…それに周りのみんながざわざわしてる。

頭なでてるだけなのに…

ま、いいや。気にしたらきりないもんね。

「それじゃ、確か台本はあったような気がするから今日はそれ読んでいてね。明日から練習するからさ」

「了解です」

「わかったわ」

「じゃ、今日は解散やね」

演劇部、生徒会のメンバーが順々に帰っていく。すぐに私と絵里と希だけになった。

「ねえみはね。今日泊まっていけない？いや、むしろ泊まってほしいのだけど」

「ん？なんで？」

「なんでもいいじゃない」

なんでもよくはないよ。まあ、ひさしぶりだしいいかな。

「わかった。じゃ、希を家まで送ってからになるけど」

「ちよ、ウチは一人で帰れるから大丈夫よ？」

もう暗くなってきたからダメに決まってるでしょ。

なに？ばかなの？希が変な人に絡まれたりとかしたらほんと嫌なんだけど。

「無理！一緒に帰るよ」

希の手をとって歩き出す。

途中で絵里が反対側の腕に抱きついてきて、周りから見たらめっちゃおかしいでしょ！って感じになったが。両手に華とはまさにこ

のことだなあ。幸せ。

そんなこんなで歩き慣れた道を歩いていく。

「なんや、緊張してきたわあ」

「ほんどね。初めてのことばかりだし」

「生徒会最後のかっこいいところ…ちゃんと見てるからね？」

みはねもでしょ、なんて言われながら3人で笑いあう。

私はこの時間が好きだったりする。

隣には絵里と希がいて、たまににこもいて。

いつもひだまりみたいにあつたかくて、優しくて。

でも、生徒会が終わったらこんな時間も減っちゃうのかな…

楽しい時間はあつという間で希の家についてしまい希とばいばいをする。今度は絵里と二人きりになる。

「なんだか久しぶりね。みはねと二人きりなの」

「そうだねー。最近忙しかったもんね」

「ええ。劇も頑張らなくちゃね」

絵里はいくら忙しくても弱音を吐かずによくやっていると思う。

それが強みでもあり弱みでもあると思うんだけど…

「絵里は一人じゃないからね」

絵里の手を取り指同士を絡める。

「みはねがいるから私は頑張れるの。それに、みんなもいるわ」

照れてるのかこっちは見てくれないけど、ふわりと優しい笑みを浮かべたその横顔は赤く染まっていた。

きれい…だ…

これからも一番近くでこの笑顔を見ていられたらな。なんて気持ちになって私も少し照れてしまった。

*

「で、なんで今日はお呼ばれしたの？」

「な、なんのことかしら」

絵里は私の質問に答えずに目をそらす。

夕飯も食べてお風呂も終わりあとは自由時間。

何回も絵里の部屋にはきているため今更緊張なんかしないけど、髪をおろしている絵里の姿にはドキドキしっぱなし。

にもかかわらず、はぐらかそうとする彼女に少々苛立ち無理やりこつちを向かせて目と目を合わせる。

顔が近いのはこの際どうでもいい。心臓がうるさいのも…まあ、うん。とにかく理由を聞かせてもらいたい。隠し事なんかされたら私だって拗ねるんだからね！

「はーやーくー」

「ちよ、近いわよ!?!」

顔を赤くしてそらそうとするがそうはさせない。まったく、素直に言えばいいものを…

「早く言わないとちゅーしちゃうぞ?」

「…?!?そ、それは…」

「あ、やっぱ素直じゃない子にはするのやめよう。うん」

さつきまでの期待の眼差しは私の一言で絶望の眼差しに変わった。顔が赤いのはそのまま少しだけ目に涙がたまっている。

は、破壊力が…!

でもここで折れるわけにはいかない。

顔から手を離そうとすると絵里に手を添えられて離れられなくなってしまうた。

「やだ」

あ、あああああ…

なに今のやだ。かわいすぎなんですけど。

「ここはいつたん引くべきか…」

「えーりっ。手を離してください」

「いやよ。離れたら…」

「絵里さーん。私、素直じゃない子はきらいだよ」

その言葉に手を離すことはなかったが、目をよりうるませてシヨツクを受けたような顔をしている。

そんな傷ついた顔しないでよ。

泣かせたくないのに泣かせたくなる。

こんな矛盾してる感情絶対おかしい。

ああ、もう私の負け。降参。

愛しの彼女に触れるだけのキスをして抱き寄せた。

「ごめん嘘。素直じゃないから絵里のこときらいとか絶対ありえない。だから…泣かないで」

絵里のきれいでサラサラな金色をすくようになでる。

「最近、私のことなかなかかまってくれなくて…さみしかったの」

ぽつりと絵里が呟いた。

「そっか。さみしい思いさせちやっってたんだね…ごめん」

「私のほうこそこんなにわがままでごめんなさい。それだけみはねのこと大好きなの」

こんなわがままだったらむしろ嬉しいに決まってる。それに、絵里の頼みとかわがままのうちに入らないしね。

もっともっと自分に素直になって欲しいって思ってるんだよ。私 のこともっと頼ってほしい。希にはかなわないかもしれないけど、絵里のこと、支えたい。

「絵里大好き。愛してる」

「はじめて、愛してるなんて言われたわ。私も…愛してる」

やっぱり絵里の笑顔はきれいで、その姿を独り占めしたくて、いつもより強めに抱きしめた。

この気持ちがあしでも伝わればいいのに。

4.2. 練習開始!…問題発生。

今日から劇の練習。

ちよつと待った…え、覚えなきやいけないセリフこれほとんど全部。

ああ…結構大変かも。

しかも部長さんもすごく気合い入ってるし、期待を裏切りたくない。

「あ、そうだわ。あのね、ことりが衣装を作ってくれるみたいなのよ」

「え、そうなの!？」

てことはものすごく本格的な衣装が出来上がる…すごい…!

「ええ。それで、採寸したいからきてほしいって言ってたわよ」

「う、うん。わかった」

*

つてことでやってきた被服室。毎回ここ来る時って作る時のお手伝いばっかだったからなあ…ちよつと新鮮。

「ことり」

「あ、みいちゃんやつときた!」

「ごめんね。待たせちゃったみたいだね」

「うん。ずっと待ってたんだよ?」

なんだかメジャーを持ったことりがじりじりと近寄ってくる。

笑顔だけどなんか怖い…

「ちよ、こ、ことりさん!？」

そのあとは…まあ、ここまで密着しなきやいけないのかなって思ったりするところがかなりあったけど…

これからのことりの仕事の量を考えたら許せる範囲かも。それに、

ことりといちやいちやできてうれしかったし。

廊下を早歩きで進みながら、もしかしたら緩みきつているかもしれない顔を引き締める。

「戻りました〜」

「あ、戻ってきたね！よし、キスシーンの練習しよつか!!」

え、そんないきなり？って、部長さん…絶対楽しんでるじゃん。

はああ…

「わかりました」

「よーっし！じゃあ、みはねちゃんロミオの希ちゃんジュリエットね！」

「ウチから!?ま、ちよ」

希が強制的に寝かせられる。

暴れる希を押さえつける部長さん。ちよつとかわいいそうなんだけど…

「はい。希ちゃんはそこで大人しく待っててね。みはねちゃん！よろしくー」

「はーい」

希は真っ赤になっちゃってるし、絵里は遠くから前のめりになってみてるし…

ま、自分なりにやってみよう。

「おお、愛しのジュリエット。まだ唇や頬がうす赤く染まっている。ジュリエット、なぜまだこんなに美しい？」

ゆつくりと希の頬に手をそえる。

二度三度と親指ですべすべの頬をさすると希がぴくりと反応した。「ジュリエット！今こそ私のすべてを君に捧げよう！」

表情が見えるように前髪を優しく横にながす。

希の目はぎゅつとつぶられていて見ているこつちまで恥ずかしくなってくる。ただ、フリをするだけなのに。

そんな顔されたら我慢できなくなってしまう。

目を閉じゆつくりと顔を近づけて行く。あと5センチ、1センチ。ここで止まればオツケーのはず。

だけど私は止まることなんかできなくて、後ろには見えないようにキスをした。いや、してしまった。

その瞬間顔を真っ赤にした希の目が見開かれた。

「み…はね…？今…」

希が小さなつぶやきが耳に入って我にかえる。顔を一気に離れた時にはもう遅かった。

希は起き上がると教室を走って出て行った。

一瞬だけ見えた希の横顔は涙で濡れていたと思う。

傷つけちゃった…？嫌われた…？

「ど、どうしよう」

「あれ？希ちゃん恥ずかしくなっちゃったのかな？」

部長さんまた、絵里も含め周りの人は、希が泣いていたことに気づいていないようだ。

「みはねちゃん。すごくよかったよ！本番もこの調子でお願いね！」

「あ、え、あの…」

「ん？どうしたの？」

「公演はやっぱり希がジュリエットで絵里がロミオがいいと思うんです。私は裏方のほうがいいなあって…」

周りがざわつき始める。

部長さんも急なことで混乱してしまっただみたくて口をパクパクさせている。

「ちよ、みはね！こっちきなさい！」

絵里に腕を引っ張られて廊下に連れてこられた。なんだか罪悪感で胸がいっぱいになってくる。

「さつき、希の様子がおかしかったけどそれと関係あるの？」

「うん。実は…希にキスしちゃった」

「そ、それだけ？」

絵里はなにが問題なの？とでも言いたそうな顔をしている。

「ん。さつき出て行った時、希泣いてたの。だから、嫌だったのかなって」

「はあ…そんなことね」

絵里は心底呆れたような表情で私を見る。

「みはねのこと大好きな希が、キスされて嫌なことなんてあるわけないわよ」

希のことは信じている。けど、それとこれとは話が別なような気がするのだ。その、お互いそういう雰囲気になってないと嫌かな、とか。許可なしにしたら…とか。

「でも…」

「じゃあ、いいわよ。みはねは裏方でも。私と希でロミオとジュリエットやるから」

説明してくるわね。と言って絵里は教室に入ってしまった。

*

く絵里く

ほんとにめんどくさい性格してるわね。それに、みはねにキスされたなんて羨ましい。って、そんなこと考えてる場合じゃなかったわ。もう…

とにかく希に電話で居場所を聞くと思った通り屋上にいるそうで…
とにかく急いで屋上まで来た。

ドアを出ても誰もいなくて周りをキョロキョロと見回してみるとドア横にうずくまっている希がいた。

「希」

「え、えりちい…!」

とつぜん抱きつかれた。ちゃんと受け止められてよかったわ。みはねっていつもみんなのことこんなふうに受け止めているのね。尊

敬するわ。

びつくりするくらいに希はまだ泣きじゃくっている。

「どうしてそんなに泣いてるの？聞いてあげるから、ほら」

ハンカチをさし出して希の頭を優しくなでる。みはねみたいにはできてないと思うけど少しでも希が落ち着いてくれたらいいな。みはねの手は不思議な力があるのかしらね？

「あ、のね。みはねがキスしたん」

「ええ、みはねから聞いたわ。でもそれで泣いちゃったの？」

希は手をブンブン振って全力で否定する。

「ちが、ちがくて。恥ずかしいのとうれしいので頭がついていかなくて…」

「ふふっ。ほんと羨ましいわよ。あのみはねが我慢できなくなるなんて、ね？」

「ごめんなあ…」

「そういえば、みはねは希に逃げられちゃったことがショックでロミオの役やらないみたいよ」

「え、そ、そうなん!？」

「私に押しつけて自分は裏方やるつもりみたい」

希は下を向いて考え込んでしまった。

私は別にみはねが裏方やりたいならそれでもいいと思うけど。

「でも、ウチ、またみはねとキスシーンなんてできへん…」

「はあ…じゃあ、公演は1日にしましょうか」

「…うん。えりちごめんなあ…」

私はつくづく親友にも恋人にも甘いみたい。

だって二人ともかわいいんだもの。普段はとても頼りになるのにな。

「ふふっ。じゃあ、演劇部のみんなにも伝えなきゃね」

「そうやね」

「あ、そうだ。みはねと後でちゃんと話し合うのよ？」

「がんばる」

えらいえらい。と頭をなでたら真つ赤になった顔で怒られた。
まったく、素直じゃないんだから。

あの後一緒に帰っている姿を見届けてから一人で帰った。
ちゃんと話し合えたってことかしらね。

私：みはねともロミオとジュリエットやりたかったな：

43. あなたの王子様

く希く

みはねを傷つけちゃうなんて、ウチ最低や。

それとともにこんなに好きなのに伝わってないのかな？って
ちよつと残念だったり…

ウチがみはねにキスされて嫌なわけないやんか。

「みはねお待たせ」

「希…さつきはごめんなさい」

ウチを見るなり頭をさげるみはね。

その表情は見えないけれど、ブレザーの裾を握っている手は震えて
いた。

「ちよ、ウチこそごめんな！嫌だったわけやないんよ！…むしろうれ
しかったから」

「の、希…！」

普段なら抱きついてきそうなものを、今日は安心した笑顔で手を握
るだけだ。やっぱりさつきのこと気にしてるんかなあ？

「抱きつかなくていいのっ…」

今の言い方はちよつと意地悪だったかも。

本当はウチが抱きつきたいのに。

「いいの？また我慢できなくなっちゃうかもだし」

「我慢しなくて、いいんよ」

「…っ。ばか。もう知らないんだからね！」

「はやく、みはねとぎゅってしたい」

両手を広げるとみはねはそこにすっぽりと収まった。

あつたかいしい匂いする。

「あのね、私は裏方やるから」

「うん。ウチのせいでごめん」

「希が照れ屋さんなのはずーっと前から知ってるし」

みはねは笑って許してくれる。だれにでも優しいのは知ってるけど、手を繋いでる手から伝わる鼓動の早さがウチのこと好きって言ってくれてるみたいでうれしい。

えりちに悪いことしちやったな。

希と無事仲直りできて、今日は本番前日。

劇は放課後に見学は自由参加で行われるため、どれだけたくさんの人に来てもらうかが大事だ。

そのため今日はこれから宣伝に校内を回るようになった。

「うえ!?私がかこれ着るの!?!」

「そのためにことり頑張ったんだもん。ことりが作ったの着るの、いや?。」

ロミオの役をやらないのはすぐに伝えたのに作っていたらしい。

そんな、断れるわけないじゃんかあ…

なんで、私は劇でないのに。

しかもロミオ。

絵里の隣並びたくないし。

「あらみはね。早く着替えてきなさいよ」

ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべて絵里がそんなこと言ってくる。

「うるさいロミオ。言われなくても着替えるし」

「ほら、えりちもあんましからからかわんの。ほんまみはねの事大好きなんやから」

「みはねが反抗期に!？」

「着替えてくるね」

ことりが作ってくれた衣装を手に別室へ行く。見た目のわりにはとても着やすく作られていた。やっぱりことりはすごい。

…なにこれ恥ずかしい。

鏡に映った自分を見て呆れてしまう。

「みいちゃん髪やってあげるね」

もうこれはなにも反論できないし、ことりに髪をいじられながら大人しくしていることにしよう。

手際いいなあ。いつも、sのライブの時はにこがやってるイメージが強かったけど、やっぱりことりも女の子なだけあるね。

「わあ、みいちゃん似合う♡一緒に写真撮ろ!」

カシヤ

いや、早すぎでしょ。カメラ見て笑顔を作るひまもなかった。

もう一度鏡の自分をよく見てみる。

ロミオっていうより王子様じゃないかってツツコミたくなるような白を基調とした衣装。

金髪碧眼の絵里ならまだしも平々凡々の私じゃな…

そしてなによりびっくりしたのは絵里の衣装とはまったく違うことだ。

髪型は肩くらいの髪を三つ編みのハーフアップにされてる。

「恥ずかしいなあ…」

と、思っている間にことりにずるずると引きずられて絵里たちどころに連れて行かれる。これぞまさに連行…なんでもないです。

「さ、みいちゃんの登場だよ♪」

さつきまでは恥ずかしくてあれだったけど、ここまできたら楽しまないで損だよね！

教室に入ると背筋を伸ばして歩く。ちよつとでもロミオいや、かつこい王子様に近づけられてればいいんだけどね。

はあ：演劇部のみんなはなぜか写真を撮っているし。やっぱり衣装がすごいから目立つよね。

希の前まで来て微笑む。希も微笑み返してくれた。

「ジュリエット、お迎えにあがりました」

ひざまづいて手を取る。

「ロミオ！会いたかったわ」

そのまま数秒間見つめ合う。

なんだか面白くなって二人同時に吹き出してしまった。

「さすが希。すごいかわいい」

「みはねこそめっちやかっこええー！」

「ちよつと、私のこと放置しないでよー！」

突然絵里が私と希の間に飛び込んでくる。

拗ねちゃったかな？

「私もジュリエットがいいわー！」

「いや、絵里はかっこいいからそのままお願いします。さ、希。宣伝に行こう」

「うん。ちゃんとエスコートしてな？」

「任せといて」

なんて元気に校内を回っていたはいいけれど。
なにこれ。

「みはねちゃん♡本物の王子様みたい！」

「こっち向いて!!!」

「写真撮りたい!」

「きゃー!王子ー♡」

さつきからこんな感じで囲まれている。

少しでも手を離れたら希とはぐれてしまいそうだ。

それだけは避けたいので壁のほうまで希を押しやる。そのまま壁に後ろ手をつけて自分はみんなとの壁になった。

「ごめんねみんな。ジュリエットがやきもち妬いちやうからさ。写真は明日の劇の後に撮るから…ね?」

今私は王子様。王子様だからお姫様は守らなきゃ。

うん。イエス、王子。

てか、私が王子とか無理があると思います。

とまあこんな感じで宣伝をし終わった後には私も希もクタクタになつてしまっていた。

「みはねモテモテやん」

絵里のところに戻るため、今は誰もいない静かな廊下を二人で手を繋いで歩いていった。その時に、小さく呟かれた希の言葉を私が聞き漏らすわけがなかった。

「そ、そんなことないよ!?それより、希かわいいから誰にも見せたくなかった」

実際希はその性格からか一、二年から絶大の人気を得ている。きつと年上にも人気なんだろうな…

絵里と希みたいな先輩がいたらそりやあ目がいつちやうのはわかるけどさ。

でも私はそれが少し面白くなかったりする。

私の彼女なのに…って。

「もう、そんなんずるいやん!ばか」

「ん。ごめんね。やきもち妬いてるの私のほう…っ…んう!」

いきなり希に手を引つ張られたと思ったたら触れ合う唇。希にキスされたことに私が気づくまで、少しだけ時間がかかった。

「ウチだってやきもち妬いてるもん。みはねはウチのものや」

普段の希なら学校内でキスとか絶対ありえないのに。ずるいのは希だよ。

「ね。もっかいキスしよう？」

キスしたくてしようがないって言ったらちよつとあれだけど…

今すぐ目の前にいる希が私の彼女だって、私のだって感じたい。

真つ赤になつてだめつて小さくつぶやく希。

でも、見つめてくる瞳は熱がこもりすぎているのか涙目になっていて、ああ、希もキスしたいの我慢してるのかな？とか思つてしまう。でも、前回のことがあるから無理になんてすることできないけど。

「そっか。ごめんね」

抱きしめていた希を解放する。そろそろ着替えたいし。

すると希ははつとなつて私の両腕の袖を握つた。

「ちよつと、着替えに行けないんだけど…」

「いや。もっかいぎゅつてしてや」

本当に困る。こういうことされちゃうから我慢できなくなっちゃうんだよ。

でも、我慢。希は私が必死になつてるのわからないんだろうなあ…

「ほら、離れてくれないと困っちゃうよ」

そう言つて顔を逸らそうとした瞬間、強い力に引つ張られて私の体は希に近づく。

「んっ。んんう…好きなん…みはね、ん、ちゆう」

「ん、んっぷはっ。ちよ、希!？」

「みはねがキスしたいっていうたんやもん」

そ、そうだけど…

あんなの。

「ばか。大好き。ほら、一緒に戻ろう」

「ウチも大好きや」
もう一回触れ合うだけのキスをして二人仲良く戻った。

44. ロミオとジュリエットにはキスシーンがある。

「ただいまより、生徒会の劇が始まりまーす！ぜひご覧ください！」
今日はついに本番。あれだけ頑張ったんだから大丈夫だって信じてる。

それと…

「ことり。例の件、よろしくね」

「うん！」

例の件ってなんだって？それは後でのお楽しみってことで！

私は裏方といっても実際やることはない。暇なので舞台袖から絵里と希の劇を見る。

ちよ、二人とも近すぎ！むう：なんか複雑な気分なんですけど…
希はやっぱり照れてるみたいだけど、絵里は慣れているのか難なくこなしている。

なにそれ、私以外の人とそんなに接近して。

ってだめだな私。どんだけ嫉妬深いっていうか独占欲強いんだろ。

「みいちゃん。怖い顔してるよ？」

「あ、ごめんね」

「ううん。どうしたの？」

「嫉妬」

どうせごまかしも効かないだろうし素直に答える。

自分で言っていてなんだか面白くなってしまっ。ことりも笑っているが、それは私につられてだろう。

「あの二人のこと大好きだよ。みいちゃんは。ことり妬げちゃうなあ?」

「ことりはほんと優しいね」

いつも私のことだけを見てくれる。私の喜ぶ言葉をくれるし。私はフラフラ誰かひとりなんて決められなくて、中途半端なことしてるのに。

こんなに優しくされちゃうから甘え癖が治らないんだよ…もう…

「みいちゃん。キスして?」

「…いいの?」

ことりが目をつぶったのを合図に顔を近づけていく。大体の時は目を瞑るが、今回はうつすらと目を開けたままことりのことを見ていた。

触れた瞬間ことりの顔が少し緩んだ。

その反応が嬉しくて、かわいくて、腰を抱いて体をより密着させる。好き。好きなんだよやっぱり。絵里のこと希のこともことりのことも。μ, sのみんなのことも。

「無理して一人に決めなくてもいいんだよ。私たちはずっと待ってるから」

その代わりみんな平等にね。なんて言って優しく笑うからもう一度強く抱きしめた。

そうこうしてるうちに舞台ではもう終盤を迎えていた。二人のキスシーン。顔がどんどん近づいていくたびに私の胸はチリチリと痛む。触れる寸前で止まった。当然のことなのにそれだけでほっとしてしまう私はやっぱりどうかしている。

そのままじっと二人を見ていると絵里と目があつた。

「…っ」

会場がざわつき始める。

絵里が、希に…キスをしたからだ。

会場のみんなが言うように本当にキスをしているように見える、じゃない。本当にキスをしたのだ。

そのあとも演技が続き、無事終了し幕が降りる。

「みいちゃん。準備して」

「あ、うん」

ことりは絵里に駆け寄ると、ロミオの衣装からジュリエットの衣装に変えていく。

私はそれをぼんやり見ながら私もロミオの衣装に着替えた。

「ちよ、なにをするつもりなの!?!」

絵里は突然のことに戸惑っているがそんなのおかまいなしに幕は上がっていく。

幕は完全に上がった。

私はつかつかと歩みを進めて絵里の隣まで行く。

「今日は生徒会の劇を見に来てくれてありがとうございます」

お辞儀を一つすると会場みんなの歓声に包まれる。

「劇は終わってしまいましたですが、少しだけお時間をいただいてもよろしいでしょうか?」

ざわついていたみんなはその言葉を聞くと笑顔でいいと答えてくれた。

「ありがとうございます」

一呼吸置いて絵里のほうを向く。絵里はまだ状況がつかめずにいた。

「絢瀬絵里生徒会長。私たち生徒会役員一同は今まで幾度となくあなたに助けられてきました。時に厳しく、時に優しく。毎日遅くまで学校に残り書類の処理をしている姿を何度も見てきました。そんなあなたを私たちは心から尊敬しています。今期生徒会長お疲れ様でした」

絵里に向かって礼をすると、舞台袖から生徒会のメンバーが出てきた。

希は花束を持っていて、絵里に笑顔でそれを渡す。

「えりちお疲れ様。大好きやで」

「ありがとう希。あなたも副会長お疲れ様。大好きよ」

二人が微笑み合う。会場みんなはお似合いだと騒いでいる。そんなのわかってる、二人はお似合いだ。でも、でも…

「みんなもこんな私についてきてくれてありがとう！大好きよ！」
わー！つと会場が歓喜の声に包まれる。
それを聞きながら幕は降りていった。
そのあとは約束通りいろんな人たちと写真を撮ったり撮られたり。
だから、私は劇でてないんだってば。
そして楽しい時間はあつという間で終わってしまった。

*

しばらくしてみんなの興奮も冷めてきて、もうそろそろ終わりになろうとしている時。みんなに丁寧な挨拶をしている絵里の手を引いて生徒会室まで来た。

無理やり中に押し込んで鍵をかける。

「どうしたのよ」

「べつに、どうもしてないよ」

「嘘。じゃないとこんなことしないもの」

さつきまで楽しかった。楽しかったことに変わりはないけど、やっぱり二人のキスが頭から離れなくて…

「…なんで、キスしたの」

思ったより低い声になってしまった。

自分で思っている以上に頭にきているようだ。

「なんだそのこと。あれは、劇をよりよくするためよ。あとで希にも怒られちゃったけど」

笑顔で答える絵里。

その答えに私はイラついて、笑っていることにムカついて絵里に詰め寄る。

腕を掴んで体を逆転させ、絵里の体をドアに押し付ける。

「そう。だからってキスしちゃうんだ」

私が睨みつけても絵里は動じず、むしろ睨み返してきた。

なんで、こんな顔してほしくないのに。違う。違うんだよ。私は…
「みはねだつてことりと抱き合つてキスしてたじゃない」

「っ!?!…そ、それは」

「いいんじゃないの?ことりはあなたの彼女だもの。キスして当然。たしかに私は希とキスをしたわ。でもそれは劇のためだし、なにも悪くないでしょ?」

見られてたんだ。ことりは彼女だし、付き合っているならキスをして当然だと思う。でも、場をわきまえるべきだった。ことりも絵里も悪くない、私のせいだ。

なんだかも何もかもダメだ。

私は、だれかと付き合つたりするべきではないのかも。いや、誰かに好きになつてもらおう資格なんてない、だね。

「私、最低だ…。もうみんなとこの関係が続けるのは…だめかもね」
思つたよりも冷静な自分がある。やっぱり私はダメダメだなあ。

「ご、ごめんなさい!違うの!そういうことじゃなくて」

なぜか絵里が焦り始める。なんで?そんな焦るようなことなんてなにもないのに。

「いや、こつちこそごめんなさい。やっぱり私じゃ誰も幸せにできないよ…ははっ」

「だから話を聞いて!」

「聞いている。ほんとに最低だよ。二人の劇を見ててイライラしてことにキスしちやつたし…。みんなにも謝らないと…んっ」

なぜかしゃべっている途中で絵里にキスをされる。突然のことに驚いて頭がついていけない。

「ごめんなさい。違うの、話を聞いて。嫉妬…してただけなの」

「嫉妬…?」

「そうなの。ごめんなさい。だから別れようだなんて思わないでっ」

しつと…嫉妬。それって…

「私と一緒」

そうつぶやくなりまたしても口を塞がれる。

何度もなんども角度を変えて。

「ん、ふっ…んむう…んっえ、り」

「んう、はっ…みはね…」

息もそろそろ苦しくなってきた肩をたたくとようやく解放される。

「絵里」

「いやよ。こんなにもあなたのこと好きなのよ。みはねが私のこと好きじゃなくなっても別れたくないの。私と一緒にいて…!」

熱のこもった瞳で見つめられる。こんなにも私のこと想ってくれているのに私は…

「嫌いになることなんてないよ。絵里のこと好きなのに」

「でも」

「でもじゃないの。さつき、ことりとキスしてたのは…絵里と希がお似合いだったから。たぶんイライラしてて、ことりは優しいから…その…」

なんだか泣きそうで少し鼻声になってしまった。

そんな私を絵里は優しく抱きしめてくれて。

やっぱり絵里の匂いが一番安心して。

「ごめんなさい。さつきはあんな態度とって」

「私こそ、ごめんなさい」

そう言って絵里の腰に手を回すと、もう一度しっかりと抱き直してくれた。

「落ち着いたみたいね」

何分か経ったらそう言って離れようとするからそれが嫌で。より力を込めて。

「もっとこうしていたい。絵里といると安心するの」

絵里の胸に顔を押し付ける。

「かわいすぎなの自覚してほしいわ」

ため息をつくとき、また軽く触れるだけのキスをされて手を引かれる。

絵里は自分の席に座ると膝をポンポンと叩くので大人しく絵里の

上に座る。すると後ろからぎゅっと抱きしめられた。

「絵里。絵里は私のものなの、いくら相手が希でも譲ってなんかあげない」

「あら奇遇ね。たとえば、sのみんなとみはねが付き合っていたとしても、あなたはまぎれもなく私のものよ」

そう言つてさらに強く抱きしめ首筋に軽く歯を立てるから、ある感情がふつつつと胸の奥底から湧き上がってくる。

「ねえ、そのまま痕つけて?」

「いいの? 本当につけちゃうわよ?」

「うん。絵里のものって証がほしいの。その代わり私もつけるけど」

「ふふっ望むところよ」

そのまま絵里が後ろから私の首筋に吸いつく。たまにチクリと痛みが走るけど、それすらも嬉しくて。

絵里の上で体を反転させて向き合う。絵里は微笑んで私に首筋を見せる。

それだけで我慢できなくなって、今度は私が絵里の首筋に顔を埋める。

一個、二個、と丁寧に跡をつけていく。

まあ、つけてるっちゃつけてるけど見えない位置につけてはいるから安心してほしい。

だってほら、仮にもアイドルだしね。

「幸せ。お互いに染まっていく感じ」

「ほんとね」

もう一回キスをしてしばらく抱き合う。

「さ。そろそろ部活行かないと」

「そうね…名残惜しいけど…」

10分間くらいくつついていたのだろうか。もうとつくに練習が始まってしまっている。

「またいつでもできるから。ね?」

「約束よ?」

「もちろん。さ、姫。お手をどうぞ」

そう言つてふざけながら絵里の手をとる。
「ふふっありがとう」

絵里はクスツと笑うと手を握り返してくれた。

*

「つて遅いよー！絵里ちゃんもみはねちゃんも！」

「遅刻するときは連絡してください」

屋上へ行くなり怒られた。

「これだからみはねはまったく…つて」

ジロリ、とにこに睨まれる。

「ちよつとみはね？その首に見える赤い痕は何ニコ？」

「あ、うん。キスマークじゃない？」

堂々とそう答える私ににこは一瞬ひるむ。

その間に絵里にこつそりと絵里のは見えないところにしてあるのを伝えた。

「は、破廉恥です！」

え、この前海未にもつけたと思うんだけど…

「みいちゃん？さつきみんな平等につて言つたばかりだよね？」

こ、ことり。こわいよその笑顔。

「つてことは、みんなみはねに突撃やー！」

ちよ、希ー!!!余計なこと言わないで！

一斉にみんなが突撃してくる。ちよ、やめ！くすぐりたいから！
きやー!!!

みんなにもみくちやにされてそれぞれにキスマークをつけられて
…

「みはね。大丈夫？」

みんなが練習に戻ったあと、絵里が頭をなくでながら心配をしてくれる。

「うん…せっかく絵里につけてもらったのに、どれかわかんなくなっちゃった…」

「そうね。でもとつても嬉しそうよ」

「うん。私は幸せ者だね」

そのまま二人で笑い合っていると、今日一番の海未の雷をいただきました。しかもほとんど私。そりやあ、絵里が怒られちやうより全然いけど…

でも絵里も一緒に怒られてくれて。

しかも怒られてる時もずっと手を握ってくれて…

ほんと絵里はかわいすぎだ。

45. 理事長

朝の教室で睡眠をとるのは私の日課。

最初の頃はずつと起きて外を眺めていたんだけど、最近は鳥のさえずりと登校してくる生徒たちの声を聞いているとついつい心地よくなって寝てしまう。

そんな私をいつもだったらみんなにも言わずにスルーしてくれていたんだけど…

どうやら今日は違うみたいだ。

ガヤガヤと騒ぐみんなをよそに、寝たふりを決め込んでいた私だけど、ついに髪を片方に寄せられさらに騒がれ体を揺すられてしまえば起きるしかない。

「なあに？」

少しだけ不機嫌なのは気づかれなないように笑顔で首をかしげる。

体を揺すっていたであろうクラスメイトの一人はなんとも気まずそうな顔をしている。

彼女の視線と後ろのみんなの視線が同じところを見ているため、なにが言いたいのかすぐ理解できた。

彼女たちはきつと、私の首についている複数の跡が気になって仕方がないのだろう。

「そ、それって…き、キス」

「なんでもないよ？虫にでも刺されたのかも…ね？」

誰かのセリフとかぶせてすぐさま否定をすれば、誰もそれ以上問い

ただしてくることができない。

みんなを利用しているような、悪いことをしているような気がして気分が悪くなる。

これ以上は、笑顔も崩れそうだ。

「ほら、席ついてー」

タイミングよく先生が来たためみんなは席に戻ってくれた。

「はあ…」

何やってんだろうな、私。

女子校で、ましてやこんな目のつくところに赤い痕をつけていれば、誰だつて気になるだろう。

それをわかっていて、今この状況を作ったのは自分自身だ。

しかし、私のほうを見てシユンとしている三人の姿がなんともかわいくて仕方ない。

少し意地悪をしたくなって、口パクで「ばか」と言つて、拗ねた顔をする。

真姫ちゃんと花陽にはちゃんと伝わったようで苦笑いで返された。しかし、凜にだけ伝わらなかったようで、首をかわいらしく傾げている。

その様子に私が笑えば真姫ちゃんと花陽もつられて微笑んだ。

「みんななんで笑つてるのー!」

笑われたのが気に入らなかつたのかさういつて立ち上がった凜。教室は一瞬固まり、ドツと笑いが起きた。

「星空…いきなりどうしたんだ?」

先生はあくまで真顔で凜に声をかける。それがまたなんとも恥ずかしい。

「な、なんでもないです…」

顔を真っ赤にしてストンと椅子に座る凜は、やはり怒りより恥ずか

しさが勝ってしまったようだ。

「あ、そうだ桜」

「なんですか？」

「理事長が、みはねちゃんは昼休みに理事長室にきてねはあとって言ったた」

「がつつり口ではあとって言ったよね!？」

「しかも棒読みすぎて…はあ…」

「わかりました」

なんなんだろう。こんな前もって呼び出されることは珍しいな。

いつもは突然放送で呼びつけたりするから…

これはこれで恥ずかしい。

凜がクラスメイトにからかわれている中、私は一人でひっそりと意味もなく恥ずかしがっていた。

*

いつ来ても緊張する理事長室のドアを軽くノックする。

いつもならすぐに返事が返ってくるのだが、今回は返事が返ってくるどころか人の気配すらしない。

いないなら呼び出さなければいいのに、なんて心で悪態をつきつつドアに手をかける。

中を覗くとやはり誰もいない。

いない時は中で待っていてくれればいい、という理事長の言葉に従って、おとなしく中で待つことにした。

「し、失礼します。いないんで中で待ちますよ」
なんて誰もいないのに。

中に入ったのはいいが、どこにいればいいのかわからない。

「みはねちゃん！」

「きやあ!？」

突然後ろから抱きしめられて、つい女の子らしい声を上げてしまった。

犯人は…

「理事長！びつくりするじゃないですか！」

私の言葉を無視して耳元でクスクスと笑っている理事長。

「ちよつと、聞いてるんですか？」

「聞いているわ。いいじゃない、たまにはこういうことしても」

そうなんとも甘い声色で言つて、私の顔を優しく撫でる。

ぞわり、とくすぐったさが全身を駆け巡り思わず息をのむ。

「ふ、ふざけすぎですよ」

「あら、ふざけてなんかいいわ。こんな見えるところにこんなものつけてる悪い子を、少しだけ…お仕置きかしらね？」

理事長の少し冷たい手が触れたのは、紛れもなくキスマークが付いている場所。なんで知っているのか、なんて考えている場合ではない。

「お仕置きされるようなことはしてません。それに、これはμ'sのみんなから…あ」

「そんなの知ってるわよ？」

向きを変えられてお互い向き合う形になる。

いつも穏やかな笑みを浮かべている理事長はそこにはいなかった。

なんとも真剣な眼差しで見つめられてしまえば何もいうことができなくなってしまう。

無言のままゆっくりと後ろに押されていく。それに合わせて逃げるように後ろへ行けば、ついに机に手が付いてしまった。

「それ以上は逃げられないわよ」

「そ、んなのわかってますよ」

わかってるけど、どうすることもできない。

なんだかよくわからないけど、金縛りにあったかのように体が動かない。

「ふふっ、私が理事長だから抵抗できないのかしら？それとも…」

「理事長にこんなことされるなんて思ってたから、対処法なんてわからないんです！」

理事長はそう、と小さく呟くと私のブレザーを脱がせて机の上に置いた。

「あついわね」

いや、あつくないです。

なんて言葉はさすがに口に出さない。

「こんなバツチリ見えるところに…ことりにも注意しておかないといけないかしら？」

「それはお願いしたいですね」

「そこは正直なのね」

なんだか疲れてきた。

私があ…つとため息をつくると理事長は目を細めて笑った。

「なんですか」

「いや、かわいいなあって。みはねちゃんは本当にかわいいわね」

「理事長はいつもとてもお綺麗ですよ？」

「ついきなりそんなこと言われたら…もう、かわいすぎね」

そろそろこの茶番も終わるだろうか、なんてぼんやり考えながら体勢を戻そうとする。しかし、私の体勢は余計に崩れ、気付いた時には理事長の顔が私の顔のすぐ横にあった。

「あ、の…？」

チュツとリップ音が聞こえたと思ったら、首筋に歯を立てられる。

「ちよ、ま…」

ぐるぐるぐるぐる。

なに。私今どうなってるの？

わからない。でも…この状況は非常にまずい！

「失礼します」

「…!?!」

まずいと思った途端にドアが開き、嫌な汗がつーつと背中を伝う。

これは、入ってきた相手が誰でもとんでもないことになっちゃう！

そつと理事長の肩越しにドアの方に視線を向けると、そこには見慣れた2人が。

「み、はね…？理事長!?!」

「これは、あかんとこころに来てしもたなあ」

よりによつて、なんでこの2人なの…

なんだか2人から真つ黒いオーラが見える。

そんなこと気にしていないのか、理事長は微笑んでいる。

私は理事長からするりと抜けだすと制服を整えた。

「絵里、希、なんでもないからね」

「あら、なんでもなくわないわよ?」

「なんでもないんです!」

「もう、つれないわねえ」

理事長、その笑顔は絶対この状況を楽しんでいるからですよね。

「それで、何の用ですか?」

絵里は特にこれといって深くは追求しなかった。これは、今は生徒会長モードの絵里、ということか。

そのことに理事長は驚いたようで、椅子に座っていつもの凜とした大人の女性の表情に戻った。

「生徒会のことよ。次期生徒会はどうなるのかしら？」

にこり、と理事長は笑顔を絵里に向ける。

それに答えるように、絵里も笑顔になった。

なんというか、営業スマイル感がすごく出ている。それは希も気づいたようで、絵里を呆れた顔で見ている。

「高坂穂乃果に生徒会長をお願いすることにしました」

「そう。楽しくなりそうね？」

「そうですね」

「ええ」

なんだかとんでもなく怖い。

両者全く目をそらさずに笑顔をキープしている。

「理事長？もうほかに用事はないですよね？」

「ないわ。あ、そうだ！みはねちゃん。今日から毎日放課後に私のお手伝いでもしない？」

「却下です！」

突然の理事長の発言に、言われた私ではなく絵里と希が反対した。

「こんなちよつとしたことで喜んでいる私は相当ちよろいと思う。」

「だそうですねよ。まあ、お手伝いくらいはいつでもしますよ」

そう言っつて携帯を出して振ると、理事長はふわりと穏やかな笑みを浮かべた。

「ほんとに、みはねちゃんには敵わないわ」

その言葉の意味はよくわからなかったが、なんだか心があつたかくなる。

「それでは、失礼します」

ほな行くよ、と希に手を引かれ理事長室を出た。

「もう、みはねは無防備すぎるのよ」

「そうやで。ウチらが来なかつたらどうなつてたことやら」

希と絵里に挟まれて交互に小言を言われる。

「ごめんなさい」

希は手を繋いだままだし、絵里は私の腕に絡みついてくる。

もう、そんなにしなくても誰も私のことなんて取らないよ…？

「いや、あのままだつたらみはねは間違いなく理事長に襲われてたわね」

「そうやね。理事長の目、本気やったし」

「あれ？私声に出してた？」

アニメ二期

46. 真姫ちゃん

〈真姫〉

穂乃果が生徒会長になって数日、放課後の屋上では二年生三人とみはねの姿がなかなか見られなくなった。見られなくなったと言っても練習が終わる十分前くらいには必ずくるのだけど…

べ、べつに寂しいわけじゃないわよ？

新生徒会が始まってから仕事を覚えたりとか大変なのもわかる。それに、海未やことりはそれなりに仕事ができるみたいだけど、生徒会長の穂乃果があの様子じゃなかなか仕事が終わらないのもわかる気がするし。でも、でも…それだと生徒会のメンバーであるみはねも部活に来れないじゃない！

ドカツ

「わあっ真姫ちゃんごめんね！」

「いや、今のは私が悪いわ」

「真姫。練習中はちゃんと集中しましょうね？」

練習中にもかかわらずこんなことを考えてしまうのはあの人のせいだ。それに加えて花陽とぶつかって絵里に注意されてしまうのもあの人のせい。

部活に来れないならまだいいのだけど、昼休みの時間も二年生の負担を減らそうとみはね一人でずっと書類と向き合っているせいで音楽室の二人きりで過ごす時間がなくなってしまった。一度みはねにわざわざ一人で昼休みにやる必要はないのでは？という質問をしたら、どうしてもみんなに負担をかけたくないらしく、苦笑いでみんなには内緒にしててと言われてしまった。

そして何より私の機嫌を悪くさせるのは終わる十分前に来た二年生たちだ。

「遅れちゃってごめんねー」

「穂乃果のせいで思った以上に時間がかかってしまいました」

「生徒会ってやっぱり大変〜」

「遅れてごめんなさい。明日は普通にこれらと思うので」

三人ともなぜかとても笑顔なのだ。

みはねだけは疲れ切った顔をしているのに。

どんなわけがあるのかしらね。気になる。

「ねえ、エリー。今日一緒に帰らない?」

「真姫が誘うなんて珍しいわね。もちろんいいわよ」

絵里と二人きりで帰るなんてもしかしたら初めてかもしれない。

「で、今日はどうしたの?」

絵里はやっぱ気づいていたみたい。

「実は、みはねのこととかで聞きたいことがあって…」

「ふふっみはねとの時間が減って寂しいのね」

「べ、べつにそんなんじゃないわよ!」

ムキになって叫んでしまい、しまったと思った時にはもう遅かった。隣で絵里の笑い声がより大きくなった。はあ、何やってんのよ私。

「それで、聞きたいって生徒会のこと?」

「うん」

そうねえ、と少し考えたそぶりをすると絵里は手を引いて公園に行きましようと言って歩き出した。

公園のベンチにつくと二人並んで座った。

「生徒会でのみはねはすぐく頼りになるのよ。ほら、仕事とかすぐ終わらせてくれちゃうし」

「それはわかるわよ。かなり努力もしているもの」

「あら、その様子だと真姫はお昼休みのこと知ってるのね」

驚いた顔でそう言われた。

絵里が知ってるのはなんとなく予想がついたけど。

「まあ、ね。私が気になってるのは練習に来た三人がなんであんなに嬉しそうなのかよ!」

「やっとな練習に来れたからじゃない?」

絵里はくすくすと笑っている。この様子からじゃ絶対違うわね。

「本当のこと言って」

睨みつけると肩をすくめて冗談よと笑った。

「仕事をしているみはねがとつてもかっこいいからかしらね。ほんとに、誰が見ても百人中百人がかっこいいって見惚れると思うわ。それに、教えてくれる時の距離感が…ね」

そういうことか。でも、それなのに絵里も希も一緒に仕事していてよく平気だったわね。

「私や希は慣れちゃったっていうのもあるけど、影で周りの人の何倍も努力しているのを知っているからかしらね。それに、みはねったら自分から近づいてきて照れちゃうから」

絵里は私が質問するよりも先に答えてくれた。理由はわかったし仕方がないのもわかったけど、やっぱり二人の時間がとられてしまったように悔しい。

「そんなの、我慢するしかないじゃない」

聞こえないように呟いた言葉は、もしかしたら隣にいる絵里に聞こえてしまったかもしれない。

「あ、そうそう。かわいい真姫ちゃんにいいこと教えてあげるわよ?」

「か、かわいいってなによ…!」

「あら? 教えてほしくないのかしら?」

「べ、別に聞かないなんて言ってるじゃない!」

絵里って意外とSっ気がかるのかしら? さっきからいいように遊ばれてる気がする。

「私、お昼休みにたまにみはねの手伝いをしに行くのよ。って言ってもご飯を食べないみはねに無理やり食べさせたり、ほんとにちよつと

だけ書類の整理をやるくらいしかないので」

絵里はみはねとの時間があるのね。と考えてしまっている時点で私は相当独占欲が強いみたい。

「それで？」

「毎回みはねは口癖のように早く終わらせないと言って言うのよね」

「は？それだけ？」

「ふふっちゃんと続きがあるわよ」

やっぱり私のことバカにしてるの？

「理由を聞いたのよ。そしたら、早く部活に行かせてあげたいし自分も早く行きたいって」

絵里は一呼吸を置くとまた口を開く。

「みんなとの時間を大切にしたいから。そのために真姫ちゃんに悪いことしちやってるけど、早く真姫ちゃんとも二人きりで過ごしたい」って

そ、それって…みはねも私と同じ気持ちってこと…？

「あ…え…」

「真姫はみはねに愛されてるわね。ってこの話秘密だったんだ。でも、私の前で他の子の話をあんな顔でするのが悪いわよね」

やっぱりなぜか楽しそうに笑う絵里。そんな絵里の優しさも嬉しかった。普通なら怒ってもいいところなのに。

「エリー。ありがとう」

「どういたしまして。頑張りなさいよ？そのかわり私も頑張るから応援してほしいかな？」

「うん。エリーも頑張れ」

絵里ともちよっぴり距離が近づいた今日。

明日はみはねともっと一緒に居られますように、というらしくないことを考えながら家に帰るのだった。

最近：っというか、生徒会が新しく始まってから忙しくてしようがない。今さらになつて絵里と希すぎさがわかって、この前出会い頭にお礼を言ったらびっくりされてしまった。

海未とことりは飲み込みも早いし頑張ってくれているけど、穂乃果がどうしても：はあ。

なぜか丁寧に教えているのに覚えようとしてくれない。それどころかわざとわからないふりまでしてくる。海未にもきつく怒られるみたいだけど、まあ、穂乃果の仕事くらいなら私でもカバーできるし：

最近は大切なお昼休みの時間を使って仕事をしているおかげで落ち着いてきた。

「真姫ちゃん！」

「な、なによ」

「今日は一緒に音楽室に行こう！」

「し、仕事は「終わった！」」

なかば強引に真姫ちゃんの手を取って音楽室に行った。

音楽室に入るなりドアの鍵をちゃんと閉めて後ろから真姫ちゃんに抱きつく。

ふわりと真姫ちゃんの香りがして、なんだかひどく安心する。もうずっと二人きりの時間なんて取れてなかったし。

「な、なによいきなり」

「やっとなんて二人きりになれたから嬉しくて」

バカね。なんて言いながらこっちに向き直って抱きしめてくれた。

「真姫ちゃん寂しかった?」

「べつに」

「そっか」

「はあ…寂しかったわよ。当たり前じゃない!その、す…き、だから!」

「ま、真姫ちゃん…」

いつもはない素直な言葉に涙が出そうになる。

「あのさ、今さらだけど真姫って呼んでいいわよ」

「え、真姫ちゃんを呼び捨てに!?!」

「そ、そんなに驚くことじゃないでしょ!呼ばなかったらもう二度と音楽室に入れてあげない」

なんて理不尽な。てか、音楽室に入れないとかどこで真姫ちゃんと二人つきりになれっていうんだ。

「それはやだな。大好きな真姫との時間がなくなっちゃうじゃん?」

「な、ちよつと!いきなり呼ぶのやめてくれる!?!」

「なんで怒られるの!?!」

もうやだ。顔を髪色と同じくらいに赤くさせちゃって、照れてますって言ってるようなもんじゃないか。

「みはね」

小さく名前を呼ばれて顔を覗いてみれば、なんだかとても物足りなさそうな顔をしている。これは、お許しをもらえたってことだよな。

「真姫。好き」

私よりもすこし背の高い彼女に少しだけ背伸びをしてキスをする。

「ん。今まで寂しい思いさせたんだから、今日はなんでも言うこと聞いてもらおうよ」

「うん。もちろんそのつもりだよ」

そう答えると真姫は当然とでも言いたげに笑いピアノの椅子に座った。

私もいつも通りピアノの椅子に横向きに軽く座る。

「じゃあ、今日は歌ってもらおうかしら」

「え、私が…歌うの…?」

私たぶん下手だと思っただけ。今まで歌とか歌ったことないし。「何にしようかしら？・やっぱ最初は愛してるばんざーい！かしらね」いつもならそんなに笑わないのに今日は顔が緩みっぱなしの真姫。その心からの笑顔にやられてしまった私は歌わないなんて選択肢はもうなくて。

「はあ…愛してるばんざーい♪ここぞーよかったー♪」

歌い始めると私の声と真姫のピアノの音が交わっていく。歌うってこんなに気持ちのいいものなのか。完全にこの音楽室は私と真姫の二人だけの世界が出来上がっていた。

いつの間にか真姫の歌声も合わさっていて、私もより感情がこもる。愛してる。みんなのこと、真姫のこと。

いつの間にか歌は終わっていて静かになる。

「あの…真姫…？」

目をつぶったまま動かない真姫に声をかける。

「あ、あの」

「もう…だ…」

小さく口が動いた。が、何を言っていたのか私のもとまで届かない。い。

「ん…？」

いきなりこつちを向いて肩を掴まれる。

「私以外の前で歌っちゃダメだから！」

え…？ちよつと話が見えてこない。まさか、人前で歌っちゃいけないほど音痴だったのかな。

「う、うん。ごめんなさい」

「ほんと、なんで今まで気づかなかったのかしら」

「へ？」

「だーかーら！私が認めてるんだから素直に受け取りなさいよ！」

「あ、ありがとう…？」

「歌上手いのを知っているのは私だけ…ふふっ嬉しい」

普段はなかなか見せてくれない緩みきった顔で、なにやらブツブツ呟いている真姫。

「どうしたの?」

「なんでもないわよ!とにかく、私の前でしか歌っちゃいけないんだからね!」

「?…は、はい」

その後もいろいろと歌わさせられた。

結構二人ともノリノリで楽しんでしまったせいであつという間にお昼休みは終わってしまった。

「このことは私とあなたの秘密よ?絶対だからね?」

午後の授業が始まった後も教室に入る前に耳元で囁かれた時のことが忘れられない。

なにあれ、なにあの表情。なにあの声。真姫って大人っぽすぎって
いうか…

この赤くなつた顔どうしてくれるんだ…ばか…

真姫を見ると、授業に集中しているようで見られていることに気づかない。

「真姫があんな楽しそうにピアノを弾く姿を一番近くで見れるのは、私だけ…」

こつちを向いた真姫に微笑みかけると、真姫も小さく笑ってくれた。

小さな幸せ。

47. 二度目のラブライブー

「え？ラブライブの第二回大会？」

「はいっ！そうなんです！しかも、今回の大会は地区予選型で行われるので私たちにも大会に出れるチャンスがありますよ！」

またラブライブに挑戦できる。今度こそ…！

「でも、地区予選ってことはA—RISEとぶつかるんじや…」

「たしかに…でも、今度こそチャンスなのよ！」

にこ…そうだね。誰とぶつかろうが関係ない。私たちは私たちの目指すところへ進むだけ！

それに、みんなの目がここ最近で一番輝いている。

「出なくてもいいんじゃないかな？」

えっ？

声のした方を向いてみると、穂乃果がいた。

「どういうことよ!？」

「だから、ラブライブには出なくてもいいんじゃないかなって…」

「えっと、理由は？」

絵里が優しく問いかける。

「私はみんなで歌って踊ればそれでいいかなって」

ああ、そういうことか。前回のことも少なからず気にしているんだろう。

「ありえないんだけど!？」

その言葉を聞くなりになが叫ぶ。

ちよ、にこ顔怖いから。落ち着いてください。ほんとに本気で。

でも、穂乃果を誰も攻めることなんてできなくて、各自もつとよく考えてみるということはこの場はお開きになった。

*

次の日の朝、私はいつもの通り教室で寝ていた。

なんだかひどく体が重いのはなぜだろうか。

時間はまだ5時半。こんな時間学校にいる人がいたとしたら、相当物好きだと思う。

「みはねーちよつと話しがあるんだけど」

「に、にっ?」

「早く、ついてきてー!」

突然のにこの登場に頭が全くついていけない。なぜか腕を引つ張られ、半ば引きずられているんじゃないかって感じで廊下を突き進んでいく。

にこに無理やり連れてこられたのは屋上だった。

「どうしたの?」

「だから、話があつて」

あきらかに震えてるじゃん。寒いなら教室でもよかつたのに。

「なに?」

にこにブレザーをかけてあげながら話の本題を話すよう催促する。

「今日の放課後、穂乃果と勝負してくるわ」

「えー…つと?」

「私が勝ったらラブライブ!に出るっていう条件をつけて戦うの!」

あーなるほど。にこの本気は前回の時からわかっていただけ、朝早くに私に言いに来たつてことは他のみんなには言わないつもりなのかな?

「そっか。場所は?」

「神田明神かしらね」

「ん。じゃあ今日の練習はなしだね。にこ…負けちゃダメだよ?」

「あつたりまえでしょ!」

そのにこのかつこよすぎる笑みに見惚れてしまう。にこつてたまにぶりっ子的なのするけど(それもかわいいけど)絶対このかつこい

い姿をみんなに見せたら好きになっちゃうよね…

なんだか、今実際見ているわけでもないのに嫌だなんて気持ちが大きくなつて、私よりも小さいにこを両腕で包み込む。

「いきなりなによ」

「いやー。寒いなつて」

「あつそう。にこにブレザー貸すからでしょ」

「風邪引いたら困るし。それにこうしてればあつたかいしね」

なぜかにこは盛大なため息をつく。

「あんたもかなりたらしよね。みんなこんなやつに騙されちゃつて」

「ははつ。好きな人にしかこんなことしないし言わないよ」

今この小さな彼女に私たちが、sの未来が託されている。いや、最初の道が彼女なだけであつて、もちろんみんな未来を切り開くけどね。

「ばか。あんたにだけよ。こんな気持ちになるの」

「へえ、どんな気持ち？」

意地悪してやろうと思つて聞き返すが、にこの答えはとても私の考えを上回っていたようで…

「こんなにくつついていたいのも。もっと触れて欲しいって思うのも。なんだかいつも目で追つて、無茶してると一番に助けてあげたいし。それに…」

近くにあつた顔がだんだん近づいてきて気付いた時にはもう重なっていた。

「キスしたいのもみはねだけ」

「…っ！あんまかわいいことしないでよね」

今自分の顔がどうなっているのかがさむいせいで余計にわかる。

あつい。

「さ、そろそろ戻るわよ。あつつくなつてきたし」

「にこのせいじゃん！」

「あーもうっさい」

ふたりして言い合っているが下を見ると指が絡まってしつかりとつながっている。

こーゆー自然な関係をもっと深く築いていけたらいいな。

屋上でかなりの時間話していたのか校舎内には生徒がちらほら。

なんだか手を繋いで歩いているの、にこは嫌じゃないかな？

「ねえ、手繋いでいいの？」

「は？繋ぎたくなかったらとつくに振り払ってるわよ」

え、振り払われてたかもしれないの？なにそれ悲しい。

「そか。あ、もう教室ついちゃったね」

「そうね。送ってくれてありがとう」

目をそらしながらお礼を言われても…

そう思つてにこの顔をつかんでこつちを向かせる。

ぷつなんだかへんな顔。

「なによ」

笑つていたら睨まれてしまった。

「なんでもない。バイバイ」

ちゃんと目を見て言う。すると、にこの後ろの方になにやら見覚えのある顔が二つ。

「わしわしMAXやー！」

「ぎやあああああー！」

「ふふつみはね、にこ。おはよう」

希とにこは仲良いなあ。絵里なんか慣れてるのか、そんな二人を温かい目で見守っている。あ、また捕まっちゃってるよ。

横からくいつと制服の裾を引っ張られる。

「朝から随分とラブラブなのね？」

隣を見ると、そこにいるのは笑顔の絵里。

笑顔…待って、笑っているけど目が笑ってない…！気付いた時にはもう遅かった。

肩を思い切り押され壁に押し付けられる。

絵里の長くてすらつとした足は逃げられないようにか私の足の間、いわゆる股ドン？をしている。あごを持たれ上にあげられると背の高い彼女と目があつた。

「え、り…っ？」

その言葉にはなにも答えてくれず、顔がどんどん近づいてくる。キスされる…と思ったが、絵里の顔は私の耳元に持つて行かれた。「期待した?…今したらお仕置きにならないじゃない。だからしてあげない」

なんともSつ気の強い発言だったような気がしたが、いつもより低く甘い声で囁かれたせいか顔に熱が帯びてくる。

「ほら、ちゃんとお願いできたらしてあげるわよ?」

なんだか絵里に耳元でなにか囁かれるたびに頭の中がぐつぐつと沸騰するような感覚に陥ってぼーつとしてしまう。

その熱をなんとか逃したくて、どうしようもできなくて顔を絵里がいる方とは逆に向ける。うるさい心臓を落つけようとするとするたびに存在を示すかのようにばくばくと高鳴っていく。思わず熱い吐息が漏れてしまい、ここが学校だということを思い出し余計に熱がこもる。

「絵里…いいか、げんに」

「求めているのはどっちかしら?」

確かにこのままいくと、キスを懇願してしまいそうだ。でも、ここで、求めたら。

「だめ、だから。…っ」

どうしようもできなくて。本当にどうすればいいのかわからなくて。ただ、今絵里の思い通りの行動はしてはするもんかという気持ちがあつて…じわりじわりと瞳に涙がたまっていく。

こんな意地悪しなくていいじゃんか。

我慢の限界がきて、絵里の体を力の限り押す。

突然のことにびっくりしたのか絵里は尻餅をついてしまった。

いつもならすぐに謝って手を差しだすくらいのことではできるはず。しかし、今の私の頭ではなにもすることができない。

「…っ」

どうしよう。どうすればいい?考えようとすればするほど頭の中がこんがらがってくる。

「みはね?…どうしたん?」

希が私たちの異変に気づいたようだ。

「つて絵里！何やってんのよ」

廊下に尻餅をついている絵里をにこが起き上がらせる。

その様子をぼんやり見ながら私は希に優しく抱きしめられることしかできない。

「大丈夫だからね」

そう言いながら優しく頭を撫でられ、背中を一定のリズムで叩かれる。希の胸に顔を埋めしばらくそうしていると、不意に顔をもち上げられた。

「落ちついた？」

「うん。希ありがとう」

また優しく頭を撫でると一つ優しいキスをくれた。

それだけでさっきまでの熱が嘘みたいに冷めていって、ぽかぽかと暖かい気持ちになる。

「で、えりちゅ？いったいみはねになにしたん！」

希は絵里が何かしたと思っていて怒る。

「ちがっ絵里は悪くなくて…！」

絵里はにこに頭を叩かれて、見るからにしょぼくれていた。なんだかさっきまでの様子と違いすぎて笑いがこみ上げてくる。

「ごめんなさい。調子に乗りすぎたわ」

「あんた、壁ドン禁止ね。天然たらしが余計なことするんじゃないわよ！このポンコツ」

「ウチらのかわいいみはねをいじめちゃあかんよ？次いじめたら…わかってるよな？」

「はいい。ごめんなさい」

どんどんと小さくなっていく絵里。

「私は大丈夫だから、二人ともその辺にしてあげて」

希の腕から出て絵里の前まで行くと、さっきまで希が私にしてくれていたように綺麗な金髪を撫でる。

「ごめんなさいみはね。あなたのこと大好きなの…」

「わかってるよ。だから気にしないで」

きつといつも絵里と違いすぎてびっくりしただけ。怖かったけ

ど、その、かつこよかったとか思ってしまったている私もいるわけで…
本当に食べられちゃってもいいかもとか思ってたし。これから先
はそうなる前に反撃しないと危険だな…

いや、その前に自分の体が自分の体じゃないみたいだ…うまく気持ち、感情が制御できない。今まではちゃんと隠すことができてたのに。

いや、気のせい…かな…？

ああ、なんだか頭がいたい。

48. おかしい日

いつも通り退屈な授業を受けて、休み時間には周りの人と話したりいつも通りに過ごす。

やっと放課後。長かったような短かったような。ぼーっと過ごしていたからかよく覚えていない。

お昼休みにいつも通り真姫と音楽室に行ったが途中で怒ったような呆れたような顔で寝ててって言われちゃったし…

あ、そういえばこれからこと穂乃果は神田明神に行くんだった。部活を休みにするとはあえて言っていないので部室に向かうことにする。

ふと外に目を向けると雨が降り出してしまっていた。

なんだか気持ちまで沈んでいってしまうような感覚になる。今日はなんだか調子が悪い。

そうこうしているうちに部室までついた。中からはもうみんなの話し声が聞こえてくる。

それだけで元気をもらえる気がする。

「大丈夫。みんなの笑顔は私が守るよ」

ガチャ

「みんな。突然だけど今日は部活なしにするから。神田明神に行こう?」

「な、なんでにや!?!」

「いきなりやな。まだ来てないにこっちや穂乃果ちゃんにも伝えな」

どうせ雨降ってるから外では練習できないし。

「伝えなくて大丈夫だよ。ほら…行こ」

「ちよつと理由も説明しないの? 今日のみはねおかしいわよ?」

絵里に言われてそれもそうか…と思いなおす。ひとつ息を吐くと後ろにいるみんなに笑顔を向けた。案の定みんなの頭の上にはクエスチョンマーク。

「神田明神でにこと穂乃果がラブライブ！出場についての話をしてるんだよ。たぶん、にこが説得しようとしてると思う」

「にこちゃんか？それを早く言いなさいよ」

「ご、ごめん。だから、早く行こう？」

なんだか頭がいたい。そんなこと言ってられる場合じゃないのに。みんなは急げ急げと昇降口へ向かう。

さっきまでみんなのことをせかしていた私はもうとっくに置いていかれてしまったようだ。

「なんか、ほんとどうしたんだろ」

ぽつり、小さくつぶやいた言葉はどこに届くわけでもなく消えた。みんなの背中はどうんと小さくなっていくばかり。

急がないと。そう思っただけで走り出そうとした瞬間、視界がぐらついたかと思えば真っ暗になった。意味がわからない。

「みはねっ」

誰かに名前を呼ばれた。

やわらかい。いい匂いがする。この優しくてあたたかい匂いは…

「っっ!？」

「みはね？大丈夫？」

やっぱり希だ。

「後ろみたらふらふらしてるし、いきなり倒れそうになるわでびつくりしたわあ」

「ご、ごめん。自分でもびっくりしてる。大丈夫だから行こう」

「休んどいた方がいいんじゃない？」

「いや、平気」

立ち上がって歩きだすと、希は何も言わずに隣まで小走りできて私の腕をとる。

「また倒れたりしたら困るやんなあ」

「ありがとう」

やっぱり希は何も言わなくてもわかってくれる。それだけで嬉しかった。

私と希、相合傘をして歩く。少し先には絵里と海未とことり。さらに先には凜と手を引かれて歩いている花陽。それを見ている真姫。さつきからチラチラと絵里に見られている気がするが、気にしないことにしよう。

「大丈夫かなあ？にこっち」

「どうだろう。大丈夫って信じるしかないけどね」

「せやなあ」

希の肩が少し濡れてしまっていることに気がついて傘の位置を調節する。

「あの…なんでみいちちゃんと希ちゃんは同じ傘を使っているの？」

いきなり振り向いたことりに私も希もびっくりしてしまう。危うく傘を落としてしまうところだった。

「や、えっと、私がお願いしたんだよ。希の傘入りたいーって」

「そうなんですか？私の傘でもよかったですよ？」

やけにそわそわしている海未。

ああ、そっか。最近ことりや海未と二人の時間取れてなかったかも。

「じゃあ、今からお邪魔してもいい？」

「もちろんです！」

ほんとに嬉しそう。かわいいなあ。

対してことりはちよつと渋い顔をしている。

「ことりは帰りね？」

「う、うんっ！」

ことりの顔にもばあつと笑顔になった。

よかった…

希に傘を握らせて海未の傘に入ろうとすると、手を引つ張られて希のところに戻って来てしまった。いきなりどうしたんだろう。

「みはね、大丈夫？」

なんだ、そういうことか。

「大丈夫だよ」

「そっか。その…今日はうちに泊まらん？や、泊まってほしいんやけど」

やっぱり希は優しい。だからついついその優しさに甘えてしまう。「そうする。ありがと」

につこりと笑った希の顔を見てから海未の傘に入らせてもらった。そのあと神田明神についてみんなの想いを穂乃果に告げた。

大丈夫。みんなもついでる。

そんな気持ちも伝わったのか、はたまた穂乃果も元々そう思っていたのかラブライブ！に出場することを決めたのだった。

「雨、やめー！！！！」

まさか穂乃果がそう叫んだ瞬間にほんとに雨が止んじゃうなんてね。

なんだかこれからこのメンバーなら奇跡を起こせる。そんな気がするんだ。

49. 甘やかす、甘やかされる

ウチの好きな人、大切な人：いや、恋人さんはなぜだか自分のことは全く興味や関心がない。

簡単に言うとは無理をしすぎる。

今日の朝からなんだか様子がおかしいと思っていたら放課後いきなり倒れるし。受け止めてみたらみただですごく熱いし。絶対熱あるやん。体調が悪いことに気づいているのかよくわからなかったから、今日はうちに泊まらせることにした。

今は神田明神からみんな帰っている。穂乃果ちゃんが雨を止ませた？おかげで相合傘とはいかないけれど、行きの時の約束どおりことりちゃんと手を繋いで歩いているみはね。

その様子をえりちはちらちらと何度も羨ましそうにみて、その後なにを思っているのかとても悲しそうな顔をする。おおかた朝のことを気にしているのだろう。未だ声をかけられずにいるということは相当だと思う。

まあ、周りのことしか見ていない彼女ならえりちのことも気づいているのだろうが、今はその余裕がないのか、はたまたこちら朝でも朝で一件を気にしているのか何かアクションを起こすようなこともなかった。

はあ：大好きな親友のためにも今日みはねにその辺のこと聞いてみるしかないなあ…

「ねえみいちゃん。今日、このままうちに泊まっていけない？」

ことりちゃんのその一言にドキリとする。もし：もしみはねがうちに泊まることを望んでいなかったら。もしうちに泊まるという約束を忘れていたら。

「あ、ああ…今日はやめとく。ごめんね？あと、ありがとう」

「そっか…ううん！こっちこそごめんね？」

「また今度誘ってくれると嬉しいな」

「うん！」

ああ、ことりちゃんに悪いことしているはずなのに、わかっているはずなのにほっとしている自分がいる。

みはねのちよつとしたことだけで一喜一憂しているのがなんだかおかしい。

もうウチ、めちやめちやみはねのこと大好きやん。どうしてくれるんよ。ばか。

みはねの断り方がうまかったためか、ことりちゃんとみはねは仲良く歩き続けた。ことりちゃん家に着いた時、ことりちゃんはやはり少しだけ寂しそうな顔をしたが、みはねが今度は泊まらせてもらうね、と言うと笑顔で家に入っていった。

やつと二人きり。

「みはね」

「ん？」

「や…なんでもない」

「ふふっどーしたの？」

そう言いながら手を繋がれる。

あまりにも自然にそうするものだから、一瞬反応が遅れてしまった。

「周りの人に見られてるよ」

「え？それは希がかわいいからみんな見てるんだよ」

いや、そういう問題ちゃうし。

いや、でも、女子同士が手を繋いで歩いていることを除いてならば、みんなみはねのことを見ていると思う。みはねはそれくらい目を惹く存在なのだ。

ほら、あそこの男子二人組見てみ。どう考えてもみはねのこと見て写真撮ろうとしてるやん。

「みはねのあほ。普通にみんな、みはねのこと見てるやろ」

「はあ…これだから希は」

なぜかため息。ため息つきたいのこっちや！

「あ、あの…」

ほら、さつきこつち見てた二人組がみはねに話しかけてきた。

「どうしたんですか？」

「あ、あの！写真…一緒に撮ってもらってもいいですか!？」

ほら、ほらあ！だから言ったやん…

みはねはウチのなのに。普通に考えて女の子と釣り合うのは男の子。ウチとみはねは女の子。きつとかつこいい素敵な男の子が現れてしまったらウチらの関係は終わってしまう。

「ごめんなさい。私はそんなこと言ってもらえるような人じゃないですよ…それに…今下校中ですし」

「そう…ですよ。いきなりすみませんでした」

「いえ、こつちこそごめんなさい。嬉しかったですよ」

ふわりと微笑むみはねに二人の顔が赤くなる。もう…ほんと自分のこと全然わかってない。

二人がいなくなった後、なぜだかみはねの機嫌がいい。鼻歌でも歌い出しそんな雰囲気だ。

「よかったやん。男の子二人に言い寄られて」

「え？なにが？」

うちが嫌味なことを言ってもニコニコの顔をキープしたまま。なんやこいつ、イラつてくるなあ…

「べつに！…みはねなんか嫌いや」

あ、ちよつと言いすぎた。嫌いなわけがないのに…

後悔とともに、ゆるくなってしまうたみはねの手をキュツと握り直す。

「そっか、嫌いか。希がやきもち妬いてくれてるって思ってたけど、勘違いだったのか…」

「え、え？」

「嫌いなんですよ？私のこと。ごめんね勘違いしちゃって」

待って。まさかそれでニコニコしてたん？

「さつきまでニコニコしてたのって…？」

「希がやきもち妬いてくれるって思ってた嬉しかったからだけ」

ああ…勘違いしてるのはウチの方やん。

「さっきの言葉取り消してほしいんやけど…ダメ？」

「あははっ了解しました」

みはねがウチの手をぎゅっと握り返してくれた。

やっぱりウチはみはねのことなんか嫌いになれるわけないやんなあ？

*

家に着いてすぐ、ウチはとりあえずみはねをベッドに座らせた。

「はい。熱はかって」

「え？なんで？」

もう、まだ気づいていないん？ほんとばかやんなあ。

頭にハテナを浮かべているみはねに無理やり体温計を脇に挟ませる。

「そのまま動いたらあかんよ」

数分後、体温計の音になる。

さてさて、熱は何度かなあ？

「ほら、早くウチに見せなさい」

「え、やだ」

なんでここでわがまま言うんよ。

熱あることくらいわかってるわ。

「はやくー！」

「う、うう…絶対この体温計壊れてるよ…」

渋々と差し出された体温計の表示を見てびっくりする。

「38.6!?!みはねアホやないの!?!」

「な、絶対それ嘘だよ」

希といちやいちやしてて体温上がって、なんてふざけたこと言ってるみはねを少しきつめに叱る。

「いいからはやく寝て」

しゅんとなつてしまったみはねを部屋着に着替えさせ、ベッドに寝かせる。

「どこか痛いところかない？」

しばらく考えるそぶりをするみはね。

「そういえば、頭がいたい気がする」

「それ気がする言うんやなくていたいんやろ」

まったくもう。ちっちゃい子でも自分の体調不良くらいわかるわ。

あ、そういえば…

「あ、そういえば。えりちのこと気づいてるんやろ？」

「あ、ああ…なんか見られてるかもって思ってたけど」

「え？それだけ？」

「ほえ？なにが？」

あ、熱のせいではやばやしてるのか。それじゃあ、朝のこと気まずいとかじゃないんだな。

「えりち、朝のことめっちゃ気にしてるよ」

「そーなの？よくわからなけれど気にすることなくない？」

なるほど、みはねが朝あんなんだったのは熱のせいか。

やっと謎が解けた気がする。

明日ウチの方から言っておくしかないな。

「とりあえず今は寝たほうがいいんやない？ちゃんど元気になってもらわないとなあ」

「うん…おやすみ」

寝るのはやつ！

相当無理してたんやないかな？

まったくもう、無理したらあかんやろ。

「ずっとそばにいてあげるからね」

かわいい寝顔やな。ほんま。

そんなことを考えながらみはねのサラサラな髪を撫でる。

ウチがちゃんとしてあげないと。

50. またまた合宿！

なんでこうなった。

目の前には大きな別荘。周りを見たら山、山、山。自然に囲まれている。

そう…またしてもきてしまったのだ。合宿に!!!

なんでかって？そりやまあ…色々あったわけですよ…

ことの始まりはライブの一次予選の話をしてた時だ。まあ、未発表曲じゃいけないルールってことでもちろんあの3人に頑張ってもらってなったんだけど…

「みはね…私…作れないの…」

「みいちゃん！どうしょ…なにも思い浮かばないよう…ひつく」

「みはね。すみません…なにも出てこないです…」

「合宿よおおお!!!」

なんと作詞、作曲、衣装の3人がスランプに陥ってしまったのだ。そんな時ナイスタイミングで絵里が合宿を思いついたわけ。

ここにくるまで穂乃果を電車においてきたりとか色々あったけど、とりあえず真姫の別荘までついた。

「よし。じゃあ、荷物を置き終わったら3人は新曲作りしてくれる？」
どうも自信なさげな3人がうなづく。

「残りのみんなは練習しよっか」

「わーい！今度は山だあ！」

「探検するにゃ！」

元氣二人組が飛び出していく。

まったく…練習だっっていつてんじゃん。

「ごめん絵里。あとはよろしく」

「はあ…わかったわ。みはねはどうするの?」

「ん、ああ…3人の様子を見るよ」

というわけで、私たちの2回目の合宿が始まった。

様子を見るといつても邪魔になるのでしばらくリビングに座っていた。

これはこれでつまらない。そうだ。お茶でも入れにいこう。

「真姫ー。お茶入れにきたよー…って3人揃ってなにやってるの?」

真姫の部屋には真姫しかいないと思っっていたら3人で集まっていたようだ。

「全然うまくいかないのよ…」

真姫はピアノのイスに座っていて、海未とことりはテーブルで向かい合って正座をしていた。3人とも下を向いていて表情がよくわからない。まあ、見なくても暗い雰囲気からして想像はつく。

「ねえ…みはね…」

「ん?なに?ま…んう!」

真姫に名前を呼ばれてピアノの方に近づくと、気付いた時にはもう目の前にきれいな真姫の顔のドアップが。

「真姫…ずるいですよ」

そんなつぶやきとともに海未に腕を引っ張られたと思ったらしいのまにやら私は床を背にしている。

海未は普段から想像できないほどにんまりと口角を上げると私の首筋に顔をうずめた。

「ちよつくすぐったいからー」

「ごどりのことも見て…!」

今度は横からごどりにキスをされる。

まって。なにこの状況。

ものすごく甘えられてる…?

思わずうれしい状況に顔がふにやりと緩んでしまう。しかし、今は

喜んでいる場合ではない。

「まったくもう」

起き上がって3人のことを両手いっぱい抱きしめる。

「よしよし。今まで頑張ってくれてありがとうがとね。これからも頼りにしてる。だから…私のことももつと頼って」

私の右手側にいた真姫の頭をなでてあげる。今まで頼りすぎちゃってたもんなあ…

私気づくの遅すぎ。ちゃんと反省しないと。

どーしようかなあ。うーん…あ。

「それぞれグループに分かれるかなあ…」

とりあえず3人をリビングのソファーに連れて行って座らせて、残りのメンバーを呼ぶ。

「どうしたん？」

戻ってきて早々嫌な笑みを浮かべている希。その隣では絵里がソファーに座っている3人と私を交互に見ている。

「希…なんでそんなニヤニヤしてんの」

「いんやあ？みはねが3人になにしたのかななんて思ってたへんよ？」

まったく。こういう時に希はふざける。

絵里はなにも言わずに睨んでくるし。美人さんって顔がきれいなせいか睨むと迫力がすごいんだよね…

「はいはいなにもしてないよー」

「棒読みすぎて面白いにゃ」

なんかもう疲れてきたよ…

「いや、そんなこ「真姫ちゃん！暖炉なんてあるんだね！」

まてこら。なにかぶせてんの！なんで今暖炉の話になったのかな？穂乃果さんよ。

「そうよ。その煙突からサンタさんが来なかったことなんてないんだから」

そこ話に乗っからなくてもいいんだってばあ！って、え？

「毎年私が掃除してるのよ」

「え、そうなん？」

「そうよ。だって汚かったらサンタさんが入ってくる時かわいそうじゃない」

ま、真姫ってまさか…

「真姫…今」

「パパがね、私が小さい頃からそう言ってたのよ」

「ぷっぷぷぷー！まつさかねー」

にこがものすごく悪い顔をして笑っている。

「真姫ちゃんがサン」

「だああああ！それ以上言っちゃダメー！」

あの真姫がまさかこんな純粋な心の持ち主だったなんて。

真姫の夢を壊すようなことをしようとしたにこの口を飛びついてぶさぐぐ。

「みはね…にこちゃん…なにやってるの？」

「いい？余計なこと言っちゃダメだよ？」

真姫に聞こえないように小さな声でにこに耳打ちする。

「わかったわよ」

「なんでもないよ。それよりも話の続き！」

さつきから全く話が進まない。楽しい時間もいいけれど、今は新しく曲を作ることが優先だ。

「えーと、さつき思いついたんだけどグループに分かれない？」

「なにそれ。どういうこと？意味わかんない」

真姫にジト目で見られてしまった。

私の考案的は、ただ単に作詞、作曲、衣装のグループに分かれて考えればいいんじゃないかなってだけなんだけど。

「ほら、海未、真姫、ことりを中心に3グループでそれぞれの役割をやらばいいんじゃないかな？って」

そもそも今回の合宿は練習するっていうよりも、スランプになっちゃった3人をどうにかしようってみんなで考えたことだし。

「私も同じこと思ってたわー！それでいきましよう」

「いいんじゃないかな？やろうやろう！」

「でも、どういうふうに分かれるん？しかも、一人余るやん」

あ、私たち10人だ。

「それは…私は一人でみんなのグループを回ることにするよ」

「ふーん。なるほどね。で、どういうふうに分かれるのよ」

「くじ引きって言いたいところだけど…めんどいから私で決めるよ。

えーつと、作詞は…海未…と、希と凜で！」

「凜に作詞のお手伝いなんてできるかにやあ？」

「凜ちゃん、ウチと一緒にがんばろな！」

「ふたりとも、よろしくお願いします」

よし、今のは本当に適当だけど…意外とあの3人なら上手くやれそうだな。

「えー、作曲は…：うーん。真姫だから…絵里と…にこ。だね。うん」

「私だからってどういう意味よ。絵里、よろしくね」

「ええ、頑張りますよう」

あの二人に任せるとして…

「ちよつと！なんでにこのことスルーするのよ！」

「なんでにこちゃんなのよ…」

こつち向かれてもなんとなくだし。いや、考えてはいるんだけどね。ほら、あんまりない組み合わせで仲良くとかなってほしいじゃん

？絵里って希と一緒にのイメージだし、ね？

「に、にこも一緒に頑張りますようね」

絵里、緊張してるのかな？

わかんないけど…次！

「残った二人はことりと一緒に衣装考えてね」

「わあい！ことりちゃんと一緒だ！」

「うん！穂乃果ちゃん、花陽ちゃん一緒にがんばろうね！」

「はい！楽しみだなあ」

さ、グループ作り終わった。

なんか

「このグループでユニット組んで歌っても面白そうだなあ」

なんてね。

「なんだかそれ、いい考えね」

あ、声に出た…

真姫に聞かれちゃったとか恥ずかしい。

「ははつとりあえず新曲づくりがんばろ！」

さ、今からが合宿の本番だ！

どのグループともそれぞれ外に行っただけ…

あ、衣装グループのテント発見。

テントを張り終わって中で休んでいるようだ。川の近くだからか気持ちいい。

「なーしてるの？」

「ああ、みいちゃん！やっぱり決まらなくてね…」

中にはことりと穂乃果しかいなかった。

さつきと状況は変わっていないがことりは落ち込んだ顔ではなく笑顔だ。

「凝ってなくてもいいと思うよ？みんながどんなのを着たいかでしょ？」

「そっか！私たちのだもんね！」

「あれ？みはねちゃん。来てたんだ？」

「あ、花陽。なに持ってるの？」

テントに戻って来た花陽の手にはカゴの中にたくさんのお花が入ってた。

「おんなじ花でもね、それぞれ違うんだ。個性があって…衣装の参考になればいいなって」

「花陽ちゃんありがとう！」

さつきから穂乃果は頷くだけですごく眠そうだ。

「まあ、難しく考えないでお昼寝でもしたらどうか？なんて」

なんだかい天気だし、空気は澄んでるし。アドバイスをしているとみせかけて、実は私も眠くなってきたり…ね。

私があくびをすると同時に膝の上に重みがかかった。今度は両肩にも。

「みいちゃんのお膝でお昼寝ー♪」

「あははっみんなでお昼寝しようか」

3人とともに横になる。

「なんかお花畑にいる気分だね」

「わかるかも。空気もきれいだしね」

「ふわああ。本当に眠くなつて来ちゃいましたあ」

太陽がぽかぽかと暖かいせいかな今にも寝てしまいそうさ。

少しだけ…そう思いながらゆっくりと目を閉じると意識は夢の中へと落ちていった。

*

ここはどこだろう。真っ白な世界。

周りにはなにもみあたらないどこか寂しい空間。

「そうさ…ことりたちとお昼寝して…」

そして、気づいたらここにいて…

夢…なのだろうか。ここまで意識がはっきりしていると夢ではない気もして少し怖い。

「みはね…」

誰かに呼ばれた気がした。いや、はっきりと聞こえた。

「誰？誰かいるの？」

「こつち」

声のした方を向く。

眩しい光に照らされて目をぎゅっと瞑る。

光を受けている感覚がなくなつてからゆっくりと目を開けると、そこはなんとも殺風景な部屋だった。

「んん、どい…」

部屋には小さな机が一つ置いてあるだけだ。それ以外にはなにもない。誰か人が住んでいるような気配もしない。

とりあえず、他に何かないか探すために部屋のいたるところを物色する。

あれ、机の下に何か落ちてる。

拾い上げると写真たてのようだった。

「これは…」

写真たてには亀裂がいくつも入っていて、かんじんな写真は黒いマジックペンで塗りつぶされているみたい。

しかし、なんとなく人が写っているのがわかる。

なんだか意味がわからなくなってきた。ここは現実なのか夢の中なのかもわからなくなってきた。来てしまうくらいにリアルで。

「もしかしてここは…」

私の本当にいるべき世界。

ここが、現実だったとしたら。

これ以上口にしてしまったら本当のことになってしまおうと思いつつ口に口をつぐむ。

なにこれ。夢なら早く覚めてよ！嫌だ、みんなのことが夢だったら。

そんなことない。

窓から外を覗くところが一階ではないことがわかった。

私ははなんのためらいもなく窓を開けて空中に身を投げ出した。浮遊感に体が震える。

「大丈夫」

私の体は真つ逆さまに落ちていった。

*

「っはっ！」

次に目を開けると目の前には青空が広がっていた。

やっぱりさっきのは夢だった？

いや、もう、どっちでもいいか。

寝ている3人の姿を見てほっとする。

よかった。

真姫の別荘に戻って薄い毛布を持ってきて3人にかけてあげる。

この3人の寝顔を見てると今は秋だけど春のぽかぽかの陽気の中にいる気持ちになる。

なんか、名前も春っぽいしね。

次は海未たちのところにも行くかな。

51. 答えはすぐそばに

「えーと、海未？なにをしに行くのかな？」

「ええ、少し山を登りに行こうかと」

まあ、そうだと思った。

後ろにいる凜と希の顔が死んでるけどいいのかな…

「そっか。いつてらっしやい」

「なんでとめないの!？」

「みはねはウチらを見捨てるんや！」

後ろにいた二人組が抱きついておいおいと泣いたふりをし始める。

わーわーわーなにも聞こえない。今海未を送り出さないと私まで巻き添えになりそうだもん。

「ほら、絆が深まるといいね？いつてらっしやい！」

「はいーいつてきますー！」

海未のはりきったようすにどんどん他の二人が沈んでいく。

「みはね…」

「ん？希どうしたの？」

希は私のそばまで来ると耳元に顔をもってきた。

「意地悪するなんてひどい。いつてらっしやいのちゅーしてくれへん
と行かない」

自分で言っつて顔を真っ赤にしている希がどうしようもなくかわ
い。

てか、海未と凜は気づいていない様子で首を傾げている。

「いいよ。」一回離れて」

「う、ん…」

目と目を合わせるとぶいっつと横を向かれてしまった。恥ずかしい
ならやめとけばいいのに。

「こっち向いてよ」

「い、いやー!」

全くこっちを見てくれない希の顔を両手ではさんで無理やりこっちを向かせる。

少し目が合うとふせてしまった。服の袖をギュツと掴まれるとそのかわいさに負けて反射的にキスをしてしまった。

「いってらっしゃい。ケガとかしないようにね」

もう一度だけ少しだけ触れるようにキスをすると、希に抱きつかれた。

「そんなんずるい」

「ははっごめん。気をつけてね」

頭をなでるとやっぱり恥ずかしかったのか、海末の後ろまでいって座りこんでしまった。

「み、みはね! 破廉恥です!」

え、私が怒られるの。

「凜も凜も〜!」

凜は私に飛び込んで来ると同時にキスをする。あ、ほっぺにだからね?

私も凜のほっぺにお返しをする。

「いってらっしゃい。仲良くね?」

「もちろんにゃ!」

凜はやることだけやって希のところへ行ってしまった。

「海未はしないの?」

「し、しません!」

「そーだよねー。いってらっしゃい!」

「い、いってきます」

行ってくると言ったわりには全くいく気配がない。どうしたものかと思っていると海末が口を開いた。

「みはねのバカ…」

そう一言だけ言うとは後ろを向いてしまう。なんだか今行かせたらどこか遠くへ行っちゃいそうで思わず腕をつかんだ。

「離してください。希たちが待っています」

「いやだつて言つたら?」

「そんなの…んう!」

こつちを振り向いた海末の唇を強引に奪つて抱きしめる。

「ごめん。その…大好きだから、そんな顔してほしくない」

「私のほうこそすみませんでした」

「海末はなにも悪くないよ?ほら、笑つて?」

笑顔でいつてきてほしいから笑顔で送り出す。

「はい!みはねの笑顔は最高ですね。なんだかとっても癒されます」

そんな海末の笑顔のほうが最高じゃんか。

「ありがとう。いつてらっしやい」

「はい!」

ユリ。白いユリの花。純白という言葉があこの3人にぴつたりだと思つた。

自分を飾らない3人の魅力がもつと他の人にも伝わるもいいのに。

まあ、今以上に人気になられちゃつたら少し妬けちやうけどね。

*

はあ…もう夜になつちやつたよ。こんなに暗いけど、絵里は大丈夫かな?なんて、心配しすぎか。

てか、どこにいるんだ!?

「こんな三年生のために曲作るなんてね」

ん?今のは真姫の声?

声の聞こえたほうを目を凝らして見てみると木々の間から光が漏れている。

あんなところに行ったのか。

「やつぱそんなこと思つてたのね」

今度はにこの声。

近くまで来ると二人の様子がはっきりと見えた。絵里は…テントの中にいるようだ。

「曲はいつも、全員のためにあるのよ」

なんだかにこが先輩らしいことを言っている。

多分さっきのやり取りからするに、真姫がスランプになった理由はプレッシャーからだろう。三年生にとって最後のラブライブ。予選で落ちたらその道は絶たれてしまう。だから、どこよりもいい曲を作ろうと必死になったのだ。普段は素直になれないけど、音楽を通してなら素直になれる。そんな真姫がとても愛おしい。

私は真姫のところまで行くと後ろから抱きしめた。

「うええ!? みはね!」

「真姫。ほんとにかわいい」

「な、なによいきなり!」

だって、これは真姫のせいだもん。だから少しの間我慢してよね! 「あー、いちやこらしてるのに悪いけど焼き芋焼けたから冷めないうちに食べちゃいなさい」

棒に刺した焼き芋を顔の前に押し付けられた。ほんとに空気読んでよね。

「じゃあ、私はちよつと絵里のどこでもいつて来るよ」

「あつそ」

テントからは絵里が顔をのぞかせていた。

「みはね、ほら」

絵里は私がさつきまでいたふたりの方を指差す。振り向いて見てみるとにこに渡された焼き芋を真姫が半分にしてにこに渡していた。

「仲良しだね」

「そうね。中、入りましようか」

テントの中に入って一息つく。

「絵里もあの中入ってくればいいのに」

「あら、みはねは私と二人きりはいや?」

「そんなこと…むしろ嬉しいよ」

二人見つめあつて自然と唇を重ねる。

なんか…今日はいろんな人とキスしてる気がする…

「ふふっ好きよ」

「ん。私も好きだよ」

ああ、なんか焚き火の炎でテントが照らされていてかなりオシヤレかも。たまにはこういうのも悪くないかな、なんて思ってみたり。

しばらくして真姫とにこの話し声が聞こえなくなったと思ったら真っ暗になった。

「や、やあああああ!？」

耳がキーンとするほどの絵里の叫び声が聞こえたと思ったら前からすごい衝撃がきた。

お察しのとおり絵里が私に抱きついてきたのだ。

「絵里、落ち着いて!私はこちらにいるよ」

「みはね…みはねええ…!」

涙声で私の名前を連呼する絵里の体をきつく抱きしめる。大丈夫、と耳元で囁きながらあやすように背中をポンポンと叩くと落ち着いてきたのか絵里も抱き返してくれた。

「ちよ、ちよつとすごい声が聞こえたんだけど!」

「え、エリー?の声、よね?」

さっきの絵里の叫び声にびっくりした二人がテントに入って来る。すぐにランプの明かりがついて明るくなった。

「ごめん。いきなり暗くなってびっくりしちやっみたい」

「みはね。もうちよつとこうしてて…」

甘えるように抱きつかれたらいやな気にはならない。それに、誰よりも絵里の暗所恐怖症を理解してる私に、絵里を無理に振りほどくなんて真似はできるわけがない。

「わかってる。大丈夫になるまでこうしてていいよ」

真姫とにこは顔を見合わせる。

「元生徒会長様は暗いところが苦手なんだ」

「絵里にもかわいいところあるのね」

ほら、ふたりとも面白がってるよ。いい加減離れないと。

それでもなかなか離れてくれない絵里。ふたりは寝る準備を始め

ていた。

仕方がないので私も絵里たちと一緒に寝ることにする。

「もう、寝よっか」

しばらくして絵里が寝たのを確認してから起き上がる。

外に出ると星がとても綺麗だった。

「みはね。起きてたのね」

「まあね、ほら星がきれいだよ」

実は真姫は天体観測が趣味だったりする。他の人に言うのは恥ずかしいみたいだけど、とつても素敵だと思う。

「ええ。その、これから別荘に戻ろうと思うの。ピアノないと困るし」

きつと絵里やにこと話したおかげだろう。

「じゃあ、一緒に戻ろうか。きつと…今なら素敵な曲ができるよ」

笑顔で手を差し出す。真姫は何も言わずに手を取ったが、気持ちは私と同じだろう。

別荘に戻るとしばらくしてから海未とことりも戻ってきた。考えることはみんな同じ…だね！

52. 新曲完成!

別荘では新曲づくりが行われている。海未とことりも新曲について何かつかめたようで、すでにノートにびつしりと書き込まれている。

「あのね!穂乃果ちゃんがね、9人もいるから誰かが止まっても誰かが背中を押すって!きつとうまくいくって言ってくれたの!」

穂乃果がそんなことを…

「そっか。きつとうまくいくよ」

今度は海未が前のめりになって興奮気味に話してくれた。山登りのすばらしさ。3人でみた星はとてきれいだったこと。希はペンギンと一緒に南十字星を見たことがあること。

…あれ?最後のすごい。

「それに、三人で星を見ている時流れ星が流れたらしいんです。なんでも、南に向かう流れ星は物事が進む暗示なのだとか」

物事が進む…か。

「希に一番大切なのは本人の気持ちだって言われたんです。その言葉のおかげで心の重みが取れたような気がします」

さすが希といったところか。南極のくだりになった時はどうなるのかと思っただけ、やっぱり先輩なんだなあ。直接的に言わないのがなんとも希らしい。

「真姫ちゃんのところは?」

「え、えっと。にこちゃんが曲はみんなのためにあるって」

やっぱりこの言葉はちゃんと真姫の心に届いてたんだね。

「よし、みんなの気持ちも込めてがんばって曲を作ろう!私も手伝うよ!」

3人はなぜかキョトンとした顔で私のことを見つめている。もし

かして、私変なこと言った？

「え…？なんか変なこと言っちゃった？」

海未ははつとすると答えてくれた。

「いえ、みはねの笑顔がとても素敵で」

な、なにそれ！て、照れるんだけど。

「そ、そんなことないって！」

「ううん。いつもみいちゃんの笑顔に癒されてるよ」

「そうね。みはねの笑顔にはいつも励まされてるわ」

3人してそんなこと言つて、顔赤くなるからやめてほしい。

「ほ、ほめてもなにもでないから！早く曲作ろ」

「そうね。早く作っちゃいましょう」

3人が集中し出すのは早かった。

私が手伝えるようなことなんてもちろんなく、曲はどんどんできていく。

その間暇になった私は海未からノートを一枚もらって落書きを始める。

今日グループに分かれてみて気づいたことをどんどん書いていく。

どのグループもみんな相性がよくて、曲を作ったら最高だな…そうだし！

ことりたちのグループ。

三人ともほんわかしててかわいい。一緒にいてなんだか心が温まる。けどなんだか元気もあつて、元気な曲も切ない曲もどっちもいけそうだよね。

海未たちのグループ。

私の中では一番不思議な組み合わせかも。一年、二年、三年全員いて、でもすごく仲よさそう。あまり自分を前に出すような感じではないけど、そこが逆にいいかもしれない。

今日、それぞれのグループを回つてどんなことを思ったのか紙に書き出していく。

真姫たちのグループは何だろう。

真姫も絵里もお姉さん系でモデルみたいにきれい…

にこ：うーん。お姉さんと言うよりはお姉ちゃんって感じだよなあ、たまにだけど。

おしゃれな曲も似合うけど、にこに合わせて元気一杯でノリノリって感じの曲を歌っているところも見て見たい。

真姫って口ではああ言っているけど、実はにことかに振り回されるのそんな嫌じゃないみたいだし。絵里にいたってはそういうのノリノリでやってくれそうだし。

ふわあ：眠くなってきた。

周りを見てみると、それぞれもう作り終わっていたようで3人はもう寝てしまっていた。

ソファで寝ている海未とことりのおでこにキスを一つ。真姫はピアノのところで寝てしまっていた。

「3人ともお疲れさま」

真姫の触り心地のいい髪をなでながらおでこに口づける。

私ももう：寝よう：おやすみなさい。

く絵里く

朝目が覚めると真姫とみはねの姿がない。

きつと別荘に戻っているわよね。みはねもいるんだし。そんなことを思いながらにこのことを揺する。

「なによ…」

「もう朝よ。別荘の方に戻りましょ」

にこは寝起きがよく、テントの片付けをしてから別荘までの道を行く。

「絵里ちゃん。にこちゃん」

「花陽じゃない。どうしたの？」

「実は：朝起きたら誰もいなくて」

花陽のところのメンバーはことりと穂乃果ね。ことりはともかく穂乃果はどこ行つたのかしらね？

「ああ、みんなー！」

気がつくと向かいから希と凜。横の方からは穂乃果が来ていた。つてことはやっぱり別荘に戻ったほうがよさそうね。

「みんな、別荘に行きましようか」

「せやね。それがいいと思う」

急いで戻ると、そこには寝ている四人の姿。

きつと夜に四人で新曲作りを頑張ってくれたのだろう。すでに次の曲は出来上がっていた。

曲名は『ユメノトビラ』

寝てしまっている四人に毛布をかけてあげる。

「起きたらみっちり練習よー！」

その言葉にみんな頷いて笑顔で外へ出ていった。

あら？この紙はなにかしら？

「うーん…？」

そこには昨日分かれたグループそれぞれの感想や思ったことなどが書かれていた。

これは間違えようもないみはねの字。

このユニットで曲を作ったら…？なんて思わせてしまうほどしっかりと書かれていた。

ただまわっていただけじゃなくてちゃんと私たちのこと見てくれていたのね。

「ん、ふわあ…絵里？」

「みはね！起きたのね」

みはねが起きてしまい、とっさにさっきの紙を新曲の紙の間にはさむ。

「新曲づくり頑張ってくれたのね」

「まあ、頑張ったのは3人だけだよ」

みはねはそんなことを言うけれど、きつとあなたがいたから3人も

頑張れたのよ。

目を通した海未の作詞からはそんな雰囲気も出ている。きっとそれを伝えてもみはねには否定されてしまうのだけど。

「でも、お疲れさま」

「ん。ありがと」

そういつて甘えるように抱きついてくるみはね。いつになく子どもっぽくなってしまっていて、胸にぐりぐりと頭を擦りつけてくる。

「絵里の匂い、おちつく」

「甘えんぼね」

「私は誰なの…？もう、わからないよ」

「何か言った？」

嘘。ほんの少ししか聞こえなかったけど、はっきり聞こえた。みはねは自分の存在がなんなのかに疑問を持っているの…？

「ううん。なんでもないよー！」

顔を上げたみはねの顔は周りから見たら普通の顔。でも、私から見たらこつちまで悲しくなってきたような苦しそうな顔をしていた。

なんでもないって言うってことは、言いたくないことなのかもしれない。ならば無理に聞くなんともってのほか。自分から言ってくるのを待つしかないわね。

「そう。ふふっよしよし」

いろいろな気持ちを込めて頭をなでてあげると満足したのか離れてしまった。

「まあきくー！海未！ことりい！朝ですよー！」

それぞれ3人のことを起こす。後ろを向いていて顔は見えないけれど耳が赤くなっている。照れちゃったのかしら？かわいい。

「さ、練習しましょうー！」

さっきのユニットのことはそのうち真姫たちにも相談するとして、今は予選突破に向けて頑張りましょう！

「みはね、今さらだけど寝癖すごいわよ。ふふっ
「ええ!?!もっと早く言ってよ! 恥ずかし…」

*遊園地デート！

とある金曜日。

今日も無事部活が終わり、みんなが部室に戻っていく。

そんな背中を見つめほっと息をついているのもつかの間、まきりんはなの三人が…主に凜が、すごい勢いで詰め寄ってきた。

「みはねちゃん！日曜日ひま?!ひまだよね?!」

眩しいくらいの笑顔。日曜日がひまかと聞かれているが、なんのこともだかさっぱりだ。

「はい？」

「ひまだって！よかったにや！」

いや、ちよつと、ちがう。

「今のは疑問形だったでしょ」

「凜ちゃん。落ち着いて」

この三人つてなかなかバランス取れてるよなあ。

なんてことを考えながら、会話の行方を見守る。いや、私も会話に入らないといけないんだろうけど…

「凜は主語が抜けてるのよ。まったく…」

「みはねちゃん。日曜日に私たち遊園地に行こうと思ってるんだけどね。予定が合えば、みはねちゃんも一緒にどうかなあ…って」

なるほど。それで日曜日ひま?ってことだったのか。

最初から花陽が説明してくれてたらよかったのに…って、凜のあの様子じゃ無理か。

「大丈夫だよ。誘ってくれてありがとう！」

学校で一緒にいることは多かったけど、学校外で一緒にどこか行くことはほとんどなかったから嬉しいな。

「やったにゃー！みはねちゃんと遊園地♪」

そう言っただけ抱きついてくる凜のさらさらな髪をなでる。ぐりぐりと頭を押し付けてくる様子は本当に猫のようでかわいらしい。

「真姫ちゃんよかったね？」

花陽も喜んでくれているのか笑顔で真姫にそう問いかけるが。

「べ、べつに。私はどっちでもよかったけど」

なんて、照れているのかなんともツンデレキャラのようなセリフを言っただけを向いてしまう。

そんな二人の様子を見つめていると、凜が耳元に口を寄せてきた。

「一番最初にみはねちゃんを誘いたって言ったの、実は真姫ちゃんなんだよ」

もちろん凜たちもそのつもりだったんだけどね、と言っただけで離れる。目と目が合うと凜はにこりと微笑んだ。

わかってるよ。真姫だけじゃなくて、二人も誘うつもりでいてくれたこと。こんなに優しくされると、少しくらいは自惚れてもいいんじゃないかなって思っちゃう。

それにしても、遊園地楽しみだな。

本日、快晴！

待ちに待った遊園地当日。見事なまでに雲ひとつない空を見上げ深呼吸をする。緩んでしまう顔をがんばって引き締めながら、待ち合わせの場所に急ぐ。

集合時間まであと30分あるのでちよつと休憩しよう、と思ったのもつかの間、3人で待ち合わせしてからきたのか私を見つけると小走りで駆け寄ってきた。

あ、嘘。

「みつはねちゃん！」

凜だけはかなり全力ダッシュだった。つい先日、こんなことあったような…

止まることを知らない凜は、そのまま手を広げて私のところまでくる。覚悟を決めて、私も両手を広げて受け止める準備をする。

上手くすっぽりと入った凜を一回転しながら受け止めた。

「凜、危ないよ？」

「ごめんなさい。嬉しくてつい」

そういつてぎゆうつと力を込める凜にキュンとする。

まったく、ほんとにかわいいんだから。

「それにしても、3人とも早いね？」

まだ約束の時間まで20分もあるのに。

「それはね、真姫ちゃんが…」

「みはねのほうが早いじゃない！それより、もう行きましょ」

花陽が話そうとするのを押しのけて、真姫はなぜか頬を赤く染めながら遊園地を指差す。

ああ、きつと、真姫は友達と遊園地なんて来たことなかったのかもなあ。そもそも友達と遊ぶことなんて、勉強の方が忙しいからなかったのかもしれない。

「真姫、今日は遊園地…楽しもうね！」

「しよ、しょうがないわね」

それぞれチケットを買って中に入る。

「う、わあ…」

過去の自分は来たことがあったんだろうか？

おもしろそうな乗り物がたくさんある。わあ…あれはどんな乗り物なんだろう。

真姫も隣で目を輝かせているようだった。

そんな私たちの様子を見て、凧と花陽が微笑んだ。

「みはねちゃんも、真姫ちゃんも、ちっちゃい子みたいだよ」

「そうだね。なんだか私たちがお姉さんになった気分かも」

なんだか恥ずかしい。まさかこんなにはしゃいじゃうなんて。きつと、初めての遊園地。

最初は凧の希望でジェットコースターに乗ることに。運がいいことに、一番前に乗ることができたみたいだ。

「みはねちゃん！凧と一番前乗るにゃー！」

花陽と真姫に目で聞くと、二人とも前に乗るのは怖いみたいでも、すぐく領いていた。

凧にいいよ、と返事をして先に乗り込み手を差し出す。

「ほら、気をつけて乗ってね？」

「ありがとにゃー！」

手を貸したのも意味がなかったのか、凧はバランスを崩してこちらに倒れてきた。

「わわっ」

「凧！ちよ、危ない」

ほっぺたに柔らかい感触。

瞬間、凧がぐいっと私を押しつけて隣に座った。

何が起きたのか、よくわからなかった。

でも、凜が照れた顔をして、自分の唇に手を持っていくから、私のほっぺに当たったのは凜の唇だったということに気づく。

「ご、ごめんなさい」

「え？いや、うん。怪我とかなかった？」

「大丈夫にゃ」

凜を見るとバツチリ目が合ってしまった。慌てて二人して前を向く。

もう一度隣を見ると、凜が顔を真っ赤にさせて俯いていた。

キスくらいしたことあるはずなのに、不意打ちっただけでここまで変わるものなのか。

ジェットコースターが動き出してから、そんなことを冷静に考えてしまいうくらいに私は動揺していた。

キスの感触、そして何よりその後の凜の照れた顔。

なんだかどうしようもなく嬉しくなって、自分がだらしない顔をしていることを自覚する。

よし、ジェットコースターに集中しよう。

感想は、わー！きゃー！ぐえええ!!!って感じかな。

まあ、叫んでいたのは真姫と花陽です。

最初にちよつとした事故があったものの、私と凜は落ちる時に手を繋いで手を上にあげちゃったり、思ってたより怖くなくてかなり楽しめた。

「なんで、二人はあんなに元気なのよ」

「こ、怖かったね…」

ベンチでぐったりしている真姫と花陽に飲み物を渡す。

花陽はまだ涙目で、小動物みたいにプルプル震えている。

「あんなのへっちゃらだよ」

花陽の頭をなでると、花陽は俯いて飲み物を飲み始めた。

「よし、じゃあ次は花陽の乗りたいの行こっか」

何乗りたい？と顔を覗き込む。

「じゃあ、メリーゴーランドに乗りたいです」

「いいね！かよちゃんにぴったりじゃ！」

いつの間にか隣に来ていた凜が花陽と私の手を引つ張って歩き出す。

後ろを向くと、真姫はまだベンチに座っていて。

「ほら、真姫も行くよー」

「わ、わかつてるわよ」

メリーゴーランドには、主に小さい子達が並んでいた。

「私ね、小さい頃からメリーゴーランド大好きなんだあ」

「花陽らしいね」

「えへへ、ありがとう。本当のお姫様になれるんじゃないか、なんて思ってたのかも」

ほんわかと笑う花陽は、すつごくかわいい。

「じゃあ、私が花陽の王子様に立候補するよ」

順番がくると、花陽の手を引いて二人で一緒に乗れる馬車に向かう。

花陽を先に乗らせて、後から自分も座った。

「花陽、手繋いででもいい？」

「うん……ふふ、なんだか照れるね」

甘い雰囲気のまま、メリーゴーランドはゆっくりと動き出した。

凜はノリノリで馬に乗っている。対する真姫は少し恥ずかしそうに周りをキョロキョロ見ている。

「みつはねちゃーん！かよちゃんは渡さないにやー！」

「ちよつと凜！恥ずかしいから叫ばないで！」

「凜、花陽姫は私のものだから。奪おうとか思っちゃダメだよ。」

そう言つて、繋いでいる手を見えるように上にあげた。そして、花陽の手の甲にキスをする。

「み、みみ、みはねちゃん!？」

「私が王子じゃ…ダメ、かな?。」

「そんなことない! 幸せすぎて泣きそうなくらいだよ。」

目を潤ませて微笑む花陽は、やっぱりお姫様みたいにかわいくて、きれいで。普段は絶対にしないくらいくつつかれて、心臓がはねた。

花陽の左目からこぼれた涙を人差し指ですくう。

それ以上涙が出なかつたことにホツとした。

「ごめんね」

「ごめんねよりも…」

「うん。みはねちゃん、ありがとう」

メリーゴーランドを降りると、凜と真姫が待っていた。

「いつまで手、繋いでるのよ」

真姫は呆れた顔をして私を見る。

花陽は恥ずかしくなつてしまったのか、手を離して凜のところへ行つてしまった。

残念なんて思いつつ、それが花陽のかわいさか、とすぐに思つてしまふ。幸せボケな頭を振つて、真姫ににこりと笑顔を向ける。

案の定、ぽかんとした真姫。そんな真姫の手を奪つて、ぎゅつと握れば真つ赤に染まる頬。

「赤くなつた」

なんて言えば、うるさい、と呟いて顔が背けられてしまった。

「次はね、真姫の乗りたいのにしようかなつて思います」

「そう。でも、私は遠慮しておくわ」

「なんで?。」

「みはねとなら、なんでもいいもの」

そんな事を平然と言つてのける真姫に、今度は私の顔が赤くなつて。

「赤くなった」

さっきの私と同じセリフを真似て、くすりと微笑む真姫にドキツとしてキュンとして、無性にくつつきたくなくなって。

すりすりと言姫の肩におでこを擦りつけるようにすれば、柔らかい表情で頭をなでられた。

「真姫って、たまにずるい」

「そう?」

「…そう。ねえ、あれに乗ろう?」

そう言つて一際目立つ大きな観覧車を指差せば、どこから話を聞いていたのか凜が花陽の手を取つて、大はしゃぎで観覧車へ駆けて行った。

凜のはしゃぎっぷりに、二人で笑いあう。

「私たちも行くわよ」

真姫に手を引かれてあつという間に観覧車の中。

当たり前前に二人きりの空間。

少しドキドキするのは、私だけじゃないって、さっきから繋がれたままの真姫の手からドキドキが伝わる。

そのことにホツとして、嬉しくて。

いつの間にやらドキドキはワクワクに変わっていた。

「今日は、正直妬いてたわ。さっきまでは、ね」

突然そう呟いた真姫に、こてんと首を傾げればまた笑われて、少しむっとする。

「怒らないの」

「怒ってないもん」

「はいはい。それで、話の続き。今日ずっと、みはねは凜と花陽のこと甘やかしてたじゃない?」

繋がれていた手がいつの間にか指同士が絡まって、さらに密着していた。

「う、ん…? そうかもしれない」

「だからね、私のことも構いなさいよって思ってたわ」

「ごめんね…?」

でも順番に甘やかして行くつもりだったんだよ、とちよこつとだけ抗議をすれば、わかっていると言われてしまった。

「でもね、私気づいちゃったのよ」

「なにが？」

「甘やかされるより、甘やかすほうがいいなって」

そんな事を耳元で囁かれた。くすぐったいよって言えば、かわいいわねって返されて。

これから先は、真姫に甘やかされるんだなって身をもって理解した。

それが、真姫の優しさなのもわかったから。手を繋いだのはそのまま、立ち上がって真姫の真正面へ。

「どうしたの？」

「どうもしないけど、ありがとう」

そのまま真姫のおでこにキスを一つ落とす。

目を丸くして固まっている真姫に、にいつとイタズラが成功した子供のような笑顔を向ければ。お返しにと言わんばかりに抱き寄せられた。がたんと観覧車が揺れて、真姫の腕にすっぽりと私が収まれば、耳元で囁かれる。

「結局、甘やかそうとするんだから」

そんなことないよ、と言葉ではなく抱きつくことで伝えれば、真姫もおでこにキスをくれた。

これでもかかってくらい幸せになって、ちよつぱり切なくなった。

「みはね」

その気持ちをわかってか、真姫が優しく本当に優しく私の名前を呼ぶから、顔を上げることはせず真姫の胸元に顔をすり寄せた。

そんな私の髪を柔らかくなられて。大好きが広がって、落ち着きすぎて眠くなってきた頃、私たちは地上に帰ってきた。

「おっそいにやー！」

「凜が、先に行っちゃうからでしょ」

あくびをしながら凜と真姫のやりとりを聞く。

「みはねちゃん、眠いの？」

花陽の問いかけにこくりと頷けば、笑い声が三つ。

「帰りましょ」

真姫にまた手を引かれる。

真姫とは反対側に花陽がいて、その手を取れば、優しく微笑んでくれた。

「そうだ！今日はみんなでお泊まり会しよう！」

背中への衝撃とともに、凜がそんな提案をすれば、全員が賛成して。みんな真姫の家に帰ることになった。

遊園地デートは楽しくて幸せだった。

小さな幸せがいっぱいになれば、それはもう言葉じゃ表せないくらい大きな幸せで。

ありがとう。大好き。

そつと微笑めば、それに気づいた三人も微笑んでくれた。

53. はじめまして

ついに新曲が完成した。いよいよ予選が始まる！そんな私たちに
またも問題が…

「どこでライブするの？」

そう、今回の予選は参加チームが多いため会場以外の場所で歌うこ
とが認められている。

私たちはまだどこでライブするかを決めていなかった。

「各グループの持ち時間は五分。エントリーしたグループは出演時間
がきたら自分たちのパフォーマンスを披露。この画面から全国に配
信され、それを見たお客さんがよかったグループに投票。順位が決ま
るのです」

「そして、上位四組が最終予選に、というわけね」

四組：四組といってもここ東京地区にはA―R I S Eがいる。実
質四組の中一組は決まっているようなものだ。残りの三枠に入らな
ければならない。

「あ、そうだ！学校でライブやらない？そのほうが緊張とかもしない
しー！」

確かに、でも、もう少し印象に残るようなことをしないとね。

その後も中庭でいろいろと、主にセクシー路線でという話をしてい
たがそもそも本気でやろうと思っっているわけではないので。てか、ふ
ざけているだけなので話は進まず…

「ねえ、こんなことしてるよりもやることあるんじゃない？」

「あ、真姫。なにしてたの？」

さっきのやりとりの間真姫はどこかに行ってしまったことを
思い出す。

そんな真姫に連れてこられたのは放送室だ。

「ほんとにっ？」

「はい。お昼休みならいいですよ」

「ほら、ここでアピールすれば学校のみんなにも応援してもらえるし。それに、中継されるときは練習にもなるでしょ」

真姫はさっきの間にクラスの放送部の子に放送室の使用許可を取りに行っていたみたいだ。

まさか、まさかねえ…

「真姫がクラスの子とこんなに仲良くしてるなんて」

「べ、べつに！日直で一緒になって少し話しただけよ！」

真姫は真っ赤になった顔を誤魔化すようにふんつと横を向いてしまった。

そんな真姫を見ながら微笑んでいる放送部の、名前：宮島さんに話しかける。

「これからも仲良くしてあげてね？」

「もちろんです！かわいいですよね、西木野さん」

なんと！真姫のかわいさをわかってくれてる人がここにもいたなんて！

自分の彼女を褒められたことが嬉しくて思わずにこにこしてしま

う。

「み、みはねちゃんとも西木野さんの話したいなあ…なんて」

「ん？私？もちろんだよ！また教室で真姫とも一緒に、ね？」

「うん！うれしいな」

そうこうしているうちに準備も整ったよう

私と真姫、それに話すメンバー以外は外で待つことにして、早速放送が始まった。

まずはもちろんリーダーの穂乃果から挨拶だ。

「みなさんこんにちは！」

穂乃果は元氣よく挨拶するとそのまま勢いよくお辞儀をした。

「うがつー！いったーい！」

マイクに頭をぶつけるのは普通に考えてわかることだ。なんで気づかなかったの…

「えーと、みなさんこんにちは！生徒会長…じゃなかった。μ'sのリーダーをやってます高坂穂乃果です。実は私たちまたライブをや

るんです！今度こそラブライブにでて優勝を目指します。みなさんの力が私たちには必要です。ライブ、みなさんぜひ見てください！一生懸命頑張るので応援よろしくお願いします！高坂穂乃果でした。それでは他のメンバーも紹介…あれ？」

挨拶はなかなかよくできたと思う。しかし、次に紹介されて話すはずの海未と花陽が放送室の後ろのほうでブツブツと何かつぶやいていた。いや、緊張でおかしくなっていた。

そんな海未を立たせてマイクの前まで連れてくる。

「ほら、海未ならできるよ」

なんとも自信なさげな海未が口を開く。

「えっと。園田海未役をやっています、園田海未と申します」

え。え？なに役って。おかしいでしょ。

「なんでこの三人なのよ」

「リーダーと一番緊張しそうで練習が必要な二人よ」

そんななこと絵里のやりとりが聞こえた。

これ、練習の意味ないかもしれない…

次は花陽がマイクの前までくる。何度も深呼吸してようやく話しました。

「μ，sメンバーの小泉花陽です。えっと、好きな食べ物はごはんです。μ，sの中では…」

声が小さい。まあ、仕方がないことなのだが。

「はあ…ポリューム上げて」

それに気づいた真姫は放送部の子に指示を出す。

「えと。ライブ頑張ります。ぜひ見てくださいっ」

「かよちゃん！声あげてー。こーえー」

凜は放送室のドアから大きな声を出さずに一生懸命声を出すように伝える。

「はっ…ごめん。うわあ!？」

そこでいきなり穂乃果が割り込んできた。

「いえーい！んぐ!？」

ポリュームが大きくなっているにもかかわらず大声を出したため

穂乃果の声が爆発した。いち早く気がついた私が後ろから両手で口を押さえたため被害はそこまでひどくない…わけがない。

その証拠に学校中から悲鳴の嵐だ。

私はポリウムを普通に戻しつつマイクのスイッチをオンにする。

「みなさんお騒がせいたしました。これからラブライブ予選突破に向けてμ、sの応援をしていただけるとうれしいです。よろしくお願ひします」

それだけ言ってマイクのスイッチを切る。

「穂乃果。ちゃんと考えようね?」

「…ごめんなさい」

まったく。理事長に呼び出されたりしたらたまったもんじゃない。

「もう!なにやってんのよ!」

「でも、μ、sらしくてよかったんじゃない?」

「それって褒め言葉…?」

真姫は呆れながらも放送部の宮島さんと自然に話しているようだった。

ちよつと嫉妬…なーんてね。しないから!さすがにクラスメイトにはしないから!

「宮島さんありがとね。また教室で」

真姫の邪魔をしないようにお礼を言ってから放送室を出ようとしたが、宮島さんは返事をしてくれた。

「みはねちゃん!また…教室で」

それ以上話を続けるのもあれだったので笑顔で手を振って放送室を出る。

真姫はそのあと話すものだと思っていたけど、すぐに私の隣まで駆け寄ってきた。

なぜだかその後から真姫がべったりくっついてきて…

その後宮島さんと話すときもずっと私の制服の裾を握ったままだったし。

そして放課後になった今でもそれは変わらず。周りから不思議が

られても別にといいただけで理由も言わず、私も変に追求せず。

ライブする場所を探して校内を歩き回るときは手を繋がれていて。秋葉原を歩いているときもしつかりと繋がれていた。真姫は右手。左手はみんなで誰にするが決めていたが、真姫のひと睨みで誰も繋がらずにそのままにされてしまっていた。

本当にどうしたんだろう…？

『UTX高校へようこそ』

ふと気がつくとも目の前にはUTX高校の巨大モニターにA—RI SEの三人が映っていた。

『ついに新曲ができました』

新曲、できたんだ。

『今度の曲は今までで一番盛り上がる曲だと思います』

長い髪とつり目で切れ長なキリツとした表情の彼女の名前は確か統堂英玲奈。

『ぜひ聞いてくださいね〜』

統堂英玲奈とは対照的なたれ目気味でふわふわとした印象の彼女は優木あんじゆ。

思わず画面に見入ってしまう。

真姫も画面に見入っているのか自然と手が離れていった。

と、前から別の誰かに勢いよく引つ張られる。

「え、ちよ、ええ!？」

「しっ…来て」

人混みの中を謎の女性と駆け抜けていく。

後ろからはにこと花陽がついて来ていてなにやら騒いでいる。

走ること数分、私の体力の限界も近づいて来たときUTX高校の中へ入っていく。

静かな空間にくと私の手を引いていた彼女は止まって、息も切らずにこちらを振り向く。

「はじめまして」

「はあはあ…っはじめましてっ?」

目の前にいたのは短い前髪に短い髪。さつき画面の真ん中にいた、

そう、A—RISEのリーダーである綺羅ツバサだった。

「あなた、μsのマネージャーさんよね？桜みはねさん」

不敵に笑う彼女はなんでも知っているかのような口ぶりだった。

「なんで…いや、こんにちは綺羅ツバサさん」

「ふっふっなんて知ってるのか聞いてこないのね。ずっと会いたいと思っていたのよ」

あなたに。そう耳元で囁かれるとぞくりと背中に電流が走ったかのように。驚きのあまり声も出ない。

「みはね、有名よ？音ノ木の天使。それに生徒会役員だし、ね？」

天使。なにそれ、誰だよ作ったの。いろんな意味で恥ずかしい。しかもそんなこと言ってもらえるような人間じゃないし！

まあ、生徒会役員で絵里とともに少しの間だけここにお邪魔したことはある…けど。

「そんなの初めて聞きました。天使だなんて何かの間違いじゃないですか？」

頬を手でなでられる。この人の前で感情を出したら危険だ。そう頭の中で警報が鳴る。

「真顔でも…ここまでかわいいのには？」

綺羅ツバサはくすくすと笑いながら腰を抱き寄せて来た。そんな彼女に私はなにも言わず、目をそらすこともしない。

ちよつとすると彼女はなぜか空いていたほうの手で顔を隠して私から顔を背けた。

「…試しているこつちが試されている気分」

「ツバサさん？」

「っ！ツバサって呼びなさいー！」

「は、はあ…？」

わけがわからず固まっていると綺羅ツバサの後ろからどこからが現れたふたり、統堂英玲奈と優木あんじゅが歩み寄ってきた。

「まさか、ツバサが照れるなんてねえ？」

「私もびっくりだ」

「うるさい。ふたりもやればわかるわよ」

なんだかよくわからないが、この人たちはとても画面で見ているような感じではないことはわかった。なんだ、音ノ木の生徒とあまり変わらないのかもしれない。

「優木あんじゅよ。みはねちゃんよろしくねえ。私のことはあんじゅって呼んで？」

「ツバサが迷惑をかけてすまない。統堂英玲奈だ。好きなように呼んでくれ、みはね」

「よ、よろしくお願いします」

「敬語はいらないわ？はい、もう一度」

あんじゅは私の唇に人差し指を置いてきた。

少しことりと似た感じのふわふわかと思っていたら大間違いだったようだ。こう、なんか、大人の色気？みたいなのがすごい。けしてことりが子どもっぽいと言っているわけではなく、この人は自分の魅せ方をよくわかっている。

そんなあんじゅのペースに狂わされ、思わず口を開く。

「よ、よろしく。あんじゅ、英玲奈…それにツバサ」

私のぎこちないながらもくだけた挨拶に満足したのか三人とも笑顔になる。笑うと少し幼く見えるその顔に、三人もやっぱり高校生なのだということがわかって嬉しくなり、私もつられて笑顔になった。

「はあはあっ…みはね！」

「にこ。それにみんな。どうしたの？」

「どうしたのじゃないでしょ！いきなり連れ去られたんだから！」

真姫の怒りに反省する。

「真姫…ごめんね？」

「わ、わかればいいわよ」

「こんなところじゃあれだし、カフェスペースにでも案内するわ」

ツバサのその一言で、私たち4人はA—RISEと初めて対談することになる。

54. 言葉の力

A—RISEと話をする事になったのは全然いいんだけど…

カフェスペースってここ？これ、なんかA—RISEだけの特別ルームみたいになってるけど…？

みんなはこのカフェスペースの長いテーブルを囲むように座っている。私は立ってるけどね。

「μ_sのこと、だいぶ前から知ってたわ。一度挨拶したいと思ってたの」

「そう…なんですか？」

「あらみはね、みんなの前だと戻ってしまふの？…私たちの仲なのに」
さらっとそんなことを言うツバサ。私の生死に関わるからそう言う冗談は本気でやめてほしい。現にみんなからの視線がチクチクと痛い。

「ツバサ、その言い方だと誤解されるから！知り合ったばかりだし」
「あら？ふたりで見つめ合っていたのはなんだったのかなあ…なんて」

「そ、それ、私真顔だったと思うんだけど…」

そうだった？なんておどけるツバサのせいで周りから睨まれ変な汗が止まらない。

「みはねちゃん！もうA—RISEのみなさんと仲いいんだね」

穂乃果は睨んでいると言うよりかは羨ましそうにキラキラした眼差しを向けていた。

「高坂穂乃果さん。やっぱり魅力的ね」

「ああ、人を惹きつける力。カリスマ性とでも言えばいいのだろうか？」

「は、はあ…」

突然の褒め言葉に穂乃果はよくわかっていないようだった。

「私たちはあなたたちのことずっと注目していたの」

あんじゅはほんわかとした笑顔とともに続ける。

「実は前のラブライブでも、一番のライバルになるんじゃないかって思っていたのよ?」

あのA―RISEにそんなことを言われるなんて誰が想像できただろうか。

絵里は戸惑いとともに口を開く。

「そ、そんなことは…」

「あなたもよ?」

ツバサに続いて英玲奈は話します。

「絢瀬絵里。ロシアでは常にバレエコンクールの上位だったと聞いている」

いきなり褒められ、しかもかなり詳しいことまで知っていて絵里は驚いて何も言わない。いや、言えない。

今度はあんじゅが。

「西木野真姫は作曲の才能が素晴らしく、園田海未の素直な詩とともにもマッチしている」

その言葉に二人がピシッと顔を強張らせる。

特に真姫はなぜか敵意がむき出しだったためより驚きが隠せないみたいだ。

「星空凛のバネと運動神経はスクールアイドルの中でも全国レベルだし。小泉花陽の歌声は個性の強いメンバーの歌に見事な調和を与えている」

「牽引する穂乃果の対になる存在として全員を包み込む包容力を持った東條希」

「それにアキバのカリスマメイドさんもいるしね。あ、元と言ったほうがいいのかしら?」

次々とメンバーのことを褒められていくが、どこまで私たちのことを調べたのだろうか。

「そして矢澤に…:…:…いつもお花ありがとう」

…は?

全員同じことを思ったらしく、一斉ににこに視線を移す。その先に

はなんとも気まずそうな顔をしたにこ。

「あ、いや、μ，sを始める前からファンだったから。って、私のいいところは?！」

「グループにはなくてはならない小悪魔ってところかしら?」

「はうあくー!小悪魔…にこは小悪魔…!」

にこ…大丈夫かな?頭のほうだけど。

ツバサの言葉をもらってからくねくねしてる…

「それにみはね」

「はい?」

「あなたほどのマネージャーはいないわ」

さつきまでにこにこしていたツバサは突然真面目な顔でそう言った。

「そんなことないよ」

この言葉は謙遜などではなく本当に心から否定している。まあ、当たり前だよ。

「いや、あなたほどメンバーからも周りからも信頼されて、好かれて、それに仕事も完璧にこなせる人はいないわ。それに、何よりあなたには魅力が詰まってる」

な、なに…そのべた褒め。私はそんなこと言ってもらえるような人間じゃない。

「そんなことない!私には何も取り柄がないし。みんながいなくて何もできない」

そんな私の言葉に反論してきたのは意外にもツバサだった。

「みはね。それ、本気で言ったら怒るわよ」

「ツバサに怒られる筋合いはないもん」

なぜだかあんじゅは満面の笑みで私たちを見守り、英玲奈はやれやれと呆れている。μ，sのみんなは案の定言い合っている私たちの間に入ることもできず、私の言葉に怒るでもなく呆けている。

ツバサは立ち上がって私の前まで来ると胸ぐらを掴んできた。息がしづらくて苦しくなる。

睨みつけると、ツバサは深くため息をついた。

「みはねの悪いところ、見つけたわ。それは頑固で自分が全く見えていないところね」

至近距離でそんなことを言われて何も言い返すことができない。

なんで、なんでそんなこと会ったばっかのツバサに言われなきやいけないの…！

言葉のかわりに目で訴える。

「なに？なにとも言えないの？」

「つ、ツバサにそんなこと言われる意味がわからない。私のなにを知ってるっていうの！」

その言葉にツバサの眉間のしわがさらに深くなる。

「それは…一目惚れしたからよ。みはねのことが好きなの。この私が惚れた人間がそんなこと言ってたらムカつくに決まってるじゃない！」

そう言っでぐいっと私のことを引き寄せるとそのまま唇が重なった。

…え？頭が追いつかない。す、好き…？ツバサが私のことを…？

今日まともに話したばかりなのに。

そんな簡単に誰かのことを好きになるなんて、私のことを好きになるなんて、ありえない。

視界いっぱいツバサの顔の後ろに、喜んでいるあんじゅと頭を抱えている英玲奈の姿が見えた。その様子から、二人が今ツバサが言った事を知っていたというのは明白で。

本当に、意味がわからない。

「これでわかった？」

「わ、わからない…よ。私は…」

「そんなだと、すぐに捨てられちゃうわよ？………」

私の耳元で、周りには聞こえないように小さな声でつぶやいた。もしかしたら、私にも聞こえないように言ったのかもしれない。それくらい小さな声だった。

しかし、私の耳にはしっかりと聞こえた。

捨てられる？そんなこと、あるわけない。もし、みんなに必要なとき

れなくなってしまうたら…私の居場所がなくなってしまう。そんなの…やだよ…そんなの嫌だよ。

「ちよつと…みはねになにしてるのよ!」

「そうです。手出しはさせませんよ」

「離れてちょうだい!」

真姫と海未と絵里はツバサに今にもくっつかかりそうだ。

「あ、そうだ。私たち、屋上に特設ステージを作ってライブをやるの。
μ sのみなさんもどう?」

ツバサは私のことを離すと笑顔でμ sを見た。

一瞬ちらりと私を見たツバサの目は、挑戦的な、獲物を狩る猛獣のようなもので。それが意味するのは、そういう事だろう。

「やります!」

ツバサのその言葉に穂乃果は即答する。

「そう。これだけは言っておくわ…私たちが絶対に勝つ」

「私たちだって負けません!」

「ふふ。詳しいことはまた連絡させてもらうわね。じゃあ、また」

A—RISEの三人は部屋から出ていった。

そのあとみんなにツバサとのことを聞かれ怒られた。

ほんとならみんなに囲まれてやきもちとかも妬いてくれてうれし
いはずなのに、つい考えてしまうツバサの言葉。

そのうち、みんなに飽きられてしまうのだろうか。学校で1人考え
ているとどんどん悪い考えばかりが浮かんでしまう。

胸がもやもやして。頭もぐらぐらしてきて。

ひどく吐き気がする。

すぐに捨てられちゃうわよ?

頭からツバサの声、言葉が離れない。

どうすれば…いい?わからない。

本当に捨てられてしまう?みんながそんなことするはずない。

でも…わかんない。

もう……………

「わかんない。嫌だ嫌だ嫌だ。イヤダ」

目をつぶったわけでもないのになぜか視界がどんどん暗くなる。

私はそのまま真つ暗闇に、落ちていった。

55. もうわからない

目がさめる。ゆっくりとまぶだ開けるとそこは真つ暗な空間。

「ここは…」

たしか、自分の部屋で考え事をしていた。考えても考えてもわからなくなつて、嫌になつた。そうだ。自分はわからなくなつて逃げ出したいと思つてしまつたんだ。

「誰？」

人の気配を感じ振り返ると、自分自身の姿があつた。

鏡に映っているのかと思つたら、そうでもないようだ。

「ここは、夢の中？だよね」

「さあ？」

なんだかそつけない返事にむつとする。

「…かわつてあげる」

「へ？」

「だから、かわつてあげるよ。だって私はあなただから。私も桜みはね」

…かわるつて、そういうことだよね。

でも、それもいいかもしれない。今の私にはみんなとうまく付き合える気がしない。

どうせ夢なら、いつそのまま……

” 助けて”

私はまた、暗闇に包まれた。

二重人格というものを知っているだろうか。

そう、私は桜みはねのもう一つの人格。

μ、sのマネージャーであるみはねと同じで違う存在。やはり同じ存在ではない。

別にこの体に乗っ取ろうと思っっているわけではない。ただ、もう一人が壊れる前に、なんとかしないとっと思っただの。

もう一人は過去を知らないぶん、あまりにも脆すぎる。

これからどうしよう。明日は学校もあるだろうし。隠し通せるとは思わないけど。

少しくらいはこの子を休ませてあげないと。

だから、今は彼女が出て来なくなるまで時間を作らないと。まあ、そもそも、今さら戻ることなんてできないし。

「そろそろ朝がくる」

外を見るとさつきまでいた月がいなくなっていた。うつすらと太陽の光が見える。

「どうしようかな」

時間がくるまで屋上ででも寝ていようかな。

まだ少し暗い廊下を歩くとなんとも心寂しい気持ちになる。

彼女はいつもこんな中一人でいたのか。

屋上は少しだけ肌寒かったが空気が気持ちいい。あ、あのはしごから上に登れるのかな。あそこで寝てよう。

おやすみなさい。

（絵里）

まったく、A—RISEの綺羅ツバサはなんなのよ！見えないと思っていたかもしれないけどはつきり見えていた。みはねと、キス、してた…わよね。

思い出すたびに胸がぎゅうつと痛くなる。忘れてたくて何度もクツシヨンに顔を埋めるが息が苦しくなるばかりで意味がない。

「みはね…」

あなたはあの時なにを思ったの。

うれしかった？嫌だった？もし、うれしいと思っていたら…そんなの嫌よ。

「す、き…」

この気持ちを伝えたくて、大好きな声が聞きたくてどうしようもなくなる。

どうしよう、今電話かけたら迷惑かな。

一度だけ、そう思って通話ボタンを押す。

いつも以上にコール音がながく響いて聞こえる。…出ない。やっぱり寝てるのかしら。

UTXからの帰り道、私たちがなにを話しかけても反応は薄くて。とても不安になった。

ちらりと覗き見た顔が、今まで見たことないくらいに怖くて、悲しそうで。穂乃果といういろいろあった時の顔に似ていた気がする。

なぜそんな顔をするのか理由が知りたくなかった。でも、聞くことなんてできなくて。あなたのことになると臆病になってしまみたい。だって、あなたを好きになる前はこんなじゃなかったもの。

「はあ…もう寝ましよう」

*

今日は朝練がなかったためみはねと会うことができなかった。放課後の練習まで待つしかないわね…

「えーりちつ。ここ、しわ寄ってるよ」

そう言っただけが私の眉間のしわを指でぐりぐりとほぐす。

「気になるじゃない」

「ああ、みはねのこと？」

「そう。ちよつと様子おかしかったし」

「せやね。まあ、放課後になればわかるんちゃう？」

そう、きつと私が気にし過ぎなだけ。

その後も早く終わってほしいと願いながら授業を受けた。

昼休みが始まるチャイムが鳴った。

お昼どうしようかな、とお弁当を出そうとした時。

「エリーっ！ちよつといい？」

呼ばれた方を向くときれいな赤毛の美人な後輩の姿。真姫の顔は今まで見たことないくらいに焦っていた。

周りからの視線もあつたため急いで廊下に出る。

「どうしたの？」

急いできたのか少し息が上がっている真姫は息が整うのも待ってられないとばかりに言い放つ。

「み、はねがっ…いないの！」

みはねがいない。はつきりそう言った。

「どういうこと？」

「朝から教室にみはねの姿がなくて。先生も知らないみたいで。さつき、みはねの部屋に行つたけどいなくなつたから」

普段の真姫からは考えられないほどに焦っている様子。これは、ただ事じゃないわね。

「わかつたわ。あまりおおごにしたいくないから、私と真姫で手分けして探しましょう」

「そうね。学校にいればいいんだけど…」

「見つけたら連絡しましょう」

みはね、どこに行っちゃったのよ。このまま見つからなかったらどうしよう。普段から儂げな存在で、少しでも触れてしまえば壊れちゃいそう。いなくなっちゃいそうと思うことは多かった。でも、今まで黙ってどこかに行くことはなかったし…

よけいに不安がつってくる。

みはねが行きそうな場所なんてわからない。だって、みはねは自分のこと全然教えてくれないから。まあ、記憶がないから教えられることがないのかもしれないけど…

だめね、私今かなり動揺してる。

「ここにはいないわよね」

ついたのはみはねの部屋。ここは真姫がすでに確認済みだ。

今まで一度も入ったことがないのもあつてか手が勝手にドアを開ける。

「なに、これ…」

そこはとても人が住んでいるようには見えなかった。あまり部室と変わらない。いや、部室よりもものが少ない。

長机とソファが置いてあるだけ。

中に入ると空気が冷たかった。いや、もしかしたら物理的に冷たいだけではなく心細さからきているのかもしれない。そう思ってしまうほどにさみしい空間だ。

いつも、ここに一人でいたの？

ふと、みはねがうちに泊まりにきたときのことを思い出す。ご飯を食べるときはほんとうにおいしそうに食べて、ベッドに入ったときは幸せですと言わんばかりの顔で私にくっついてくる。

それに、ときどき悲しそうに笑う。

夜は涙で頬を濡らしている時もある。

なんで話してくれないのよ。さみしいって一言くれたらずっといっしょにいたのに。それとも、そこまで心を許してくれてなかったの？まだ、ずっとそばにいてほしいって思えるほどの仲じゃない？

「う、うう…なんで。なんでなのっ」

今は泣いている場合ではない。頭ではわかっているが涙は止まってくれそうにもなかった。私が泣いている時に、優しく涙を拭って抱きしめてくれるみはねが今はいない。

探さなきゃ。その一心で走り出す。

たどり着いたのは、私たち^μ sの練習場所である屋上だった。
「あっ」

背後からぶわりと大きな風がおきた。

今、みはねの匂いがした…気がする。

振り向いてみると、普段なら気がつかないような場所にさらに上へといけるはしごがあった。

「確認、したほうがいいわよね…」

私は妙な胸騒ぎとともににはしごに手をかけた。

56. 過去

コン、コン、コン。と、誰かがはしごを登ってくる音がする。私は、目を閉じたまま寝たふりをすることにした。ひとつ、またひとつと音は上に登ってくる。しばらくして音が止まった。上についたのだろうか。

「みはねっ」

音の主であろう人は私の名前を呼んで、寝ている私に抱きついてきた。

「よかった…いなくなっちゃったと思った」

そう言っただけ私の頬をなでる。少しくすぐりたい。

なんだか少し興味が湧いて、ゆっくりと目を開けた。

「ん…誰？」

目を開けた先には、きれいな金色の髪と青色の瞳があった。絢瀬絵里…だっただろうか。絵里の瞳からは宝石のようにきれいな涙がこぼれていた。

「みはねえ…つく、うう…」

起き上がった私にしがみついて泣いている彼女に戸惑う。どうすればいいのかわからない。

「どうして、泣いてるの？」

「っそんなの、みはねが心配だったからよ！当たり前じゃない！」
肩を震わせながらより強く抱きついてきた。

心配だったから、か。そんなこと言ってくれるような人が今はそばにいるのか。

なぜだか、そんな些細なことで絶望的な気分になる。

しかし、だんだんと泣いている絵里を見ていたたまれない気持ちに

なってきた。

とりあえず、謝ればいいのかな。

「ごめんなさい…？」

「ばかあ。いなくならないですよ…」

泣き止まない絵里をどうすればいいのかわからない。彼女ならどうするのだろうか？

こういうことはわからない。なにも。

ただ、わかることが一つだけある。それは、私は、みはねは絵里のことが好きだ。大好きだ。私自身にその気持ちがないにも関わらず心臓がうるさい。鼓動が全身を伝わっていく。身体中が、心が絢瀬絵里のことを好きだと叫んでいるようだった。

これが、人を愛するということなのだろうか。初めての感情にどうすることもできない。なぜこんなにも苦しいの。

「ねえみはね。いつもみたいに慰めてよ…」

それはたぶん、伝えるつもりがない言葉だったのかもしれない。

小さくそう呟かれた言葉に疑問を抱く。

「慰める？」

慰めるとは何をするのだろうか？

「えっと、どうすればいいの？」

思わず聞いてしまった。

これは言わないほうがよかったかもしれない。

「ねえ。なんだか変よ？」

絵里の不審そうに私を見つめる。

ああ、やっぱりダメだ。こんなのバレてしまうに決まってる。

だって、私ともう一人はあまりに違いすぎる。

「ごめんなさい」

「どういうこと？なんで謝るの？」

「実は、私は、みはねだけどもみはねじゃないの」

信じてもらえるだろうか？いや、説明くらいは私からするべきか。無理にかわったのは私だし。

私はそう決心して困った顔をしている絵里に話すことにした。

「私は、もう一人なの。わかりやすく言うと……みはねのもう1つ的人格。私の話を、聞いて？」

私の、過去を。

*

私は人に愛されたことも人を愛したこともなかった。

私の両親は望んで私を産んだわけではなく、ただ、できてしまったから。それだけだった。

両親は結婚しているわけではなかったらしい。

だんだんと私という存在が邪魔になって、それが原因で両親の仲はどんどんと悪くなった。私に物心ついた時には既に母親の姿はなかった。

父親はというと、仕事で家にいることはほとんどなかった。

家に帰ってくるたびに女の人を連れてきていた。

隣の部屋から声が聞こえる。

私は邪魔にならないように、息を殺して、部屋の隅にうずくまっ
ていることしかできなかつた。

いつも考える。

ああ、私の名前ってなんだったっけ。

ああ、私の存在価値ってなんだろう。

ああ、私はなんで生まれてきてしまったんだろう。

邪魔なだけなのに。

答えなんて、誰も教えてくれない。

名前なんてそもそもなかったのかもしれない。私が誰かに名前を呼ばれることは一度もなかった。

存在価値。そんなものあるわけない。だって、ただ存在しているだけなんだから。

なんで生まれてきたか。教えてほしい。私はなんで生まれてきてしまったの——

机の下に落ちた写真たて。中に入っている写真は過去の両親。その写真は、誰がやったのか、マジックペンで黒く塗りつぶされていた。部屋に置いてある本棚にはぎっしりと本が詰まっっていて。毎日少しずつ読み進めていった。簡単な絵本から少しずつ難しい本へ。本から知識を得ることは楽しかったと思う。

たまに帰ってくる父親。

彼と一緒にたまに家に来るきれいな女性。

机と写真たて。

たくさんの本。

この静かな部屋。

それが私の世界で、私の全てだった。

ある日、本棚の隅に見つけた小説、それが私の人生を変えた。

その本の主人公は心羽^{みはね}。

天使に憧れる心優しい女の子。彼女はとても優しく、周りのみんなから愛されて、それで、ちよつとだけ泣き虫だった。

私は心羽がとても羨ましくて、彼女みたいになりたいと思った。

それで、なんだかこんなところでなにもできない自分がすごく嫌になって、部屋の窓から飛び出した。もちろん一階じゃないし、どのくらいの高さかわからなかったけど、まあ、落ちたんだ。不思議と怖くなかったけどね。

怪我はしてたけど無事だった。下にいつも父親という女性が女の子を連れていて、私に何かを言おうとしていたけど、それすらも怖くなって逃げ出した。よくわからないけど走って走って走りまくって。どこだかよくわからないところで力尽きて、倒れて。

もう、いろいろと疲れてたんだと思う。このまま死んでもいいかなとさえ思ってしまった。

そう、あの家から自分の力で、自分の意思で出たってことだけで満足したのかもしれない。

そしたら、いつの間にか、なんて言えばいいのかな、心の中？みたいなところで自分自身と向き合ってた。

何かを話すわけでもなく、彼女の頬に少しだけ触れたの。

優しく抱きしめられて、大丈夫だよって言ってくれた。それが今私の中で眠ってるもう一人の私。

どっちの私も私で。どっちも本物。

あなたは、心羽のように幸せになってー

私はそれだけを願って、彼女に自身のこれからを託した。

そうして自分は心の奥深くに閉じこもって、記憶のない彼女に守られてきたんだ。

*

私の話を聞き終わった絵里は、疑問と悲しみが入り混じったような顔をしていた。

「ということは、二重人格ってことになるのよね」

絵里の言葉にゆっくりと頷く。

「そういうことになる」

「そうなのね…」

「うん」

信じてもらえただろうか？私の話を。嘘のようで、本当の話を。

悲しそうに私の話を聞いていた絵里は突然怒った顔になる。

「…なんで無表情なのよ」

「そんなこと言われても、これが私の普通だから」

そう、とため息をつく。私のほっぺたをむにゆむにゆといじりだす。

「にやにすりゆの」

「もう。なんかむかつくわね」

なんて言いながらも絵里は笑っていた。

二重人格つてところに触れてこないってことは、信じてもらえたのかな。

「ねえ。どうしていきなりあなたになったの？」

その言い方に、少しだけ嬉しくなる。

ちやんと、今は眠っちゃってる私とは別の人間として扱ってくれているように。

「ああ、それも教えなきゃね。もう一人、追い込まれちゃったみたいで。綺羅ツバサに君たちにすぐ捨てられちゃうって言われたみたい。彼女、ひどく不安になって」

むすつと不機嫌になった絵里は、突然がっしりと肩を掴んできた。

「ねえ、戻ることできないの？」

「なんで？」

「いや、また私たちににも言わないで悩んでってことじゃない？頭にくるわよ」

頭にくる、と言っているわりには全然怒っていないなさそう。どちらかというところ、不安な顔をしている。

「彼女のこと、大好きなんだね」

「当たり前よ」

「そう。彼女は他人の気持ちにとっても敏感。記憶にないだけで、体はきつと覚えてる」

それが、なかなか難しいのだ。

「どうしたらみはねは戻ってくるの？」

「今はまだなんとも言えないけど…みはねが、出てきたいと思ったら自分で出て来るんじゃないかな？」

だから今は彼女が出てきてくれるのを待つしかない。

「そう。じゃあ、あなたのことサポートするわ。このまま今までみたいに生活できないでしょ？」

「うん。ありがとう」

なんだかすごく愛されているんだね。すこし、羨ましかったり。

はやく彼女が戻って来るといいんだけど。それが、私にも、μ、sにも、彼女自身にもベストだと思う。

「そういえば、あなたはもともとなんて名前だったの？」

「名前なんてなかった。あつたとしても君に教える必要はないと思うけど…？」

「そうなの。って、そこまで言わなくてもいいじゃない！もう」

彼女は頬を膨らませてむすつとした顔をして拗ねている。

「まあ、名前がないのは本当なの」

「そうなのね…」

ごめんなさいと絵里は俯いてしまって、どんな顔をしているのかわからなくなってしまう。でも、たぶん、悲しい顔をさせてしまっただろう。

「たぶん、もう一人はあの物語の主人公の影響を無意識に受けているんだと思う。いや、違うか。私がそうあってほしいって願ったからか

もしれない」

南ことりと初めて会った時、彼女は自然とみはねと名乗ったのだ。だから、彼女はみはね。私がそう望んだから。

「でも、影響を受けていたとしてもみはねはみはねよ」

絵里は少し悲しそうに笑った。

「そうだね」

「でも、あなたもきつと優しいのね。じゃないと、そんなに優しい顔で笑わないもの」

「え？」

絵里の言葉を不思議に思い、自分の顔をペタペタと触って確認する。

そんな私を見かねてか、ポケットから鏡を出して、私に向けてくれた。

鏡に映る私は、絵里がいうように笑っていた。

ほろりと涙がひとしずく溢れる。

「頑張ったのね、今まで」

そう言って、優しく頭をなでるものだから、余計に涙が溢れてきた。

あまり、優しくしてほしくない。

嘘、本当はもう一人の私が羨ましかったのだ。

こんな感情、知らなくてよかったのに…

だって、私はただ一時的に代わりをやっているだけなのだから。

57. 私の居場所

桜みはね。もし、もう一人の人格の名前が桜みはねなのだとしたら、私という人格はなんという名前になるのだろうか。
ふとそんなことを考える。

「ねえ、とりあえずこの後どうするつもり？というか、どうすればいいの？」

私が黙り込んでからしばらく経って、絵里は少し困ったように笑った。

私の過去を話した後も、普通に接してくれている。彼女ならもしかしたら…

「絵里…私、名前がほしい」

「へっ？名前？」

私の突然の質問にヘンテコな声をあげて、絵里はかわいらしく首をかしげた。

「そう。だって、桜みはねはもう一人の名前でしょ？」

「そ、そうね。確かにあなたを呼ぶのに少し困るかも…？」

じゃあ…と考える絵里の顔があまりにも楽しそうで、少しだけ心がほんわかとする。

さつきまで、感情なんてものほとんどなかったのに、本当に不思議だ。

「いや、でも、名前なんてつけなくてもいいんじゃないかしら…？」

少し気まずそうな顔をされて。もしかしたら、私なんか名前をつけるの、嫌だったのかもしれないなんて思っ

「なんで」

少しぶつきらぼうに。

「だって、みはねじゃない。私にとってはあなたも本物のみはねよ」
その言葉は素直にうれしい。

「でも」

欲しい。私の名前が。私だっていう証が。私だけのものが。

絵里はそんな私を見て、ため息をひとつついた。

「わかったわ。じゃあ、こうしましょう。心羽、これで”みう”って読むの」

「み、う…？」

「ええ。これからは、みうって呼ばせてくれるかしら？」

眩しいくらいのきれいな笑顔。思わず見惚れてしまった。

「うん。ありが、とう…」

これは、私だけの呼ばれ方。みう。

「ふふ、どうしたの？にこにこしちやって」

「し、してない！」

「そう？それよりも、さつきより表情が豊かになってきて嬉しいわ。やっぱり、笑っていてくれたほうがいいわね」

そう言って頭をなでられる。初めてだが、自分の顔が赤くなっていることがわかった。それくらいに、顔が熱い。

誰かに優しくされることがこんなにも嬉しいことだったなんて。

このままずっと…なんて、そんなずるいことを思う。でも、それと同じくらいにもう一人に早く返してあげたい、そう思った。

「みう。難しいこと考えてるでしょ」

「…早くこの体をみはねに返してあげたいなって思ってる。でも、私…誰かに優しくされることなんて初めてだから…」

言葉の途中で絵里に抱きしめられた。

「今は、私に甘えてもいいのよ。それに、返すも何も、あなたのものじゃない。そんなに深く考えなくていいと思うわ」

「絵里は、早くみはねに会いたくないの？」

そういうわけじゃないわ、絵里はくすりと笑って。

「私は、みはねが私に会いたくなるまで待つことにしたの。いや、待つだけじゃなくて、ね？」

そう言っただけで、頭をなでる手が優しく、あたたかくて。心がほかほかになって。

強張っていたはずの体も、いつしか力が抜けて、自然と絵里に預けていた。

「心の奥にいる時もね、絵里の、みはねの周りにいる人みんなの優しさ、感じてたよ。ありがとう」

「ふふ、もう少しだけ、こうしていてもいいかしら」
「しようがないなあ」

まるで、絵里が望んだから仕方がなくなると言い方をしているのに、むしろ、私のほうが絵里を離さないように抱きついて。

色々考えなくちゃいけないことはたくさんあるけど、もう少しだけこのままでもいいさせて。

*

あれから絵里は、私のことを探していた真姫に連絡をとって。元生徒会長が授業をサボるなんてことできないので、私を部屋まで送りつけると教室に戻っていった。

「…というわけなの」

そして今、放課後になって、絵里がみんなを部室に集めて全てを説明してくれた。

事情を聞いたみんなは私のことをじっと見つめている。

「ねえ、今までと同じように接しても問題ないよね？」

穂乃果…は、笑顔で私に問いかける。

とりあえず、こくりと頷く。

「よかった」

穂乃果は変わらず笑顔で。それが、私にはあまりにも眩しすぎて、目を伏せた。

「みいちゃん」

声の主、ことりのほうを向くと、もう一度みいちゃんと呼びかけられた。

「な、に…?」

「大丈夫だよ」

気付いた時には、ことりの腕の中にいた。

とつさに体が離そうとしたが、ことりがぎゅっと力をいれたので、離れることができなくて。それに戸惑い、どうすればいいのかわからなくなる。

でも、どこか安心する。以前にもこんなことがあったような。そんなことを考える。

「なるほどなあ。でも、なんか、本当に別人やね」

ことりから解放されると、今度は頭の上に小さな重みが。そのまま希はゆつくりと私の頭をなで始めた。

なんだか、そわそわする。やめてほしいけど、やめてほしくない。矛盾した気持ち。

「別人、だからね」

「わかつとるよ。なんだか、家に来たばかりの猫さんみたいやね」

な、真姫ちゃん。と、希は突然真姫に話を振った。

「なんで私に聞くのよ。意味わかんない！」

「それはあ、真姫ちゃんがあ、家に来たばかりの素直じゃない猫みたいだからじゃない？」

にこの言葉に真姫がかみつく。

「はあ!? 希は素直じゃないなんて言葉いれてなかったわよ!」

てんやわんやとしてきた部室。

もしかしたら、みはねはこのみんなと一緒にだからこそ、あそこまで感情を豊かにすることができたのかもしれない。

まあ、すぐ泣いちゃうところは、あの物語の主人公と一緒にだけど。

「みんな、改めてありがとう。これからも、いろいろとよろしく」

深く、深く頭を下げる。

頭をあげると、みんなの驚いた顔。

「どうし…あつ」

ぼたぼたぼた。

目から涙が溢れだす。

みんなの心配した顔が目に入って、それもすぐ歪んでしまつて。一生懸命に拭うが、どんどん溢れだして。

「とまん、ない。ははっどうしよ」

笑つてみたが、笑えなかった。

こんな顔、見られたくない。

そう思つて、下を向こうとした瞬間、穂乃果の両腕が私の首元に伸びてきて。気がついたら、頭を抱えるようにして抱きしめられていた。

「みはねちゃんの泣き虫」

耳元で笑われる。

「そんなことない。これは、泣きたくて泣いてるわけじゃ…」

子どもの言い訳のようなことを言う私に、穂乃果はくすりと笑みをこぼす。

「ばかだなあ、みはねちゃんは。人間ってね、ものすごく悲しい時とか、ものすつごく嬉しい時とか、勝手に涙がでちゃうんだよ」

だから、我慢しないでいいんじゃないかな？

「そうよ。泣きたい時は泣きなさい。にこたちが、一緒にいてあげる

から」

ふふん、と鼻を鳴らして自慢げに。にこが、先輩ぶるから。

「うるさい」

「んな!? あんたねえ…!」

「にこちゃん、落ち着いて」

私の言葉に怒ったにこを、花陽がなだめる。

そうしている花陽のほうに、にこよりもお姉さんに見えるのはなん
でだろう。

あ、いろいろとちつちやいからかな。

「ちよつと! 全部声に出てるわよ!」

「ふつ、あはは! みはねちゃんすつごく毒舌だにや」

「そんなことない、はず」

凜に小さく返して。さつきまで怒った顔をしていたにこも、その周
りにいるみんなも、私を見てにつこり笑う。

穂乃果の肩に、顔を押しつけるようにしてぎゅつと抱きつく。

「みはねちゃん? どうしたの?」

わかつてるくせに、穂乃果はおどけたようにそう聞いてくるから。
もっと、痛いくらいにくつついて。

「なんでもない」

「えー」

頭をゆっくりとなでてくれる。

「穂乃果に、子ども扱いなんてされたくないんだけど」

かわいげがないことを言っているのに、やめないで優しく接してく
れる。

それに嬉しくなって、もっとなで抱きついて。抱きしめられて。

「とりあえず、明日からはちゃんと授業には出てくださいね。これか
らのことは、一緒に考えましょう」

海未が優しく頭をなでる。

「みいちゃん。もうどこかに行っちゃダメだよ?」

ほっぺをつんつんと突つつかれて。ことりにごめんなさいと謝る。

でもその言葉は、みはねに聞かせてあげたいな。そんなことを思った。

「みはねちゃん、困ったことがあったらすぐに相談してね」

花陽にっこりと微笑まれる。それに、ありがとうと返すと、凜が横から。

「みはねちゃんは、凜とずっといつしよににいるにや」

手をぎゅっと握って。私もそれに握り返して、こくりと頷いた。

「凜とっていうより、私たちとね。みはね、私の目の届く場所に居なさいよ」

そう言った真姫の顔は、すごく優しくて。

「でも、私はみんなのマネージャーのみはねじゃない。いいの?」

「当たり前だよ! だったら、みはねちゃんはm&sの二人目のマネージャーってことでいいんじゃないかな」

穂乃果の人懐っこい笑顔。もう、本当にこの人たちには敵わない。

「まったく、次このにこにこに心配かけたら、絶対許さないんだから」
「にこっちは今回なんもしてへんやろ。えりちたちに感謝しないとなあ」

にこと希の会話を聞きながら、ちよつとだけ笑う。

すると、突然お腹に手を回されて、後ろに引つ張られた。

「そうよ。みうは私が見つけたんだから」

頭の上から絵里の声。

「み、みう?」

穂乃果は目を丸くして、そうしているのは穂乃果だけじゃなくて。

「そうよ。一番最初に見つけた私だけの、特別な呼び方」

そう言って、楽しそうに笑うから。

その顔が見たくなかって、もぞもぞと腕の中で体を反転させる。

優しげな青色。

「絵里だけの、特権ね」

「ええ、ありがとう。みう」

今は、ここが私の居場所。

でも、必ず返さなきゃいけない場所。

いや、必ず返したい場所。

58. 作戦会議

「それで、これからどうするー?。」

穂乃果はみんなに向けて、笑顔で首をかしげた。それは、なんのこゝとを指しているのか。

「どうするもなにも、とりあえずはライブに向けて練習です」

「そうやねえ。次のライブは新曲やし…な?。」

希はこつちを向いて微笑んだ。

なんで私の方を向くの。

希に向かって、むつとした顔を見ると、海未はどうしたのですかと。

希は、何事もなかったかのように隣にいる凛にちよつかいをかけている。

「なんでもない、よ」

「そうですか」

にっこりと微笑んだ海未を見て、少しだけ恥ずかしくなった。

「あ、そうだ!。」

穂乃果は突然机を叩いて立ち上がった。

「どうしたの? 穂乃果ちゃん」

ことりが隣から穂乃果の顔を覗き込む。

それににいつと笑って返すと、穂乃果はいいこと思いついたの!と私たちの方を向いた。

「ライブでさ、私たちの想いを届けたいんじゃないかな」

突拍子もない提案。

全員の頭の上にはてなが浮かぶ。

「…なにが？」

そんな穂乃果の提案に、思わず口に出してしまっていた。

「ほら、みはねちゃんだよ！ 私たちの好きって気持ちとか、楽しいよって気持ちを伝えられたら、もしかしたら戻ってくるかも！なんて」
ビシッと指を指させて。

みんなからの視線も集めて。

やっぱり、こういうのは苦手だ。

「中にいるみはねのことだよね？ うん、まあ、ありえなくもないと思う」

ありえなくもない、なんて回りくどい言い方をしたが、実際はそれで戻ってくると思っている。いや、確信している。

まあ、みんなの気持ちが本物なら。

みはねのみんなへの気持ちが本物なら。だけどね。

「でも…したら今のみはねちゃんは、どうなっちゃうのかな？」

花陽は眉を下げてぽつりと呟いた。

「それは、まあ、そのときにならないとわからないし。そもそも私は、みはねとはまったくの別人だしね」

だから、今はみはねが帰ってくることだけを考えよう。

そう言った言葉は、ちゃんと音になっていたかどうかわからなかった。

「でも、あんたも私たちsのマネージャーで。私たちの、友達でしようが」

にこに軽くチョップされる。

痛い、けど痛くない。

「やめて」

「ふんっやめないわよー」

にこは目をそらしたが、絵里と希がその様子を見て頷いた。

希はにこに、不器用やなあと言ってからかっていたが、絵里は私のそばまで来て。

「そうよ、みう。少しは自分のことを大切に考えてあげて？」
そう言つて、今度は絵里に頭を優しくなでられた。
「はあ…もう、ほんとに優しすぎるんだから」

ため息をついてみたものの、めんどくさいとか、本当にやめてほしいなんて思っている自分が見当たらない。

私、かなりめんどくさい。

謎の話し合いは新曲の練習を頑張ること、その新曲のステージではねに気持ちを伝えるということでもとまった。

*

μ、sの練習。

マネージャーになってしまった？私はもちろん参加しなければならぬ。
正直、全くこんなことになるなんて予想してなかったわけで。なに

をすればいいのかもわからない。こんな私なんかになにができるつて言うんだ。

そんな感じで、隅に体育座りをして、さつきから前を睨みつけているわけだけど。

「…ひま」

言葉に出すと、余計に意識してしまい、だんだんとイライラしてきた。
た。

「ふう…一旦休憩にします」

その海未の一言でそれぞれが休憩を始めた。

絵里は水分を取るとすぐさま私のところへ歩いてきた。

「ねえ、みう」

少しバツの悪そうな、困った顔をしている。

「…なに？」

不機嫌な私はぶつきらぼうに返事を返す。

と、同時に横からやわらかい衝撃。

「みはねちゃん。さっきから眉間にシワがよりっぱなしやで」

希は私に抱きついたまま、頭をわしゃわしゃとなでてきた。

「髪、ボサボサになったじゃん」

ペリツと無理やり剥がすと、なにが面白いのか、おかしそうに笑った。

「やーん。シワ取れなくなっちゃうよ？」

「そうなたら希のせい」

今度は確かに、なんて頷いている。

にひひつといたずらっ子のような顔をする希に呆れてため息をひ

とつ。かわいいとか、思っていないから。絶対に。

そんな希を横目に、絵里に話しかける。

「で、絵里はどうしたの」

「あ、えっと…なんだか、機嫌が悪そうだったから」

バレていることに驚くと同時に、少しだけうれしい気持ちになる。

「……………うれしい？」

なんでだろう。

「べつに」

「そう…」

ならいいのだけど…と、絵里は静かに私の隣に腰を下ろした。

「あんまりえりちを困らせたらかかんよ？」

絵里とは反対側にいた希にほっぺを軽くつままれる。

希の顔は笑っていたが、声はとても真剣だった。なんだかそれすらも気に入らない。

前をぼうつと見つめたまま、隣にあるであろう絵里の手を探す。

あった。

探しだして、そのまま握りしめると、隣からどうしたの？と。

「その、ひまだったただけだから。だから、ごめんなさい」

言いたいことが伝わったのか、絵里は優しく微笑んだ。

「ふふっいいいのよ。気にしないで」

握り返された手に視線を移すと、少しだけ気持ちが軽くなった。

「ありや、みんなもみはねちゃんと同良くしたいみたいやね」

希が指差す方をみると、残りのメンバーが表情それぞれに私たちのことを見ていた。

「べつに、私と一緒にいても、楽しくないと思うんだけど。ほんと、みんなよくわからない」

そう呟くと、絵里が手にぎゅつと力を込めた。

「あ、わかった。みはねちゃん、野良猫さんに似てるんや」

そう思わん？

唐突な希のその問いに、絵里は小さく笑って、そうねと呟いた。

「ねえ、私のことバカにしてるでしょ」

「ふふっちやうちやう。褒めてるんよ。かわいいってことやん？」

そんなふうに取り繕っても、バカにしているのは目に見えていて。ジロリと見れば、希は誤魔化すようにほっぺたをいじってきた。

「なんかな、野良猫であるみはねちゃんを、ウチらがかわいがりたくて、懐いてほしくて必死になってるん。ほら、なんか想像できるやろ？」

言われるままに想像して、なんだか少しおかしいなって。

「私は、誰にもなつかないし」

なんて、ちよつと怪訝そうな顔をしてみて。

私は、誰かを好きになる気持ちなんて知らなくていいし、知りたくもない。

「いや、えりちが一步リードしてるなあ」

「そうかしら？まあ、私はみうのこと大好きよ」

絵里は私のほっぺたにちゅつとキスを落とす。

そうすれば、遠くで見ただけの他のメンバーがやってきて。

「ちよつと、そうやってすぐ天然タラシをするのやめなさいよー」

「みはね、こっちにきてなさい」

私はなぜか真姫を中心に一年生グループに保護されて。絵里はにこにすごい剣幕で怒られて。絵里は少ししよんぼりしてて。

希は隣で見て笑って。

「またですか」

「海未ちゃん。今日は許してあげよう?」

「そうだよ。みはねちゃんも楽しそうだしさー!」

海未は休憩の時間を過ぎていると最初は怒っていたが、ことりや穂乃果に上手く言いくるめられて、しょうがないですねと。って、

「私、楽しそうになんかしてない」

穂乃果の言葉を否定する。

「ううん。すっごく楽しそうだよ。穂乃果にはわかる!」

なんて、どっからの自信なのだろう。

私ももうすっかり諦めて、わいわいと騒がしくなったこの場の行方を見守ることにした。

きつと、そのうち誰かが練習をしなければいけないと気がつくだろう。

59. ふたり

く 絵里く

みうと出会ってまだ数日。

私は彼女についてみんなよりは知っているが、まだまだ知らないことが多い。

しかし、別れが近づいているのもまた事実。

そう、ついに明日はライブの本番。

今回のライブは私たちにとってとても重要なもの。

もちろん、UTXの屋上でA—R—I—S—Eと一緒にライブをするということも大きな理由だ。

でも、と言ったらなんだけど、最も重要なのは私たちの大切な人が関わっている。

そう、もしかしたら、みはねが戻ってくるかもしれない。でも、もしみはねが戻ってきたとしたら、みうはいなくなってしまうということになる。

「なかなか、難しいわね」

気持ちの整理がつかない、とでも言えばいいのだろうか。

もちろんみはねのことは好きだし、愛しているといても過言ではない。みはねは私にとってなくてはならない、絶対に必要な存在。

しかし、私の中でみうも大切なことに変わりはない。

はじめの頃こそは、真顔でツンツンしてて、手を出したら引つかかれてしまいそう。そんな印象だった。まさに、希が言っていたように、周りと一步距離をとった野良猫のような…ね。

今まで甘えることがなかったから、その分不器用で甘えるのが下手で。きつと彼女の心の中では誰かを頼ることが、すごく恥ずかしいことなんだと思っている気がするの。

本当は、頭をなでられるのが好き。

でも、素直に喜ぶことができなかったり。

手をつなぐことが好き。

でも、なかなか自分からはぎゅってできなかったり。

抱きしめられるのが好き。

でも、抱きしめられると、何を思ってたか少し悲しみとも不安とも取れる顔をして、離れようとしたり。

つまり、私はみうのことがほっとけないの。

みはねとはまた違った好意。

この気持ちに名前をつけるなら、何になるのかしら。

ふと、そんなことを考える。

「絵里…その、帰らないの？」

あまり変わらないその表情にじっと見つめられる。

でも最近、みうのそのちよつとの顔の変化がわかるようになってきた。それに、感情が激しく揺れ動いた時は、しっかりと反応してくれるようにもなった。

この顔は、ちよつと困ってる顔ね。

「少しぼーっとしていたわ。ごめんなさい、帰りましょうか」

そう言って、みうの手をそっと握る。

「手を繋がなくても、どこにも行かない」

「それも少しあるけど、本当はみうの手があつたかくて安心するから

…ねっ」

「なにそれ」

みうは意味がわからないという顔をして、ため息をつく。

でも、私がお願いと手をぎゅつと握ると、しよがないなあと言いながら、嬉しそうに笑みをこぼした。

みはねもとい、みうがいなくなつてからというもの、彼女は毎日うちに泊まっている。

純粹に、*μ* sメンバー全員がみうを一人にするのが心配だったというのもあるのだけれど。それよりもなによりも、あのみはねの部屋に入ってから、寂しい思いをさせたくない思いがあることが一番の理由なわけで。

ソファアーの上で、ちょこんと体育座りをしているみうの頭を優しくなでる。

「なに？」

訝しげな目で私を見るみうがなんだかかわいくて、自然と自分の顔が緩む。

やっぱり、希が言っていたことは少し違うかもしれない。みうは、野良猫よりも、ちっちゃなかわいい子猫みたいね。なんて考えて、一人で納得する。

「ふふ、なんでもないわ」

「そう」

それだけ言うと、なぜだかみうは自分の腕に顔を埋めてしまった。いつもなら、小言の一つでも言っけきそうだけど。

「どうしたの？」

どうもしない、と小さく呟いて私のお腹のあたりに顔を押しつけるように抱きついてきた。そのまましばらく頭をなでていると、みはねは抱きついたのはそのまま、顔だけをこちらを向けてじっと私のことを見つめる。

(何かを訴えているのかしら?)

理由もわからず無言で笑顔を返すと、何かを観念したかのように、ため息を一つ。

「絵里のその笑顔を見てると、なんかなにも言えなくなる。嫌とかじゃなくて、嬉しい?みたいな。心がぽかぽかかってなるの。それが、自分が自分じゃなくなるみたいで、なんか、変な気分。でも、絵里の笑顔はもつと見たいの。どうすればいい?」

ところどころ、つつかえながら。

だんだんと弱々しく、いや、やわらかくなっていく語尾。

普段ほとんど自分のことを話してくれない彼女が、ここまで話してくれている。

その理由は、なんなのか。

私たちは、明日のライブでみはねが戻ってくると100%信じている。

最初のソロパートを二年生3人ではなく、わざわざ自分を入れてもらったことにももちろん意味がある。それは、私の気持ちを余すことなくみはねに届けるため。

そう。みうは明日私たちの前からいなくなるということだ。もちろんそれはみう自身もわかっていることで。

そっか、そうだったのね。

最後になるかもしれないから、きちんと自分の気持ちを伝えてくれた。そういうことなのよね、きつと。

巡り巡らされた思考が、一本の糸になるかのように繋がった。

「ハラシヨー…」

「へ?」

小首を傾げるみうを見て、途端に愛おしくなって。抱きしめたくなった。それと同時に、悲しさも込み上げてくる。

ちゅ、と、みうのおでこにキスを一つして。突然のことに、全然理解が追いついていないであろうみうを、包み込むように抱きしめた。

「絵里? どうしたの?」

「どうも、しないのよ。きつと」

ありがとうと、ごめんなさい。

好きって気持ちと罪悪感。

それら全部が私の中に溢れて、抑えられなくなって。

それは、涙となって零れ落ちた。つうつと頬を伝う一粒の雫がみうの首元に。そしてそのまま流れていく。

みうはそれにびくつと驚いて、ゆつくりと顔を上げた。

「泣いてるの?」

「そんなこと、ないわ」

がんばって笑顔をつくったが、それはもう、ひどい顔だったと思う。見られたくなくて、みうから顔を隠すように彼女を抱き直した。

「そっか」

みうはそれだけ言うと、私の腰に腕を回してきた。

なんで、こういう時に限って。ずるいわよ。

普段は絶対に抱きかえしたりしてこない彼女が、今こうして私にぴったりとくつつくように抱きしめ返してくれている。

さらには、手を背中において、トントンと一定のリズムで叩いている。

ずるい。

なんで、こんなに愛おしいことするのよ。

離れたく、離れたく、なくなってしまう。

「ごめんなさい」

思わず、そう口からこぼれ出てしまっていた。

ずるいのは私で。みうにとっては、私のしていることは卑怯なことなのかもしれない。それでも、みうと仲良くなりたくて、私のことを好きになってほしくて。それは、結果みうを傷つけることになるのはわかっているのに。

「なんでごめん? 絵里が私に謝らなきゃいけないことなんてない」

なんでかまた込み上げてきた感情を抑えて、そうね、と唸るように

つぶやいた。

「私ね、みんなと会えて、みんなの優しさに触れられて、よかったなっ
て思う」

今にも消えてしまいそうな儂げな笑顔。

こういう時ばかり、みうは私だけに色々な表情を見せてくれる。

「ならよかったわ」

「何にも知らない私に、嬉しいとか、楽しいとか。あと…寂しいとか、
悲しいとかいっぱい教えてくれた」

「ええ。もう、いいから」

これ以上聞くと、もうお別れのような気がして。聞きたくなくて、
自らくつつけた身体を離そうとしたけど、離れることはできなかつ
た。

みうが、離れてくれるはずなかった。

わかっていただけ。

苦しい。

「ありがとう。今、みんなに一番伝えたい言葉」

「そうね。きつと、喜ぶわ」

亜里沙にするように、頭をなでるとみうは顔を上げた。絡み合う視
線。

少しでも気を緩めると、涙が出てしまいそうだ。

「でもね、絵里に一番最初に伝えたかった。ありがとう。私のこと、見
つけてくれて。ずっとそばにいてくれて」

ありがとう、みうがもう一度呟いたそれは、ひどくかすれていて。

「みうの、そういう直球なところ、とても好きだけど少しだけ苦手だ
わ」

そう返すのが、精一杯だった。

「ん。ごめん」

みうは、私から目をそらすと、しばらくの間なにもないところを見
つめていた。

「絵里。明日、さ？ライブの前に、ちよこつとだけ時間ほしい。みんな
とは別に」

「え、ええ。もちろんよ」

またこつちを見たみうの顔は笑顔で。少し戸惑いながらも、私もそれに答えるように微笑んでみせた。

その時、初めてみうとみはねが、重なって見えた。

60. ほんとうは

心地よく、あたたかい光。

浮遊感。

見えない波に身を任せ、ゆらゆらと光の中を漂っている。

「……………う。…みう」

目を閉じていてもわかる、大好きな声。

そして、大好きな温もり。

大好きなあなたの、その優しくやわらかい手に触れられている。

このままずっと——

いや、このままじゃダメなんだ。

声のする方へ向かって、手を伸ばした。

お願い、届いて…！

目が覚めると、窓から差し込む光と私をじっと見つめる絵里の姿が

目に入った。絵里の金色の髪に、朝日の白い光が反射してキラキラと輝いていて、微笑んだその顔すらも眩しくて。

手を伸ばせば簡単に届いてしまうほどの距離。いや、手を伸ばすまでもないな。って…

「絵里。ち、近くない、ですか…?」

その距離の近さに一気に目が覚めた。

変に敬語になってしまった私を見て、ふふっと笑みをこぼす絵里。その息さえも当たってしまうくらいの近さ。

「おはよう、みう」

本当に、穏やかな微笑みと優しい声色。

「お、おはよう」

嬉しさが込み上げてくるのを無理矢理に閉じ込めて、絵里に挨拶を返した。

そんなことよりも、そう、離れてくれないことだけが気がかりだ。その気持ちがダダ漏れだったのか、絵里は困ったように笑って右手を上げた。

それと同時に私の左手も上がる。

「起こそうとしたら、急に捕まって。ね? 少しだけ、このままでもいいかなって」

そう思っていたときに、私が起きてしまったと。

「あ、え…」

私が、絵里のことを掴んでいて。離さなくて。この近さで。

ぐるぐると頭の中で思考を巡らせて、すべてが合点した時には、心臓はばくばくと音を立てて頭の中も沸騰したかのようにぐつぐつなって、とにかくあつい。

嘘だ…いくら寝ぼけていたからって、私がそんなことするはず…

「ぐ、めん」

「いいえ。朝からいいものが見れたわ」

なんてウインクを決められて、全身から力が抜ける。

再びベッドに仰向けになって、顔を腕で隠すようにすれば、絵里は

楽しそうに笑った。

「…忘れて」

「それは、なんのことをかしら？ 私のこと掴んで離さなかったこと？ それともー」

「もう、全部！」

ガバツと起き上がって、絵里の言葉を遮るようにそう叫ぶ。

絵里を睨みつけるように見れば、いたずらが成功したように笑う顔。目があって、無性に悔しくなる。

絵里が私の頭に手を伸ばして、頭、そして頬へとなでながら移動させた。

頬を親指の腹でくすぐるようになってなられば、なんの言葉も出なくなつて。

「ふふっ、かわいいわね」

「ーでも、いやよ。」

私のおでこにキスしてから、絵里はそう呟く。

「え？」

「忘れるなんて、絶対にいや。今のことも、あなたのこと全部」

顔では笑っているが、とても真剣な目。そんな絵里から目が離せない。息が詰まりそうさ。

いつもは悲しそうするのに、今日は違う。

少し困ったように眉を曲げている。

「絵里？」

なんだか無性に触れたくなくて、絵里の顔に手を伸ばす。

指先が微かに絵里の頬に触れる。

「お姉ちゃん！ みはねさん！ もう、朝だよー！」

部屋の外から亜里沙の呼ぶ声。

ハツとなって手を下ろした。

「さ、亜里沙も待っているわ。行きましょう」

なにもなかったかのような声に小さく頷くと、絵里は私の手をとつ

て部屋を出た。

∴絵里、何かあったの？

そんなこと聞けるはずもなく、私は絵里に手を引かれるままだった。

「あーっ、ついにライブだよ！しかもA—RISEだよ!!楽しみ！」

衣装に着替えるなり、ぴよんぴよんと犬のように飛び跳ねる興奮気味の穂乃果。

「穂乃果、少しは落ち着いてください」

そう言つて穂乃果を見て、呆れたようにため息をつく海未。

「そういう海未ちゃんは、緊張してるよね…」

ことりは、あきらかに緊張している海未を指摘する。

「それはことりも同じです！」

そう叫ぶ海未に、ことりは苦笑いで返す。

なんでも、ライブ直前の二年生3人はいつもこうらしい。

「あまり緊張しなくてもいいんじゃない。A—RISE?だっけ?たちよりもかわいいし、自信持つて」

それと、穂乃果はさつきからふわふわと衣装が舞っていて、目のやり場に困る。なんてことは言えなかった。

私の声に振り返った3人は、いつもの練習の時のような笑顔で。

その笑顔を見てなんだか満たされた気持ちになる。それと同時に胸がぎゅっと苦しくなった。

「あーあ、絵里の近くにいたせいで、みはねまで天然タラシになったわね」

準備を終えたにこが、そんなことをぼやきながら軽くデコピンしてきた。

「痛いんだけど…ってあれ、髪型いつもと違うね。似合ってる」

「つな!? あ、あんたね…! に、こならなんでも似合うわよ!」

ぷいっと顔をそらされてしまったが、にこの耳は赤い。

「なに照れてんの」

「照れてないわよ! って、そんな目で見ないで!」

どんな目だよ。

なんか一人で騒いでいるにこをスルーして、花陽たち一年生のところへ向かう。それに気づいてさらにギャーギャー騒いでいるが、無視しよう。

「みはねちゃん、どうしたの?」

花陽は、本番前にもかかわらず普段通りにこにこととしていた。

「花陽はあんま緊張してないの? なんか、意外」

思ったままを素直に伝えると、花陽は少し困ったように笑った。

「違うよ。かよちん、ほんとはすっごく緊張してるし、不安なんだよ」

凜が後ろから抱きついてくる。

「そうなの?」

「うん。みんな、おんなじ気持ちなんじゃないかな」

声はいつも通り明るかったが、そういう凜の手は微かに震えていた。

花陽の手をとると、やはり震えている。

そうだよね。緊張しないわけじゃないよね。こういうところ、もつとちゃんと、すぐに気づけるようになりたかったな。

「私は別に、緊張なんてしないけど」

いつも通り、自分の髪をくるくると指で弄っている真姫の手を両手で包む。

真姫の嘘、いや、小さな強がりを見抜くのは簡単だった。

「な、なによ」

「冷たいね、真姫の手。いつもあったかいのに」

やっぱり緊張してるんだ。そう言うと、真姫の顔は赤くなった。

凶星だ。

ちよいちよいと凜と花陽の手もこちらに誘い、三人の手を一緒に包み込む。

「大丈夫だよ。私の持つてる気持ちとか想いとか、全部あげる。だから、ライブ成功させて？信じて待ってる」

ね？と首をかしげると、3人も悲しそうに笑った。こんな顔、させたいわけじゃないのに。なんて今さらか。

少しだけ気まずい空気になってしまったところで、控え室のドアが鳴った。

「本番前にごめんなさい。少しいいかしら」

現れた人物を見て、思わず顔をしかめてしまう。

「綺羅ツバサ…」

ツバサはまっすぐ私のところへ来る。

「あら、みはね。そんなに警戒しないでほしいわね」

余裕そうな笑みを浮かべるツバサを睨みつける。

「私、今あまりキミに会いたくない」

「なぜかしら。嫌われるような事、した？」

完璧なまでのきれいな笑顔で。

なんだか二人きりになりたくて、いや、みんなのいるこの空間で話したくなくてツバサの手を引いて部屋を出た。

「ずいぶんと大胆ね。自分から手を繋いでくれるなんて」

「繋いでるんじゃないかと、掴んでるんだけど。はあ…ねえ、私怒ってる」

ツバサは一瞬真顔になると、また笑顔を作った。

「それは、なにに対してなの？」

さっきの笑みとは違う、普通の笑顔。

笑ってるのはムカつくけど、こっちの方がまだましだ。

「あの時、私がみんなに捨てられるって、言ったでしょ」

ずっと聞きたかったこと、あつたら必ず聞こうと思っていた。そして、場合によっては文句の一つでも言おうとも。

ツバサは、ああ、そのこと。と呟くと、じっと私を見つめてくる。

「あれは私の本心よ。だって、そのほうが好都合なもの」

実際に言われたのは私じゃないけど。

そうか、この目で言われたら確かに無理だ。

μ×sにはない、絶対的な自信に満ち溢れた瞳。

王者の風格というものなのだろうか。オーラが他の人たちとは全く違う。

でも、ここで怖気付くわけにはいかない。

「好都合。つてなに」

「私、あなたのことが好きだって言ったのよ？捨てられたって私が奪う、この前も言ったはずよ」

待って、私が見えねから受け継いだ記憶にはそんな言葉入っていない。

「言ってたっけ？そんなこと」

「言ったわよ。捨てられるわよの後に」

その言葉にくらっとくる。

なにそれ、それって、だいぶみはねが思ってたことと違う意味になるんじゃないか。

聞くまでもないが、確認しないわけにはいかない。

「…つまりっ」

「え、ああ。誰が相手でも、あなたは私が奪う。ここまで言えば、ちゃんと伝わるのかしら？」

伝わったよ。

もう、これでもかかってくらいに恥ずかしいこと言われてるはずなのに、ツバサが言うに心ですっと入ってくるのはなぜだろう。

「なるほど、ね」

私が彼女と入れ替わった意味は一体なんなのか。そんなことを考

える。

ツバサがもつとストレートに伝えていたら。みはねはとても大切なライブにいられなかったこと、もしかしたらすぐく嫌かもしれない。

それでもこんなことを思ってしまう。

みはねの勘違いでも、入れ替わることができてよかったと。私にとってはとても意味のある時間だったと。

「ねえ、私はみはねに嫌われてしまったの…?」

黙っていると、突然ツバサは私の袖をぎゅっと握って上目遣いで見つめてきた。

「へ?…あ、ええ?」

さっきの態度とはあまりにもかけ離れた。いや、自分の知っている限りのツバサとは全く違う。それゆえに、うまく対応ができない。

あれ、ツバサってこんなにかわいい感じだったっけ。

「ねえ、どうなの?正直に言って」

顔をぐいっと近づけられて、思わず仰け反ってしまう。

そんな私の態度に何を思ったのか、ツバサの瞳が潤む。

「え、あ、ちよつと待って。なに?これ、なんなの?」

「私のこと、嫌いなのね」

演技なのか。

これは、演技なんだろうか。

私の記憶にあるツバサは、いつも堂々として自分に自信を持っていて。涙なんて、見せるわけない。

「待って、ほんとに。ちよ」

「謝るから、嫌いにならないで」

ポタリと涙が瞳から落ちる。

え、なに。ツバサの涙を見て、動悸が激しくなる。

本当に、私は何をやっているんだ。

「嫌いじゃないから!ほんと待って」

「ほんとに、嫌いじゃない…?」

「ほんとだつて！ね？私のこと信じて？」
こくり。

ツバサは頷くと、ぎゅつと私の首元に抱きついてきた。
「初めて、人前で泣いたかも」

すんと鼻をすすつている事で、本当に泣いているんだなつてわかつた。

「これからライブなんだから。目、赤くなったら困っちゃうよ？」

「そうね。なんとかするわ」

へらりと笑ったツバサを見て、胸がぎゅつとなる。ねえ、こういうのを、反則って言うんじゃないの。

照れを隠すように、ツバサの目を親指で拭う。

「なんとかするって…もう。ほら、落ち着いて？」

初めて絵里と会った日教えてもらったように、抱きしめて、とんと、とあやすようにツバサの背中を叩いてあげる。

しばらくすると、ツバサはありがとうと言って離れた。

「今、自分でもびっくりしてるわ。私、あなたに嫌われるの、すごく嫌みたい」

そう言って、私の顔を伺うように下から見つめてくる。

「よかった、目赤くなってないね。その…ありがとう。嫌いになる事ないと思う」

私はこれから消えるから、先のことはみはねにしかわからないけど。たぶん、彼女なら嫌いにならないと思う。

ツバサの気持ちは、周りが思っている以上に大きいものらしいし。きつと、みはねにも伝わっているはずだ。

「その、ね。これからのライブ、あなたのためだけに歌うってことはできない。でも、あなたを魅了できるくらい本気で歌うわ。だから…」

ツバサは目を伏せて、ゆっくりと私に手を伸ばしてくる。

その手を私に触れるよりも先に取って、優しく握った。

「うん。A—RISEの時は、A—RISEのことだけ…いや。ツバサのことだけ考える」

「ふふっ嬉しい」

いつの間にか、ツバサに指を絡められていて。

きゅっと握ったり、力の入れ具合を変えてみたり。親指で手の甲をなでられたりと、私の手は完全にツバサのおもちや状態で。ちゅ、と手にキスを落とされて顔が熱くなる。

止めようとは思うが、時折嬉しそうに目を細めるから。そんな姿を見て、何も言えなくなってしまう。

「ツバサ、こんなところにいたのか。最後の確認をするから来てくれ」
どうすることもできず、困っているときに英玲奈がやってきた。

「わかった。今すぐ戻るわ」

私から離れたツバサの顔は、普段画面越しに見るときの顔に戻ってしまっていた。

一体どつちが素なんだろうか。

「じゃあ、みはね。約束は守ってね？」

「もちろん」

また後で、と言ってツバサは背を向けた。

別れは案外あっさりしているな。なんて、なにを期待しているのか。

「ツバサが世話になったみたいだな」

そう言ってツバサ背中を見つめる英玲奈の横顔は、まるで姉のよう
で。絵里が亜里沙という時のような顔にとてもよく似ていた。

「いや、そんなことないよ」

ツバサのことを見つめながら、英玲奈はぼそりとこんなことを呟いた。

「ツバサに振り回されるのは嫌いじゃないが…」

たまに疲れる時もある。と。

でも、英玲奈の顔はとて面白い笑顔で。

「そっか。私、かっこよくてみんなの憧れの的であるA—RISE好きだよ」

そんなA—RISEであるのは、紛れもなくツバサのおかげだろ

う。ツバサが周りを振り回すことも、穂乃果が周りを振り回すことも、どっちも必要なことなのだ。きつと。

「ははっそうか。なら、私ももつと頑張らないとな」
ふわっと私の頭をなでて微笑んだ。

「応援してる。もし疲れたら、話くらいは聞くとよ。いつでも」

ポケットに入っていた紙に、ボールペンで自分の連絡先を書いて渡す。渡してからハツとした。みはねは嫌がらないだろうか。

「何から何まですまない。ありがとう」

「いいえ。ライブ、がんばってね」

「ああ。それじゃあ」

私が小さく手を振ると、英玲奈はそれに答えるように軽く手をあげ去って行った。

ふっと目を細めて微笑む顔は、見惚れてしまうくらいにかっこよかった。クールな印象が強かったが、それよりも優しい人だということがよくわかった。

みはねに戻って連絡が来ても、彼女ならたぶん会いに行くだろう。大丈夫だ。

これから消えるはずなのに、周りと関わりを持ってばかりなのはなぜだろう。

それで困るのはみんなだし、みはねだ。

いや、それよりも今一番私自身が迷惑だと思っている。嫌だ、こんな。

過ぎたことは仕方がない、か。

少し遅くなってしまったが、これからμ☒sのみんなともちゃんと話をしよう。

私は少し緊張しながらも、μ☒sの控え室へ急いだ。

61. キミへの気持ち

「あつ、みはねちゃんや」

μ☒sの控え室に戻る途中、トイレから出てきた希とぼったり会った。

ツバサといろいろあつた後で、変に緊張していたのか、穏やかな笑みを浮かべる希を見て少しほっとした。

「希…さ、緊張してる?」

私の問いに、希は少し考えるそぶりをして。

「まあまあかな」

そう、へらりと笑った。

よく考えてみたら、さつき私が控室にいた時、希はいなかった。

その時から緊張、してたのかな。しないわけないよね。

真姫のように、私の前で強がっていつも通り笑おうとする希を見て、ふとあることを思いつく。

「そつか。ねえ、こっち来て」

呼んでから後悔した。よく考えたら、すごく恥ずかしいことしようとしてるかも。なんて。

「なあん?」

かわいらしく微笑む希。

ここまでできたら、なんでもありませんって言うわけない。

希の腕を引っ張って、自分の近くまで来させる。希は笑顔のまま首を傾げている。

ん?と顔を覗かれて、やっぱり恥ずかしくなったが、ここまでできた

らやりきるしかない。そんな義務感みたいなものを感じながら、希にぎゅつと抱きついた。私のなんともぎこちない動きに、希は体を強張らせたが、すぐにふつと力が抜かれた。きつちり3秒心の中で数えてから離す。

「…終わり？」

きよとんと目を丸くしている希に、こくりと一つ頷いて下を向く。「そっか。ありがとうなあ。みはねちゃんのおかげで緊張が解けたみたいや」

その言葉に嬉しくなって、顔を上げる。

「…ほんと？」

「ほんとやで。ありがとうなあ」

頭をなでなで。

それにいい気になって、もう一度控えめに抱きついた。希の肩に顎を乗せ、首元にぐりぐりと頭を押し付ける。

「ん、希。希の匂い、優しくて好き」

「…………みはね…？」

希が何かつぶやいたが、なんて言ったのかはちゃんと聞こえない。そのあとにも言わないのも不思議に思い、顔を上げてじっと見つめる。

「あ、あはは、くすぐったいやん？もう、ほんま猫さんみたいやなあ」
誤魔化すように前髪をくしゃつとまでられて、なんだか納得がいかない。

むっとした表情を希に向ける。

「いつも、猫みたいって言う」

そう言つて、ずっと頭の上にある希の手を掴んで、すりすりと頭を擦りつける。

ちゃんとなでてほしいの。気づいてよ。

そんな私に、希は苦笑い。

しかし、しばらくすると、ゆつくりと私の頭をなで始めた。
気持ち、ちゃんと伝わったのかな。そうだったらいいな、なんて。
私はなにを考えているんだろう。

「かわいいうつてことやん？よし、みはねちゃん、そろそろみんなの所へ
戻るか」

優しくもうひとなでされて、自然に手を繋がれる。恥ずかしいとか
そんなこと考える暇すらなくて。むしろ、あったかいとか喜んでい
る自分がいて。

「希、ライブがんばれ」

「うん、ありがとう。それ、みんなにもちゃんと伝えてあげんとね」
「ん」

優しく微笑んでくれる希に、少しだけ勇気をもらった。
すっかり忘れていたけど、早くみんなのところに戻らないと。

*

ドアの前で深呼吸をしようと思っていたが、希が普通に開けるか
ら、心の準備というものが全くできなかつた。

「みう、おかえりなさい。大丈夫だった？」

私を見るなり、絵里は心配そうな顔をして近寄ってくる。きっと、
ツバサとのことを心配してくれているのだろう。

「平気。ツバサとは、仲良くなった…かな」

「そ、それは…よかつたのかしら？」

絵里は一瞬微妙な顔をしたが、まあよかつたわ、と頭をなでた。

「絵里は過保護すぎるのよ。まあ、野放しにしとくとその辺の人たち
に手を出されてるこいつも悪いけど」

「にこ。意味わかんないこと言わないで。それと、絵里はすごく優し

いの」

口調からにこが私と絵里のことを悪く言っているのはわかりきっていて。思わず反抗的なことを言ってしまった。

「にこっちのほうが過保護やんなあ。みはねちゃんにも愛情たっぷりすぎてウチ妬けちやうわあ」

しかし、希の言葉を聞くなり顔を赤くしてそっぽを向くにこを見て、なんだか穏やかな気持ちになる。

にこも、すごく優しいと思う。

「他の人たちみたいに包容力はなさそうだけど」

その薄っぺらいのは抱き心地が悪そうだ。

「あんた、今それどこ見て言った？喧嘩売ってんの？」

こんなやりとりも、今ので最後なのかな。

「みんなに、言いたいことがあるの」

普通に言っただけなのに、思いのほか部屋に響いた私の言葉。それを聞いて、みんながこっちを向く。座っていたメンバーは、わざわざ立ち上がってこっちまで来てくれた。

「あの、ね」

こんなに緊張して、声が震えるのはなんでだろう。

みんなに見られているから？

普段言わないようなことを言葉にしようとしているから？

それとも――

「ありがとう。私、みんなのおかげで楽しかった。みはねが、とっても大事にされてることも知ることができて、本当によかった」

本当はもつと、たくさん言うことがあるんだろうけど。私の中ではなかなかうまく言葉にならないし。

なんか、みんなを悲しい気持ちにもさせちゃいそうだから。

「だから、ありがとう。ライブがんばって」

私、今どんな顔してるのかな。

みんなに見られすぎて、いい加減下向きそう。

「みはねちゃん。なんかいろいろ言いたいことあるけど、穂乃果うまく伝えられないと思うから。あのね、この気持ち全部歌に込めるよ。だから、ちゃんと聞いてね！」

ぎゅーっと正面から痛いくらいに抱きつかれる。

今回のライブは、みはねを呼びもどすためって、そう言う目的だったくせに。ぶれぶれじゃないか。

「そうですね。ありがとうは、私たちからあなたに伝えるべき言葉でもあるのですよ。そのこと、しっかりとわかってくださいいね？」

「海未…うん。もう、わかってるつもりだけど…ね」

「いいえ。まだまだ足りません！」

海未は私の頭に手をやると、ライブ期待しててくださいと。

「そうだなあ。みいちゃんってば、人からもらうの苦手そうだし。溢れるくらい、いっぱいあげなきゃだね」

ことりは人差し指を私の口元に持つてきて。そのままにこつと微笑む。

「そうだね。みはねちゃん、とつても不器用だから」

花陽まで、こつりの味方して。

「もう、わかったから」

「わかってないにや。だってみはねちゃんだもーん！あははっ」

でしょ？なんて首を傾げて、私の顔を覗き込んでくる凜。

そんなこと言うけど、みんなほんとに私のことそんなにわかってるの。

「そうね。彼女もあなたも、似てるもの。私たちの気持ち、これでもかかってくらいにあげるから。ちゃんと聞いておくのよ、私の音。少しでも聞き逃したら怒るから」

彼女はみはねのことで、あなたは私のことだね。私の考えてたことは、真姫にはバレバレだったようだ。

「うん」

嬉しい。素直にそう思える。

「よーっしーじゃあ、そろそろA―RISEのライブが始まるし、移動しよう！今日もファイトだよっ！」

私のありがたうを受け取ってくれたみんなは、それぞれに言葉を返してくれて。二年生、一年生と部屋を後にする。

「まあ、にこたちも言いたいことは山ほどあるけど」

「それは全部、歌で！っってことやんな」

にこと希は私の頭をなでると出て行った。

ただ一人だけ、なにも言わずに残っている。

「絵里」

「ん？なあに？」

二人だけになってしまったこの空間。さつきまで賑やかだったのが嘘のようだ。

「約束、覚えてたの？」

近づいてきて、そつと手をとる。

「当たり前じゃない。だって、みうとの約束よ？」

ふつと顔を緩める絵里は眩しくて。さつきもそんなような顔どこかで見たな…

そうか、英玲奈の時だ。絵里が、亜里沙と話しているときみたいなの。そんな、表情。

「なにそれ」

「なにそれじゃないの。まったくもう、素直じゃないんだから。ね、話って？」

こんなすぐに振られると思ってなくて、今さらになって心臓がぼくぼくと鳴り出す。心臓、出てきそう。

「えっと、ね。私、絵里のことが…」

顔、すっごい熱いし。

今までで一番緊張する。

できることなら、このまま逃げ出してしまいたい。でも、それ以上に伝えたい。

「ほら、落ち着いて?」

そう言つて、優しく微笑む絵里。

落ち着いてなんか、いられるわけないでしょ。これから私が言おうとしてること、知らないくせに。

息を吸つて、ゆつくりと吐き出す。

もう、言うしかないよね。

「絵里のことが好き」

「え、ええ? 私も好きよ?」

絵里は私の言葉を聞くなり、抜けた声を出してそんな言葉を返してくる。

「そう言うことじゃなくて。特別な意味で好きなの。みはねじゃなくて、私を選んでほしいの…!」

そこまで言葉を吐き出して、ようやく気持ちがすつきりした。

私、すごく最低なこと言ってるのに。

黙ったまま固まっている絵里を見れば、余計に罪悪感でいっぱいになる。でも、どうしても伝えたかった。このまま、この気持ちを持つたまま消えるのは、嫌だった。

「……………ごめんなさい」

しばらくして、絵里が出した答えは私の予想通りだった。

「ん、わかってた」

そういうことじゃないの。と、絵里は悲しげに眉を曲げた。

「私、選ぶなんてできないわ。みはねとかみうとか、どっちが好きでどっちがいいとか。どっちも大切なもの。みはねが戻ってきてほしいから、みうに消えてほしいとも思えない。でも、みはねが戻ってこないのは嫌なの。だから、ごめんなさい」

泣きそうで、自分を責めてるようなそんな顔。優しいこの人のことだから、今相当傷ついているんだろう。

みうに消えてほしいとも思えない。

みはねが戻ってこないのは嫌。

もう、答えは明白じゃないか。

「絵里が謝ることじゃない。わがまま言って、困らせてごめんね」

「そんな。私は嬉しかったわ。後になって、こんなのいらないかもしれないんだけど、これ受け取ってもらえないかしら？」

絵里が渡してきたのは、四つ折りにされた紙だった。ゆっくりと開く。

「これって、ユメノトビラの歌詞……」

絵里のきれいな字で、これからライブで歌う『ユメノトビラ』の歌詞が書かれていた。

「ええ、そうよ。今日は歌わないんだけど、2番の歌詞を変えてもらったの」

「え？」

「みうへの気持ちをも、私なりに歌詞にしてみたわ」

ほとんど海未に手伝ってもらったんだけどって、絵里は照れたように笑った。

「ライブ、楽しみにしてて」

「ん、わかった。がんばれ、絵里」

外からすごい歓声が聞こえる。

そろそろA—RISEのライブが始まるのだろう。

絵里は、黙って私の手をとると、微笑んでから走り出した。

私、きつと、絵里に手を引かれるのが好きなんだな。この瞬間だけは、絵里を独り占めしてられるから。

絵里、いつも一緒にいてくれて、私のこと見ていてくれて、本当にありがとう。

屋上のステージに着くと、ちょうどA—RISEのライブが始まるところだった。

62. ユメノトビラ

ユメノトビラずっと探し続けた

君と僕との

つながりを探してたー

「みう？A—RISEのライブが始まるわよ」

絵里に声をかけられて、意識が現実へと一気に引き戻された。

「ん、見る」

約束。守らなきや。

ライトがチカチカと光り、曲が流れ出す。

後ろを向いていた三人が踊りながら前を向く。後ろからライトが当たっていて表情がよく見えないが、それがまたさらにかっこよく見える。

「すい〜…」

誰かがぼつりと呟いた。

その言葉に素直に頷いてしまった。

「……誰かのためじゃない
ツバサと目があつて心臓が跳ねた。

その瞬間、さっきの言葉が思い出される。

“これからのライブ、あなたのためだけに歌うってことはできない

”

あの真剣な瞳。ツバサは、スクールアイドルとしての意志をしつかりと持っている。

スクールアイドルの頂点に君臨している彼女は、誰か一人のために歌うことはない。それはわかっている。でも…

「……自分次第だから

”でも、あなたを魅了できるくらい本気で歌うわ”

あんなこと言われたら、自惚れてしまう。

今、ほんの少しでも私のこと考えてくれてたらなんて思ったり。みはねじゃなくて、私のことを。

…自分の都合のいいように考えるのはダメだ。

「……主役は自分でしょ？わかるでしょ？」

下を向こうとした時、またツバサと目があつた。しっかりと私のことを見つめて、ウインクをひとつ。

もう、本当に、かっこいい。

そこからは、一度もツバサから目が離せなかった。

曲が終わり、A—R—I—S—Eの三人がステージから降りてくる。そのまま、まっすぐと私のところへ来た。

「みはねちゃん♪…もう、ツバサと英玲奈は本番前に会ったのに。私とは会ってくれなかったのは何でなの？」

あんじゅは笑顔でこっちまで来たかと思つたら、すぐに拗ねた顔をした。

「その、もともと会うつもりじゃなかったっていうか…。ご、ごめんなさい」

最初の言葉でツバサの眉間にシワが寄った。英玲奈はそれに気づ

くと、やれやれと首を振る。

「まあ、今回はこれで許してあげよう。」

あんじゅは私の頬にキスをした。

「な、あ…!？」

なぜか驚いたのはツバサで。咳払いをひとつすると、ツバサはそっぽを向いた。

「はあ…ステージエンジンまで少し時間があるから、ゆっくりしててくれ」

英玲奈はどうとうため息をつくど、あんじゅの手を引いてその場を離れていった。

この状況はかなり気まずい。

隣にはなぜか怒っているツバサ。この状況を救ってくれる人は誰もいない。

ここは、自分で切り抜けるしかないと言うことだ。

「ツバサ…?なんで怒ってるの?」

「……………怒ってないわ」

声がいつもより低いし、こっちを向いてくれない。ツバサが怒っているなんてわかりきっているのに、なんでわざわざ否定するんだろう。

「ふーん」

これ以上何を言っても、同じことを繰り返すだけな気がして。私も視線を横にずらした。

しばらくすると、隣からの視線を感じて、思わず顔をしかめた。最初から、私のこと見てくれていたらよかったのに。

「好き。初めてなの、私が誰かのことを追いかけるなんて」

ツバサは突然そう呟いた。

好き。その言葉に胸の奥が熱くなる。

ゆっくりとツバサに目を向けると、案の定じっと見つめられていて。

「え？」

ツバサの腕が首元に回ってきたかと思ったら、そのままぐいと引き寄せられた。

心臓に悪いにもほどがある。

「だから、私から目を離そうとなんてしないで」

視界いっぱい広がるツバサのきれいな顔。恥ずかしくて目をそらしたいけど、もちろん少しも目線をずらせない。

だって、ツバサの顔、すごく必死だから。

「ははっこれじゃ、近すぎて逆によく見えないよ」

なんだか急におかしく思えて、ついつい笑ってしまった。

「もう、ここ笑うところじゃないのに。このまま恋に落ちるところよ。まったく」

そのままツバサは私から離れて顔をそらした。

「ツバサから目を離してる」

「そ、それは、べつにいいのよ」

照れてるのか、顔を赤らめて両手で顔を隠してしまった。こういうのを、ギャップ萌え？って言うんだろうか。

でも、だからってなんでも許してしまうわけではない。顔を隠されているのが腑に落ちなくて、ツバサの腕をつかむ。

「ツバサもちゃんと私のこと見て」

「ど、どこからそんなセリフ覚えてくるのよ。ム☒sから？ねえ？」

真っ赤な顔で睨まれても、少しも怖くない。

またまた込み上げてくる笑い。しかし、今度はそれをこらえる。ほっぺをつんつんと叩くと、ツバサは覗き込むように私を見た。

「思ったことを言ってるだけだよ」

思っていた以上に自分の声が優しく、びっくりしてしまった。

「はあ…あなたには勝てる気がしないわね。負けなんて絶対に認めないけど」

ふっと目を細めて、本当に楽しそうに。

きゅんってしたなんて、今は内緒にしておこう。私も、ツバサには負けたくはないし。

なんだか急に恥ずかしくなって、逃げ道を探す。

「そろそろ、準備できたみたい。戻ったほうがいいかもよ」

「そうね。そうするわ」

少しだけ名残惜しそうな顔。

罪悪感を感じながらも、身を守ることに徹する。だって、もう、どちらにせよこの時間はおしまいだから。結果的には、ツバサを守ることにもつながらるから。

「じゃあ、また」

そんなことを考えている自分に違和感を感じながらも、ツバサに手を振った。

*

ツバサが行ってから、時間が経つのは早かった。いや、もしかしたら、遅かったのかもしれない。ほんの一瞬、一コマ進むのがスローモーションに見えて。この時間が続けばいいのに、とか。まだもう少しだけ、なんて。そんなことを考えて、私は自分の中の時間を遅らせようとしていた。

悪あがきにもほどがある。

決心なんて、とつくについていたと思っていたが、言い聞かせていただけだったのかもしれない。

めまぐるしく動いていたスタッフさんたちも立ち止まり。さつきとは真逆と言っているほどのシンプルなステージにUSのみんなが立った。頭には花かんむりをつけ、ふんわりとした水色を基調とした衣装に身を包んでいる。

それはまるで妖精のようで、私もみんなから目が離せなくなった。曲が流れ出すと、時間がゆっくりと流れているように感じられる。穂乃果、海未、絵里の三人が真ん中において。残りのメンバーが、その三人の周りをゆっくりと円になって一歩ずつ歩く。

最初は穂乃果。

「ユメノトビラずつと探し続けた」

次に海未。

「君と僕との」

きつと、この君はみはねで、僕はμ、sのことだ。

最後は絵里。

「つながりを探してた」

”つながり”

私が一番欲しくなかったもの。

でも、もう、たくさんのつながりを持ちすぎて。みんなからもらいすぎて。最後には、自分からつながりを持つとうとしてしまった。

曲が一気にアップテンポになると、みんなは笑顔で跳ねるように踊りはじめた。

目をそらしたいのに、そらせない。これはみはねのための曲。それなのに、どうして、こんなにも惹かれるんだろう。

ふと、自分が紙を握りしめていることに気づいた。

「そうだ…絵里の、気持ち」

まだ見ていなかったことを思い出す。

これは今、私が持つてる、一番強い絵里とのつながり。さつきはこわかったんだ。

つながりを形にされてしまったことが。絵里の気持ちを受け取ることが。そして、それらすべてを失うことが、こわかった。

でも、今は違う。絵里の気持ちをちゃんと受け取らないと、諦めがつかないから。

紙を開くと、上の行から順番に目を通していく。半分を過ぎたあたりから、絵里の言っていた2番の歌詞だ。

”Chance! 自分の想いがみんなの想いが
重なり大きくなり 広がるよ”

突然いなくなってしまうたみはね。それによって、もつともつと、みんなのみはねに対しての想いが大きくなった。それは、あの時の私にも感じられていて。羨ましいような、でもどこか温かい気持ちになった。

”Chance! 期待の波へと身を任せてみよう

素敵さ：どこまででも続くPower”

このライブで、みはねに気持ちを届けると決めたあの時のこと。みんなのあの自信に満ち溢れた顔は、本当に眩しかった。

”瞳はレンズ僕の心へ 君の笑顔残そう

やがて思い出へ変わるのかい？

そんなことは今は考えないで”

なぜか、この部分だけ二重丸で囲われている。疑問に思つてよく見ると、矢印が引つ張つてあつて、その横にも何か書かれていた。『みうの笑顔、大好きよ。消えるからとか、みはねじゃないからとか、そういうのなしでもつと笑つてほしい!』

絵里：

どこまでも優しく。一緒にいると安心できて。ほんとに、本気で、大好き。

紙の上に、ぽたりと雫が落ちる。

まだ全部読み終わっていないから。涙なんか、出てほしくないのに。止まらない。

「ふっ…う、絵里…っ」

困らせてばかりだったことを、今さら後悔する。ごめんなさい。

”キボウノユクエ 誰にも解らないね

確かめようを見つけようと走つてく

キボウノユクエ きつと追い続けたら

君と僕にもトビラが現れるよ”
”ユメノトビラ 誰もが探してるよ
出合いの意味を見つけたいと願ってる
ユメノトビラ ずっと探し続けて
君と僕とで旅立ったあの季節
青春のプロローグ”

曲が終わると同時に読み終わる。なんだか、くらくらする。そろそろ、終わりの時間だろうか。さよならは、やっぱり悲しいよ。

目の前にどこからか光が現れる。光の中に、扉が見える。まるで、歌詞の通りになったみたいに。

「みはね!？」

一気に体の力が抜け、私はその場に崩れ落ちた。

*

「みう! そろそろ起きて」

ぺちぺちと頬を誰かに叩かれる。

なに。今、私、機嫌悪いんだけど。

「機嫌悪くてもいいから、目を開けてよ」

は? なんで? 喋っていかないのに。

ゆつくりと目を開けると、目の前には私が出た。

「み、はね...?」

「うん。ちよつとぶりだね、みう」

ふんわりと微笑む彼女。

あの時の、絶望的な顔をしていた時のことを思い出して、少しだけほっとする。

「もう、大丈夫でしょ? 早く戻って」

少し、ぶつきらぼうになっちゃった。みはねはそんな私をみて、

ふふつと笑みをこぼす。

「あのね、その事について、少し話があるの」
「なに」

「私たち、一つにならない？てか、もともと一つだったしね」

突然のことに、一瞬頭が真っ白になる。

「な、に…言ってるの？みんなが待っているのは…！」

さつき、ちゃんと諦めようって。

私は、もともとみんなと一緒にいたわけじゃないし。今さら、そんなこと…

「落ち着いて。そのね、絵里にはもう言ってるよ。もちろん、賛成してくれた」

「いつの間にそんなこと！ちよつと待って、全然追いつかない」

だって、みはねはずっと私の中で眠っていて。いつだ。いつー
「…つまさか」

「うん。今日の朝だよ」

そうか、だから起きた時あんな状況になっていて。部屋を出るとき
の、あの絵里の表情にも納得がいく。

「もうちよつと言うとね、もうだいたい私たち一つになり始めてる。いや、もう新しい私たちって言ったほうがいいかも。完全になるんだよ、これで」

少しだけみはねの言っていることが分かる気がする。私自身、自分の言動に驚く場面もいくつかあった。

「だって、でも…」

「いいでしょう？お願い。私、ちゃんとした桜心羽になりたい」

それは、私の希望でもある、か。

手を伸ばされて、なんとも言えない気持ちがかみ上げてきて。で

も、ゆっくりと手を伸ばすと、絡めるとるように繋がれた。

触れている部分がじんわりと温かくなっていく。お互いの記憶とか、気持ちとか、全部が溶けて絡み合っていく。

再び現れたトビラに、二人で歩いて行く。

もう、迷いなんて少しもない。

私たちは、きつと、一緒じゃなきや意味がない。

63. おかえりなさい

く絵里く

ライブが終わってすぐ、みはねの姿を探す。

端っこのほうで頭を抑えている姿が目に入って急いで駆けよつたが、みはねの体がぐらりと傾いた。

「みはね!？」

ギリギリのところまでキャッチして、顔を覗き込む。表情は穏やかで、ただ寝ているだけのようだ。

ほっと安堵の息をこぼして、みはねをお姫様抱っこで抱きかかえた。

控え室に、ソファがあつたわよね。

とりあえず、そこで寝かせてあげましょう。

今日の朝、私が起きた時に、みうはすでに起きていた。

私の隣で体を起こして、布団を握りしめていて。起きた私に気づいていない様子で、ずっと目の前にある壁をぼんやり見つめていた。

「みう…?」

私が声をかけると、少しの間固まってから、ゆっくりとこちらに顔を向けた。

「絵里っ…ご、ごめんなさい。私…」

そう言つて涙を流しながら、抱きついてきた。

その様子を見て私は直感的に思った。彼女はみはねだと。

「みはね、なのね?」

確認を取るように顔を覗き込むと、私の右手の袖をを掴んだまま、体だけ離して小さく頷いた。

聞きたいこと、言いたいことがたくさんあったはずなのに、いざみはねを前にしたら全部吹き飛んでしまった。

「おかえりなさい」

ただそれだけ言うと、みはねはもう一度抱きついてきた。

「うん、ただいま。ごめんね…絵里」

「謝ることなんてないわよ。でも、その…みうは？」

嬉しさとともに感じていた不安。

私はまだ、彼女になにも伝えられていない。

「今、絵里に言いたいことがあって、一時的に変わってるだけだから」

「そう、なのね…」

みはねの笑顔が、心をぽかぽかとあたたかい気持ちにさせる。久しぶりのことで、より強く感じて、胸が苦しくなる。

みうとみはね、やっぱり全然違うのね。

やっぱりわたしはみはねのことが好き。でも、今はみうのこと…

「そんな心配そうな顔しなくても、大丈夫だよ」

突然、右手の袖をぐいっと引っ張られた。みはねはそのまま寝っ転がる形になり、バランスを崩した私はそれに覆いかぶさるようになってしまった。

「ど、どうしたの？」

「少しだけ、甘えなくなっちゃった」

自分で言っておいて、少しだけ目を横にそらして照れている。

「ねえ、絵里。みうのこと…好き？」

じっと見つめられると、吸い込まれてしまいそう。みはねが今なにを考えているのかは、正直全くわからない。

「…好きよ」

「じゃあ、これから先も、みうとずっと一緒にいたいと思う？」

何かを試されているかのような質問。どっちに答えても、きつと私は傷つくと思う。それと同時に、どちらかを傷つける。

「それは、もちろん…思うけど…」

「けど？」

「私は、どちらかなんて選ぶことできないわ。…二人と、一緒にいたい」

少しの間、みはねは驚いた様子で固まっていた。しかし、しばらくすると目元を和らげた。

「そっか。ありがとう」

絵里は優しいねって、本当に優しい声で言うから。なんだか涙が出そうになってしまった。そんな私の頭を優しくなでて、私の唇に小さくキス。

離れた顔は、悲しそうで。

「…みはね？」

「絵里。私ね、みうとひとつになろうかなって思ってるの」

ひとつに…なる？

「それ、どういうこと？」

みはねは小さく息を吐くと、笑顔を作った。

「元に戻るんだよ。二つの人格を、一つに戻すの。二人で一人になるんだよ」

「そんなこと…可能なの？だって、今は二人いて、でも、一人になるんだったら…っ」

どちらかが消えてしまう。

その言葉は、音になることなく消えた。

みはねの唇が、私の唇にゆっくりと合わさる。最初は優しく、だんだんと深く。

まるで、その言葉を言わせないとでもいうように。

「んっ…み、はね…」

苦しくても、離してくれない。いや、私が離れたくないのかもしれない。それくらいに、久しぶりのこの感触が気持ちいい。

いつの間にか、みはねは私のなすがままになっていて。上にいる私が離れなければ、キスは深くなるばかりだ。

気持ちもなにも、止まらなくなつて。私はもつともつとみはねを求める。

「絵里、ストップ」

キスの合間に名前を呼ばれれば、待てと言われてしまった犬のように固まる。現に待ってをかけられているわけだけど。

「絵里の言いたいことはわかるけど。でも、私はこれが一番いいと思う」

「……………」

「絵里？」

「…みはねがいいなら、私は止めないわ」

嘘よ。聞き分けのいいふりをしているだけ。私はきつと、みはねに嫌われることがこわい。

みはねが消えてしまうことより、みうが消えてしまうことより、みはねの心が私から離れてしまうことが、何よりこわい。

「ありがとう、絵里」

みはねはそう言って微笑んだけど、とても悲しそうな、苦しそうな顔をしていた。

ねえ、私ちゃんと待てたわよ。

あなたに言われたこと、しっかり実行できたの。だから、ごほうびをちょうだい。

みはねのことを気にしながらも、私は自分の気持ちを優先する。なんてずるいんだろう。

「どっちの意識が主になるかはわからないけど…」

まだ話し続けるみはね。聞かなきゃいけないのに、もうそろそろ限界。ねえ、ほしい。

そう目で訴えれば、あなたは悲しげな瞳で私に口づけをした。

——私のこと、好きでいてね。

そのまま、みはねは静かに寝息を立てた。

そして、数秒後に、みうが目を覚ました。

*

ソファで眠る彼女の手を握る。

温かくて、やわらかくて、少しでも力を入れれば壊れてしまいそうな小さな手。

……私はこの手でいつも守られてきたのね。

みはねと出会ってから、つらいことも悲しいことも、たくさんあった。そのぶん、嬉しいことや楽しいこともたくさんあった。

どんな時でも、みはねは変わらず私にその温かい手を差し伸べてくれた。

私は、いつもその手に甘え、支えられていた。

今考えてみると、みはねは無理してたんだと思う。

みうと出会ってから、その手の冷たさを知った。身体は同じはずなのに、中身はまったく違って。最初の頃のみうは心も身体も表情も、全てが冷たかった。

突き放されてる気持ちになって、悲しくもなったけど。そのぶん、心の距離が近くなることが嬉しかった。

私が守ってあげなきゃ、なんて思っていたのね。きつと。

「…ねえ、早く声が聞きたいわ」

みはねもみうも、思い出されるのは優しい声。「絵里」と呼ばれるだけで、心が羽になったかのように軽くなる。大好きな声。

手の甲にキスを落とす。

すると、ぎゅっと握り返された。

「え、り…？」

少しだけ掠れた声。

でも、やっぱり優しく。涙が出そうになってしまった。

彼女はみはねなのか、みうなのか。

「みはね、なの…？それとも…みう？」

答えを急かすかのように抱きつく。

でも、私の質問になかなか答えてくれなくて。かと思えば、いたず

らっ子のような笑顔でこちらを見てくる。

少し距離が開いてしまったのが悲しい。

「…どつちだと思う？」

なんて意地悪な問題。

見た感じで判断しろって？

そんなの、わかるわけないじゃない。

とりあえず……

「あ、えつと…みう？」

「ううん」

彼女は首を横に振る。

「じゃあ、みはねなのね？」

「ぶっぶー」

私の中にはこの二つしか選択肢がないのに。

何がしたいのかわからない。

そんな気持ちを含めて睨んでみせる。

「絵里、怒らないでよ」

「怒ってないわ。呆れているの」

「ははっ。それで、答えは見つかった？」

表情を崩して笑う姿はすごく自然で。

ゆっくりとこちらに手を伸ばしてきたかと思ったら、親指の腹で頬

をなでられた。

こんな小さなことがとても嬉しく、くすぐったい。

「…見つかったわ」

「教えて？」

ふんわりと微笑む彼女は、本当に天使なんじゃないか。そう思ってしまうくらいに、きれいで。

「おかえりなさい、心羽^{みはね}」

これでもかかってくらいに抱きつくど、苦しいよってみはねは笑って。

「絵里。たくさん迷惑かけてごめんね。ずっと一緒にいてくれてありがとう」

笑顔の彼女になんだか涙が出てきてしまう。

みはねも少し目が潤んでいて、お互いがそれに気づくと、笑みがこぼれた。

もうそこからは、二人とも泣き笑い。

「ねえ、みはねってことは、みうはどうなったの？」

「え？みうも私だよ」

うーん…？

なに言ってるの？って顔で見られても、私にはわからないんだもの。

私の困った様子にみはねは苦笑い。

「じゃあ…こう考えてみて。前のみはねは赤色の、うん。絵の具かな。

それで、みうは青色の絵の具」

「…うん」

真っ白なパレットの上に、赤い絵の具と青い絵の具が出されていることを想像する。

それとこれと、どう関係があるの？

表情に出してたのか、「うまく説明できなかったらごめんね」とみはねは笑った。

「これって、絵の具なのは一緒でしょ？それは、同じ人間ってことね。でも、色は同じっ。」

「全く違うわ」

赤と青。全くべつの色ね。

「そう。色は違う。私たちは同じ人間だけど、中身は全く違ったの」「ええ。だから、みはねが残ったなら、みうはどこに行ってしまったの？」

「今の私たちは、その絵の具を混ぜた状態。想像できる？」

「さっき頭の中で想像した絵の具たちを、パレットの上で混ぜる。」

「どうなった？」

赤と青の絵の具を混ぜたのだから…

「紫色の絵の具になるわね」

「うん。それが、今の私だよ」

紫の絵の具が…今のみはね…

「紫の絵の具は、どっちの色の特徴も持つてるよね。私は、完全にどちらかじゃなくて、中間ってこと…かな」

ある意味本当の私だから、と。

なんとなく、言いたいことはわかった。まあ、でも、どんなあなたもあなただから。

「もう、なんでもいいわ。あなたが戻ってきてくれたのなら」

なんでもいいの。

「好きよ、みはね」

そう言って、不意打ちでキスをする。

みはねは目を丸くして固まっていたけど、もう一度触れるだけの軽いキスをする、答えるようにキスをくれた。

「約束したじゃない。好きじゃなくなるなんて思った？」

あの時、私はキスを優先したけど。一番に、あなたの気持ちを優先したいって思いは変わらないから。

みはねは私にぎゅうつと抱きついた。

「…思っていない。ありがとう」

表情は見えなかったけど、声は震えていて。泣いているんだなっかわかった。

落ち着くまで、もう少しこのまま…なんて思っていた矢先。外か

らバタバタと足音が聞こえてくる。

私とみはね、考えていたことは同じなようで。顔を見合わせて思わず笑ってしまう。

「みはねちゃん!!!」

ドアが開くと同時に穂乃果の必死な顔。

それでさらに笑いがこみ上げてきた。

「な、なんで笑ってるの!?!ツバサさんが、みはねちゃんが倒れて絵里ちゃんに運ばれてたって言ってる…」

穂乃果はよろよろとこちらまで歩いてくると、私にぎゅっと抱きついた。

「大丈夫そうですよかったです。みんな心配していたのですよ?……穂乃果はもう少し落ち着きを…」

海未は私を見るなり柔らかい表情になったが、穂乃果が抱きついてるのを見て少しだけ眉間にシワが寄った。

「海未ちゃん、今回は許してあげよう?みいちゃんのことなんだし」
そう言っつて海未をなだめることりも、少しだけ顔が不機嫌だ。

「はは…みんな、心配かけてごめんなさい。もう、大丈夫だから」

みんなに向けて、今できる最高の笑顔を向ける。みんなの表情から、不安が消えた。残っているのは安心や喜びだろうか。

少しだけ軽くなった空気の中、私の心は重くなった。

私は、みんなに、今の私の気持ちを伝えなければならぬ。

64. 伝えること

正直、このことはずっと前から考えていた。

私が、みはねが、みうが。μ sのみんなに対してどうあるべきか。どうすることが、一番いいのか。

今でも、答えは見つかっていないのかもしれない。今からみんなを言うことが、正しいとも思っていない。

でも、私は言わなければならぬ。

「みはね? どうしたん?」

今までずっと黙っていた希が、心配そうに私の頭をなでた。みうだった時は、みはねちゃんと呼んでいたのに…と、今さら気づく。

ちよつとしたことに喜びを感じて、この心地よい空間を壊したくないのも確かだ。

でも、ここまでできて言えませんかなんて、かつこ悪いにもほどがある。

「ちよつと…ね。みんなに言わなきゃいけないことがあつて…」

なるべく早くと気持ち焦っていたのか、周りがちやんと見えていなかった。

私の言葉を聞くなり、全員の顔から笑顔がなくなる。

今このタイミングで切り出すべきではなかったかもしれない。

「あのね…」

それでも私は話し続ける。

ライブ前に、みうがみんなの前で話した時のような緊張感。あの時

は、みんなにありがとうを伝えようと思つて。それと同時に、別れのこと、考えていて。

そんな、緊張感と同じにしているのかはわからない。
でも……………

しんと静まり返つた空間で、みんなが真剣な瞳で私を見つめる。

「私ね、みんなとの関係を…一回リセットしたい」

みんなは、ただ何も言わずに、やっぱり私を見つめていた。

誰一人、目をそらす者はいない。

「この、恋人つていう今の関係をなくしたいの。こんなこと、言える立場じゃないんだけど…」

もう一度、はつきりと言い放つ。

私の言葉に最初に反応したのはことり。

「みいちゃん…やだよ。ことりは、どんな形でも、みいちゃんの彼女でいたいよ…っ」

ことりの声は震えていて。瞳は潤んでいた。

私が、こんな顔をさせている。

罪悪感が、少しずつ心に積み重なっていく。

泣いてしまったことりを抱きしめて、海未は私を見た。

「なんで、こんなことを…」

悲しげに揺れる瞳を、直視することは今の私には無理で。思わず視線をそらしてしまう。

「ごめんなさい」

するとにこが、腕を組んでため息をついた。

「こんな話をしてるってことは、あんたは絵里の言う”みう”じゃないくて、”みはね”なのよね」

しっかりと頷くと、にこは少し複雑そうな顔をした。

「前のみはねの時の記憶も、みうの時の記憶も、みんなと出会う前の記憶も…全部持つてる」

「…あつそ。それでもやっぱり、あんたの言ってること…にこには理解できない」

眉をひそめて静かにそう言う。

まだ何か言いたそうな顔をしていたが、後ろにいた凜が前に出てきたことによつて、何も言うことはなかった。

「みはねちゃん、凜たちのこと嫌いになっちゃったの!？」

凜は今にも泣きそうな顔で私に抱きついてくる。

「ちがうよーそれは、絶対じゃない!」

すぐに否定できた。しかし、みんながその言葉を信じてくれたかは別で。

「でも、そういう好きは無くなっちゃったんだよね?」

凜の手を握つて花陽は悲しそうに笑つた。

凜が私から離れる。思わず、手を伸ばしてしまいそうになる。

ちがう。違うんだよ。そういうことじゃなくて…違くて。

懸命に言葉を探す。

「何も言わないのは、肯定つて捉えられても仕方ないわよ」

真姫は呆れたようにそう言った。

「…ごめん」

「それは、何に対しての謝罪なん?」

思わず口から出た謝罪に、希は怪訝そうな顔をした。

どんだん悪い方向に転がっている。

「もう、違うの。言葉が…」

いつも優しく微笑んでくれる希。でも今は、冷たい目で私を見ている。この短時間で…そう考えると、すごく怖くなって。

心臓は、壊れてしまふんじゃないかってくらいにバクバクとなつて
いる。

「みはねちゃん、何も言わないのはずるいよ。穂乃果、今、なんでこんなことになつてるのかもよくわかんない」

穂乃果にも冷たくそう言い放たれると、一瞬目の前が真っ暗になつた。

しかし、体が暖かく包み込まれたことによつて、私に光が戻る。

「絵里…」

絵里に抱きしめられている。

それだけで、安心する。

「みんな、悲しいのはわかるけど、みはねを責めるのはダメよ。ちゃんと、理由も含めてみはねの話を聞きましょう?」

大丈夫よ。そう言っただけで私の頭をなでて優しく微笑まれる。まるで、信じてると言われてるみたいだ。

深呼吸をして、もう一度みんなの方を向く。

「悲しい思いさせてごめんなさい。でも、私、今のままは良くないと思うの」

なんで? 誰も言葉に出さなかったが、全員がそう思っているだろう。

「記憶がない時に、みんなにたくさん助けられて、好きって言われて。私もみんなのことが大好きで。その気持ちは、今でも少しも変わっていないよ」

むしろ、もっともって好きになってるくらいだもん。

絵里の手をそっと握る。少しだけ、私に力を貸してほしい。わがままでごめんね。

「でも、みんなと付き合ってから、この状況はすごく中途半端な気がして。誰の気持ちにも、真剣に向き合っていないように思えて。それでも、ちゃんとこのこと言えなかったのは、みんなの優しさに甘えてたんだと思う」

誰の気持ちにもちゃんと答えられていない。

みんなは真剣に私への気持ちを伝えてくれたのに、私はみんなの愛がほしくて、ズルをした。

「本当にごめんなさい。今、記憶も全部戻ってよくわかった。愛を知らない私に、みんなに愛をあげることはできないって。みんなにもらってばかりで、私にはしっかりと返すことはできないって」

そう。あの頃は、何者かわからない恐怖から、守ってほしかったのだ。私の居場所をなくしたくなかった。

でも今は違う。

私の居場所がなくなっても、もう、みんなのことを無意識に傷つけるのは、絶対にしたくない。

だから…

「しつかり考える時間がほしい。みんなの気持ちを真剣に考えて、ちゃんとした答えを見つけない。でも、*μ* sのマネージャーを辞める気もないし、みんなのそばにいたいよ。もし、みんながそれを拒むなら、私はみんなの前から消える。そのくらいの覚悟で言っているの…信じてほしい」

順番に、みんなと目を合わせていく。

最後に絵里。みんなが悲しい顔をしている中、絵里は余裕そうな笑みを浮かべている。

「いいわよ。みはね、別れましょう。その代わり、別れたことを後悔させるくらい、本気で落としに行くわよ?」

絵里の言葉がすつと私の中に入ってきて、なぜだか涙が出そうになった。

もちろん堪えたが、表情に出てしまったかもしれない。

絵里は、ゆつくりと私を抱きしめると、おでこにキスをした。

やだ。

今優しくされたら、我慢できなくなっちゃう。

「泣いてもいいのよ」

それだけで、全てが許されてしまうような気がして。そんなこと、あるはずなのに。

こういう時の絵里は本当にずるい。

「やだ…っ!」

だって、みんなを傷つけてるのは私なのに。

最初のひと粒がこぼれ落ちてから、もうボロボロと止まらなくなつて。涙で視界が悪くなって、みんながどんな顔をしているのかもわからなくなってしまう。

「ごめんなさい。私…っみんなの、こと…:大好きなのに…っ」

こんなに辛いのは、みんなのことが大好きだから。みんなのことを大切にしたい気持ちと、それ故に別れなければいけないという矛盾

が、こんなにも胸を締めつける。

「もう…みはねはバカなんやから」

希がおでことおでこをこつんと合わせてきた。

「え…？」

突然のことに理解ができない。

すりすり、何回か押し付けてきた後に、少しいたずらっ子のような笑顔をして。

「みはねが、何でもかんでも我慢するから。少しだけお仕置きしようと思つてなあ？」

それから、えりちに全部持つてかれちやつたけどなあ、と。

「……………なに、それ」

頭をひとなでされて、顔を上げる。

みんなのことを見回すと、誰一人、さつきみたいな顔をしている人はいなかった。

「なん、で…？」

「それは、みはねちゃんが何でも溜め込むからだよー。穂乃果たちは、みはねちゃんのどんな気持ちも知りたいの！」

穂乃果は太陽みたいな笑顔で、私に手を差し伸べてくる。

その手を取ると、ぐいっと前に引つ張られた。

「みはねがみはねじゃなくなった時も、私たちにはなにも言ってくれなかったですし…」

海末はいつものように穏やかな笑顔で。

「だ、だからつて…でも…！」

「みいちゃんと恋人じゃなくなるのは、やっぱりつらいよ。でも、それがみいちゃんの本当の気持ちなら、私たちは受け入れたいの」

ことりの瞳はまだ濡れていたけど、表情は笑顔だった。

ああ、なんて優しすぎるんだろう。

つまりは、さつきののは、私の本当の気持ちを聞き出すための演技で。私はまんまとそれに引っかかって…

最終的には、それを受け入れると。

「μ、sのマネージャーは、もう、みはねにしかできないんよっ。」

さつきとは違う、胸の苦しさ。

うまく息ができなくて、はあつとゆっくり吐くことだけで精一杯だった。

「私にしかできない…」

私の、居場所――

「え、ちよつと待つて。なんで私には教えてくれなかったのよ！すごく恥ずかしいじゃない！」

ぼけつとした顔で、私たちの話を聞いていた絵里が、突然そう叫んで私を後ろから抱きついてきた。

抱きついてくる意味が、正直よくわからないんだけど…

「絵里？」

なんのことがよく理解ができず、前を向くと、呆れた顔をした希と目があつた。

「はあ…えりち…」

ため息をつく希に、絵里はショックを受けた顔をする。

「そんな目で見ないで…え、なんで私だけ仲間外れにされてたの…？」

「えりち、たまにポンコツやから？」

めずらしく、希がめんどくさそうに顔してる。

「絵里はこういうの苦手そうよね。今回は希が正しいわ」

希、真姫とそれぞれに攻撃をされて、私の肩に顔を埋めている。もう、返す言葉もないようだ。

さつきまでのかつこいい絵里はどこに行っちゃったのかな。なんて、そんなかわいところもいいけど。

みんなして、絵里のポンコツについて話し始める。

しばらくその様子を、笑いながら見ていると、絵里の腕に力が入る。

「どうしたの？」

「……………」

「絵里？」

声をかけても、唸る声しか返ってこない。

「おーい？…エリーチカ？」

絵里の腕の中で体を反転させて、絵里と向かい合う。

「私…もう子どもじゃないわよ」

子どもの頃の愛称で呼ばれたことが不満なのか、ほっぺたを膨らませて怒っている。

こういうところが、子どもっぽいつてことなんじゃないの？

なんて、言わないけど。かわいいし。

「呼ばれるの、そんな嫌じゃないでしょ？」

大好きなおばあ様に呼ばれてたんだから。

そう思っていたが、本人からしたら違うみたい。

「嫌よ。みはねには、絵里って呼ばれたいわ」

「なんで？」

「好きな人には、ちゃんと名前前で呼んでほしいのよ！」

直球すぎる言葉。

絵里の綺麗なアイスブルーは悲しげに揺れていて。

「…どうしたの、ほんと」

なんでそんな顔するの。

さつきまで、余裕そうな笑顔浮かべてたくせに。

「どこにも行かないで…」

強められた腕とは裏腹に、ひどく弱々しい声だった。

「どこにも行かないよ？」

楽しそうに笑うみんなから離れた場所。

まるで、二人だけ世界から切り取られたかのようだ。

またしても、絵里は黙り込む。

今度は、私が一人ぼっちのよう。ただ、触れているところから伝わる熱だけが、私を安心させる。

「絵里」

「さつき言ったことは本心よ。あなたと別れても、また付き合えるようにがんばらばいいだけだもの」

絵里は、私の肩に顔を埋める。

「ただ、それでも、恋人という繋がりが無くなることが…怖いの」
その声は、震えていて。

泣いてしまっているんじゃないかと。

「どこかに行つちやいそうで、今みたいに抱きしめていないと、この熱を感じていないと…っ」

絵里が顔を上げる。

それと同時に、触れ合わせた唇。でも、それは触れたのかどうかさえもあやしいほどで。

ただ、理性だけがギリギリのところまで働いたことだけはわかった。やっぱり、私はずるい。

別れると言っておきながら、こんなことをして。こういうことを、なくすためについて思っているのに。

「今…」

「ずっと一緒にいるから。悲しい顔しないで」

絵里の言葉をわざと遮った。

不安げな瞳で見つめられると、ぎゅっと胸が苦しくなる。

「本当に、いなくならない?」

そんなかわい顔で見つめられても困るんだけど。

「もう…いなくならないよ。だってき、9人もいるんだよ?逃げられっこないって」

誤魔化すように笑うと、絵里もつられて笑顔になって。

「ふふ、そうね」

最後にするから、と、絵里はゆっくり顔を近づけてくる。

何がしたいのかわかったが、わざとわからないふりをした。

「…んっ」

ちゅ、と音がなつてから顔が離れる。

音でみんなにバレたのでは?と思つたが、みんなはまだ話しに夢中でこちらなど気にしていなかった。

「ごめんなさい…好きよ」

私はそれに応えることができない。

もう、ここから先は友だち…仲間に戻る。

「……………」

「さ、みんなのところに行きましょう」

私を見る絵里の表情は笑顔で。

その笑顔があまりにもきれいで、一瞬息が止まった。

私は、絵里のことは好きなんかじゃない。絶対に。

絵里のこと、嫌い。嫌いなんだ。

μ, s みんなのことも、好きにならない。

65. にこのかぞく

「つていう夢を見たんだよ!!!」

穂乃果の声が部室に響く。

今日は、ラブライブ予選の結果発表があるということで、部室に集まっているわけだけど…

「あ、ごめん。全然聞いてなかった…なんの話だったけ？」

なんか、穂乃果が長いこと何かを説明していたが、途中で飽きてしまつて聞いていなかった。あくびをしながらみんなのほうを見ると、呆れた顔で返される。

「Mutant Girlsで予選突破できなかった話っ！」

「ちよつと！縁起でもないこと言うんじゃないわよ！」

穂乃果の言葉が終わるなり、にこがパコツと頭を叩いた。

痛いよー、なんて言いながら、穂乃果は私にくつついてくる。

「で？結果はどうだったの？花陽」

「なんでみはねちゃんは、そんなに冷静なんだにや？」

凜は首をかしげて私を見つめてくる。

じーつと見つめ返すと、凜はさらに首をかしげる。

「信じてるからだよ」

にこつと返すと、凜はほっぺたを赤く染めた。

「ず、ずるいにゃー…」

その反応を見て、ひとりで満足する。

「4位…」

いつの間にか、3位まで言い終わっていて、次が最後のひと枠と
なっていた。

「……………みゆ、μ s…」

全員から、安堵の息が漏れる。

「や、やったー!!!」

穂乃果の声を横で聞きながら、黙って喜びを噛みしめる。

1番喜んでいたのは、たぶん私。

声には出さないけど少し、ほんの少しだけ、泣きそうだった。

あんなことがあった後でも、私を普通にマネージャーとしてく
れているみんな。

今の私にできることは、余計なことは考えずに、全力でμ sを支
えることだけだ。

「よしーそれじゃあ、練習始めよう!!!」

予選突破もあつて、みんなにやる気がみなぎっている。絵里や海未
から今後の練習について軽く触れた後、いざ練習を始めようと言う時
に問題は起きた。

「待って、誰か足りないような…」

ことりがぼつりと眩く。

しかし、他のメンバーはぼかんとしている。

明らかに、一人足りない。

「にっ」

私の一言で全員がハツとする。

声にならない驚き。

屋上から下を見下ろすと、昇降口からにこが出てくる様子が見えた。

*

「どこ行くの、にこ」

後ろから声をかけられて驚いたのか、にこはびくりと肩を揺らした後、ゆっくりと振り返った。

「今日はちよつと、用事があるの」

少し離れたところで、眉間にしわを寄せながらそう言う。

みんなはもちろん不審がっていて。

「本当に？」

「たまらず聞き返す。」

「…っ…ほんとよ。じゃあ」

一瞬、驚いた顔をして、そのまま早歩きで門を出ていってしまった。こんなタイミングで隠し事なんて、不安でしかない。

みんなのほうを見ると、意見は一致しているみたいで。

あとをつけるなんて、ほんとは良くないんだけど。今回ばかりは仕方ないよね。

にこが最初に向かったのは、とあるスーパーだった。

まあ、学校帰りに買い物するのは誰にでもあることだが。にこが周りを気にしながら入っていったことがとても気になる。

さすがに店内まで尾行するのは、お店側にも迷惑なので、入り口のところまで待つことにした。

「…何やってるんだろう」

穂乃果の質問は、なにを期待しているのか。

「いや、普通に買い物じゃないの?」

どう考えても、これしかないだろうに。

「まさか…:バイト…?」

「だから、買い物」

「大切な人が来るとか!」

「みはねちゃんがいるのに!?!にこちゃん、すぐ乗り換えちゃったの…?」

「はあ…もう、なんでもいいよ」

私の話、聞いてくれない。

勝手に盛り上がっている面々をよそに、絵里と希は私の腕を引っ張る。

「にこつちのことやから、裏から出てくるんやない?」

「だから、裏口にまわりましょう」

私の返事を聞く前に、二人は私をぐいぐいと引っ張って歩く。

「…あ、にこだわ!」

絵里が指差すほうににこの姿。

にこは私と目が合うと、一瞬悲しげな顔をした。

今のは、なに?

手を伸ばせば届く距離にいたのに、一瞬ためらってしまった。

そうこうしているうちに、希と絵里からうまく逃げて、にこは走り出す。

私もそれにつられて走り出すが、後ろから来た他のメンバーに抜か

されてしまった。

みんなのことも見失ってしまい、たどり着いたのはにこの家の近く。

近くにあつた階段の隅っこに腰をかけて、ぼんやりと考え事をする。内容は、まあ、察しがつくだろう。

μ s が予選が突破できて、すごく喜んでいたはずのここ。

でも、今大切に行っているμ s の練習を休んでまでやらなきゃいけないことがあつて。

そして、そのことを誰にも相談しない。

「うーん…」

なにか、理由はあるんだろうけど。

それってやつぱり、本人から聞くしかないよね。

「みはね…さん?」

家に行こうか、なんて思って立ち上がったら、急に声をかけられた。

「…はい」

少し間があいてしまったのは、目の前にいたのがにこそっくりな女の子だったから。

「あ、もしかして…」

「はい!はじめまして。矢澤にこの妹の、矢澤こころです」

丁寧なお辞儀をした後、にっこりと笑う姿はとても愛くるしい。

思わず抱きしめたくなってしまうた。

にこから話は聞いていたけど、本当に妹なのだろうか。

「はじめまして。桜みはねです」

「お姉さまから、お話はたくさん聞いていますっ。お姉さまの、こんやくしゃ?なんですよね!?!」

ん。あれ。それは違うなあ。

いや、聞き間違いかもしれない。

「にこが婚約者って言ったの?」

「はい!」

うん。おかしいね。

それに、今は恋人つてわけでもないの、とりあえず訂正しておこう…

「ごめんね。私、婚約者じゃなくてマネージャーなんだ」

「お姉さまのマネージャーになれるのは、こんやくしゃで特別なみはねさんだけだつて言っていましたよ?」

そんなに純粋な目で見られると、反論しづらいというか。そもそも、こころちゃんに反論したところでもなにも解決しないし。

「…私のこと、さん付けしなくていいよ」

結果、無理に話をそらすことにした。

「…?!?みはねえさま…でも…」

目をキラキラさせて、上目遣いで。いつのまにか、袖まで掴まれていて。

予想以上の食いつきに、びっくり嬉しい。

「いいよ」

どんな呼び方とか関係なしに、ふにやりと顔の力が抜ける。

「あーっ!みはねちゃん!」

「凜!と、花陽と真姫。みんなも」

みんな考えることは同じだったようだ。

続々と集まってくるメンバーに、思わず笑みがこぼれる。

「あつ、お姉さまのバックダンサーのみなさんですよ?」

掴まれたままだった袖を、くいつと遠慮がちに引つ張られる。

その言葉に、驚きを隠せないままこころちゃんの顔を見ると、すごく純粋な瞳。

「みはねえさま?」

「う、うん。これ、どうしようか」

引きつつているであろう顔でみんなを見ると、表情は様々で。

なんだかよくわからないまま、こころちゃんに案内されて矢澤家に

行くことになった。

「みはねえさま！こっち、こっちに座ってください！あ、こたろう」
弟君、かな？モグラ叩きをしていたようだが、私に気づくとそばまで来た。

しやがんでこたろうくんの頭に手を置く。

「はじめまして。お姉ちゃんの友達の、桜みはねです。お邪魔してもいいかな？」

こたろうくんは一瞬じーつと私のことを見つめた後、こくりと大きく頷いた。

「ありがとう」

今度は小さく頷いた。

そして、私の袖を掴むと、ようやく部屋に上がってきた他のメンバーを指差した。

「バックダンサー」

一瞬にして固まるみんな。

こたろうくんはそれだけ言うと、またモグラ叩きをしに座っていた場所に戻った。

よく見てみると、モグラに^々sのメンバーの似顔絵が貼られている。

ことりはそれに気づいたようで、若干ひきつった笑顔をした。

「落ち着いてね、ことり」

「う、うん。大丈夫だよ」

ことりは、怒っているというよりは困っているようだ。

絵里と海未は完全に怒った顔してるけど。

しばらくすると、絵里は携帯を取り出した。

少しの間の沈黙。

たぶん、ここに電話をかけているのだろうが相手が出る気配はない。

切れてしまったのか、絵里の顔がより不機嫌になった。

「あなたのバックダンサーの絢瀬絵里です」

いや、声低すぎだし。

なんだか怖くなつて、他のメンバーがいるところに逃げることにした。

しかし…

「これ、μ sのポスターだよね…?」

穂乃果は目をパチクリさせている。

視線の先には、確かにμ sのポスターが何枚か飾られていた。しかし、明らかに違和感がある。

そう、センターである穂乃果の顔とにこの顔が入れ替わっているのだ。

穂乃果からしたら、なんとも言えない気持ちだろう。

しかし、穂乃果よりも海未の顔が可愛い。

「海未」

「なんですか」

その顔のままこっちを向く。

「顔、こわいよ?」

指摘されると、少しだけ眉を曲げた。しかし、怒った顔は変わらず。

「すみません、今はちよつと」

そう言つて、私から顔を逸らそうとする。

「だめ。こっち向いて」

ほっぺたを掴んで無理やりこっちに向ける。

「海未は、怒ってる顔よりも、笑顔のほうがかわいいよ」

なんて、ベタなセリフで機嫌が直るのか。

「しかし…みはねっ」

駄々をこねる子どものように、私の制服を掴んで揺すってくる。

「気持ちわかるけど、にこのことも考えてあげよう? まだなにも、わかってないし」

まだ何か言おうとする海未の手をとって、リビングへと戻った。

*

あの後、家に帰ってきたにこを捕まえて事情を聞くことになった。しかし、にこが詳しく事情を説明することはなかった。

隣の部屋にはこころちゃん、こたろうくん、そして、にこが帰ってきたときにちょうど帰宅してきたここあちゃん。

三人は、モグラ叩きで遊んでいるようだ。

帰り際、下までお見送りに来てくれた3人は、にこのグッズを自慢げに見せてくれた。

帰り道、みんなの顔は難しい顔をしている。

今の、私にできること。

「ねえ、にこって、お姉ちゃんじゃん？」

誰も、何も答えてはくれなかった。

「それでいて、忙しいお母さんの代わりに家事もやってるし」

それは、みんなもわかっていること。

それがどれだけ大変なのかは、実際やっている本人にしかわからないこと。

「二年の頃からスクールアイドルやっててさ。まあ、結果その時はうまくいかなかったみたいだけど」

希の顔が、少し泣きそうになった。

絵里の顔は、何かを後悔しているような。

「またこうして、今度はみんなとスクールアイドル…μ'sをやってる」

今のにこの笑顔は、いつみても輝いていて。本当に、アイドルが好きなんだなって思う。

「でも、こころちゃんたちにとつては、ずっとアイドルだったんだよ。μ'sを始める前から。だから…」

ファンのためにも、どんな手を使ってでも、自分のアイドル像を崩してはいけなかった。

「わかってるよ」

穂乃果は、優しい笑みを浮かべて私にピースを向けていた。

「にこちゃんは、家ではずーっとアイドルだから。教えてくれなかったこと、ちよつと寂しかったけど。でも、言えない状況作ってたのかもなあって、穂乃果思うんだ！」

穂乃果の隣には、ことりと海未が寄り添うように立っていた。

少し視線を右にずらせば、一年生3人の姿。

この3人は、本当ににこに懐いていると思う。凜と花陽は頷く。

真姫は、照れ隠しからか肩をすくめた。

今度は反対に目を向ける。

希。

「にこっちは、がんばり屋さんやし。ずっと前から、にこっちのこと見守ってたけど…でも、見守るだけじゃなんも解決しないやん」

希の瞳がキラリと光る。

「希が支えてくれてたから、今こうしてみんなでき、sになれたんだよ」

私の言葉にこくりと頷いて、絵里は希のほうを向く。

「そうよ、希。希は私と違って、自分よりも他の人のことを気にしてしまっから…」

絵里の後悔は、今でもまだ消えてはいない。

きつと、責任感の強い彼女だからこそだと思う。でも、アイドル研究部をそのままにしていたのは、絵里が優しかったからだ。

「それはちやうどえりちのほうが、優しいよ」

希はそれをわかってる。

「どっちも優しい。それでいいんじゃない？」

私が声をかけると、ふたりは困ったように笑った。

そしてこう言う。

なんだかんだ言って、一番優しいのはみはねだと。

そんなこと、ないんだけど。

むしろ私は、自分のことしか考えてなくて。誰にも嫌われないようにズルをして。

「今なら、私たちなら、にこのことを助けてあげられるかしら？」
絵里は、もう答えを持っていくらしかった。

「穂乃果、ちよつといいこと思いついたかも」

にんまりと笑った穂乃果は、もう、μ sのリーダーの顔だった。

次の日、穂乃果は学校にこころちゃん、ここあちゃん、こたろうくんを連れてきた。

その他のメンバーは、屋上で準備をしていたり、被服室にいたり。つまり、にこのライブをするのだ。

スーパードール矢澤にこととしての、最後のライブ。

妹たちは悲しげな顔をしたが、にこは言つてのけたのだ、これからμ sと一緒に宇宙No. 1アイドルを目指す。

もちろん、バックダンサーという誤解もといてね。

私は、にことこころちゃんたちを家まで送ることにした。

「今日は、ありがとう」

「私はなんもしてないよ。お礼は、明日みんなにね」

「…っ、それでも、あんたにも感謝してんの」

「はいはい」

私の右手にはにこ。左手にはこたろうくん。

こころちゃんとここあちゃんは、少し先を歩いている。

「昨日、家で反省してた。みんなのこと、頼らなかつたこととか。今

回、すごく迷惑かけたし」

「ふーん」

「あんた、興味ないわよね!？」

「ないよ。だって、これからは頼ってくれるんでしょ?」

「う、うるさいっ!」

顔を真っ赤にしているあたり、照れているだけだろう。

「そんな態度取るんだ。私のこと、婚約者…とか家で言ってたのは、どこの誰だったかな…?」

ジト目でにこのことを見ると、気まずそうに目をそらされる。

「なんか、ごによごによと言っているが、何を言っているのかさっぱりだ。

「なあに?」

「そのくらい、みはねのこと本気で好きだって言ってるのよ」

「うわ、ずるい。」

「結婚したいくらい?」

「……っ!…そう!」

耳まで真っ赤にしてそう言い放つもんだから、眠そうにしていたこたろうくんが驚いてにこのことを見る。

「今こっち向いたら怒るからね」

絶対、私の顔も赤くなってる。

こたろうくんにすらバレるのが嫌で、こたろうくんを抱きかかえる。

やはり眠かったようで、すぐに眠りについてしまった。

今、家族っぱいかも、とか思ってる私を誰かぶん殴ってほしい。

「みはね、顔真っ赤じゃない」

もう、こっち見るなって言ったのに。

66. リーダー

「ねえ、なんで一緒じゃないの」

「お母さんから許可が下りたのに、どうしてなの」

「少しでも、離れるのは寂しいです」

そう駄々をこねる穂乃果たち二年生を、無理矢理に沖繩に送り出した。彼女たちは、これから修学旅行でしばらく学校を留守にするのだ。

一週間ほど前、わがままを言ったことりに、理事長は呆れたように特例を出した。

「みはねちゃんも、一緒に沖繩に行ってもいいわよ…?」

それを断ったのは私。

もちろん、一緒に行きたいとも思った。でも、それよりも何よりも、学校に残る他のメンバーのことを考えたら、行くに行けなかったのだ。

それに、穂乃果たちが修学旅行から帰ってきたらライブがある。絵里がどこからか受けてきた、ファッションショーでのライブが。

そのことを考えると、やはり私は残って万全の状態に準備をするべきだと思う。

それに

「みはね、こっちの資料まとめておいたわ」

「ありがとう、絵里」

私まで居なくなったら、生徒会の仕事が大変なことになってしまふ。

*

「もー！最近ずーっとみはねちゃん練習きてないにや！」

放課後、生徒会を少しだけ抜けさせてもらって部室に来ると、凧は駄々っ子のように座りながら手足をばたつかせた。

「ご、ごめんね？」

さすがに危ないのでやめさせる。

そんな捨てられた子犬のような顔をされても、すごく困る。

「それに、ずっと4人で練習だよ!？」

「り、凧ちゃん、二年生が修学旅行なんだから仕方ないよ。それに、絵里ちゃんたちは生徒会の手伝いしてるし…」

花陽のフォローも虚しく、凧はほっぺたを膨らませてそっぽを向く。

「そうよ。気合いが入らないのはわかるけど、やることはやっておかなきゃ」

「絵里！」

「今日も生徒会？」

真姫は、すぐさま問いかける。なんだかんだ、寂しいのだろう。

「絵里たちは、練習に出てもいいよ？私だけでも、なんとかなるし」

「ダメよ。こういう時こそ頼ってほしいわ」

絵里は、取りに来た資料を私の頭に軽く乗せる。むしろ、頼りすぎてて申し訳ないなんて言ったら、本気で叩かれてしまいそうだ。

「そうやで。みはねはすぐ無理するから、ウチらが見張つとかないなあ」

希と絵里は、目を合わせると呆れたようにため息をついた。真姫はそれを見てくすりと笑うと、今度は凧に視線を向ける。

「どちらにせよ、みはねが来ないと駄々をこねる子がここにいるもの」私の制服の袖を掴んで離さない。ちっちゃい子みたいだ。

「また凧たちだけで練習…」

凧は、ほんの少しだけ涙目だ。

うちの末っ子は、本当にかわいすぎる。

「穂乃果たちが帰ってきた次の日にライブなんだから、練習しないと、ね? 凜」

「早く、仕事終わらせてね」

下から見上げてくる凜があまりにもかわいくて、ついつい頭をなでてしまった。

「ん、了解。怪我しないように気をつけるんだよ。真姫、花陽、よろしくね」

「ちよつと! なんで私には頼まないのよ!?!」

ここは、なにが気に入らないのか声を荒げる。

「うるさいよ、にこ」

「はあ!?! なんなのよほんと!」

まだぶつぶつ呟いているにこの肩に手を置く。

「元気なのはいいことだけど、怪我しないようにね」

私はそのまま部屋を出た。

早く、仕事終わらせなきゃ。

生徒会室に戻るなり、絵里と希は話し始める。

「ほんと、みはねは強いわね」

「誰も敵わないんちゃう?」

なにが言いたいのかさっぱりだ。

「あ、そうだった。あのこと、穂乃果たちに連絡しとかないとよね」

「絵里に任せるよ」

絵里は生徒会室に戻るなり、穂乃果に電話をかける。

「あ、もしもし穂乃果? 忙しい中ごめんなさい」

希はどこかに行ってしまったようで姿が見えない。

私も電話の邪魔になるし、自分の仕事に戻ろうとすると、絵里に腕を引つ張られた。

なに、と口パクで聞いてみるが、答える気はないらしい。

一旦私から目を逸らしたかと思えば、嫌な笑顔でこちらを見つめて

くる。

「ええ。私たちも同じ意見よ」

「ばーか。」

一瞬眉をひそめた。反応しちやってかわいいの。

「…わかったわ。ええ、そうね」

それでも何事もなかったかのように電話する絵里に、次の攻撃。

「ばーか、ばーか。エリーチカ。」

むっとした顔になるが、すぐ元の顔に戻った。

悪口はバカしか言っていないんだけど。

「……………」

私の口パクを、はじめこそは気にしていないふりをしていたが、だんだんと不機嫌そうに眉間にシワが寄ってくる。

「…いえ、なんでもないわ」

穂乃果との話は終わったのだろうか。そろそろ切りそうだ。

絵里が電話を切ってしまう前に、携帯を奪い取る。

「もしもし穂乃果？」

『みはねちゃん!?!』

「うん。って、あー!」

絵里に携帯を奪い返されてぶつりと切られる。

「ああ…」

「エリーチカは、悪口ではないのだけど…?」

不機嫌な顔をした絵里と目があう。

片手でまた後で連絡するね、と穂乃果にメッセージを飛ばしてから、にこりと笑顔を向ける。

「悪口で言ったんじゃないし。悪口言われたって思う絵里が悪いんじゃない?」

私のこと無視するからじゃん。

「いや、無視したわけじゃないわよ?」

言葉に出てしまっていたみたいだ。

「じゃあ、なに」

「そばにいてほしかったの」

気づいてよ、と上目遣いで見てくるからずるい。

「なにやってるん？怒られたいの？」

戻ってきた希が訝しげな目でこちらを見ている。

よく考えたら、最近ずつと一緒じゃん。つて言ったら、拗ねちゃうかな。

「ええー!?凜には無理だよ!」

私たちが考えていたのは、穂乃果達がない間だけでも仮にリィダーを作ろうって話だ。

今、昨日まとまった意見を伝えたわけだが…

「なんで凜なの？他の人でも…」

そう。みんなの意見は凜で一致した。

そしてそのことを伝えたら、こんなにも反発されてしまったのだ。

「みんな凜がいいって言ってるんだよ?」

「みはねちゃん…でも…凜には無理だよ」

でも、なんで、無理、そんな言葉ばかりが凜の口から出てくる。

なんでそんなに、自分に自信がないのか。

いつもとちがう様子の凜に、なんて言葉をかければいいのか。うまく出てこない。

「あ、ほら!一年生から選ぶなら真姫ちゃんとか!歌もうまいしリィダーっぽいし!真姫ちゃんて決まり!」

いつもの元気な笑顔とはちがう、繕った笑顔。名指しされた真姫は、すごく怒った顔をしている。

「みんな、凜がいいって言ってるのよ」

ぴしゃりと言い放つ。

凜はすごく困った顔をした。

「意外ね。凜なら調子よく引き受けると思ってたのに」

あまり会話に参加しなかったにこは、ちらりと凜を見て不思議そうな顔をした。

「凜ちゃん、結構引つ込み思案なところあるから…」

「特に、自分のことに関してね」

黙り込んでしまった凜の代わりに、凜のことをよく理解している2人が答える。

うーん。

「いきなり言われて戸惑うのはわかるけど、みんな凜が適任だと考えているのよ。その言葉…ちよつとだけでも信じてみない?」

「み、みはねちゃんっ」

助けを求めるかのような瞳で制服の裾を掴まれる。

甘やかすのは簡単だけど、ずっとそれでは意味がない。そう思うから。

「う、えっと。凜なら大丈夫だよ」

そう言って頭を撫でると、ぎゅつと抱きついてきた。

「2人がそこまで言うなら、やってみる…」

私に顔を埋めたままぼそりと呟く。

ホツとはしたものの、不安が消えるわけではない。

「さあ!そろそろ雨も止みそうだし、放課後の練習を始めて!」

絵里が声をかける中、花陽の肩を叩く。

「どうしたの?」

「何かあったら、誰にでもいいから相談してね?穂乃果でもいいし」

「うん、わかってるよ」

少しだけ頼もしい笑顔を向けられる。

それにちよつと驚きながらも花陽たちの背中を見送った。

今なんで、胸がチクチク痛いんだろう。

67. わかっていること、わからないこと

二年生が帰ってくるのは明日。

ようやく、生徒会の仕事も目処がついてきた。

「これなら、穂乃果たちも帰ってきてからゆつくりできるかな?」

ぐーっと伸びをして、絵里と希のほうを見る。

2人はまだ終わっていないのか、パソコン、書類とそれぞれ目を向けている。

たくさん助けてもらったし、何かお礼…

そう思っただけ席を立った。

「みはね。なにやってんの?」

「あ、ここ」

2人に飲み物でも買おうと、自販機の前で飲み物とにらめっこしていたら、不機嫌そうなことばったり。

「何かあった?」

何が何だかよくわからないけど、とっさにそう口にしていた。

質問を質問で返すんじゃないわよ。そう言いながらため息をつく。

絵里にと思って入れたお金で飲み物を1つ購入してにこに渡す。

「いちごみるく…?」

不思議そうに私を見てくるにこの頭をくしゃつとなでた。

「にこの色だなんて」

そのまま絵里と希にもそれぞれ飲み物を買って、にこと少しだけ中庭で話すことにした。

「ごめんね」

「なんで、みはねが謝るのよ」

だって、私のせいでいろいろ迷惑かけて。

みんなのことも振り回して。

ましてや、今回に至っては全然部活にも出れてないし。絵里と希のことも1人で独占して。

なんて、さすがに言えないけど。

「いろいろと、ね」

「あつそ。でも、あんたが悪いことなんていつものことだし」

ふっと顔を緩めたにこは、私のことをじっと見つめると、なぜか頬を赤らめた。

「惚れた弱みってやつ…よ」

「照れるなら言わなければいいのに」

何も言わずに、私からぶいっと顔を背けて、いちごみるくを飲み始めた。

「こういう所は、かわいいんだよなあ…って、いたっ!」

殴られた。

すごく、痛いんだけど。でも、こんなやりとりも久しぶりだなんて感じるの、最近私の中で、sという時間が短かった証拠だ。

「昨日、真姫と意見が割れて。それで、リーダーである凜に意見を求めて。凜のこと困らせた…ごめん」

「そっか。でも、気にすることないよ」

「何をもってそんなこと言えるのよ」

少しだけ、怒ってる声。

顔を見なくてもわかる。きつと眉間にしわを寄せて、私のことを睨みつけている。

「だって、まだ花陽からなにも相談されてないもん」

それって、きつと、そういうことだ。

もし花陽が本当に困ったときは、何かしらのSOSサインを出してきてるはず。

でも、今日1日過ごしていて、そんなそぶりは一度も見せなかった。「だから、大丈夫だよ?」

笑顔に向けたつもりだが、なんだか変な顔になってしまった気がした。

「こは、そんな私を見てばつが悪そうな顔をする。」

「なんであんなに、一番困った顔してるのよ」

困った…顔。

なんで、私が困るんだろう？

「なんでだろうね？」

「まったく。ほんとに世話が焼ける…」

「ここに言われたくない」

にこの肩に頭を乗せると、ぽんぽんと軽く叩かれた。なでられたわけじゃないから、余計に子供扱いされてるみたいで。

なんだか納得いかない。

頭をぐりぐりとにこの肩に押しつける。

「ちよ、なにすんのよっ！地味に痛い！」

「怒ってるんですよーだ」

変に優しくしないでよ。

にこに甘えなくなってしまう。

「ちなみに言うけど、こはは今あなたの彼女じゃないから。ついでに花陽も。そういう事じゃないの？」

そう、なんだけど。

頭ではわかってはいるんだけど。

困った時には頼ってほしいし、なんでも話してほしい。

今までは、もしかしたら、恋人って関係があつたから頼ってくれただけで。

たくさん私に話してくれていただけで。

そういう関係がなくなったら、私はただのマネージャーになってしまふ。

そう思うと、すごく、こわい。

今の私は、前の私とか確実に何か違って。

良いほうに変わったのか、はたまた悪いほうに変わったのか、わか

らない。

だって、比べるすべがないのだ。

何が良くて何が悪いのか私にはわからないのだから。

でも、それを誰かに聞くのはもつとこわい。

「それでも、私はみんなのマネージャーだから……だから」

たかがマネージャー。

そう思われたら。私がここにいる必要が、なくなってしまう。

「前にも言ったけど、私たちのマネージャーはあんたにしかできない

のよ。少なくとも、私はみはねじゃないと嫌」

「にこ…」

ただ必要とされたいだけなのか。

「ほんと、めんどくさいわね」

「だって…」

「甘え方もよくわからないのに、人に甘えてもらおうってのが間違えてんのよ」

だから、もつと甘えていいわよ。

びっくりするくらい真紅の瞳が優しく見つめてくるものだから。

もう、なんだか温かい気持ち胸の奥からあふれ出してくる。

ぎゅーつとにこに抱きつくつと、今度は頭を抱えるように抱きしめら

れて。そのままゆつくりと頭をなでられた。

「うちのチビ達よりも子どももっぽい」

「そんなことないもん」

「あーはいはい。大きい赤ちゃんね」

うるさいな。希みたいに胸が大きかったら、もつとこわ、あれなの

に。

そう、いろいろと。

「母性本能もなにもないよね」

思い切り頭を叩かれた。

すぐに反応するあたり、にこも意識してるのだろう。

「いったー…もうにこ嫌い…」

「今の、にこ悪くないわよね?！」

耳元で大きな声を上げられたせいで、頭にキーンと響く。にこ、声、高いよ。

「みはね!こんな所にいたのね」

ふくれっ面でそっぽを向くと、絵里と希が廊下からこちらを覗いていた。

「絵里ー!にこが叩いたー!」

少しだけ子どもっぽいい、くだけた口調で告げ口をする。

「ええ、何してるのよ」

「ほんま、2人は仲ええなあ」

絵里は不安そうな顔をしたが、くすりと笑ってまったく…と肩をすくめた。

対する希は終始笑顔で、私たち2人を母親のように穏やかな表情で眺めている。

結局は、甘やかされるのだ。

ほんと、3年生には甘えてばかりな気がする。みんなは、甘えるの下手くそだっていうけど。そんなことないよ。

*

2人は、たまたま通りかかったのではなく、探していたのだという。

絵里に穂乃果たちから連絡があったと、部室まで連れられた。

「え、穂乃果たち帰ってこれないの?」

それでセンターなんだけど…と絵里は続ける。

「ファッションショーだから、センターで歌う人はこの衣装でって指定がきたのよ」

その衣装を見た瞬間、みんなの目がキラキラとする。女の子の、憧れの衣装。

「女の子の憧れて感じやね」

「これを着て、歌う？ 凜が？」

「穂乃果がいないんだから、今のリーダーは凜、あなたでしょ？」

「ははっ、ハハハ……！」

やっぱり思ってた通りの反応。

壊れているかのように笑ったかと思えば、変なことを言っただけで教室から出て行くとした。

「か、鍵っ！…なんでもにやー！」

ドアをガチャガチャ開けようとする凜の背後から、にこがそーっと近づいていく。

「なんでだと思っ…？」

捕まえるように飛びついたにこを、すんでのところがかわすと、凜は部屋の中を逃げる。

結局、私の背中にちよこんと抱きついてきた凜を。体の向きをくりと変えて抱きしめることで追いかけてこが終わった。

「無理だよ。どう考えても似合わないもん……」

消え入りそうな声。

いつもの凜からは想像もつかないほどに弱々しいそれ。今は、頭をなでてあげることしかできなくて。

「そんなことないわー！」

真姫の大きな声の反論に、凜は体をびくりとさせた。

顔を上げた凜は、私から離れて真姫と向き合う。

「そんなことあるー！」

むすつとした真姫。

「だつて凜……こんなに髪も短いんだよ……？」

不意に凜の手をとると、向こう側で希が微笑んだ。

「シヨートカットの花嫁さんなんて、いくらでもいるよ？」

どこまでも優しい希の声に、凜は少しだけ瞳を揺らした。

「そうじゃなくて……こんな女の子っぽい服、凜には似合わないって話」
どうしたものか、とみんながため息をついた。

「じゃあ、別に無理して着ることないんじゃない？」

言い方がきつかったか、と思った時には遅かった。

凜は、一瞬困ったように眉を曲げて。

「いや、ほら、凜が着るとなると手直しも必要になってくるし。私は、誰が着ても似合うだろうなって思うし」

言い訳まがいな言葉。

実際ほんとのことなのだが、絵里の刺すような視線に一瞬たじろいでしまう。

いや、でも、これ以上凜に押し付けても。逃げられてしまうだけだ
と。

目で訴えるが、絵里はそういうことを言いたいわけじゃないらしい。

「そうになると、花陽ちゃんかな？」

希はあくまで優しい笑顔のまま続ける。

フォロー、してくれただよね。

「かよちゃんかわいいし、センターにぴったりにや」

安心した凜の笑顔。さっきの表情。

きつと、どっちの気持ちも正解なんだろう。

「……でも、いいの？」

花陽のその言葉に一瞬クエスチョンマークを浮かべた凜は、すぐに大きく頷いた。

「いいに決まってるにやー！」

「本当に？」

「もちろん！」

凜の笑顔は晴れやかで。本当に心の底からそう思ってるみたいで。でも、なんていうか。今のままでは、凜は後悔することになる気がする。

私にできること。なんだろう。

わからないけど。

花陽の助けを求めるような視線。これは、花陽からのSOSだって思ってもいいのかな。

私にできることは、なんでもする。

ほんとに。

嘘偽りなくほんとだから。

だから絵里、いい加減睨むのやめて…

絵里 Birthday

10月21日。日曜日。

今日は私の大切な人、絢瀬絵里の誕生日。

先日、悩みに悩んだ結果彼女に誕生日プレゼントを聞いたところ、顔を赤らめながら、一緒に出かけたいと言われた。

そんなの、プレゼントでもなんでもないのに…

本人はとても楽しみにしているようだ。

昨日の夜、日付が変わった瞬間に送ったメッセージにすぐ返事が返ってきた。内容は、お礼の言葉と小さなわがまま。

それを実行するべく、今日はいつもより早起きをした。

いつもとは違い、制服ではなくこの前絵里に選んでもらった服に着替える。いつもはおろしっぱなしの髪も、今日くらいは結んでみようか。

思わずにやけてしまう顔を引き締めて、絵里の家に向かった。

今日はどうと、甘やかすんだからね。

絵里

あたたかい、優しい手つき。

まるで、大切なものに触れるかのような。

本当はもう少しそのままでいたかったのだけれど、ゆつくりと目を開けた。

「絵里、お誕生日おめでとう」

真つ先に目に入ったのは、愛しい人のやわらかい笑顔。驚くよりもなによりも、ただただ、うれしい気持ちだけが込み上げてくる。

「…好き」

自分でもびつくりするくらいに、すんなりとその言葉が出た。だつて、ほんとにこの人のことが好きで好きでしょうがないのだ。

赤くなった顔を見られたくないのか、手で自分の顔を隠してしまふ。そんな所もかわいくて、大好き。

「絵里。うん、私も…好き」

照れながらも答えてくれる、大好きなみはねに抱きついた。

ああ、こんなに幸せな誕生日があつていいのかしら。

『ありがとう。本当は、一番に直接会って聞きたいわ。なんて、わがままね』

そんな私の言葉を叶えてくれる。どこまでも優しい人。

*

「寝起きを見られるのは、やっぱり少し恥ずかしいわね」

「そう？特に恥ずかしいところなくない？」

もう。

「寝起きがやなの」

みはねが急かすから髪も結べなかつたわ、とわざとらしく拗ねてみせると、ごめんねって笑われて。もう、いちいちかわいいんだから。

手を繋いでも、怒られないかしら。

なんて考えていたら、優しく私の手を取られて。びつくりして顔を

見上げると、いたずらっ子のような顔と目があった。

「せっかくだから、今日はずっと手を繋いでいよう。なんて、ダメかな？」

「ダメじゃ、ないわ」

予想外の提案に、思わず言葉がつかえてしまった。

「今日は絵里の行きたいところ、いっぱい行こう。わがままも、たくさん言ってみてね」

どこまでも優しい声で、そんなことを言われて、頷くことしかできなかった。

始まったばかりで、もううれしくて泣きそうだわ。

「最初は、映画を観に行きたいわ」

「ん、決まり！」

映画はもちろん私に選ぶ権利があつて。思わず恋愛ものを選んでしまったけど、みはねは退屈に思わないかしら？

みはねはすぐに、私が決めた映画のチケットを二枚買ってきた。お金を払おうとすれば、そんな暇を与えんとばかりに、手を引いてシアターまでエスコートする。

席について、いつの間にやら買ってきたポップコーンと飲み物を間に置かれる。

「いつの間にか買ってきたの？」

「やっき」

私、ずっと一緒にいたわよね？あれ、全然記憶がないわ。

今日のみはねは、何をするのもスマートで。なんだか妙にドキドキしてしまう。

今だって、手を繋いだままだし。

映画館の暗さの中、画面の光に照らされている横顔は、なんだかいつもより大人びている。私が以前選んだ服を着て、普段あまり髪を気にしていないのに、今日はサイドにまとめている。まるで、私のためだけのみはねみたい。

「もう、始まるね」

こんな状態で、映画になんて集中できないわ。

このままみはねのことを見つめていたら、変に思われてしまう。

「どうしたの？」

すごくいいタイミングで振り向くから、なんだかおかしくなっちゃった。

「なんでもないわ。映画、楽しみね」

私が画面の方を向くと、みはねはそれ以上何も言わず画面を見ているようだった。

もう半分が過ぎただろうか。

始まってからというもの、この男の人よりみはねのほうがかっこいい。とか、この女の子よりみはねのほうがかわいいわね。なんて、そんなことばかり。

それはそれで、結構楽しいのだけど。

そろそろ、クライマックスが近づいてきた。

両思いになった二人は、夕日に照らされる中、顔を近づける。

「絵里」

画面の二人の影が重なる直前、不意に隣から名前を呼ばれた。

その声に振り向くと、突然に唇を奪われる。

「んっど、どうしたの？」

胸の鼓動がトクトクと早くなっていくのを感じる。繋がっている手から、その鼓動がみはねに伝わってしまうんじゃないか、そんな気がした。

「いや、やっぱり絵里のほうがかわいいなって。それだけ」

なんていい笑顔で言うのよ。

これ以上、私をどうしたいって言うの。

いつの間にか、映画はエンドロールに入っていて。明るくなった中、他の人たちは席を立ち始めている。

「私たちも、行くっか」

みはね立ち上がると、私の手を引いた。
なぜか、一瞬下を向いて深呼吸した後、改めて「行こう」と歩き出した。

映画の次は、ランチタイム。

少しおしやれなカフェに二人で入る。

みはねはオムライス。私はサンドイッチ。

「おいしいわね」

「うん。はい、絵里も一口どうぞ」

そう言って、スプーンを差し出してくる。

それに少しだけ照れながらも、オムライスを頬張った。

「ハラショー！おいしいわ！」

「ふはっけチャップついでるよ」

人差し指で私の口元を拭くと、そのまま指についたケチャップをなめとった。

動きがあまりにも自然過ぎて、反応することすらできなかった。

なんだか、みはねのことが直視できない。

誤魔化すように横を向くと、ふと、周りから視線を感じる。

店内を見回してみると、他の席に座っている人たちが、男女関係なくこちらを見ていた。

その視線は、まるで芸能人を見つけたかのような。

少し、居心地が悪い。

「絵里？」

「あ、ご、ごめんなさい」

「ううん。もう出ようか」

いつの間にお会計をすませたのよ、なんて。もう今日は言っても無駄ね。

「次、どこか行きたいところある？」

なんだかモヤモヤするなか、思い浮かんだのは自分の好きなもの。

「アクセサリーショップ、行きたいかも」

みはねは満面の笑みになる。

「実は、すごくいいところ知ってる！」

珍しい。あまり、興味がないと思っていたから少しびっくりしたわ。

手を引くみはねの背中中は、見るからに跳ねていて。スキップでもするんじゃないかってくらい。

みはねに連れられてきたお店は、自分ではきたことのないお店だった。

大きな通りを少し小道に入った所にあるため、人にはあまり知られていないようだが、すごくオシャレだ。

ドアを開けるとカランと鈴の音がなった。

あまり広いお店ではないが、品揃えがいい。商品のディスプレイも丁寧で、すごく心が躍る。

「すごく、いいお店ね」

「でしょ？好きなだけ、見ていていいよ」

そう言うと、手が離れていってしまった。

「みはねちゃんー！」

一緒じゃないんだ、と思っていた矢先。奥にいたかわいらしい女性店員さんが、みはねの名前を呼んだ。

みはねはそれに笑顔で答えると、駆け寄っていく。

なんの話をしているのか、ここからは聞こえないが、みはねはすごくうれしそう顔をして話している。

さっきまで見るのがすごく楽しみだったのに、今は何を見てもキラキラに感じない。

でも、来たいと言ってしまった手前、何も見ていないわけにはいかない。

「……………ふふ、電話しようと思ったところなのよ」

少しだけ近づくと、そんな会話が聞こえる。

電話するような、そんな仲なの？

だから、私がアクセサリーショップに行きたいって言った時、あんなに笑顔だったわけ？

意味、わからないんだけど。

もう少しだけそばに寄って、聞き耳をたてる。

「ありがとうございます。ほんと、……さんに頼んでよかった」

みはねの表情は見えないが、店員さんの顔はすごく笑顔で。

「ふふ、そう言ってもらえてうれしいな。そういえば、今日は髪結んでいるのね？」

かわいいと言いながら、みはねのほつぺたをふにふにといじって遊ぶ。

その髪型は、私のためのものなのよ。

「ちよ、からかわないでください……っ」

みはねは言葉ではそんなことを言っているが、大人しくほつぺたをいじられている。

ねえ、本当にそうよね？

「ほんつと、かわいい！」

店員さんがみはねの頭をなでるところを見た瞬間、私の中の何かが切れた。

持っていた石が手から滑り落ちる。

落ちたそれは、床にあたって音をたて、みはねのほうに向かって跳ねた。

その宝石はオパール。

私の、誕生石。

視線を上に移すと、目を丸くしたみはねと目があった。

私が落としたそれをみはねは拾い上げると、店員さんと目を合わせて微笑んでいる。

だから、なんで。なんなの、さつきから。

それ、私の誕生石よ？

今日、私の誕生日なのよ？

「はい、絵里」

表情はそのまま差し出してくるが、私はそれを受け取らなかった。

もう、限界だった。今日はずっと特別扱いされていたから、もしかしたら、本当にわがままになってしまったのかもしれない。
今は本当に、この醜い感情を抑えられない。

「…つまらないわ。もう、帰る」

「え、ちよっ!?!」

こんな気持ち、きつと知らずにいたほうがよかった。

後ろからみはねの声が私を呼び止めるが、それを無視して走った。
そのまままっすぐ家へ。

本当は、残りの時間は家でゆったりと過ごすつもりだったのだ。もちろんみはねと。そのために、亜里沙には出かけてもらった。

今となつては、静かな空間が余計に私を虚しくさせる。

ソファに座って冷静になると、なんでこんなことになってしまったんだろうと後悔だけが押し寄せる。

だって、みはねがいろんな人と仲がいいのはいつものこと。

でも、今日はそれが許せなくて。ひとりぼっちになって。

止まらない悲しみ、止まらない胸の痛み。

「…っみ、はね」

それらが涙となつて、ぼろぼろと瞳から溢れる。

いつもより激しく渦巻いた感情に、私の全てが崩れそうになる。

どうして、すぐに追いかけてきてくれなかったの。

ごめんなさい。私が嫌な態度とったから？

みはねの声が聞きたい。大丈夫だよって言ってほしい。

「なんで、泣いてるの。絵里」

顔を上げると、目の前にいたのは息を切らしているみはねだった。

「み、はねが…っ泣かせたんじゃない!」

完全なる逆ギレ。

みはねは心配をしてくれているのに、それが嬉しいはずなのに、つくづく私はめんどくさい。

「…はあ、ごめん」

みはねはため息をついて。
それ以上会話がなないのが、さらに気まずい。
下を向くと、みはねはしゃがんで私の顔を覗き込んだ。
まるで、捨てられた子犬みたいな目をしてこっちを見つめられて、
思わず逸らしてしまった。
きっと、みはねも困ってる。
「……私が泣かせたんだよね」

ぼつり、そう眩くとみはねは立ち上がった。
右手を取られて、水色の包装紙にラッピングされた長方形の箱を持たされる。

少しだけ間をおいて、もう一つ、ラッピングされていない同じような箱も渡された。

「誕生日なのに、泣かせてごめんね。誕生日おめでとう。受け取ってくれるとうれしいな……」

だんだん気持ちが悪くなってきた。

時間も過ぎて、みはねも知らないうちに去って行ってしまった。

足も思考も全然働いてくれなくて。しばらくの間ぼう々と渡された箱を見つめていた。

「これ、開けたほうがいいわよね……?」

まずは、ラッピングされているほうを開けることにする。みはねからの、誕生日プレゼントだろう。
箱は、ラッピングされていないものと同じだった。これ、きっとネックレスよね。

開けてみると、中身はやっぱりネックレス。
長方形のプレートに隅に虹色に光る宝石が埋め込まれている。それにプラスして、筆記体のMの文字。

まさか。

急いでもう一つの箱を開ける。

こっちのネックレスには、水色の宝石とE。

二つのネックレスを隣合わせると、欠けている側面がハートになった。

2つの宝石に光が反射して、静かに私を照らした。

「う、そ…」

また涙が出そうになって、でも、今度はがんばって堪える。

自分の箱に、メモ用紙が挟まっていることに気づいた。見てみると、みはねとは違う字。

『はじめまして。アクセサリーショップの店長です。今、あなたを追いかけようとしているみはねちゃんを引き止めて、これを書いていきます。もしかしたら、私が勘違いさせてしまったかもしれないので…』
これ、さっきの店員さんよね。店長さんだったのね…

『このネックレスは、みはねちゃんにどうしてもって頼まれて、特別に作ったものです。石は、オパールとトルマリン。どっちも10月の誕生石です。(トルマリンが水色なのは、あなたのイメージカラーらしい)デザインは、みはねちゃんがあなたのためにって考えたものなんですよ。何回かお店に来た時も、ずっとあなたの自慢話をしてました。今日も、デートの話ばかりして、髪型も、デートだからがんばったみたい。愛情たっぷりなのペアネックレス、大事にしてくださいね』

言葉がうまく出てこない。

私、勘違いして。ヤキモチやいて。

「みはね、追いかけてなくちゃ…!」

準備をするのもどかしくて、そのままの格好で部屋を飛び出す。靴をひっかけて思い切り玄関を開けると、衝撃音とともにうめき声。

「みはね…?」

なんで、いるのよ。

「帰れるわけ、ないもん。絵里の誕生日なのに」

ほんのちよつと涙声のみはね。

そんな彼女を、そっと抱きしめる。

「ごめんなさい。勘違いして、嫉妬したりして」

「え？」

「お昼のカフェでは、みんながあなたのこと見てて」

私だけのみはねでいてほしいのに、なんて。子どもみたいなこと考えて。少しだけ、機嫌が悪くなった。

「それは、絵里もだよ。みんな絵里に見惚れてたから、早めに出たんだよ？」

少し拗ねたような顔。みはねが嘘なんか言っていないのはわかる。

「いや、でも……」

「わかってる？髪下ろしてるから、いつもより大人っぽく見えるの」
ずっと緊張しっぱなしだったんだから、そう言っただけはむっとする。

知らないわよ、そんなの。

「…それは、もう、わかったわ。でも！アクセサリーショップでは、店員さんと仲良く話してて」

「それは、べつに変な意味があったわけじゃないから！」

手を目の前でブンブンと振る。

全力で否定しているその姿がかわいくて、少しだけいじめたくなつた。

「電話するような仲なんでしょう？」

「き、聞こえてたの…!？」

少し深刻そうな顔で頷くと、みはねはさつきよりも動揺している。何か言おうと口を開いては、飲み込むように閉じる。きつと、言い訳にならないような言い訳を探しているのだろう。

どちらにせよ、怒らないのに。

「ふふっ、あはは…っ」

堪え切れなくなつて私が笑い出すと、みはねは言葉を失つたよう
で。

「全部、知ってるわ」

「へ…？」

「ペアネックレス、ありがとう」

意味がわかった彼女は、少しだけ怒った顔をしてから安心したように微笑んだ。

リビングに戻って、お気に入りのココアを2つ。

今日は特別に、マシユマロと生クリーム多めで。甘々にしてしまおう。

「趣味悪いよ、絵里」

「勘違いさせたみはねが悪いのよ」

みはねは反論せず、ごめんと呟いた。

「それで、これはどうすればいいのかしら？」

箱に入ったネックレスを二つ、みはねの前に置く。

みはねはMのインシヤルが入ってるネックレスを手に取ると、私の背後に回った。

「お誕生日おめでとう」

そう耳元で呟いて、後ろから器用にキスをされる。

「んっ」

みはねの顔がゆっくりと離れる。

いつの間にやらネックレスがつけられていて。

「もう、いきなりはずるいわよ」

「ごめんね、どうしても我慢できなくて」

さっきの行動とは違う子どもっぽい笑顔に、胸がキュンとなる。

「これは絵里の誕生日のオパール。決まった色がないでしょ？だから私とおんなじなの」

私はマネージャーだからね、って。きつと、イメージカラーのことを言っているんだろう。

何色にでも染まり、他の石と違う輝きを放つオパールは、まさにみはねそのもの。

満足そうに頷くと、座ってココアを飲み始める。

それだけ？

もつとこう、何かあるんじゃない？

欲張りな私はそれ以上を求める。

そう、もつとイチヤイチャしたいの。

「それで、こっちはどうすればいいの？」

たぶん、みはね用のネックレス。

それをわざとらしく手にとって、みはねの前に突き出す。

「あーっと、うん。ペアになってるんだけど…うーん」

素直につけると言えはいいのに、なぜだか言葉を濁す。

「私のイメージカラーとEなのに、みはねはつけてくれないの？」

甘えるように顔を覗き込むと、困ったように眉を曲げる。

「うっ…つけて、いいの？」

「みはねがつけてこそ、ペアの意味があるんじゃない」

今さら何言ってるのよ。

「ほら、だってそれ、ある意味私の束縛だよ？ずっとつけてなきやダメって言うよ？それでも、いいの…？」

真剣な瞳。

どこまで本気なのか。いや、きっと、全部本気だ。

「そんなの、当たり前じゃない。私だって、ずっとつけてなきや嫌だもの」

「絵里…！」

「ほら、つけてあげるから」

そう言っ私はみはねの膝に座る。

「え、なに」

至近距離で向かい合うと、みはねは顔を赤く染めてそっぽを向いた。

「今さらなに恥ずかしがってるのよ？」

「ちがつ！びっくり、しただけ…」

そう言ってゆっくりこっちを向く。

強がってはいるけれど、やはり恥ずかしいようで潤んだ瞳でこちらを見つめる。

「ほら、大人しくしてて」

指先が少しみはねの首筋に触れると、びくりと肩を揺らすものだから、なんだか私も緊張してきてしまう。

つける場所が見えないせいか、余計にうまくつけられない。これは、失敗だったわね。

目が合わないように目を伏せるその姿が妙に色っぽくて、クラクラしてしまう。

カチリ、ネックレスがついたと同時に、みはねの小さくてかわいい唇にキスをした。

「…んっなにをするの」

驚いているとも怒っているとも、どっちとも取れるような顔をしている。

そんな顔も好きだなって思えるのは、相手がみはねだから。

「その気にさせたのは、あなたよ」

ちゅ、ちゅ、と音を立てながら何度も角度を変えて口付ける。

「ちよ、まって…!」

待ってって言われても、止まらない。

だって…

「今日は私の誕生日よ?」

もう、私たちの間に言葉はいらない。

「んん?!」

無理やりに舌をねじ込んで、息継ぎをする暇さえ与えない。

それでも酸素を求めるとみはね。息継ぎをするタイミングを見計らって、私はさらに深くキスをする。

「ん…っくる、し」

ちゅ、と音を鳴らすたびに顔を赤くするから、理性なんて忘れてしまいそうだ。

ギリギリの状態でしばらくそうしていると、みはねが涙目でプルプルと震えだす。

怒られるかも。不意にそんなことを思った。

「…みはね?大丈夫?」

一旦キスをやめて俯いている顔を覗き込むと、みはねの顔が近づい

てきて、気づいたらまた重なっていた。

びっくりしすぎて、反応が追いつかない。

「ベッド…連れてって」

ハラシヨ…

これは、許可が下りたって事よね。

「誕生日が終わるまで、あなたは私だけのものよ」

こくり、小さくうなずいたみはねをお姫様抱っこして自室へと向かった。

誕生日が終わるまで、まだまだ時間はたっぷりとある。

覚悟してね？

68. いちばん

その後、試しに衣装を着た花陽を見て、誰よりも目を輝かせて喜んでいたのは凜。

その後の練習から、ここ最近の行動が嘘だったかのように元気で、なんていうか、本当にこれでよかったのか不安になってくる。

次の日の朝、珍しく花陽が2人で話しがしたいと言ってきた。

お昼休みに、真姫にうまく誤魔化してもらって2人で抜け出す。

「めえー」

「ふふっかわいいね」

花陽はアルパカをなでながら私の手をぎゅっと握ってきた。

いきなりの事に、ひゅつと喉がなる。

「あ、と…珍しいね?」

「ん?」

なにが?とでも言いたげな笑顔の花陽。

実際、花陽は純情な少女ではあるが、なかなかの天然小悪魔だと思
う。

実際、μsの中で1番女の子っぽいのは凜だと思うし。

いや、違くて。

「その、あの…ね?」

歯切れの悪い私を見て、よけいに面白いのか笑い声が大きくなる。

「ふふっ、あまり2人きりになることってないから、緊張しちゃうね
?」

「いや、嘘!?花陽緊張してないでしょ」

握られた手を、今度は器用に指を絡めてくる。すごく、むずむずして、くすぐったくて、離したいけど、離れないように強く握られる。

「あの、ほんとに、どうしたの」

「緊張…してるよ?」

振り返った花陽の頬は、薄紅色に染まっている。けど、なんだろう、

この感じ。

「わかった！から、その」

「手を離してほしい…？」

ちらりとまぶたの端が光る。

え、涙…!?

「いや、離さないでいいよー！」

涙は一粒こぼれてしまったけど、花陽はにこりと笑った。

なんだか、嫌ではないけど、振り回されてしまっている。

「みはねちゃんのね、手。すごく安心するんだあ」

あのね、そう切り出すと。花陽は手はそのまま、すりすり私のおでこを擦り付けた。まるで、猫みたいだ。

「ずっと、凜ちゃんみたいに甘え上手だったらなあ…とか。みんなみたいになって、思ってたの」

私も甘えてほしかったよ。その言葉は音になる前に飲み込まれる。

だって、花陽が珍しくこんな話してくれてるの。

「頑張ろうって思った時には、もう遅くて。関係がちよつと変わっちゃって」

返事をする代わりに、腰に腕を回してぎゅつと抱き寄せた。

ごめんね。

「そしたら今度、凜ちゃんが大変で。みはねちゃんが」何かあったら相談してね”って言うてくれたの、嬉しくて」

今度は、握られている手を握り返す。

そしたらまた、反応するかのように力が込められて。

ずっと、花陽に我慢させちゃっていたこと。気にはなっていたけど私も行動に移せていなかったな、と反省する。

「今なら独り占めできるかも。って思ってたのかな」

顔を上げた花陽は、困ったように眉を曲げていた。

だから、ここ最近の花陽は、私に何も話してくれなくて。私はままと、花陽の罨にはまってしまっていたわけだ。

むかつく。かわいい。キスしたい。

なんだかとつきに我慢できなくて、自分のおでこを花陽のおでこに

ぶつける。ごっつん。結構鈍い音になった。

「泣いちゃう？」

痛かったかな。そう思ってたらりと目線を上げてみる。

「ううん。もう、泣き虫な自分を変えたいって本気で思うの」

至近距離でじつと見つめられた。

私も、負けじと見つめ返すけど。花陽から逸らしてくれることはなさそう。

「それで、今度は私が凜ちゃんを助けたい！」

真剣な花陽の瞳。私の完敗だ。

初めて花陽のこと、かっこいいって思った。

いつでも、自分のことよりも友達を優先しちゃうんでしょ？そんなの、誰にでもできることじゃない。

「私に手伝えること、ある？」

なんでもするよ。

花陽のため、凜のためなら。

同級生でもあるし、入学してからたくさん助けられてきたもん。

大好きな2人のためなら、なんでもしたい。させてほしい。

「ありがとう。みはねちゃん……好き」

花陽の唇が、私のに押し付けられた。

まるで、こぼれ落ちたかのような言葉に、花陽の本心が見えた気がした。

「ん、あ、えと……」

口元を押さえながら、思いつきり尻餅をついてしまった。だって、今。

「ずるしちゃった……ね。こんなこと、最初で最後にするから」

そう言っって手を差し伸べられる。

その手を取って立ち上がるが、足にうまく力が入らない。

それくらいにびっくりして。

「花陽。その、びっくりした」

「ふふっ。ごめんなさい」

「う、うー…」

「だって、みはねちゃん、みんなに優しいんだもん。そんなのずるいよ」

「だって、みんなのこと好きだし、大切な仲間なんだもん。冷たくするなんてできないよ。」

でも、それが嫌だっていうのなら…

「優しくしないほうが、いい?」

「いや。友達のままでいいから、優しくしてほしい…かな」

不安そうな顔が、覗き込んでくる。

花陽のそういう顔、ほんとかわいから困る。勝てっこない。

「わかった。それで、凜のことだけど…」

それにさつきから、ずっと手を繋いでいて。

きつと、本当は、ずっとこういうことしたかったんだろうな。なんて、今の私には遅すぎるんだけど。

ごめん。ほんとうに。

「実はもう、大まかな作戦は考えてあるの」

本番。モデルショーのステージの客席には、たくさんの人で溢れかえっていた。

みんな、目当てのモデルさんが出るたびに、黄色い声をあげて喜んでいる。

もちろん、ステージ裏にはモデルさんたちがスタンバイをしている

わけで。

「あなたも、ステージに上がるの？」

近くにいたかわいらしい女性に声をかけられる。

「あ、いや、私は違うんです」

きれいな顔を近づけられて、少しだけドキドキする。

「そうなのー？私と一緒に出不い？」

「あ、ごめんなさい！仕事があるので…」

べたべたと触れてくる。たぶん、よくあることなのだろう。香水の匂い、少しだけきついかも。

テンションが上がっているが、メンバーたちも、餌食になっていくかもしれない。

そう思ったが、本当にテンションが上がってそれどころではないようだ。

…あ。

みんなから少しだけ離れたところでひとり、明らかにビジネスできているであろう女性から熱心に声をかけられている。

まったく、油断も隙もない。

「絵里。何してるの？」

「あつみはね！いや、違って…」

違うって何が。

わたわたししてるの、かわいい。

「ごめんなさい。私の連れに、何かご用ですか？」

スーツの女性は、少し目を丸くしてから柔らかく微笑んだ。

牽制のつもりだったんだけど、私じゃ無理みたい。

「いえ、あまりにもきれいだっただけです。モデルさんでもどうかになって思っています」

絵里の全身を眺めるように見ては、ほうつとため息をつく。

わかる。その気持ちは痛いほどわかるんだけど。

これ以上、無駄に表立って露出はしないでほしい、かな。

「そうですね。スクールアイドルにしておくのもったいないくらい

なんですよ、みんな」

絵里の腕を少しだけ強引に引つ張って、こちらに来させる。

「絵里、衣装に着替えておいで？」

「え、ええ……」

耳元で言ったからか、頬を赤く染める。

しかし、なかなか行く気配がない。

「絵里？」

「…そんなの、どこでつけてきたのよ」

少しだけむすつとした顔で、そんなセリフだけ残して去っていった。

…何かついてる？

「あの、失礼ですが、あなたは？」

おずおずときっきの女性は私に質問をしてくる。まだ終わっていなかった会話に少しだけ驚いてしまった。

「あ、マネージャーなんです。だから、無理に勧誘されたら困っちゃいますよ」

「それは、あなたも？」

妙に真剣な顔で聞いてくるものだから、最初相手の言葉がすんなり頭に入ってこなかった。私を？なんだ？勧誘するの？

「え？」

「いつでも、連絡していただけると嬉しいですよ！」

そう言っただけで差し出された名刺を無下にはできなくて、とりあえず受け取った。

なぜだか腑に落ちないが、とりあえずは丸く収まったということでもいいのだろうか。

「みはねちゃん！」

「あ、花陽……って、似合ってるね。その衣装」

「ふふっありがとう。それでね、ことりちゃんから預かったのなんだけど……」

そう言っただけで差し出されたものを受け取って、私も衣装室へと向かっ

た。

*

衣装室に入ると、みんなもう着替え終わっているようだった。

「あれ？かよちん！衣装間違ってる…」

まだ1人着替えていない凧は、用意されていた衣装を見て間違っていると振り返った。

すぐくタイミングがよかったみたいだ。

「…っ!？」

「間違ってるよ」

「あなたがそれを着るのよ、凧」

黒い男装衣装を着た真姫と花陽が、凧に微笑む。

当の凧は、ずっと目を丸くさせたまま固まっている。

「な、何言ってるの！センターはかよちんで決まってる…それで練習もしてきたし！」

「ちゃんと今朝みんな合わせてきたから大丈夫よ。凧がセンターで歌うように」

絵里は優しく凧の頭をなでる。

他のメンバーも、温かい眼差しで凧のことを見ていた。ただ1人、凧だけが状況を飲み込めていないようだ。

「凧ちゃん！私ね、凧ちゃんの気持ち考えて、困ってるだろうなって思っけて引き受けたの」

花陽はあの後、やっぱりセンターは凧がいいとみんなに告げたのだ。

「でも、思い出したよ！私がμ、sに入った時のこと。今度は私の番！凧ちゃんはかわいいよ！」

「えっ!？」

花陽の隣では、寄り添うように真姫が立っている。

「みんな言ってたわよ。μ、sで1番女の子っぽいのは凧かもしれないな

「いって」

「そ、そんなこと……!」

凜は助けを求めるように私を見てくる。

助けるようなことなんてないよ? そんな気持ちを込めて、首を傾げてみると、困ったように眉尻を下げた。

「凜?」

「みはねちゃん、は? どう思う?」

泣きそうな顔。

「なんで、ここにきて私……?」

「似合うよ、凜が一番。ぜったいに」

その言葉を聞いて、俯いてしまう。

「……着る。凜が、着たい」

消え入るようなその声に、みんなは晴れたような笑顔になった。

「着るの、手伝うよ」

みんなには外で待っていてもらうことにした。

とりあえず凜に着れるところまで自分でやってもらおう。

その間に、私は花陽から受け取った白のタキシードに着替えてしまった。

似合わないなあ、なんて。鏡を見てため息をつく。

「みはねちゃん! ファスナーあげてもらってもいいかにか?」

凜は恥ずかしいのか、カーテンから顔だけを覗かせている。驚いた顔をしている凜と目が合う。

「いっよ」

その言葉を聞いて、カーテンの奥へ戻っていく。そっとカーテンを開けると、かわいい女の子が背中を向けて立っていた。

鏡に映る顔は真っ赤になっている。

「かわいい」

「い、いよいよ……そういうの」

何が? と顔を覗くと、手のひらで押し返されてしまった。

「なんで、その衣装……なんで」

「私が凜の、相手だからじゃないの?」

もう一度顔を覗くと、今度は押し返されなかった。

その代わりに、凜の唇が私の口元ギリギリに押し付けられた。

「かわいいよ、凜が1番」

「ずるい、嘘だよ。μ、sのみんなのこと好きなくせに。マナー
ジャーでしかいてくれないくせに」

もう一度、ずるいよ。と。

ファスナーを上げる前に、さっきの仕返しとばかりに凜の背中にキ
スをして、噛みついた。

「んっ、みはねちゃん。痛いよ」

「仕返し」

「凜は、痛くなんかしてないにゃ!」

「ごめんね、なんて言いながらゆつくりとファスナーをあげる。噛み
跡が見えなくなってしまうことに、少しだけ残念な気持ちになる。

「凜、すごくかわいい」

凜は真正面を向くと、そのまま抱きついて来た。

しばらくそのまま。

ぎゆうつと、なかなか離してくれない。

「…凜?」

背中を軽く叩いて、離れるように促す。

何も言わないし、不安になって剥がすように離れると、見るからに
不機嫌な顔をした凜がいた。

「どうしたの?」

「みはねちゃん。別に凜には関係ないけど、知らない香水の匂いがす
る」

「…え?」

そこでふと、絵里に言われたことを思い出す。何がついてるって、
香水の匂いか…!

「いや、モデルさんがね。近かったっていうか、なんていうか…」

「別に、凜には関係ないにゃ」

そう突き放されるように言われると、かなりショックなんだけど。

なんてしよぼんとしていると、再び凜が抱きついてきた。
不思議そうに見つめると、得意げな顔。

「凜で上書きね？」

小首を傾げて、人差し指を唇に押し当ててきた。

「…っ、どこで覚えてくるの。そんなの」

あまりにも小悪魔女子な行動に、顔が熱くなってくる。

「今の凜、ほんとにかわいい？」

このタイミングで聞いてくるなんて、ずるいにもほどがある。

「かわいいよ。本当に1番かわいい」

私の赤くなっているであろう顔を見て、安心した顔をする。やっぱり不安だったのだろう。

惜しくも時間が来てしまつて、舞台袖まで見送ることにした。

衣装が衣装なだけに周りからはすごく見られるし、なんだか不思議な気持ちだったけど。

凜が笑顔でいてくれるなら、それでいいや。

ステージが上がっているみんなを、傍から盗み見る。

凜は、センターに立ってリーダーとして挨拶をする。

「は、初めまして！音ノ木坂学院スクールアイドル！μ'sです！」
観客席からは、かわいいやらきれいやら、たくさんの声が聞こえていて。

「あ、ありがとうございます。本来は9人なんですけど、今日は都合により6人で歌わせてもらいます。でも…残りの3人の思いを込めて歌います！」

ステージはキラキラと輝いて見えた。

「それでは…1番かわいい私たちを、見ていってください!!!」

『凜ちゃんは、みはねちゃんにかわいいって言われるだけで、がんばれると思うんだ』

69. 好きの重さ

なんで、こんな状況になったんだっけ。

あれ、これは私が望んだこと？それとも…

だって、こんなのー

*

事の発端は少し前。

ラブライブの地区予選、まだ私のみうだった時のことだ。

あの時は、A—RISEと一緒にライブをした。忘れようにも忘れられない、μ'sにとってすごく大きなイベント。

それと同時に、私とA—RISEのメンバーとの距離がぐつと近づいた日だったとも思う。

あの日連絡先を渡したA—RISEのメンバーの一人、統堂英玲奈から連絡が来たのは予想外だった。

内容はいたってシンプルで。

”少し、相談したいことがある。もし大丈夫なら、この後UTX近くの〇〇カフェに来てほしい。”

その日、とくに生徒会の仕事もμ'sの練習もなかった私はすぐに返事をした。

指定されたカフェにつくと、英玲奈は窓際の席で本を読んで待っていた。

「まさか、本当に来てくれるとは思わなかった」
本を閉じると、ふっと目元を和らげる。

「なんで？」

「いや、キミもなにかと忙しいだろう」

何がいい？と、メニューを私に差し出す。

英玲奈がいつも以上に大人っぽく見えるのは、お店の雰囲気せいだろうか。

とりあえず、アイスコーヒーを頼むことにして、席に着いた。

「で、相談って？」

しばらくの間、お互いの近況報告で盛り上がった後、頼んだコーヒーが出てきたことで本題に入ることにする。

「それがだな……………」

英玲奈の悩み事はいたって単純だった。

最近、ツバサとあんじゅの二人が練習に集中できていない。いや、A—R—I—S—Eの活動に集中できていない、と。

「英玲奈のことだから、理由はわかっているんでしょ？」

「ああ…それは、そうなんだが」

そう言葉を濁す英玲奈。

言いにくいと思ってくれているのは、気をつかってくれているからなのか。

「原因はみはね…キミなんだけど。わかっているだろう？」

きつと私が「わからない」と言えば、優しい彼女は困った顔をする。

そして私は、その困った顔に弱い。

「少しだけ」

目をそらしながら、そう言うのがやっとだった。

「ははっそうか。まあ、キミが責められることでもないが…」

「英玲奈もそういうことあるの？」

なんだか、私のほうが不利な気がして。

少しでも動揺してくれないかな、なんて浅はかな考え。

「みはねは、好きな人はいないのか？」

質問に対して質問で答えられる。

「ずるい」

むつとすると、テーブル越しに頭をなでられる。

「すまない。しかし、私もキミのことが好きだと言ったら、困るだろう」

カラン。

氷が溶けてコップにあたり、音を立てる。

どきりと心臓が跳ねた。じつと見つめられて、さらに心臓の主張が激しくなつて。

それを誤魔化すように、コーヒーを一気に口に入れた。

「…につがー」

そうだ、まだコーヒーが来てからまったく手をつけていなかったんだ。

恥ずかしくなつて下を向くと、英玲奈がふつと笑みをこぼして、コーヒーを自分のほうへ持つていった。

ちらりと視線を上にあげて、英玲奈の行動を盗み見る。

ガムシロップとミルクを少し多めに入れて、くるくるとかき混ぜた。

その後、一瞬私の元へ戻そうとしたが、それを中止して自分の口元へ。

少しだけ飲むと、また私のところへ戻した。

「うん、これならちようどいいだろう」

それは、あくまで味見をただけ。

「なっ…え」

そこで動揺した私が悪い。

反射的に顔を上げて、英玲奈を見つめる。

くすりと笑う彼女は意地悪そうだが、どこか艶やかだ。

これって…間接キスになるよね…

私の考えていることを見透かしてか、英玲奈はにんまりと口角をあげる。

「キス…だな」

「間接ね?」

重要なワードが抜けていて、思わず大きな声をあげてしまった。
「ふ、ははっそんなのわかってる」

英玲奈の笑い声が店内に響く。

「後輩いじめだ」

わざとらしく拗ねてみせると、笑い声はもっと大きくなった。

「そんなことはない。私は後輩に優しいよ。特に、キミにはね」
そう言つて頭をなでられてしまえば、返す言葉なんてなくて。

やっぱり、ずるい。

コーヒーを飲むと、今度は甘すぎるくらいだった。甘いのが好きだからいいけど。

「さて、そろそろ話を戻そう。今回、それを踏まえてみはねに頼みがあるんだ」

「ん?」

ストローをくわえたまま、目線だけ上げる。

「今日1日だけでいい、A—R—I—S—Eのマネージャーをやってくれないか?」

やっぱり私は、困った顔に弱いらしい。

*

「うわあ、いつ見てもすごい学校だねー…」

「そうか? 私からしたら普通なんだが」

そりゃ、毎日通つてますもんね。

音ノ木坂もすごいとは思っているけど。こう、UTXは見た目が学校っぽくないし。

てか、側から見たらビルじゃん。

「その表情は、私になにを訴えかけているんだ？」

「何でもないですう」

わざとらしく、ほっぺたを膨らませる。

「かわいいな。今からでもU・T・X（ユー・ティー・エックス）においで」

人差し指で私のほっぺたをつんつんと突つつきながら、本当に楽しそうに笑う。

そんな様子を見て、私までつられて笑顔になってしまう。さらっとかわいいとか言っちゃやうあたり、絵里みたいにキザな人なのかもしれない。

そんなやりとりをしていると、下校する生徒が英玲奈の存在に気づいてか、視線を感じるようになった。

「すまない。少し急ごうか」

ぐいっと強引に手を引かれて、建物の中に入る。

しばらくは生徒がいたが、エレベーターに乗ると二人きりになった。

「英玲奈ってば、強引だね」

繋いでいるほうの手をぶらぶらと揺らすと、英玲奈は目をぱちくりさせた。

「ん？ああ、手を繋いだままだったな」

と言いつつ、離す気はないらしい。

しばらくして目的の階についたのか、ドアがゆっくりと開く。

「みはねちゃん」

ドアが開ききる前に、待ち構えていたであろうあんじゆが抱きつこうとしてきた。しかし、英玲奈が私の手を引っ張ったため、あんじゆは壁に激突した。

「いった〜い…なにをするのよっ」

「そういうことは、練習の後だ」

あんじゆは座り込んだまま、英玲奈を涙目で睨みつける。

「あんじゆ、大丈夫？」

怪我はしていないようだ。

英玲奈と繋いでいない方の手を差し出して、あんじゆを立たせる。

あんじゆは何も言わず、ただぎゆうつと私の腕にくつついてきた。

「練習、するぞ」

練習すると言っているわりには、英玲奈の手に力が入っている。繋いでたら、できないよ。もう。

「ねえ、二人とも、いつまでそうしてるの?」

ツバサは、仁王立ちをして腕を組んでいた。

思わずため息が出てしまった。

これ以上は、本当にまずい。

「ほら、練習するんでしょ!準備しよう?」

「わかったわ…」

「ああ」

二人は、渋々といった様子で私から離れて行った。

ただ、怒っているツバサだけが、この場に残っていて。まだ、何か言われるのかな。

「みはね」

声をかけられて心臓が跳ねた。

しかし、それを悟られないように笑顔を向ける。

「ん?」

「なんで英玲奈にだけ、連絡先あげてるのよ」

それだけ言うと、英玲奈とあんじゆの元に行こうと背を向けてしまった。

思わず、ツバサの腕を掴んでいた。

「なに?」

こつちを見もしないで、返事だけが帰ってくる。

「私、今日英玲奈と待ち合わせたカフェでバイトすることになったんだ」

実は、あそこのお店で店長さんに頼み込まれてしまって。英玲奈にも、私が学校の近くににいるなら会いに行きやすい、とか言う理由で押しに押され。

とりあえず、断れなかったのだ。

なんてことは置いておいて。ツバサはこつちを向く気は今はない

らしい。

「ふ、ふーん」

気にしていないように返事を返されたが、一瞬言葉が詰まっていた。動揺しているのは明らかだ。

「だから、今度ツバサにも来てほしいんだけど…」

ツバサは急にこっちに振り向くと、睨みつけてきた。

「それとこれと、どう関係があるのかしら」

「もし来てくれるなら、連絡先渡しておこうかなって。そしたら、シフト入ってる日教えられるし」

なんて、ほんとはこんな口実なんてなくても渡すけど。ツバサのこどだから、自分が言ったからくれたって思いそうだし。

「い、いいわよ」

ふい、と顔をそらす。

耳、赤くなってるよ？という言葉を飲み込んで、ツバサに笑顔を見る。

「ふふ、ありがとう」

番号を教えると、私の携帯が鳴った。

ツバサにじっと見つめられて、仕方なく出ることにする。

「もしもし」

ツバサは後ろを向くと、自分の携帯を耳に当てる。

『ありがとう。でも、関係ないことでも連絡するから』

ツバサの声が二重になって耳に届く。

なんだかそれが面白くて、つつい笑ってしまった。

「あはは、了解」

それだけ答えると、勝手に切られた。

ツバサの番号を登録していると、今度はメッセージが送られてくる。

”好き”

たったそれだけ。

なんだこの、むず痒い感じ。

付き合いたてのカップルか!?なんて、ツツコミを入れてしまいそう

な。

そんなやりとり。

「みはねちゃん、顔赤いわよ?」

あんじゆが心配そうに私の顔を覗き込む。

ツバサはいつの間にかストレッチを始めていた。

「き、気のせいだよ。てか、近いよ」

近いし、女の子らしい甘い香りがする。

やっぱり顔、赤くなってるだろうなあ。

やんわりと肩を押して遠ざけると、あんじゆはわざとくつついてきた。

「今は、マネージャーでしょ? 私のこと、甘やかしてくれてもいいと思うの」

「へっ?」

「だって、μ、sはすっごく甘やかされてるじゃない。気に入らないの」

いつもの大人っぽさからかけ離れた、拗ねた顔。なんだろう、やっぱり、μ、sもA—RISEも変わらないじゃないか。

「そっか」

ふんわりとした髪をなでると、腰に手がまわってきて、そのまま抱き寄せられた。

甘やかすのって、難しいな。なんて考えてると、英玲奈から集合をかけられた。

しばらくして練習が始まると、3人の顔はライブの時のように…いや、それ以上に真剣になった。決して、お遊びでアイドルをしているわけじゃないということがよくわかる。

やはり、μ、sとは目指すところが違うのだろう。μ、sの本気とは違う、A—RISEの本気。

不意に窓の外を見ると、空がいつもより少し近くて。なんだか、μ'sのみんなに会いたくなかった。

「…っ!?」

「ツバサ！」

英玲奈の声に視線を戻すと、ツバサが右足を抑えて座り込んでいた。

英玲奈とあんじゅが心配そうな顔をしている。

「ひ、捻っただけよ。大丈夫」

どんな状況で、どんな風に捻ったのか見ていなかったことを後悔した。マネージャー失格だ。

しかし、今この状況ですべきことは後悔ではない。

私にだって、ツバサが強がっていることくらいはわかる。

「練習おしまいでもいいよね? いや、終わり」

そう言つて、英玲奈とあんじゅに片付けを頼む。

「なっ、待って。まだ始めたばかりよ」

ツバサは私の制服をくしゃくしゃになるまで掴む。

「ダメ」

その手をそつと離させるが、ツバサはきつく私を睨みつけた。

「今は私がA—RISEのマネージャーなの。家まで送るから、帰るよ」

嫌がるツバサを無理やり抱き上げる。

「こんなことして、怒られるわよ」

「誰に?」

「あなたの事が大好きな人たちによ」

そんなこと、今はどうでもいいのわかんないのかな。今ここでツバサに無理されるほうが嫌に決まってる。

ツバサに返事をしないで英玲奈にツバサの家の場所を聞く。

「ツバサは車で登下校している。下に呼んでおいたから、それで帰るといい」

「ちよつとーほんとに帰る気!？」

「英玲奈、後で連絡する。あんじゅもまたね」

それだけ言つてエレベーターに乗り込んだ。

ツバサがうるさいから、制服には着替えさせてあげたけど、そこからは逃げないようにまたお姫様抱っこをする。

抱き上げるとき、顔を赤くして照れていることは、本人には内緒だ。

下に着くと、英玲奈の言っていた通り一台の車が止まっていた。リムジン、というやつだ。

「これ?」

「そうよ。それよりーもう下ろして!」

下ろしたら逃げるくせに。

車の近くによると、運転手らしき人がドアを開けてくれた。

中に入ってドアが閉まってから、ツバサを座らせる。

「あなたくらいよ、私の言うこと聞かないの」

ようやく自由になったツバサは、恨めしそうにこっちを見ていた。

「わがままになっちゃうよ?…あ、もうなってるのか。こういうのつて、アメとムチが大事だよね」

おどけたように笑うと、ツバサのほっぺたが膨らむ。

きつと、甘やかされてきたわけではないのだろう。ツバサの言っていることは、わがままではない。

ツバサの言っていることが正しかったから、誰も逆らえなかっただけなのだろう。

「みはねは、ムチなんて使わないじゃない」

「使うよ。だから、私のこと怒らせないでね」

少し低めの声でそう言うと、ツバサはなにも答えなくて、家に着くまでの間、ずっと私の手を握っていた。

まるで、怒られた子どもがご機嫌とりをしているかのよう。

そんなに怒られるの、嫌だったのかな。

車が止まる。

「ツバサ、着いたみたいだよ」

「そうね」

家に着いたはずなのに、ツバサが降りる気配はない。

「降りないの?」

「ん!」

ツバサは私に向けて両手伸ばしてくる。

「なに」

上目遣いで見つめてくる彼女を、私は真顔で見つめ返す。

「だから、さっきの!」

さっきのとは、きつとお姫様抱っこだろう。

いや、でも、さっきは嫌がってなかったっけ?

「足、痛い。だから…」

「わかったよ、お姫様。いや、女王様?」

車のドアまでは自分でできてもらってから、ツバサを抱き上げる。

ツバサの部屋まで案内してもらって、ベッドの上にツバサを降ろした。

しゃがみ込んで、捻挫したところがどうなっているのか確認する。

「ねえ、今日、泊まっていって」

ふいに頭上からツバサの声が降ってくる。その言葉は、予想もされていなかった。

「それより、お家の人は?」

話を逸らさないで、と怒られる。

「帰ってくることは滅多にないわよ。忙しい人たちだもの」

これは、話をそらすために聞いた質問を間違えたかもしれない。

くいつと少し腫れているところをひねる。

「いつ、なにをするのよ!」

「寂しいの?」

今度はそこに口づけをしてから湿布を貼る。

早く治りますように。そんなことを考えながら。

まあ、思っていたよりもひどくはないみたいだ。

「寂しいのって聞いてるんだけど」

さつきから、顔を真つ赤にして黙り込んでいるツバサを見上げる。「さ、みしい。なんて、言えるわけ…ないじゃないっ」

顔をそらして、でも、横顔はすごく悲しそうだった。

私と同じだ。記憶もなくて、あの部屋で毎晩過ごしていた頃の私と。

記憶がない事が大きかったのか、みんなに優しくされると悲しくなつて。1人の空間がよかつたはずなのに、みんなという時間が増えるたび、寂しさが増していった。

今は、μ，sのみんながいるからそんなことはないけど。

そんなことを考えていたら、断る理由がなくなつてしまつていた。

「泊まつてく」

返事の代わりに、抱きつかれた。

しかし、すぐに離れて私の顔を覗き込む。

「あ、でも、みはねはμ，sの皆さんと付き合っているんじゃないのかしら？」

それは悪いわね、と。

ツバサつて変なの。普通だったら、こういう状況で他の人のこと気にしないものじゃないの？

「今は、誰とも付き合つてないよ」

私の言葉に、ツバサが嬉しそうに目を細める。

「それは、私にもチャンスがあるつてこと？」

立ち上がつて、ツバサの隣に腰を下ろすと、甘えるようにすり寄つてきた。恥ずかしさを隠すように、私は天井へと顔を向ける。

「うーん、どうなんだろうね？」

自分でもよくわからない。自分が何をしたいのか。何を基準に物事を考えているのか。

好きも。

記憶が戻つてから、余計にわからなくなつてしまった。

虚無感。私の心の中に空いた穴は、何で満たされるのか。

「みはね」

「ん？」

手を握られて、名前を呼ばれる。

ツバサのほうに顔を向けると、私たちの距離はゼロになった。

「ん、好き。だから、一緒にいて」

ほら、まただ。心臓はドキドキと音を立てていて、顔も熱いのに。どこか冷静な私がいる。

私は、今は誰からも好きをもらう事ができない。言うならば、呪い。何か足りない。その何かを見つけられるまでは、私に答えを出すことはできないのだ。きつと。

でも、私と同じツバサなら、この心にぼっかりと空いてしまった穴を、埋めてくれるかもしれない。

そんな少しの期待を胸に、ツバサをベッドに押し倒した。

そんな私を受け入れるかのように、ツバサは私の首元に腕を回す。それを合図に、私はツバサにキスをした。

角度を変えて、何度も。

「ん、んう、ちゅ……みはね」

ツバサがキスの合間に私の名前を呼ぶ。

さらに、すがりつくように抱きつかれると、私の心が少しだけ満たされたような気がした。

ツバサのブレザーを脱がせてベッドの端に追いやると、今度は私もブレザーを脱ぐ。ツバサのネクタイを緩めて第2ボタンまで開け、細く伸びる首筋に顔を埋めると、ツバサはくすぐったそうに身をよじった。

「あつ、みはね、キス。ほしいの」

かわいくおねだりされて、自分の口角が上がったのがわかった。もう一度ツバサにキスをあげる。

今度は私がリボンを取って、自身のシャツを第二ボタンまで開けると、ツバサが上半身をあげて私の首元に吸い付いてきた。

チクリとした一瞬の痛み。何をされたのかはすぐに理解ができた。

「あなたの好きはいらないから、そんなわがまま言わないから。私が

あなたを愛していたいの」

だから、と言葉を続けようとするツバサの邪魔をした。ツバサの口を、自身の唇で塞ぐ。

重さの釣り合わない愛。

私のほうが下になることは決してない、そんな天秤でも彼女はいいと言っている。

私がそれにひどく安心したのも事実だから。

「んっ、いらないの？わがまま、言ってもいいよっ」

ゆっくりと唇を離すと同時に、ツバサが閉じていた目を開ける。

今までで一番近い距離で見つめ合う。

少しでも、罪悪感を減らしたい。ただ、それだけだ。

「好きって、言って」

きゅ、と心臓が跳ねて。一瞬言葉にならなかつた。なんだろう、このかわいい生き物は。

「好きだよ、ツバサ」

これは、恋愛ではない。

私を愛したいツバサと、それを利用した、ただ愛されたいだけの私との残酷な契約。

首元に顔を埋めるように、下からしっかりと抱きついてくる。

「もっと…っ」

「好き」

またしても、私の首筋にキスマークをつけられる。今度は噛みつかれて、きつく吸われた。

まるで、私の心を見透かしているかのようだ。

「それ、もっとつけていいから。私の前では、わがままになっていいよ」

もう一つ、目立つであろうところに印をつけられる。

「ねえ、今日はこのまま一緒に寝て」

甘えるように私を見上げられる瞳。

私が、それに答えるようにきつく抱きしめると、ツバサはさらにくっついてきた。

温かくて、やわらかい。

ああ、私は記憶がなかった時と何一つ変わっていない。

記憶があるかないかなんて、大したことじゃなかった。

「離さないで」

それは、どっちが言った言葉だったのか。

———こんなの、ただの裏切りだ。